

阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告 1

小田高原遺跡（1次調査）

2011年

福島県教育委員会
財團法人福島県文化振興事業団
国土交通省北陸地方整備局

阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告 1

おだこうげんせき (1次調査)

序 文

文化財は、それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であり、我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠なものです。

そのため、当時の姿がよく理解できるように、可能な限りそのままの形で文化財を保存し、後世に伝えていく努力を現代に生きる私たちに求められています。

さて、国土交通省が実施する「阿賀川下流狭窄部改修事業(長井地区)」は、阿賀川下流部のうち長井地区にある狭窄部の河道を掘削して川幅を広げる事業です。この事業が完成すると、洪水の流下を阻害する部分がなくなるため、出水による冠水被害などの災害を防ぐことができるようになります。

福島県教育委員会では、この計画地区内にある周知の埋蔵文化財包蔵地、いわゆる遺跡を含めた文化財を保存するため、関係機関と協議を重ねてきましたが、現状で保存が困難なものについては、詳細な記録を残すために発掘調査を実施することになりました。

本報告書は、平成22年度に発掘調査を実施した喜多方市所在の小田高原遺跡に関する調査結果をまとめたものです。

小田高原遺跡は平安時代に営まれた集落の跡と考えられますが、竪穴住居の他に須恵器や土師器を焼いた窯などがいくつも発見されていることから、集落の一部でやきもの作りなどの生産活動が盛んに行われていたことが分かりました。

また、当時の役人が使っていた帶金具や、仏教の儀式で使用したと思われるミニチュアのやきものの塔などが発見されていることから、この集落は当時の喜多方地方の中核的な集落の一つであった可能性も考えられます。

今後、この報告書が、県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに、地域の歴史を解明するための基礎資料として、さらには生涯学習等の資料として広く活用していただければ幸いに存じます。

最後に、発掘調査の実施に当たり、御協力いただいた喜多方市教育委員会、国土交通省北陸整備局阿賀川河川事務所、財団法人福島県文化振興事業団を始めとする関係機関及び関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成23年12月

福島県教育委員会

教育長 遠藤俊博

あいさつ

財團法人福島県文化振興事業団では、福島県教育委員会からの委託により、県内の大规模な開発に先立ち、開発対象地内にある埋蔵文化財の調査を実施しています。

本報告書は、阿賀川下流狭窄部改修事業(長井地区)の実施に伴い、平成22年度に発掘調査を行った喜多方市慶徳町山科地区に所在する小田高原遺跡の調査成果をまとめたものです。今回の1次調査では、平安時代の集落跡を確認し、当時の代表的な焼き物である土師器や須恵器を生産していたことも明らかとなりました。また、瓦塔や獸脚といった仏教・仏具に関わる遺物もあり、当遺跡の性格を考える上で貴重な発見となりました。

阿賀川河岸の遺構は厚い堆積土に埋もれていますが、遺跡の一部で、過去の大きな地震によって生じたと考えられる地滑り痕を確認しました。おそらく、1611年の「会津慶長地震」の影響によるものと推測されます。当時の記録によれば、会津慶長地震の被害は甚大で、小田高原遺跡の上流で発生したという土砂崩れは阿賀川の流れを塞き止め、多くの集落が水没したという記録も残されています。このように、発掘調査では往古の生活跡のほか、災害の痕跡も観察されることがあります。

今後、この報告書を郷土の歴史研究の基礎資料として、広く活用していただければ幸いに存じます。

終わりに、この調査に御協力いただきました喜多方市並びに地域住民の皆様に、深く感謝申し上げますとともに、当事業団の事業の推進につきまして、今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成23年12月

財團法人 福島県文化振興事業団
理事長 富田 孝志

緒　　言

- 1 本書は、平成22年度に実施した阿賀川下流狭窄部改修事業(長井地区)に関連する遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、福島県喜多方市慶徳町山科学西新田・古屋敷に所在する小田高原遺跡(1次調査)の成果を収録した。
- 3 本発掘調査事業は、福島県教育委員会が国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所の委託を受けて実施し、調査・報告にかかる費用は国土交通省が負担した。
- 4 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。
- 5 財団法人福島県文化振興事業団では、遺跡調査部の以下の職員を配置して調査にあたった。

副　主　幹　吉田　功	専門文化財主査　香川嶺一	文化財主査　宮田安志
文化財主査　國井秀紀	文化財主査　大河原勉	文化財主査　山元　出

さらに調査期間中は、臨時に以下の職員を配置した。

文化財主査　佐藤 啓	文化財主査　阿部知己	文化財副主査　磯山千映美
嘱　　託　本田拓基		
- 6 本書の執筆・編集は担当職員が行い、文末に文責を示した。
- 7 自然科学分析は次の機関に依頼し、その報告を付章に掲載した。

放射性炭素年代測定・樹種同定	株式会社　加速器分析研究所
土器胎土分析	パリノ・サーヴェイ株式会社
- 8 本書に使用した地図は、国土交通省国土地理院発行の5万分の1地形図「喜多方」の該当範囲を複製したものである。
- 9 本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は、福島県教育委員会が保管している。
- 10 発掘調査および報告書作成にあたり、次の諸機関から御協力・御助言をいただいた。

喜多方市	喜多方市教育委員会	ト部厚志(新潟大学災害復興科学センター) (敬称略・順不同)
------	-----------	-----------------------------------

用 例

1 本書における地形図・遺構図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 方位・座標 図中の方位は座標北を示す。表示のないものは本書の天を北とした。座標軸には国土座標IX系に基づく座標値を記した。
- (2) 毛 羽 遺構内の傾斜部は「↑↑」、相対的に緩傾斜の部分には「↓」、後世の搅乱および削平部には「⤒」を用いた。
- (3) 網 点 図中の網点は以下を示す。これら以外を示す場合は同挿図中に凡例を示した。
■ 焼上面 ■■ 強い焼上面
- (4) 土 層 遺跡内堆積土層は、アルファベット大文字しにローマ数字、遺構内堆積土層はアルファベット小文字ℓに算用数字を付して表記した。土色およびその記号は『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄1967)に基づく。
- (5) 標 高 水準点を基にした、海拔高度を示す。
- (6) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。
- (7) 小 穴 小穴に付した()内の数値は、検出面からの深さ(cm)を示す。

2 本書における遺物図の用例は、以下のとおりである。

- (1) 土器 断面 繩文土器・土師器・陶器は断面白抜きで示し、須恵器は断面を黒く塗りつぶした。粘土紐の積み上げ痕は一点鎖線で示した。
- (2) 網 点 図中の網点は以下を示す。これら以外は同挿図中に凡例を示した。
■ 土師器の内面黒色処理 ■■■■■ 須恵器の火だしき
- (3) 遺物番号 挿図ごとの通し番号とした。遺物番号に続く()内には、出土位置・層位を示した。
- (4) 計測値 遺物の計測値は、図中に示した。また、推定値は()、残存値は〔 〕内に示した。
- (5) 縮 尺 各挿図中にスケールとともに縮小率を示した。

3 本書および調査・整理の上で使用した略号は以下のとおりである。

喜多方市…K T 小田高原遺跡…O D K 堪穴住居跡…S I 須恵器窯跡…S R
須恵器窯跡作業場…S R W 土坑…S K 溝跡…S D 焼土造構…S G
堅穴・畝状造構…S X ピット…P グリッド…G

4 参考・引用文献は執筆者の敬称を略し、第5章にまとめて収めた。

目 次

序 章

第1節 事業の概要	1
第2節 調査に至る経緯	1
第3節 遺跡周辺の環境	3
地理的環境(3) 歴史的環境(5)	

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と地形	11
第2節 調査経過	11
第3節 調査方法	13

第2章 調査I区の遺構と遺物

第1節 概要	17
第2節 基本土層	18
第3節 壑穴住居跡	21
1号住居跡(21) 2号住居跡(26) 3号住居跡(36) 7号住居跡(40) 10号住居跡(45)	
第4節 溝跡	47
1号溝跡(47) 2号溝跡(49) 3号溝跡(51) 6号溝跡(52) 7号溝跡(53) 8号溝跡(54)	
第5節 土坑	55
1号土坑(55) 2号土坑(56) 3号土坑(56) 4号土坑(58) 5号土坑(59) 6号土坑(59) 7号土坑(60) 8号土坑(62) 9号土坑(63) 11号土坑(63) 12号土坑(63) 13号土坑(65) 14号土坑(65) 15号土坑(65) 16号土坑(66) 17号土坑(66) 19号土坑(66) 20号土坑(67) 27号土坑(67) 33号土坑(76)	
第6節 小穴	76
第7節 遺物包含層	77
第8節 まとめ	88

第3章 調査II区の遺構と遺物

第1節 概要	95
第2節 基本土層	96
第3節 壑穴住居跡	109
4号住居跡(109) 5号住居跡(112) 8号住居跡(113) 9号住居跡(117) 12号住居跡(119) 13号住居跡(120)	
第4節 須恵器窯跡	124
1号須恵器窯跡(125) 2号須恵器窯跡(132) 3号須恵器窯跡(133)	
第5節 溝跡	139

4号溝跡(139)	9号溝跡(141)			
第6節 その他の遺構				142
10号土坑(142)	25号土坑(143)	26号土坑(143)	28号土坑(144)	32号土坑(144)
34号土坑(146)	35号土坑(146)	竪状遺構(149)		
第7節 遺構外出土遺物				150
第8節 まとめ				155
第4章 調査Ⅲ区の遺構と遺物				
第1節 概要				159
第2節 基本土層				161
第3節 壑穴住居跡				167
6号住居跡(167)	11号住居跡(174)			
第4節 溝跡				181
5号溝跡(181)				
第5節 土坑				181
18号土坑(181)	21号土坑(182)	22号土坑(183)	23号土坑(184)	24号土坑(185)
29号土坑(185)	30号土坑(185)	31号土坑(186)		
第6節 壑穴遺構				187
1号壧穴遺構(187)				
第7節 焼土遺構				189
1号焼土遺構(189)				
第8節 小穴群				190
第9節 遺構外出土遺物				192
第10節 まとめ				195
第5章 総括				197
付章 自然科学分析				
第1節 放射性炭素年代測定				201
1. 測定対象試料(201)	2. 測定の意義(201)	3. 化学処理工程(201)	4. 測定方法(202)	
5. 算出方法(202)	6. 測定結果(203)			
第2節 出土炭化材の樹種同定				208
はじめに(208)	1. 試料(208)	2. 分析方法(208)	3. 結果(208)	
4. 考察(209)				
第3節 土器の胎土分析				212
はじめに(212)	1. 試料(212)	2. 分析方法(213)	3. 結果(214)	
4. 考察(216)				

挿図目次

序 章

- 図1 阿賀川狹窄事業位置図 1
図2 遺跡周辺の地形分類 4

第1章 調査の概要

- 図4 調査範囲と工事計画 12

第2章 I区の遺構と遺物

- 図6 遺構配置図(I区南部) 18
図7 I区遺構配置図・基本土層 20
図8 1号住居跡(1) 22
図9 1号住居跡(2) 23
図10 1号住居跡出土遺物(1) 24
図11 1号住居跡出土遺物(2) 25
図12 2号住居跡(1) 27
図13 2号住居跡(2) 28
図14 2号住居跡出土遺物(1) 31
図15 2号住居跡出土遺物(2) 32
図16 2号住居跡出土遺物(3) 33
図17 2号住居跡出土遺物(4) 34
図18 2号住居跡出土遺物(5) 35
図19 3号住居跡 36
図20 3号住居跡出土遺物(1) 38
図21 3号住居跡出土遺物(2) 39
図22 3号住居跡出土遺物(3) 40
図23 7号住居跡 41
図24 7号住居跡出土遺物(1) 42
図25 7号住居跡出土遺物(2) 43
図26 7号住居跡出土遺物(3) 44
図27 10号住居跡、出土遺物 46
図28 1号溝跡、出土遺物 48
図29 2号溝跡 50

第3章 II区の遺構と遺物

- 図54 I 7~13列土層柱状図 96
図55 II区基本土層観察地點 97
図56 II区8列以北基本土層(1) 99

- 図3 小田高原遺跡と周辺の遺跡 6

- 図5 調査範囲の区割りとグリッド配置 14

- 図30 2号溝跡出土遺物 51
図31 3号溝跡 52
図32 6号溝跡 53
図33 7・8号溝跡、出土遺物 54
図34 1~4号土坑 57
図35 5・6・11号土坑 61
図36 7~9・12・19号土坑 64
図37 13~16・20号土坑 68
図38 17・27・33号土坑、土坑出土遺物(1) 69
図39 土坑出土遺物(2) 70
図40 土坑出土遺物(3) 71
図41 土坑出土遺物(4) 72
図42 土坑出土遺物(5) 73
図43 土坑出土遺物(6) 74
図44 土坑出土遺物(7) 75
図45 小穴 76
図46 遺物包含層出土遺物(1) 79
図47 遺物包含層出土遺物(2) 80
図48 遺物包含層出土遺物(3) 81
図49 遺物包含層出土遺物(4) 82
図50 遺物包含層出土遺物(5) 84
図51 遺物包含層出土遺物(6) 85
図52 遺物包含層出土遺物(7) 86
図53 遺物包含層出土遺物(8) 87
図57 II区8列以北基本土層(2) 100
図58 II区8列以北基本土層(3) 101
図59 II区8列以南基本土層(1) 102

図60	II区8列以南基本土層(2).....	103
図61	II区8列以南基本土層(3).....	104
図62	II区8列以南基本土層(4).....	105
図63	II区8列以南基本土層(5).....	106
図64	II区8列以南基本土層(6).....	107
図65	II区8列以南基本土層(7).....	108
図66	4号住居跡.....	110
図67	4号住居跡出土遺物.....	111
図68	5号住居跡.....	112
図69	5号住居跡出土遺物.....	113
図70	8号住居跡(1).....	114
図71	8号住居跡(2).....	115
図72	8号住居跡出土遺物.....	116
図73	9号住居跡、出土遺物.....	118
図74	12号住居跡.....	119
図75	12号住居跡出土遺物.....	120
図76	13号住居跡.....	121
図77	13号住居跡出土遺物(1).....	122
図78	13号住居跡出土遺物(2).....	123
図79	1~3号須恵器窯跡.....	124
図80	1号須恵器窯跡.....	126
第4章 III区の遺構と遺物		
図102	III区遺構配置図.....	160
図103	III区基本土層(1).....	162
図104	III区基本土層(2).....	163
図105	III区基本土層(3).....	164
図106	III区基本土層(4).....	166
図107	6号住居跡(1).....	168
図108	6号住居跡(2).....	169
図109	6号住居跡出土遺物(1).....	171
図110	6号住居跡出土遺物(2).....	172
図111	6号住居跡出土遺物(3).....	173
図112	11号住居跡(1).....	175
図113	11号住居跡(2).....	176
図114	11号住居跡出土遺物(1).....	178
付 章 自然科学分析		
図127	暦年較正年代グラフ(1).....	206
図81	1号須恵器窯跡出土遺物(1).....	128
図82	1号須恵器窯跡出土遺物(2).....	129
図83	1号須恵器窯跡出土遺物(3).....	130
図84	2号須恵器窯跡.....	132
図85	3号須恵器窯跡.....	134
図86	3号須恵器窯跡出土遺物(1).....	135
図87	3号須恵器窯跡出土遺物(2).....	136
図88	3号須恵器窯跡出土遺物(3).....	137
図89	4号溝跡.....	140
図90	4号溝跡出土遺物.....	141
図91	9号溝跡.....	142
図92	10・25・26・28・32号土坑.....	145
図93	34・35号土坑.....	146
図94	土坑出土遺物(1).....	147
図95	土坑出土遺物(2).....	148
図96	畝状遺構.....	149
図97	遺構外出土遺物(1).....	151
図98	遺構外出土遺物(2).....	152
図99	遺構外出土遺物(3).....	153
図100	遺構外出土遺物(4).....	154
図101	調査II区出土杯指数分布.....	157
図115	11号住居跡出土遺物(2).....	179
図116	11号住居跡出土遺物(3).....	180
図117	5号溝跡.....	181
図118	18・21号土坑.....	183
図119	22~24号土坑.....	184
図120	29~31号土坑.....	186
図121	土坑出土遺物.....	187
図122	1号竪穴遺構、出土遺物.....	188
図123	1号焼土遺構.....	190
図124	ビット群.....	191
図125	遺構外出土遺物(1).....	193
図126	遺構外出土遺物(2).....	194
図128	暦年較正年代グラフ(2).....	207

図129 炭化材木材組織(1).....	210
図130 炭化材木材組織(2).....	211

図131 胎土化学組成散布図..... 215

表 目 次

序 章

表1 周辺の遺跡一覧.....	7
-----------------	---

第1章 調査の概要

表2 壁穴住居跡一覧.....	15
-----------------	----

表3 須恵器窯跡一覧.....	15
-----------------	----

表4 溝跡一覧.....	15
--------------	----

表5 焼土遺構一覧.....	15
----------------	----

表6 土坑一覧.....	16
--------------	----

表7 その他の遺構一覧.....	16
------------------	----

第3章 II区の遺構と遺物

表8 1号須恵器窯跡出土遺物観察表.....	131
------------------------	-----

表10 3号須恵器窯跡出土遺物観察表(2)	139
-----------------------------	-----

表9 3号須恵器窯跡出土遺物観察表(1)	138
----------------------------	-----

表11 底径・器高/口径比度数分布表.....	156
-------------------------	-----

付 章 自然科学分析

表12 放射性炭素年代測定結果.....	204
----------------------	-----

表15 胎土分析試料一覧.....	212
-------------------	-----

表13 曆年較正年代.....	205
-----------------	-----

表16 蛍光X線分析結果	214
--------------------	-----

表14 樹種同定結果.....	209
-----------------	-----

写真図版目次

第2章 I区の遺構と遺物

1 I区調査前全景(南から).....	219
---------------------	-----

16 1号溝跡細部.....	226
----------------	-----

2 I区全景(南上空から).....	219
--------------------	-----

17 土坑(1)	227
----------------	-----

3 P・Q28G 基本土層(北東から).....	220
--------------------------	-----

18 土坑(2)	228
----------------	-----

4 N27G 基本土層(南西から).....	220
------------------------	-----

19 土坑(3)	229
----------------	-----

5 1号住居跡(北から).....	221
-------------------	-----

20 1号住居跡出土遺物	230
--------------------	-----

6 1号住居跡細部.....	221
----------------	-----

21 2号住居跡出土遺物(1)	231
-----------------------	-----

7 2号住居跡(西から).....	222
-------------------	-----

22 2号住居跡細部.....	232
-----------------	-----

8 2号住居跡細部.....	222
----------------	-----

23 3号住居跡出土遺物	233
--------------------	-----

9 3号住居跡(北西から).....	223
--------------------	-----

24 7号住居跡出土遺物(1)	234
-----------------------	-----

10 3号住居跡細部.....	223
-----------------	-----

25 7号住居跡出土遺物(2)	235
-----------------------	-----

11 7号住居跡(南から).....	224
--------------------	-----

26 溝跡・土坑出土遺物	236
--------------------	-----

12 7号住居跡細部.....	224
-----------------	-----

27 土坑出土遺物	237
-----------------	-----

13 10号住居跡(南西から).....	225
----------------------	-----

28 遺物包含層出土遺物(1)	238
-----------------------	-----

14 2・3・6~8号溝跡.....	225
--------------------	-----

29 遺物包含層出土遺物(2)	239
-----------------------	-----

15 1号溝跡(南から).....	226
-------------------	-----

30 遺物包含層出土遺物(3)	240
-----------------------	-----

第3章 II区の遺構と遺物

31	II区全景(北上空から)	241	48	1号須恵器窯跡細部	250
32	II区全景(上空から)	241	49	2・3号須恵器窯跡細部	251
33	10G列L II土層(南西から)	242	50	4・9号溝跡、畝状遺構、遺物出土状況 ..	252
34	H 6 G L II土層(南から)	242	51	II区土坑	253
35	基本土層	243	52	4・5号住居跡出土遺物	254
36	4号住居跡(西から)	244	53	4・5・9号住居跡・4号溝跡出土遺物 ..	254
37	4号住居跡細部	244	54	8号住居跡出土遺物(1)	255
38	5号住居跡(西から)	245	55	8号住居跡出土遺物(2)	255
39	5号住居跡細部	245	56	13号住居跡出土遺物	256
40	8号住居跡(西から)	246	57	1号須恵器窯跡出土遺物(1)	257
41	8号住居跡細部	246	58	1号須恵器窯跡出土遺物(2)	258
42	9号住居跡(東から)	247	59	3号須恵器窯跡出土遺物(1)	259
43	13号住居跡(南から)	247	60	3号須恵器窯跡出土遺物(2)	260
44	12号住居跡(東から)	248	61	3号須恵器窯跡出土遺物(3)	261
45	12号住居跡細部	248	62	25号土坑・遺構外出土遺物(1)	262
46	1・3号須恵器窯跡(北西から)	249	63	遺構外出土遺物(2)	263
47	2号須恵器窯跡(南西から)	249	64	遺構外出土遺物(3)	264

第4章 III区の遺構と遺物

65	III区全景(西上空から)	265	79	11号住居跡カマド(南から)	273
66	遺構集中部(上空から)	265	80	11号住居跡カマド細部	273
67	基本土層(L II)	266	81	土坑(1)	274
68	基本土層A上部(南西から)	267	82	土坑(2)	275
69	基本土層A下部(南西から)	267	83	1号堅穴遺構(北から)	276
70	基本土層B(北西から)	268	84	5号溝跡、1号焼土遺構	276
71	基本土層B地すべり層(北東から)	268	85	6号住居跡出土遺物(1)	277
72	基本土層C(南から)	269	86	6号住居跡出土遺物(2)	278
73	6号住居跡(南から)	270	87	11号住居跡出土遺物(1)	278
74	6号住居跡細部	270	88	11号住居跡出土遺物(2)	279
75	6号住居跡カマド(西から)	271	89	土坑・遺構外出土遺物	279
76	6号住居跡カマド細部	271	90	住居跡・土坑・遺構外出土遺物	280
77	11号住居跡(南から)	272	91	磁器・土製品・鉄製品・粘土塊	280
78	11号住居跡細部	272			

序 章

第1節 事業の概要

古来から会津盆地では、たびたび洪水が繰り返されてきた。第二次世界大戦前、原因の一つとして挙げられていた、会津西部に位置する阿賀川下流の蛇行部に3本の捷水路(ショートカット)を開削したが、大量の未掘削部を残したままの暫定通水であった。昭和57年9月、会津は戦後最大の出水に見舞われ、これを機に昭和58年から待望の阿賀川下流狭窄部改修事業が再開された。

阿賀川下流部は3地区的狭窄部(長井・泡の巻・津尻)が連続しており、これらの狭窄部が洪水の流下を阻害しているため、出水のたびに阿賀川下流地域において内水被害等の災害が発生している。国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所は、これらの被害を防ぐ目的で、阿賀川下流地域の治水安全度向上のため、昭和58年度から河道掘削等の改修事業に着手し、平成10年度に泡の巻地区、平成20年度に津尻地区まで完了した。引き続き長井地区に着手し、河道を掘削し護岸工事を行う改修事業である。なお、東北地方整備局郡山国道事務所の道路整備事業との調整を図り、本事業で発生する掘削土砂の一部を地域高規格道路国道121号「会津縦貫北道路」の盛土材として活用し、コスト縮減も図られている。

第2節 調査に至る経緯

小田高原遺跡は、喜多方市慶徳町山科字古屋敷地内に所在し、会津盆地北西部、阿賀川右岸の河

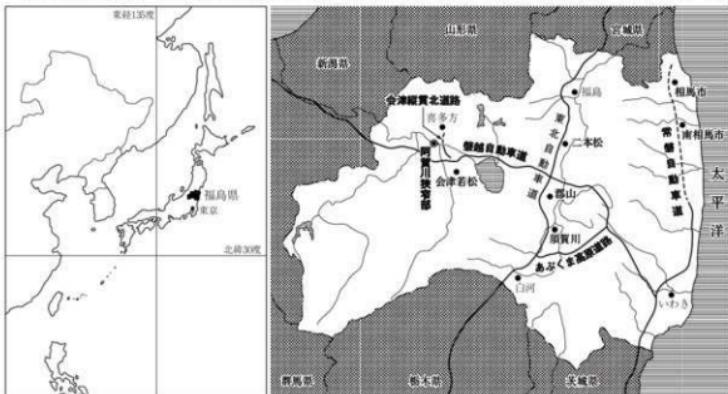


図1 阿賀川狭窄事業位置図

岸段丘上に位置する。旧喜多方市の市街地の西側に連なる琴平山麗の南西端部には小田高原台地が広がり、現況では耕地整理が進んだ水田地帯となっている。

小田高原遺跡は、古墳時代～奈良・平安時代の遺跡として登録され、遺跡の西側の段丘崖の山林部には小田高原窯跡が所在するとされ、昭和40年代後半の農道拡幅時に、古代の須恵器が多数採集されている。また、小田高原遺跡の北東には、西新田窯跡群が所在し、平成11～13年度に喜多方市教育委員会の実施した試掘調査では、9世紀前半～中葉にかけての須恵器窯跡や9世紀後半期の土器焼成遺構が確認されている。

平成19年11月に、国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所(以下、阿賀川河川事務所と略)から、阿賀川下流狭窄部改修事業(長井地区)の実施に係る埋蔵文化財所在について、喜多方市教育委員会に協議依頼があり、工事予定箇所には小田高原窯跡が所在することから、両者は直ちに埋蔵文化財の保護を目的として協議を行うこととなった。その後、喜多方市教育委員会は、平成19・20年度にかけて阿賀川河川事務所と協議を重ね、これと併行して、工事予定箇所が小田高原遺跡とも隣接する場所であることから、福島県教育委員会とも協議の上、河川改修工事予定区域内の全域について試掘調査を実施することとした。

当初、試掘調査については、阿賀川河川事務所による用地買収が完了した後に、工事予定地内の樹木伐採が終了してから実施する計画でしたが、山林内に須恵器窯跡が存在する可能性があり、伐採木搬出の際に掘削される恐れがあったため、協議の結果、樹木の伐採前に試掘調査を実施することとしたが、これに伴い試掘トレーンチを設定する場所が限定されることとなった。実際の試掘調査は、喜多方市教育委員会によって平成21年6・7月にかけて実施された。さらに、河川改修工事に関連して、小田高原遺跡北東部の遺跡範囲隣接地にて平成21年度中に水路等の改修工事を実施する計画が阿賀川河川事務所から示されたため、この工事箇所に該当する範囲についても8月に追加で試掘調査を実施した。これにより試掘調査の対象面積は、総計で25,350m²となった。

試掘調査の結果は、調査範囲のほぼ全域から縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代の遺構と遺物が確認され、大規模な複合遺跡であることが判明した。南北約330m、東西約120mに及ぶ18,000m²の範囲に加えて、洪水層に覆われた文化層の範囲(3,000m²×2面)を含めた24,000m²について埋蔵文化財包蔵地(遺跡)と確認された。

これにより、喜多方市教育委員会と福島県教育委員会が協議し、工事等の掘削により破壊される恐れのある場合には記録保存が必要と判断された。工事予定区域内で遺構・遺物が多数確認されたため、改修工事の予定地区については新たに埋蔵文化財包蔵地(遺跡)として加えられることとなり、段丘最上面に位置する小田高原遺跡の一部として追加され、「福島県埋蔵文化財包蔵地台帳」にも遺跡範囲の追加変更が行われた。この結果に基づいて、福島県教育委員会と阿賀川河川事務所が、小田高原遺跡の保護を目的とする協議を行い、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。調査の実施にあたっては、平成22年度より、福島県教育委員会が財团法人福島県文化振興事業団に委託して小田高原遺跡の発掘調査を実施することになった。

(吉　田)

第3節 遺跡周辺の環境

地理的環境

福島県は東北地方で最も南に位置し、東北地方の玄関口に位置づけられる県である。県土の面積は13,782km²を測り、北海道、岩手県について3番目の広さを有する。そのうち8割は山地で占められており、南北に走る西から越後山脈・奥羽山脈・阿武隈高地に隔てられた会津地方・中通り地方・浜通り地方の3地方に分けられる。

会津地方の中心となる会津盆地は県内最大の内陸性盆地で、東西約13km、南北約35kmの規模をもつ。盆地床の標高は175～220mを測る。小田高原遺跡の所在する喜多方市はこの会津盆地の北方に位置しており、市名である「きたかた」はこのことに由来するといわれる。

現在の喜多方市は、旧喜多方市と西部山間域の高郷村・山都町、東部盆地帯から山岳丘陵域を占める塙川町、北部山地帯の熱塙加納村の1市2町2村が平成18年に合併して成立し、新市域の総面積は約555km²となった。東は耶麻郡北塙原村・磐梯町、西は耶麻郡西会津町と接し、南は阿賀川を挟んで河沼都会津坂下町と、北は飯農連峰を隔てて山形県と接している。

喜多方市の地形は中心街をなす中央の盆地域と、それを取り囲むように存在する山間地域に分かれ。東は標高1,404mの猫魔ヶ岳を主峰とする磐梯高原に、西は越後山脈から派生する標高1,000m前後の山地に、北は飯農連峰によってそれぞれ遮られ、南は西流する阿賀川によって区切られる。盆地域は大部分が上・中・下位の扇状地に分類され、盆地域には西から順に湯川、田付川、日橋川などが南北方向に流れ、阿賀川と合流する。北西部の山間地域では、只見川や一ノ戸川など中小の河川が発達し阿賀川に流れ込んでいる。

小田高原遺跡の所在する慶徳町は、喜多方市域でも西寄り、越後山脈から派生する山地の東縁、すなわち会津盆地の北西縁部に位置している。阿賀川は、この西部山地の手前で湯川、田付川、鶴沼川と交わり、山地へと流入する。現在、真木・袋原地区には捷水路が築かれ、河道が最短距離となっている阿賀川も、もとは左右に大きく蛇行を繰り返しながら山地を切り開いており、周囲の袋原・小田高原・真木・長井などには低位、中位の台地上の河岸段丘が発達する。

喜多方市域の地質をみると、中央の盆地部分は主に礫・砂・泥層からなる。西部の山地・丘陵地は新第三期中新世に属するものとされ、阿賀川東岸の慶徳町地域では砾岩、砂岩、泥岩、西岸部の高郷地域が緑色凝灰岩や砂岩、泥岩などからなり。山都町では、山都層群と呼ばれる砾岩・砂岩・泥岩・凝灰岩などからなる軟弱な地層が分布する。阿賀川と只見川流域に発達する河岸段丘面上には、会津シラスと呼ばれる沼沢火山放出物の水性二次堆積である軽石質砂を乗せている。

喜多方市域の気候は、全域が海から遠く離れた内陸性気候であるため寒暖の差が著しい。夏は高温多湿で7月の降雨量は200～300mmほどあって稲作に適するが、冬は寒く、特に山都町域では冬の季節風の影響を受け降雪が多く、豪雪法の「特別豪雪地帯」に指定されている。

(宮田)

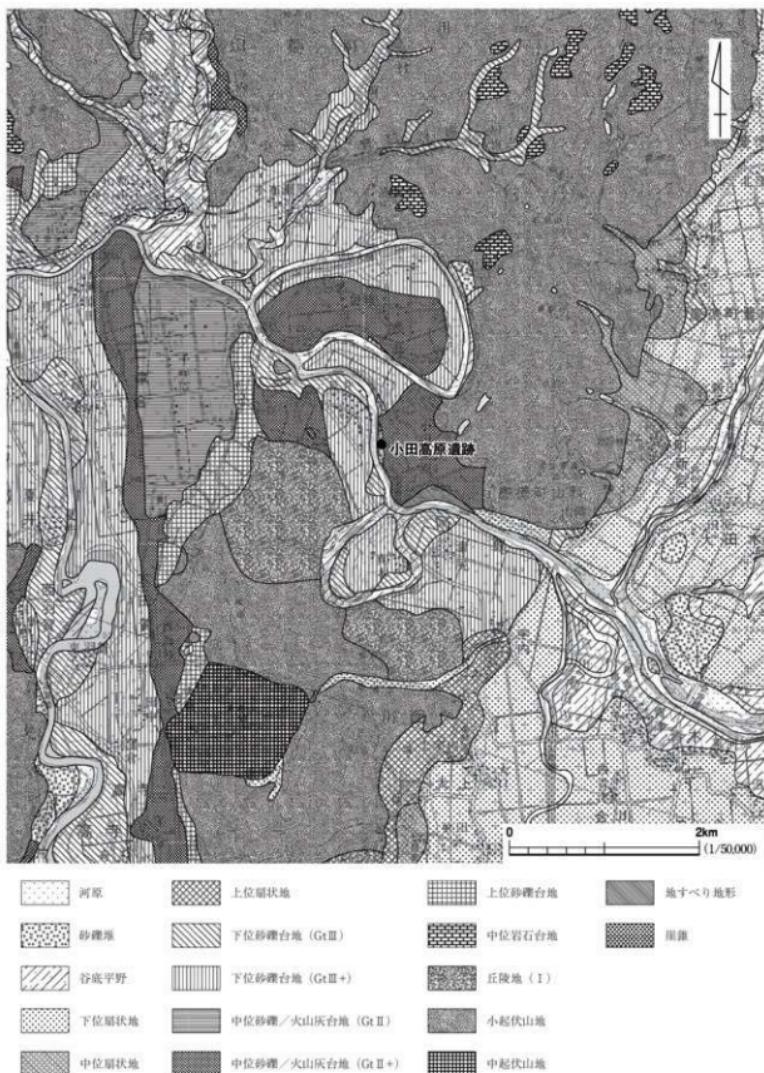


図 2 遺跡周辺の地形分類 (中村ほか1976を基に作成)

歴史的環境

現在の喜多方市内には、「福島県遺跡地図(会津地方)」(福島県教育委員会:1996)に登録されただけでも419を数える遺跡が存在する。

旧石器時代の遺跡として、高郷町塩坪遺跡が挙げられる。この遺跡は塩坪第1標高185~190mの阿賀川河岸段丘の端にあり、今から15.000年ほど前の後期旧石器時代の遺跡とされている。熱塩加納町地域にも旧石器~縄文時代の遺物散布地である丸山遺跡が存在する。

縄文時代の遺跡は、市域中央盆地部を挟んで、市南東部の塩川町雄国山麓と西部の山間部の山都・高郷町域、北部の熱塩加納町地域に分布する傾向が認められるが、中央盆地部でも遺跡が確認されている。東部の塩川町の雄国山麓には、早期後半の常世式土器の標識遺跡となっている常世・原田遺跡がある。この土器は貝殻腹縁文などが特徴的であり、雄国山麓に営まれた遺跡と新潟・北関東方面に分布が認められる。常世・原田遺跡の周辺には、前期~後期にかけての森台遺跡・上ノ台遺跡・南原遺跡・大原遺跡などが存在し、縄文時代の遺跡が多数確認されている。

北西部の山都・高郷町地域に目を転じてみると、市域東部に比べ中小の河川が発達し阿賀川に流れ込んでいる。山都町の一ノ戸川流域に存在する上林遺跡は古くから注目を集めた遺跡で、縄文・弥生時代の土器や石器が採集され、同時期の大規模集落遺跡である。この一ノ戸川上流域には廻戸遺跡や沢口段栗遺跡、長者屋敷遺跡など縄文時代の小規模遺跡が点在する。

高郷町の只見川流域では博毛遺跡・馬景遺跡・馬場遺跡など縄文中期~晩期の遺跡がある。盆地部の遺跡としては、塩川町鶴塚遺跡では後期の土器が、古屋敷遺跡では後期~晩期の土器が出土している。いずれも比較的小高い台地上に存在しており、集落の可能性が窺える。田付川流域の平沢北遺跡・治里遺跡・大沢遺跡は晩期の遺跡である。

小田高原遺跡の北約1kmの会津坂下町袋原の阿賀川迂回部の河岸段丘上には、縄文時代晩期の大洞B式から大洞A式土器が出土した袋原遺跡があり、土偶、打製石斧、石刀、独結石など多彩な土製品・石製品が出土している。

喜多方市における縄文時代の遺跡について概略的に述べれば、塩川町の雄国山麓域には早期~前期の遺跡が分布し、山都・高郷町地域には中期~晩期の遺跡が点在し、晩期になると盆地部にも集落が進出してくるといえよう。

弥生時代の遺跡は当地方でも数が少ないが、これまでに知られている弥生遺跡は中期段階の遺跡が主である。JR喜多方駅周辺の長内遺跡では、弥生土器とともに石庖丁が確認された。塚田A遺跡・村前遺跡は濁川と田付川に挟まれた氾濫原上にあって、中期末~後期の集落跡が検出されている。松山町の三百刈遺跡・羽黒森遺跡・龍泉寺遺跡はいずれも散布地である。

この他先に述べた山都町の上林遺跡・二本木遺跡・金山遺跡、弥生時代前期の合口土器棺による再葬墓が確認された高郷町の上野遺跡がある。熱塩加納町の岩尾遺跡も弥生時代前期の再葬墓で、会津地方の弥生時代前期最古段階に比定される。会津坂下町には、大門遺跡や天王山式土器がまとまって出土した能登遺跡・高畠遺跡・上崖道北遺跡など10カ所の弥生時代の遺跡がある。

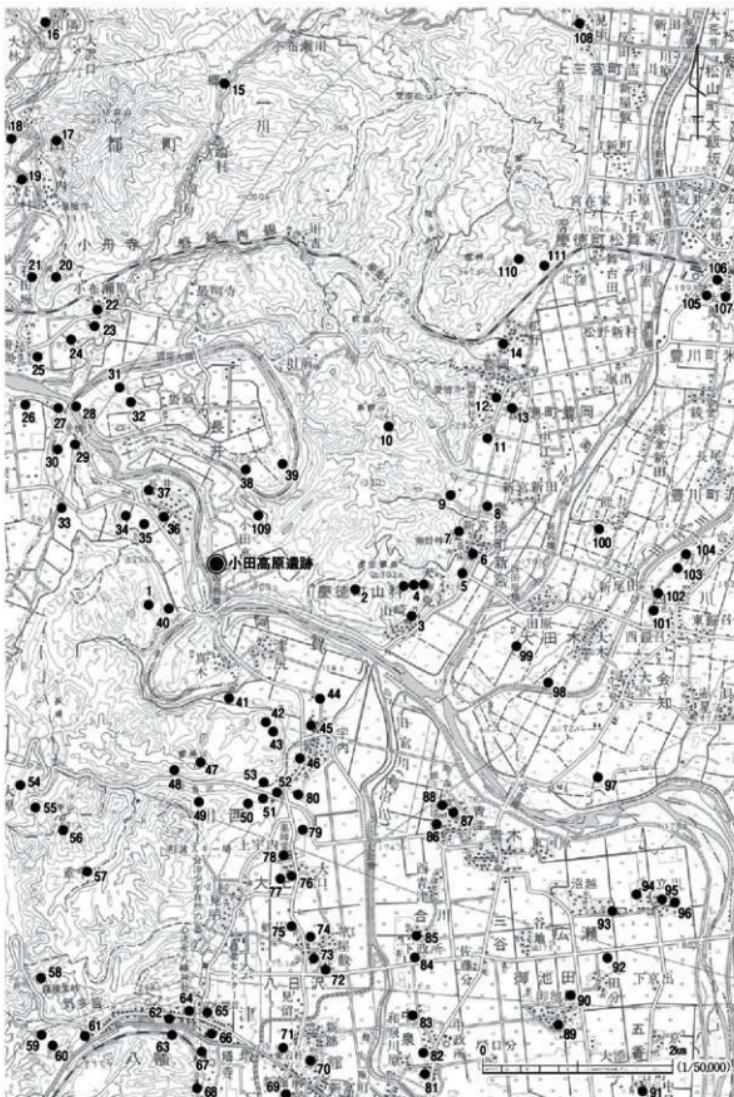


図3 小田高原遺跡と周辺の遺跡

表1 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	所在地	性別	時期	番号	直跡名	所在地	性別	時期
1	蘇ノ原宮跡	(会)長井字松曾根有林	古墳	平安	58	鷺突安造跡	(会)高寺字鐘穴堂	城跡	中世
2	虛空藏森古墳群	(慶)新宮字虛空藏森	古墳	古墳	59	蒙平人造跡	(会)気多宮宇蒙平	散布地	绳文・平安
3	山崎横穴古墳群	(慶)山崎字蒙東	古墳	古墳	60	蒙平B造跡	(会)氣多宮宇蒙平	散布地	平安
4	天神免古墳群	(慶)山崎字虛空藏森	古墳	古墳	61	蒙平C造跡	(会)気多宮宇蒙平	散布地	平安
5	招木造跡	(慶)新宮字招木	集落	平安	62	松原跡	(会)招寺字松原	散布地	绳・平・中
6	新宮中世墓地	(慶)新宮字櫛中	墳墓	中世	63	上ノ山道跡	(会)寺子字上ノ山	散布地	绳文・平安
7	敷神跡	(慶)新宮字敷神	城跡	中世	64	茶碗山経塚	(会)塔寺	塚	近世
8	新宮城跡	(慶)新宮字船内	城跡	中世	65	大門門跡	(会)塔寺字大門	散布地	绳文・弥生
9	灰塚山古墳	(慶)新宮字山腰	古墳	古墳・中世	66	經塚道跡・古墳群	(会)塔寺字經塚	散布地	古墳・绳・古
10	高島山城跡	(慶)新宮字船船	城跡	中世	67	鶴ヶ森古墳	(会)寺子字上ノ山	古墳	古墳
11	八幡跡	(慶)新宮字不勤前	城跡	中世	68	稻荷古墳	(会)寺子字上野	古墳	古墳
12	愛宕城跡	(慶)新宮字今可	城跡	中世	69	稻荷坂道跡	(会)稻荷坂・上野櫛	散布地	绳文・平安
13	新宮跡	(慶)新宮字本町	城跡	中世	70	大道道跡	(会)大道	散布地	平安
14	松野城跡	(慶)長井字船荷前	城跡	中世	71	森ノ道跡	(会)新宮字森前	散布地	绳・古・平
15	一郷道路	(山)一川字一郷	散布地	平安	72	天王道跡	(会)八日沢字天王	散布地	平安
16	川原塚	(山)本塚	塚	中世	73	飯沼北道跡	(会)八日沢字飯沼	散布地	平安
17	高島船跡	(山)小字高島	城跡	中世	74	飯沼B道跡	(会)八日沢字飯沼	古墳	古墳・平安
18	日田畠道跡	(山)本塚字日田畠	散布地	绳文	75	八日沢道跡	(会)八日沢字船ノ内	散布地	平安
19	下ノ原・越経塚	(山)大蛇字下ノ原	塚	近世	76	寺ノ内道跡	(会)大字寺ノ内	散布地	平安
20	和田山塚	(山)大字宇和山	塚	中世・近世	77	柳ノ下道跡	(会)大字柳下	散布地	平安
21	上ノ原平道跡	(山)小字上ノ原	散布地	平安	78	北之口道跡	(会)大字上北	散布地	平安
22	中原道跡	(山)大字中原	城跡	中世	79	想見道跡	(会)大字想見原	散布地	平安
23	小舟船道跡	(山)小字舟籠ノ内	城跡	中世	80	降ノ堀城跡	(会)宇字五目	城跡	平安
24	船岡道跡	(山)小字宇船岡	城跡	散布地	81	中村戦A道跡	(会)中字中中間	散布地	平安
25	舟道跡	(山)大字宇松岡向南	散布地	绳文	82	中村戦B道跡	(会)中字中中継	散布地	平安
26	大内古墳群	(会)字大村	古墳	古墳	83	三木本道跡	(会)合字三木本	散布地	平安・中世
27	水上道跡	(会)字水上	散布地	平安	84	宮ノ北道跡	(会)合字宮ノ北・村前	散布地	弥生・平安
28	羅原道跡	(会)新井字羅原	散布地	绳文	85	政所道跡	(会)合字政所	散布地	平安・中世
29	桜原古墳	(会)長井字桜沢	古墳	古墳	86	篠山古墳	(会)青字字篠山	古墳	古墳
30	伏沢道跡	(会)長井字伏沢	散布地	古墳・平安	87	龜ヶ森古墳	(会)青字字船ノ越	古墳	古墳
31	麗原跡	(会)新井字麗	城跡	平安	88	男鹿道跡・石堀跡	(会)青字字男鹿	古墳・石造物	古墳・中世
32	庵塚	(会)長井字庵	塚	平安	89	旭ノ原跡	(会)御田字旭田	城跡	中世
33	立子浜道下道跡	(会)長井字立子浜道下	散布地	平安	90	御造田山・舟跡	(会)御造田字山ノ舟他	散布地	平安・中世
34	山田道跡	(会)新井字山田	散布地	绳文・平安	91	中村経塚	(会)五番字家ノ西	塚	中世
35	官道跡	(会)長井字官田	散布地	平安	92	福原ノ道跡	(会)沼字字福原	散布地	平安・中世
36	御寺跡	(会)長井字官田	寺跡	中世	93	辻田道跡	(会)沼字字辻田	散布地	平安
37	花畠道跡	(会)長井字花畠	散布地	绳文	94	高畠道跡	(会)沼字高畠	散布地	绳・弥・平・中
38	袋原塚跡	(会)新井字袋上	古墳	平安	95	中川道跡	(会)立字中立	散布地	平安
39	袋原道跡	(会)長井字袋原	散布地	绳文	96	鶴見川道跡	(会)立字東立	散布地	平安
40	長井前ノ山古墳	(会)長井字七曲	古墳・平安	古墳	97	内附敷道跡	(会)会字内字經敷他	散布地	古墳・中世
41	山手道跡	(会)宇井字山手	散布地	绳文・平安	98	鶴見川道跡	(会)大字木戸鶴見下・下屋敷	集落跡	绳文・平安
42	鶴見山道跡	(会)宇井字鶴見山	散布地	旧・繩・平	99	古敷道跡	(会)大字木古敷他	散布地	古墳
43	竜跡山古墳群	(会)宇字山	古墳	古墳	100	能刀經塚	(会)四喜川字經塚前	塚	近世
44	牛内古里載道跡	(会)大字牛内古里載	散布地	绳文	101	園ノ町道跡B	(会)四喜川字園ノ町他	官衙開闢	奈良・中世
45	宇内古里敷道跡	(会)宇字古里敷他	散布地	绳文	102	園ノ町道跡A	(会)四喜川字園ノ町	官衙開闢	奈良・中世
46	五百道跡	(会)宇字宇五百目	散布地	绳文	103	牛坂古墳	(会)四喜川字豊ノ前	塚	近世?
47	雷山古墳群	(会)大字字次部坂	古墳	古墳	104	豊ノ前道跡	(会)四喜川字豊ノ前	散布地	奈良・平安
48	勝負沢横穴群	(会)宇字次字次坂	中世	古墳	105	太郎丸西脇路	(會)米原字太郎丸	城跡	中世
49	森北古墳群	(会)宇字森北	古墳	古墳	106	太郎丸古墳	(會)米原字太郎丸	古墳	古墳
50	出堵山道跡	(会)大字字森北	散布地	旧・繩・平	107	太郎丸東脇路	(會)米原字太郎丸	城跡	中世
51	出崩山古墳群	(会)大字字森北	古墳	古墳	108	見頃跡	(上)吉原字船中	城跡	中世
52	勝負沢道跡	(会)宇字宇勝沢	散布地	绳文	109	西新田塗跡群	(慶)山科学西新田他	席跡	奈良・平安
53	次坂古道跡	(会)大字字次坂	散布地	旧・繩・平	110	佐多千光寺経塚	(慶)松家院字金山	塚	平安・中世
54	稻荷城跡	(高)大田賀字大田	城跡	平安	111	佐多千光寺跡	(慶)松家院字大門	松家院	奈良
55	二ノ平船跡	(高)大田賀字船ヶ峯	城跡	中世					
56	高寺古墳	(会)高寺字高寺	古墳	古墳					
57	高寺道跡	(会)高寺字二重平	散布地	绳文・平安					

刈谷 (慶) 善多方市徳町 (高) 善多方市川町 (山) 善多方市山都町

(高) 善多方市高郷町 (高) 善多方市塙川町

(上) 善多方市三宮町 (会) 河原郡公坂坂下町

古墳時代に入ると遺跡数は増加する。大和王権との結びつきによって、地域の支配者・首長の墓と考えられる古墳が盆地内に造営されるようになる。まず、弥生時代末～古墳時代前期初頭に位置づけられる周溝墓が、盆地部の館ノ内遺跡や内屋敷遺跡、荒屋敷遺跡で検出されている。館ノ内遺跡の周溝墓は四隅が張り出す形態で、周溝内から北陸系の土器が出土し、北陸地方や山陰地方の「四隅突出型埴丘墓」の影響を受けたものと考えられている。また、慶徳町木曾原遺跡では北陸系土器の他、玉造りに関連する管玉の未成品が多く出土した。この時期に北陸地方から人と玉造り技術が伝わったことが分かる。会津坂下町青津の男塚遺跡・宮東遺跡などでも方形周溝墓をはじめ、前方後円型・前方後方型の周溝墓が確認されている。

小田高原遺跡周辺の古墳としては、慶徳町の丘陵上に灰塚山古墳・虚空藏森古墳群・天神免古墳群がある。天神免古墳群は小型の前方後円墳と円墳からなり、虚空藏森古墳群は前方後円墳2基、円墳2基によって構成される。灰塚山古墳も前方後円墳で、立地や形状から見て、それぞれ前期古墳の可能性が高いと考えられる。この対岸である会津坂下町青津では亀ヶ森古墳・鎮守森古墳や西方の雷神山古墳など古式の古墳が比較的密集している。その北側の会津坂下町長井にも古墳時代前期～中期の築造と考えられる長井前ノ山古墳があるなど、付近には前期古墳が多く分布する。会津盆地の古墳は会津大塚山古墳を以って始めとする考えに変革を迫ると同時に、当地域での古墳の発生を考える上では欠かせない地域となっている。

盆地東縁にあたる塙川町雄国山麓の丘陵地帯先端部でも、多くの前期古墳が営まれ始めている。十九塚古墳群・深沢古墳・田中・舟ヶ森古墳・観音森古墳・高森山古墳が挙げられる。墳形不明なものもあるが、十九塚古墳群は前方後方墳・方墳からなる。その他、平坦地の古墳としては農川町高堂太の水谷地古墳や同沢部の八幡塚古墳がある。

古墳時代中期～後期の古墳は、雄国山麓先端部に前期に引き続き比較的多く分布する。金森古墳・七ツ塚古墳群・常世・竹花古墳・狐塚古墳・明蓮寺古墳群などが確認されている。

盆地西部の慶徳町山科には、7世紀前葉の造営と考えられる山崎横穴古墳群がある。この横穴古墳群は、山崎集落北側の丘陵北東斜面に分布し総数37基の横穴古墳が確認されている。明治26年に発見され、遺物としては人骨、勾玉、直刀、馬具、須恵器などが出土した。また、盆地内では古屋敷遺跡で、後期の円墳7基が検出されている。北部の熱塙加納町や北西部の高郷・山都町における古墳の数は少ないので、熱塙加納町には高堰古墳群がある。山都町には七ツ塚古墳群があり、高郷町には6～7世紀の造営と考えられる前方後円墳の大谷古墳や藤の森古墳が存在する。

古墳時代の集落遺跡としては、塙川町の盆地平坦部に鶴塚遺跡や館ノ内遺跡・内屋敷遺跡で後期の集落が確認されている。熱塙加納・山都・高郷町地域では、該期の集落遺跡は発見されていない。塙川町に存在する国指定史跡の古屋敷遺跡は、古墳時代中期の国内最大級の豪族居館跡である。この遺跡からは「コ」字状に配置された倉庫群や2つの方形区画施設、祭祀跡などが検出された。

奈良・平安時代には律令体制が確立し、喜多方市域は会津郡から9世紀前半頃に分置された耶麻郡に属したものと考えられる。奈良時代の遺跡は比較的少数だが、平安時代の遺跡は盆地平坦部に

おいて増加する。この時期の郡衙は明確でないが、これに関連する遺跡は塩川町鏡ノ町遺跡A・B、内屋敷遺跡で確認された。鏡ノ町遺跡A・Bでは多数の掘立柱建物跡、柵列、周溝状遺構などが検出され、墨書き土器、奈良三彩陶器、陶器類などが出土した。内屋敷遺跡では奈良・平安時代の掘立柱建物跡や堅穴住居跡、柵列などが検出され、出土遺物も猿投産施釉陶器、ロクロ土師器、須恵器、瓦塔、灯明皿などの仏具や円面鏡、墨書き土器などの出土資料があり、一般集落とは異なる様相を示している。

豊川町米室の村前遺跡や塚田A・B遺跡などは、市域でも数少ない奈良・平安時代の複合遺跡である。山都・高郷町では、この時期の遺跡は只見川東岸の平坦地に集中している。これは当時主な産業が水田耕作であったために、耕作に都合のよい盆地に集落を営むようになったためと考えられる。市内関柴町・豊川町・慶徳町には、起源を古代の条里制に求められる格子状地割を構成する畔・水路・道路などが見出せるという。

小田高原遺跡から阿賀川を隔てた会津坂下町長井地区の東向き斜面上には、平安時代の須恵器窯跡である萩ノ窯窯跡が存在する。この窯跡は、須恵器と土師器長胴甕を同時に焼成した窯であることに特徴がある。小田高原遺跡の北東には西新田窯跡がある。平成10~13年にかけて試掘調査が行われ、須恵器窯と土器生産遺構からなる生産遺跡であることが判明した。この他にも小田高原遺跡から約1km北方の会津坂下町袋原には同時代の窯跡である袋原窯跡が存在するなど、遺跡周辺には窯跡がいくつかあり、会津盆地北西縁部に土器生産に関わる集団が存在したことを窺わせる。

古代末~中世初期には律令制の崩壊が進む。この時期の遺跡としては、塩川町鏡ノ町遺跡A・B、荒屋敷遺跡、内屋敷遺跡などがある。荒屋敷遺跡では白磁・かわらけ・珠洲系中世陶器などが出土し、日橋川の「津」(川湊)であろうとされる(井:2003)。中世初期における川の水運を利用した物資の流通が窺える。内屋敷遺跡ではこの時期の遺構として、掘立柱建物跡、道路跡、方形区画施設などが検出された。方形区画施設の中からは方形堅穴状遺構や井戸跡などが検出され、何らかの宗教施設ではないかとされる。

会津坂下町に目を向けると、宇内に陣が峠城跡がある。本城跡は勝負沢が形成した標高195.0~197.5mの扇状地上にあって、堀に囲まれた平場から掘立柱建物跡、土壘、溝状遺構、土坑、鍛冶炉などが検出されており、貿易陶磁器、国産陶磁器、土師質土器、漆器類、須恵器陶器、銅製錘(權衡)などが出土している。

中世になると武家社会が確立し、上三宮町には佐原氏を地頭とする加納庄が、慶徳町を中心に新宮氏が支配する新宮庄が成立する。新宮庄は新宮の熊野神社の社領が莊園化したものといわれ、庄域は熊野神社周辺にとどまらず、塩川町西部および山都町、高郷町、耶麻郡西会津町のうち阿賀川以北の一帯に比定されている。これらの莊園領主は応永~永享年間(1394~1441)に滅亡し、蘆名氏の支配下に入る。この時期には盆地部に城館跡が数多く残る。新宮氏の居館である新宮城跡は、濁川西岸の河岸段丘上に立地し、土壘、盛土整地層、柱穴などが検出され、土師質土器、陶器、磁器、石製品、金銅仏などが出土した。本丸跡には土壘がめぐる、いわゆる方形館である。付近には駿河

館跡や八幡館跡・高館山城跡など中世城館跡が分布する。

この他、慶徳町の松野千光寺経塚では、東北最古の経塚遺物である大治5年(1130)銘をもつ石櫃が出土した。また、本経塚からは經筒、独鉢杵、五鉢杵などが出土し現存している。塩川町には「鎧召」・「源太屋敷」、会津坂下町には「中政所」・「下政所」などといった中世的な地名が今日でも残っている。

戦国時代に入ると、会津地方でも戦乱が相次ぐ。その多くは大名化する蘆名氏と在地領主との戦いであった。天文年間(1532～1554)には、会津の諸領主のほとんどは蘆名氏に服属した。田付川東岸の小田付村と西岸の小荒井村は、それぞれ蘆名家臣の佐瀬氏と小荒井氏の支配下に入った。この2つの村は江戸時代には会津北部の経済・文化の中心となり、現在の喜多方市街地の原型となった。天正17年(1589)、蘆名氏は摺上原の戦いで伊達政宗に滅ぼされるにいたる。

近世の喜多方市は、戦国の群雄割拠の時代から幕藩体制に組み込まれる。その初期に伊達氏の支配から蒲生氏郷・上杉景勝・加藤嘉明・蒲生秀行(再蒲生)の時代を経て、寛永20年(1643)保科(松平)氏の治世を迎える。喜多方市は会津藩領となり漆器や酒・味噌・醤油などの醸造業が発達した。塩川には代官所も置かれた。銀の採掘を主とした熱塩加納町の加納鉱山は、近世初期の創業といわれている。山都・高郷町は阿賀川と只見川の合流点に位置しており、越後裏街道が通り、交通の要所にあたっていた。

塩川町は慶長13年(1608)に桧原峠越え米沢街道の宿駅に定められた。この時期の遺跡としては、塩川町の旧米沢街道沿いに別府の一里塚がある。中世～近世にかけての塚・石造物なども多く、牛塚・七ツ塚群、能力経塚など宗教に関わる遺物が多く残されている。山都町には館原代官所、旧一ノ戸村制札場などが残されている。塚などの信仰に関連する遺構も少なくない。

慶長16年(1611)9月27日に発生した所謂「会津慶長地震」は喜多方市にも甚大な被害をもたらした。この大地震の影響で山崎村(喜多方市慶徳町)の山崩れによって阿賀川が堰き止められ、東西4～5km・南北2～4kmに及ぶ山崎新湖が形成された。この新湖によって23の集落が水没したとされる。また、山崎新湖が完全に消滅したのは大地震の発生から34年以上の年月がかかったとされる。山崎新湖によって、会津坂下町が越後街道筋の宿駅に変更された。

慶応4年(1868)の戊辰戦争の際には、熊倉村や小田付村などが戦場となり被害をこうむった村も多かった。

喜多方市は近代に入ると、明治8年(1876)に耶麻郡から小荒井・清次袋・塙原・小田付・稻村の5カ村が合併して喜多方町が成立し、若松県を経て明治9年(1877)に福島県に所属する。明治14年(1882)には耶麻郡役所が塩川町から、喜多方町へ移された。

当地方は明治初年頃から製糸業が発達した。また、明治15年(1883)時の県令三島通庸が会津三方面道路の開削を図り、農民たちに過酷な負担を強制したのに対し、自由党会津部の民権家たちに指導された農民が服役・代夫賃拒否闘争を繰り広げたいわゆる喜多方事件があるなど、当地域は自由民権運動でも先進的役割を果たした地域でもある。

(宮 田)

第1章 調査の概要

第1節 遺跡の位置と地形

小田高原遺跡は、喜多方市慶徳町山字古屋敷・西新田に所在する。北緯37度37分07秒、東経139度48分02秒に位置している。JR磐越西線喜多方駅の南西約6.4kmのところにあって、遺跡の西側を北流する阿賀川を挟んだ対岸は、河沼都会津坂下町長井地区となる。

小田高原遺跡は、越後山脈から派生する山地が阿賀川によって開析された、通称「小田高原台地」と呼ばれる中位砂礫／火山灰台地(GT II+)の西半から阿賀川の縁までが範囲とされる。調査対象となった箇所は、台地の西端から段丘崖、河川敷の範囲である。その標高はおよそ170～200mを測る。段丘崖には、標高175m・190m付近に小段丘状の平坦面が2段形成されており、最上位段丘面と最下位の河川敷を合わせて、都合4面の平坦面を有している。

調査範囲の平面積は19,300m²を測り、平成22年度実施した1次調査はこのうち南西部を除き、河川敷の文化面重層範囲1,000m²を加えた15,800m²である。
(宮田)

第2節 調査経過

小田高原遺跡の発掘調査は平成22年5月13日に開始し、12月17日に終了した。延べ日数は107日である。今回の1次調査は、調査員を6名配し、15,800m²相当の面積について発掘調査を実施した。調査に先立ち行われた福島県教育委員会・国土交通省阿賀川河川事務所による事前協議で工事工程上の優先箇所が示されており、かかる調査区東部の3,000m²（後、工事計画の変更等によって4,900m²まで拡幅）の範囲をI区として発掘調査に着手した。河川側の調査区については、X座標：179,650を境界として、以北をII区、以南をIII区とした。

5月13日に現地入りし、事前準備として作業員雇用説明会、連絡所、駐車場造成を行った。用地内の森林伐採が終了予定日よりも遅延したため、重機による表土除去の着手は25日からである。

6月上旬、桜町遺跡から発掘器材を搬入。6月8日、慶徳地区的作業員の雇用を開始し、I区の遺構検出作業に着手する。6月10日、II区の重機による表土除去作業を開始する。同日、I区で古代の竪穴住居跡と、南北に伸びる1号溝跡を確認する。6月14日、II区の北東部で須恵器窯跡を確認した。6月22日から堂島地区的作業員の雇用を開始する。I区の斜面部で形成されている遺物包含層の掘り込みを開始する。

7月9日、調査I区の南東部斜面でクラックが発生したため、大型土囊等による処置を行う。7月21日から農川地区的作業員の雇用を開始し、II区の遺構検出作業に着手する。梅雨が明けた7月下旬以降、記録的な猛暑が連日続く。

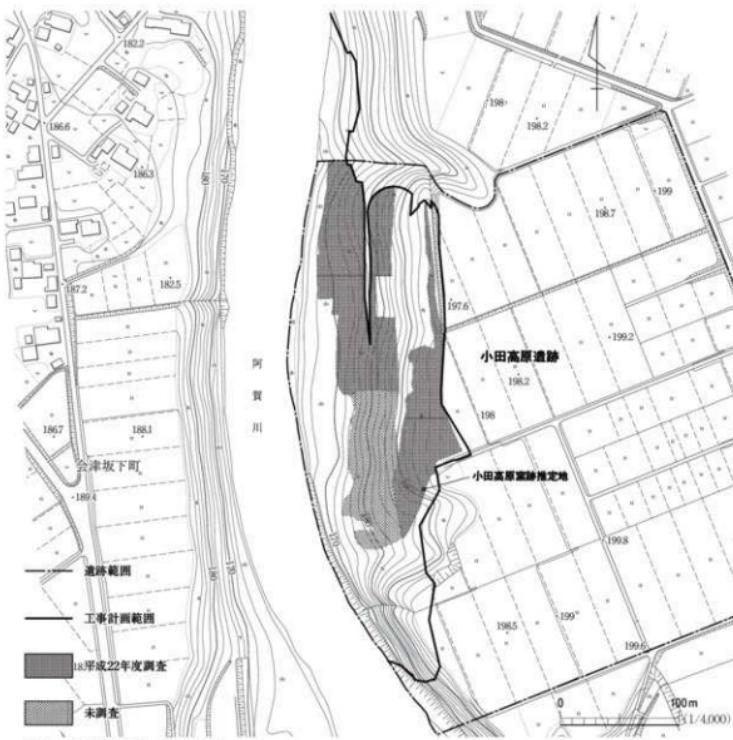


図4 調査範囲と工事計画

8月4・5日、小田高原遺跡のまほろん教職員体験研修に8名が参加、I区で体験発掘が実施される。8月20日、新潟大学ト部准教授来訪。8月23日、III区の重機による表土除去を開始する。

8月25日、ラジコンヘリによるI区の空中写真撮影・測量を実施。

9月上旬も連日の猛暑。9月7日、慶徳・豊川地区的作業員の追加雇用を開始する。II区で堅穴住居跡、土坑を検出した。9月9日、I区の3,900m²について引渡しが行われる。9月10日、慶徳町婦人会が小田高原遺跡の見学に訪れる。9月27日、秋雨の影響によってII区の東側斜面が崩落し、多量の土砂が流入しているのを確認する。9月下旬は連日の排水作業に追われる。9月30日、III区で平安時代の堅穴住居跡を確認する。

秋雨が落ち着いた10月5日から、II区に流入した土砂の除去を開始する。10月8日、畦畔の付け替えが終了し、I区の追加分400m²について調査を開始する。10月20～22日、II区を中心に簡易ボーリングによる地質調査を実施した。

11月8日、I区400m²の引渡しが行われた。11月10日、ラジコンヘリによるII区の空中写真撮影・測量を実施した。

12月1日、ラジコンヘリによるII区の空中写真撮影・測量を実施した。12月7日にI区、10日にIII区の調査が終了する。12月15日、I区とIII区の調査終了部分について引渡しが行われた。12月16日、II区の第1文化層とした箇所について調査が終了する。翌17日、器材撤収と作業員の雇用が終了し、小田高原遺跡の1次調査が終了した。なお、II区北側の斜面崩落による土砂流入防止と安全を確保するため、II区内に大型土嚢を設置する作業を12月20～24日の期間で実施した。

2次調査の早期着手を目指して、平成23年3月7～24日の日程で、III区の重機による表土除去を計画した。3月7日、調査員2名を配し、III区の北東部から表土除去を開始する。3月11日の午後3時前、東日本大地震が発生。調査区も大きく揺れ、避難する。調査区の内外で土砂崩れ等の発生は認められなかった。3月14日、阿賀川河川事務所からの作業中止指示を受け、調査区内に待機していた重機を撤収した。
(宮 田)

第3節 調査方法

今回の調査で使用した測量座標は、公共座標IX系X=179.800、Y=-3,000を基点とし、10m四方のグリッドを調査区全体に網羅した。座標値は世界測地系による。グリッドは基点から東へ10mごとにアルファベットでA・B…、南へ算用数字で1・2…と付し、その組み合わせによってA1・B1…と呼称した。各グリッドには測量杭を設定し、遺構の記録、遺物の採り上げに利用した。標高は阿賀川河川事務所が設定した基準点を利用し、遺跡・遺構等の標高観測・調査に利用した。

基本土層は、アルファベット大文字Lとローマ数字を組み合わせて表し、さらに細分した層については、ローマ数字の後にアルファベット小文字などを付けて、L I a・L II b・L III c…などのように表した。

堅穴住居跡などの大型遺構の掘り込みは、4分割法によって行った。土坑など比較的小型の遺構については2分割法で掘り込みを行った。遺物包含層の掘り下げは、グリッドに沿って10m四方の正方形の畦を残して掘り下げ、断面観察・記録を行った。土色の判別には『新版標準土色帖』を用い、記録した。住居跡・須恵器窯跡・堅穴遺構は1/20、土坑・小穴・焼土遺構は1/10または1/20で、溝跡・畝状遺構は1/40または1/80で図化した。

遺構の写真は35mm版および6×4.5cm版カメラを用い、モノクロームフィルムとカラーリバーサルフィルムで、同一被写体を同一角度、同一コマ数で撮影した。調査範囲の全景写真はラジコンヘリコプターによる空中写真撮影による。

発掘調査で得られた資料は、財团法人福島県文化振興事業団遺跡調査部で整理作業を行い、報告書刊行後は所定の様式に従い、各種の台帳類を作成し、福島県文化財センター白河館に収蔵・保管する予定である。
(宮 田)

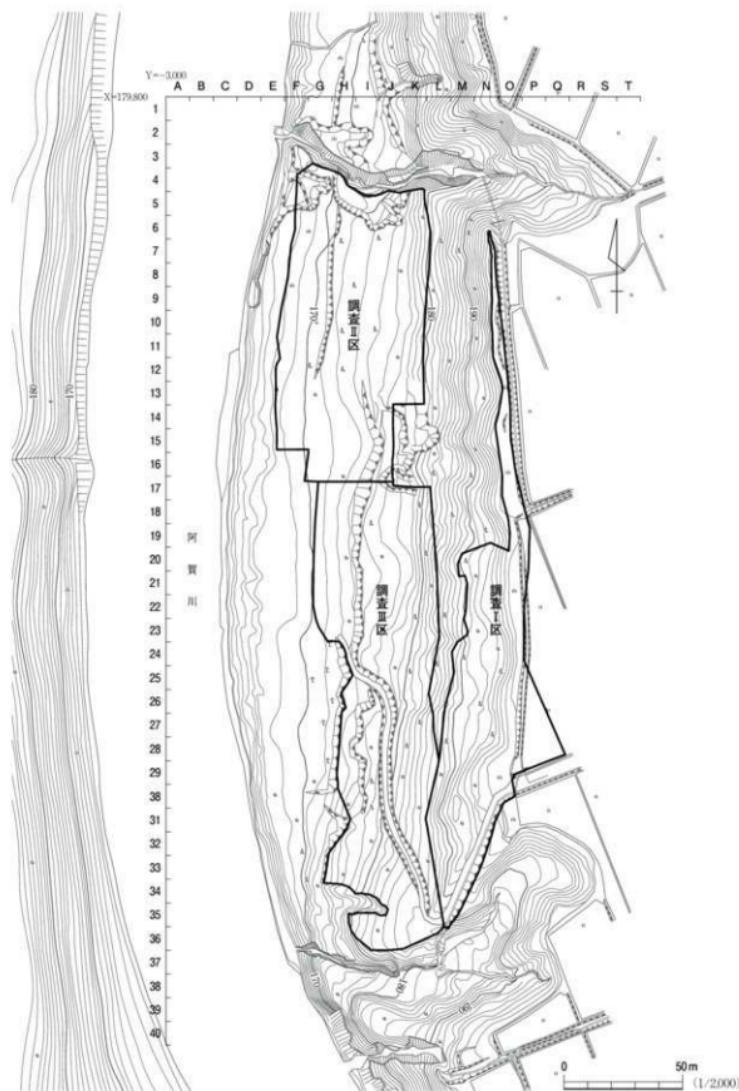


図5 調査範囲の区割りとグリッド配置

表2 竪穴住居跡一覧

遺構番号	排図番号	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
S101	8・9	I区(P-27-28)	方形	400	350	20	8C末~9C前	棲塊	
S102	12-13	I区(P-26-27)	方形	510	(410)	20	8C末~9C前	鉄具	工房?
S103	19	I区(P-Q28-29)	方形	400	-	20	8C末~9C前		南北調査区外
S104	66	II区(H-I10)	長方形	400	340	42	9C末~10C前	土師器	
S105	68	II区(I-J8)	方形	(327)	-	10	9C中~後	土師器	
S106	107-108	III区(J-17-18)	長方形	518	405	23	9C末	土師器・須恵器	S106>S111
S107	23	I区(Q27)	方形	220	190	30	8C末~9C前		竪穴状遺構
S108	70	II区(I-7)	長方形	(435)	353	23	9C末~10C前	土師器・刀子	
S109	73	II区(H-I9)	方形	244	(220)	14	9C末~10C前	土師器	竪穴式住居跡
S110	27	I区(P-26-27)	方形	360	300	20	8C末~9C前	土師器・須恵器	竪穴状遺構
S111	112-113	III区(J-17)	方形	530	498	61	9C中~後	土師器・須恵器	
S112	74	II区(H-13)	方形	550	520	40	9C末~10C前	土師器・刀子	竪穴状遺構
S113	76	II区(H-11)	長方形	438	350	30	9C中~後	土師器・須恵器	竪穴状遺構

(新)>(旧)

表3 須恵器窯跡一覧

遺構番号	排図番号	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SR01	79-80	II区(K-6)	羽子板状	(206)	124	-	9C中~後	須恵器	SR01>SR03
SR02	79-84	II区(K-6)	橢円形	(205)	(103)	-	9C中~後		
SR03	79-85	II区(J-K-5-6)	台形	(195)	145	-	9C中~後	須恵器	

(新)>(旧)

表4 溝跡一覧

遺構番号	排図番号	位置	平面形	規模(m)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SD01	28	I区(N-8-O-29)		213	1.4	0.4	8C末~9C前		
SD02	29	I区(O-28-P-28-29)		10.0	0.6	0.6	8C末~9C前	土師器	
SD03	31	I区(O-P-22)		6.4	0.6	0.5	8C末~9C前		排水溝?
SD04	89	II区(K-5-7)		28	0.9	0.2	平安時代~	須恵器	道路?
SD05	117	III区(J-18)		6.0	1.7	0.2	平安時代	土師器	道路?
SD06	32	I区(O-P-20)		4.4	0.4	0.1	奈良~平安時代		排水溝?
SD07	33	I区(O-15-16)		6.0	1.6	0.5	8C末~9C前		排水溝
SD08	33	I区(O-15)		3.2	1.1	0.3	8C末~9C前		排水溝
SD09	91	II区(H-14)		(9.5)	1.9	1.0	平安時代~	土師器	

(新)>(旧)

表5 燃土遺構一覧

遺構番号	排図番号	位置	平面形	規模(cm)			年代	遺物	備考
				長径	短径	深さ			
SG01	123	III区(I-20)		75	54	3	平安時代		

表6 土坑一覧

() : 遺存値

遺構 番号	持団 番号	位 置	平面形	規格(cm)			年 代	遺 物	備 考
				長径	短径	深さ			
SK01	34	I区 (Q28)	椭円形	120	90	25	8C末~9C前		
SK02	34	I区 (Q28)	椭円形	110	90	25	奈良~平安時代		
SK03	34	I区 (P27)	方形	300	270	35	8C末~9C前		土器焼成土坑?
SK04	34	I区 (O29)	方形	(115)	110	35	8C末~9C前		木炭焼成土坑?
SK05	35	I区 (O28)	方形	(230)	215	20	8C末~9C前		土器焼成土坑?
SK06	35	I区 (P26)	円形	170	—	80	8C末~9C前		簡易水溜用施設
SK07	36	I区 (O29)	方形	140	(110)	40	8C末~9C前		土器焼成土坑
SK08	36	I区 (L31)	長方形	115	55	75	調文時代		落し穴
SK09	36	I区 (P21)	椭円形	230	140	75			
SK10	92	II区 (H10)	椭円形	192	140	18	平安時代	土師器	土器焼成土坑?
SK11	35	I区 (P・Q27)	方形	135	80	20	奈良~平安時代		
SK12	36	I区 (P27-28)	円形	80	—	20	8C末~9C前		
SK13	37	I区 (O28)	方形	180	(160)	15	8C末~9C前		土器焼成土坑?
SK14	37	I区 (O28)	椭円形	120	(50)	20	8C末~9C前		SK14>SK15
SK15	37	I区 (O28)	椭円形	(100)	(40)	10	8C末~9C前		SK15<SK14
SK16	37	I区 (P26)	椭円形	170	145	25	8C末~9C前		
SK17	38	I区 (P26)	円形	250	—	95	8C末~9C前		簡易水溜用施設
SK18	118	III区 (J18)	椭円形	200	173	21	9C末	土師器・須恵器	SK18>SD05
SK19	36	I区 (O19)	円形	90	—	25	奈良~平安時代		木炭焼成土坑
SK20	37	I区 (P26)	椭円形	160	(140)	70			S102>SK20
SK21	118	III区 (J18)	椭円形	95	85	30	9C末~	土師器	SK21>S106
SK22	119	III区 (J20)	椭円形	56	48	14	9C中~後	土師器	
SK23	119	III区 (J18)	円形	54	—	30	9C中~未	土師器	ロクロピット
SK24	119	III区 (J19)	円形	58	—	14	9C中~未	土師器	
SK25	92	II区 (I8)	円形	150	—	23	9C末~10C前	土師器	土器焼成土坑
SK26	92	II区 (H10)	不明	210	(84)	16	9C末~10C前	土師器・須恵器	
SK27	38	I区 (O17)	長方形	(300)	90	15	奈良~平安時代		木炭焼成土坑
SK28	92	II区 (J12)	円形	80	—	40	平安時代		
SK29	120	III区 (I21-22)	長方形	(176)	(120)	26	9C	土師器	土器焼成土坑
SK30	120	III区 (I20)	円形	68	62	20	8C末~9C初		
SK31	120	III区 (I22)	円形	(90)	—	16	8C末~9C初		
SK32	92	II区 (G12)	椭円形	213	150	14	9C代	土師器・須恵器	土器焼成土坑?
SK33	38	I区 (O17)	椭円形	100	(60)	15	奈良~平安時代		
SK34	93	II区 (H9)	椭円形	115	98	32	9C末~10C前		
SK35	93	II区 (J5)	方形	(95)	(53)	10	平安時代~		木炭焼成土坑

(新)>(旧)

表7 その他の遺構一覧

() : 遺存値

遺構 番号	持団 番号	位 置	平面形	規格(cm)			年 代	遺 物	備 考
				長径	短径	深さ			
SX01	122	III区 (I19)	方形	302	298	70	18C後~	磁器・鉄製品	堅穴道構
SX02	96	II区 (F16, G14~16)		(580)	—	—	近世?		竪穴道構

第2章 調査I区の遺構と遺物

第1節 概要

調査I区は今回の調査範囲東部に位置し、I区西側には調査III区が接している。地形的には、阿賀川右岸沿いに形成された河岸段丘面にあたる。なお、遺跡の主体は、標高197.5～198.0mの最上位の段丘面である。(I区の報告にあたっては、便宜的に集落が確認された最上位の段丘面を最上位段丘面として報告することとした。)また、段丘崖を経て下位に小規模な段丘面が形成されている。段丘崖には幾つか小規模な沢が形成されており、その部分が湧水地となっている。調査I区内の段丘面の比高差は約13mである。

調査区の現況は、最上位の段丘面が水田、段丘崖および小規模な段丘面は雑木林である。なお、I区南端部の段丘崖部については、土層断面の観察から基盤層が地すべりを起こし、窪地になった部分に水田補助整備時等による盛土がなされ現地形を形成していることが判明した。このため、この部分についてはトレンチによる土層観察と土層作図に留めた。

調査I区で確認された遺構は、竪穴住居跡5軒(内2軒は竪穴状遺構)、土坑20基、溝跡6条などである。なお、昭和40年代に阿賀川に続く農道切通しで確認された須恵器窯跡については、今回の調査では確認されなかった。地区の古老によれば、この農道については降雨などで度々崩れていたようであり、須恵器窯跡についてはこれらの要因で既に消失しているものと考えられる。

調査I区で確認された遺構の所属時期については、本遺跡の主体時期である奈良時代末～平安時代初頭にかけてのものが大半である。遺構の分布状況は、図7に示したようにほぼ調査区の東南端部分に集中している。確認された遺構は最上位段丘面の縁部に位置しており、集落の中心部は調査区の東側の水田が広がる段丘面に形成されているものと考えている。

遺物は、土師器片約24,780点、須恵器片約1,780点、繩文土器片約400点、土製品25点、石器・石製品20点、鉄製品1点、鐵滓などが出土した。これらの遺物は、調査区の全体から出土しているものの、その大半は遺構内や遺構周辺部からの出土で、他の部分での出土状況は希薄である。

なお、出土遺物の中には、窯体などが付着した須恵器等も認められ、近くに須恵器窯跡が営まれていたことを窺い知る遺物も確認されている。また、検出した遺構内からは、器面が焼け、底部が抜け落ちた土器や粘土塊を多量に含むものも認められ、集落内で須恵器窯および焼成坑などによる土器生産を併せて行っていたものと考えられる。

出土遺物については、奈良時代末～平安時代初頭の遺物が主体を占める。遺物包含層と層位の関係については、「本章第2節」で述べる。

(大河原)

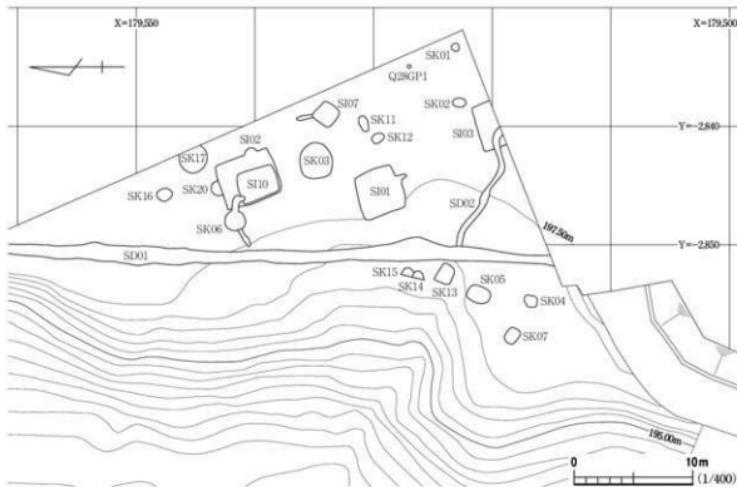


図6 造構配置図（I区南部）

第2節 基本土層

調査I区の地形は、阿賀川右岸沿いに形成された河岸段丘にあたり、複数の大小規模の段丘面と段丘崖がいくつか形成されている。このため、段丘によって土層の堆積状況が異なっている。土層の堆積状況は最上位段丘面の一部で水田耕作による削平、搅乱が認められるものの比較的安定した堆積状況にあった。また、最上位段丘では遺物包含層と造構の検出層位との関係も確認できることから、最上位段丘面を基本的な層位とし、調査区内にまたがる段丘全体を概観し、各層ごとの特徴や造構の検出状況、包含される遺物などの関係から各層を対応させ、以下の7層に大別した。

L I は黒色土で、調査区全体に分布する現表土、耕作土である。層厚は10~50cm。特に調査区南側では、水田補助整備事業時などで削られた土が段丘崖に押し出され、層厚が2mに及ぶ部分も認められる。これらの盛り土には、削平された包含層も含まれ、部分的に多量の遺物を含む場所も認められた。

L I bは、暗灰黄色粘質土である。調査区の東南部のM・N 29グリッド周辺部に部分的に堆積する層である。層厚は10~30cm。本層については堆積状況等からL IVの再堆積層と考えられる。少量の遺物を含むが上方からの流れ込みによる再包含と思われる。土層観察の結果、本層下位でL IIが確認(柱囲図⑥)されたことからL II堆積後に形成された層と判断した。

L IIは黒褐色土ではあるが調査区全体に堆積する層である。層厚は5~30cmを測る。縄文時代・奈良

時代末～平安時代初頭の遺物を包含するが、縄文時代の遺物の出土量は少ない。また、遺物の包含密度は、遺構が確認された最上位段丘面周辺とその下位の段丘崖にかけて密度が高く、それ以外の場所では希薄である。

L IIIは暗褐色砂質土で集落が形成された最上位段丘面とその下位の段丘崖の一部に堆積する層である。層厚は10～30cm。1～5cm程度の沼沢バミスを含む。本層から遺物は出土していない。奈良時代～平安時代の遺構の検出層位である。なお、今回の調査では、本層から縄文時代の遺構は確認されなかった。

また、段丘崖の一部で確認されたL IIIについては、土層断面等の観察から最上位段丘面から流れ込んだL IIIが沢地形に留まった再堆積層と考えられ、L IIIについては本来最上位段丘面にのみ堆積していた層と考えている。

L III aは黄灰色粘質土で調査区南側M29グリッド周辺の段丘崖の一部に堆積する層である。層厚は10cmを測る。土質や堆積状況等から基盤をなすL Vの再堆積層と考えられる。本層から遺物は出土しなかった。また、L IIIとの直接的な層序関係は確認できなかったものの、L II下位で確認されていることからL II形成以前には堆積を終了していると判断し、本層についてはL III aとして報告することとした。

L IVは黒褐色土で最上位段丘面とその下位の段丘崖の一部に堆積する。層厚は10～15cm。本層から遺物は出土していない。最上位段丘面では比較的安定した堆積状況にあるものの、その下位の段丘崖や小規模な段丘面では部分的に認められる。本来はこれらの場所でも安定した堆積状況にあったと考えられるが、地形的な要因等で流失してしまったものと思われる。遺構は、最上位段丘面で縄文時代の土坑が本層で確認されている。なお、奈良時代～平安時代の遺構については本層でも確認しているが、これらは、L IIIが欠落した部分やL IIIの層厚が薄く遺構検出作業時に本層まで掘り下げてしまった結果であり、本来はL III上面で遺構が構築されていたものと考えている。

L Vはにぶい黄橙色粘質土で調査区全体に堆積する。遺物は含まず、本調査区の基盤をなす層である。なお、基盤層については調査区内で色調や土質の相違はあるものの、細分せずにL Vとして報告した。

以上のように、本調査区では最上位段丘面で比較的安定した堆積状況が認められるが、その下位の段丘崖および小規模な段丘面では、地形的な要因等により、層が欠落または再堆積層が部分的に確認された。遺物は、L I・I b、L IIに包含されているが、L I・I bについては、耕作時なし再堆積時の流れ込みによって再包含されたものと思われ、本来の遺物包含層はL IIとなる。包含される遺物は、縄文時代では前期前葉、中期中葉、後期前葉、晩期と各時期にわたっているが出土量は少なく、各時期で出土の分布状況に相違は認められない。また、奈良時代・平安時代の遺物についても遺構が確認された周辺の最上位段丘面からの出土が大半である。この他に、最上位段丘下位からも遺物は出土しているが、沢地形にL IIが部分的に堆積した場所である。
(大河原)

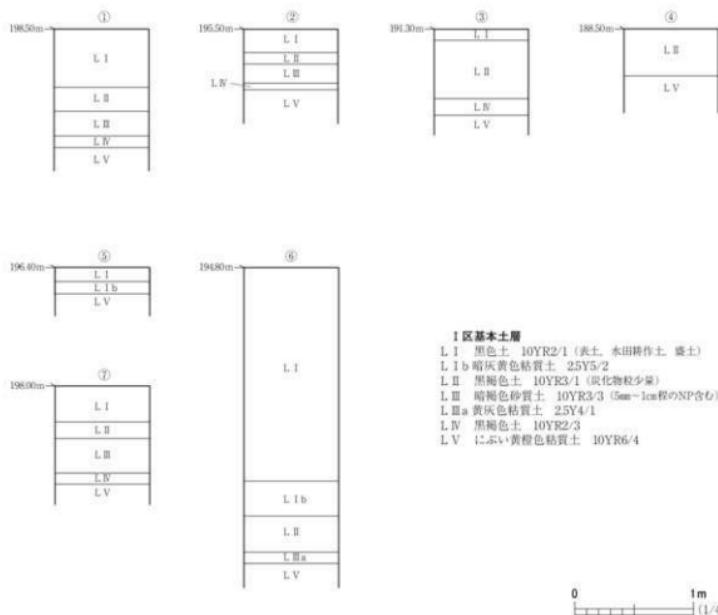
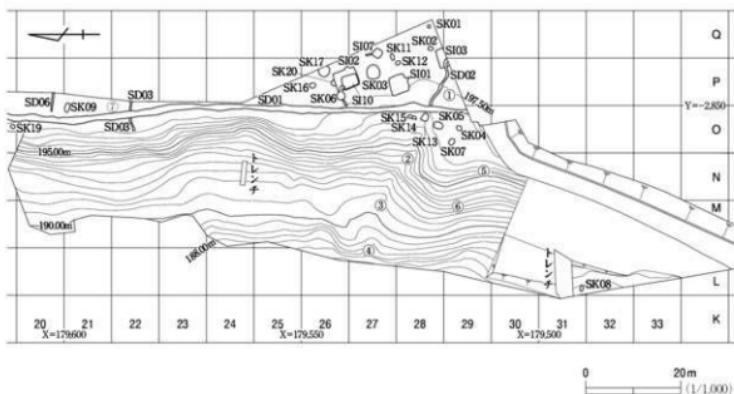


図7 I区造構配置図・基本土層

第3節 壊穴住居跡

調査I区から確認された壊穴住居跡は5軒である。このうち7・10号住居跡については壊穴住居跡として調査を行ったが、カマドなどの内部施設が確認されなかった。このため、この2軒については最終的に壊穴状遺構と判断した。報告にあたっては、特に壊穴状遺構の筋は設げずに、これらの遺構については本節で報告することとした。調査I区から確認された壊穴住居跡および壊穴状遺構の時期はいずれも奈良時代末～平安時代初頭に所属する。遺構検出面はLⅢ上面である。

なお、調査区域で検出された2・3・10号住居跡については、工事計画の変更により調査範囲が拡張したため、拡張部の調査を行うこととなった。このため、調査終了した部分については、基盤層LⅤまで掘り下げているためこの部分にあたる遺構は遺存していない。

また、出土遺物のうち未還元の須恵器杯については、須恵器窯ではなく土器焼成坑で生産されたと考えられる土器も認められるが、調査区内で出土する還元化した須恵器杯と製作技法、器形などが変わらないことから、これらを比較するため須恵器の項目で報告している。これらの土器については、須恵器系土器などの名称を用いて報告されることもあるが、近年10世紀前半の土器に使用される場合が多く、今回は未還元といった呼称を使った。これらの土器については、断面を白抜きし還元化した須恵器と区別している。以下、壊穴住居跡について個別に報告を行う。

1号住居跡 S 101

遺構（図8・9、写真5・6）

調査区東南部、P 27・28グリッドに位置する。地形的には最上位段丘面に立地する。LⅡ除去後、LⅢ上面で黒褐色土の方形の広がりとして検出した。他の遺構との重複区関係は認められない。遺構内堆積土は3層に分層でき、いずれも壁際からの流入状態を示すことから自然堆積と判断した。

平面形は方形を呈し、規模は南北35m、東西4m。壁は比較的急な角度で立ち上がり、壁高は15～20cmを測る。床は暗褐色土で貼床が施され、ほぼ平坦に整えられていた。また、全体的に軽い踏み締まりが確認できた。

住居内施設として、カマドとピット2個を検出した。カマドは南壁東隅に位置する。袖部は住居内に80cmほど張り出し、白色粘土を含んだ暗褐色土で構築され、芯材として長胴甕を使用している。両袖の最大幅は1mを測る。燃焼部の規模は焚口幅55cm、奥行き90cm、底面は床面より5cm程掘り窪められ、断面形は皿状を呈す。また、底面は1cm程焼土化していた。煙道部は、カマド奥壁から住居外に50cmほど張り出している。煙道部の幅は15～30cm、底面から検出面までの高さは10cmを測る。

カマド内堆積土は5層に区分した。 ℓ 1は住居内堆積土 ℓ 1に相当する。 ℓ 2・3はカマド天井崩落土に起因する層、 ℓ 4・5は煙道部からの流入土である。また、 ℓ 3上面で土師器の短胴甕が

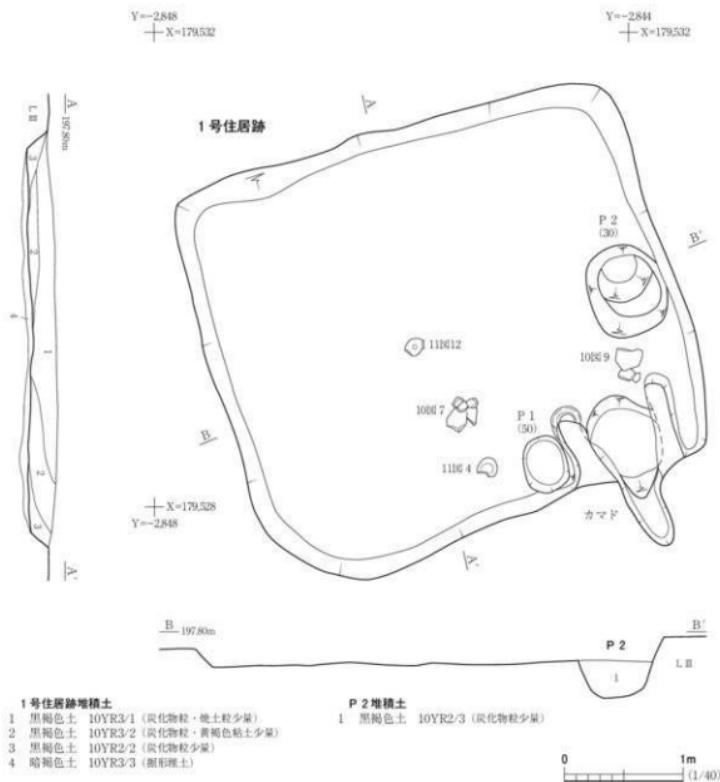


図8 1号住居跡（1）

伏せられた状態で2つ出土している。出土状況や土層の観察等から上部の流れ込みによるものや支脚などではなく、カマド廃棄時に据えられたものと判断した。カマド天井を一度壊し燃焼部底面その構築土で整え、これらの土器を据えた後に、残りの天井構築土で埋め戻したものと考えている。

ピットはカマド脇と東壁のはば中央の床面で検出した。P1はカマドの右袖に接し、平面形は楕円形を呈す。規模は長径50cm、短径40cm、深さは50cmを測る。断面形は鍋底状を呈している。堆積土は黒褐色土1層で、堆積土中からは多くの遺物が出土している。P1については、規模や位置から貯蔵穴として機能したのと考えている。P2は東壁中央位置している。平面形は楕円形を呈し、規模は長径80cm、短径65cm、深さは30cmを測る。底面は南側から北側に向かい緩やかに傾いている。P2についても位置や規模から貯蔵穴的なものと考えている。

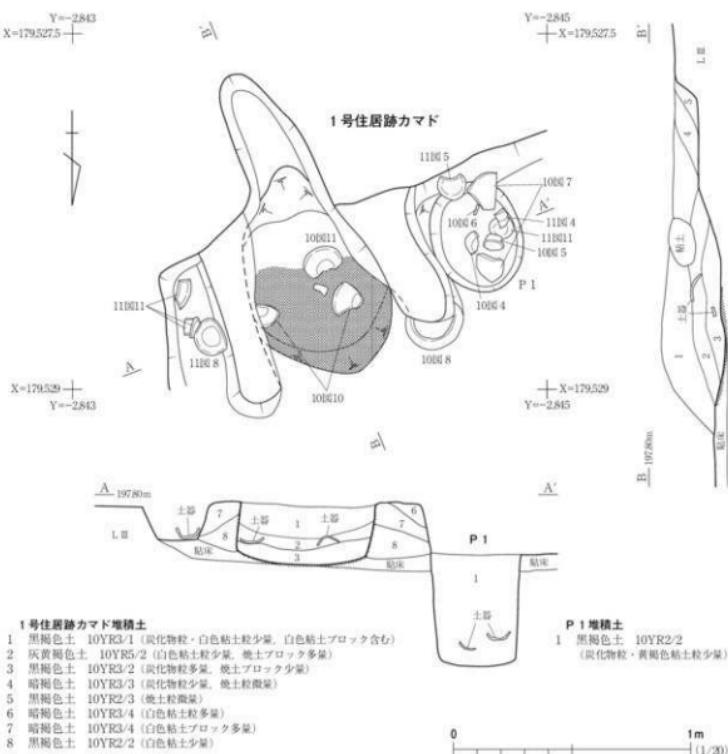


図9 1号住居跡（2）

遺物 (図10-11, 写真20)

出土遺物は土師器器426点、須恵器片18点などが出土している。これらの遺物は遺構内堆積土を中心に出土しているが、完全な形をしたもの多くは、カマド周辺とP1内からの出土が多い。また、遺物のなかには、S107の堆積土から出土したものと接合関係にあるものも認められる。この土器については、出土層位や資料の遺存度などからS107で報告している。(図24-8)

図10-1～4はロクロ整形の土師器杯である。1～3はいずれも内面に黒色処理が施されるが、3は外面および底面にもミガキが行われ、黒色処理が施されている。1・2の体部下半から底部にかけては、回転ヘラケツリ再調整が施されている。4は器面が脆く観察しにくいが内外面にミガキを施し、内面黒色処理を行った痕跡が認められる。5は小壺で器面は非常に脆く、器形にも歪みがある。形状から須恵器の短頭壺を模倣したものかもしれない。6は全面にミガキが行われている長

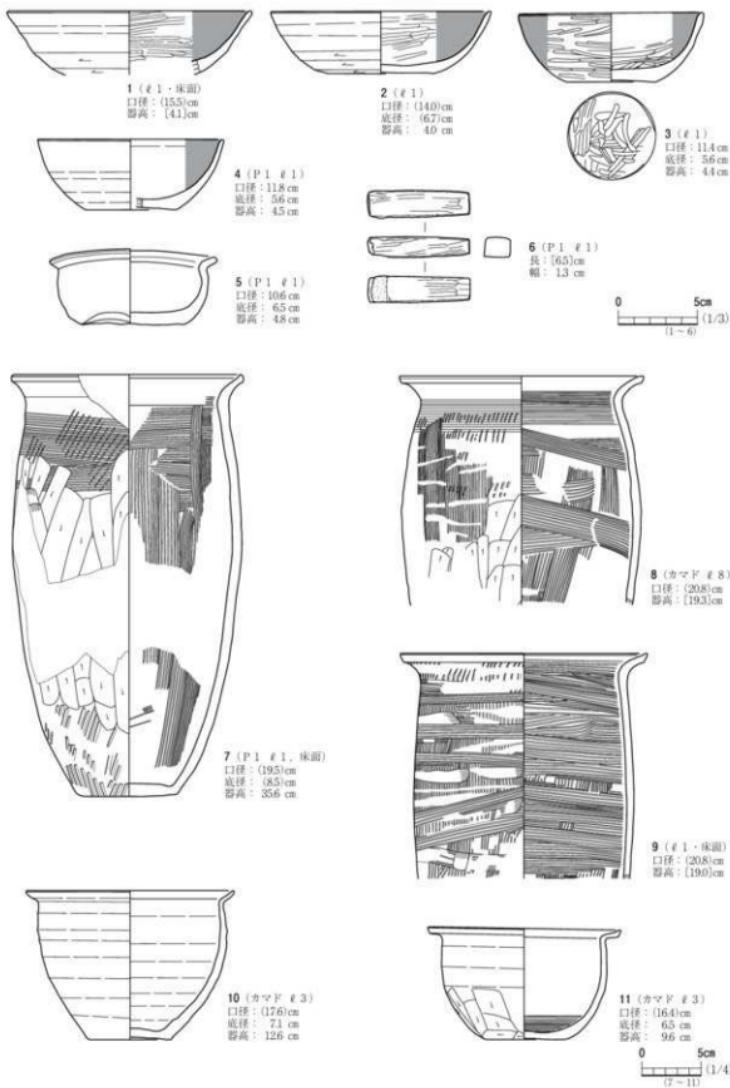


図10 1号住居跡出土遺物（1）

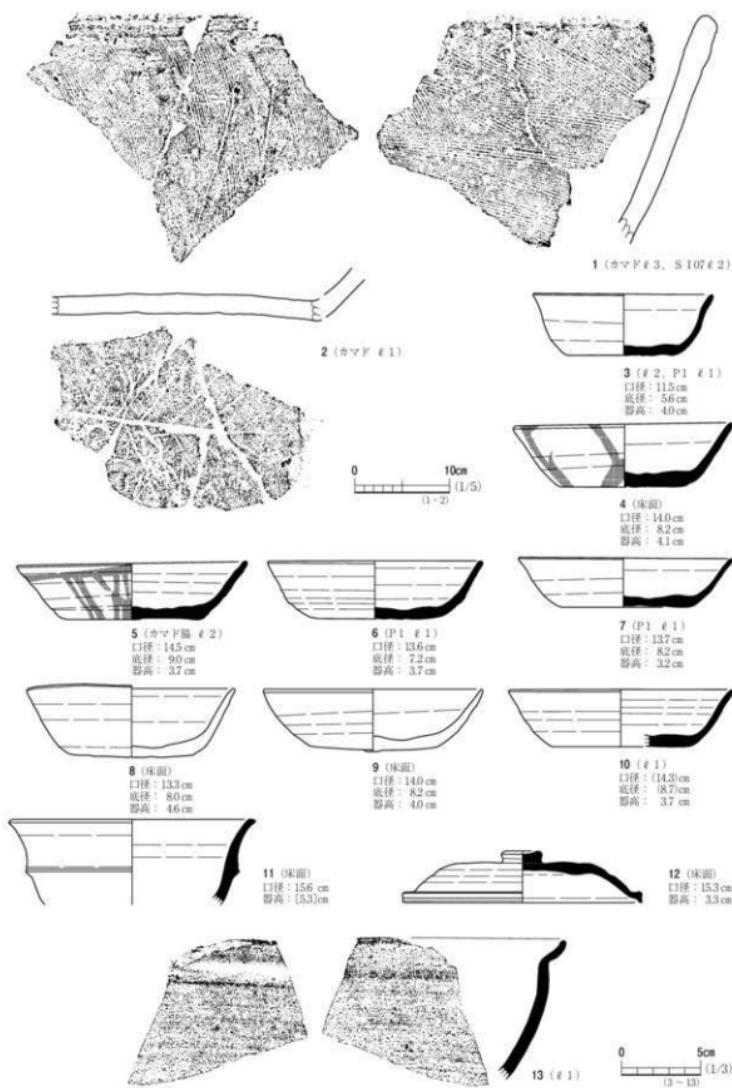


図11 1号住居跡出土遺物（2）

方形状の土製品である。形状から柄部と考えられる。

図10-7～11は土師器甕である。器形的には7～9の胴部中央がやや膨らみ、口縁部が「く」字状に外反する長胴甕と10・11の胴部中央から上半にかけて膨らみをもつ短胴甕が認められる。短胴甕には、口縁部は「く」字状に外反するものと11のようにほぼ真横に引き出されるものが認められる。7～9はタキ成形後にカキメ、縦位のハケメ、ヘラナデ、手持ちヘラケズリなどの調整を施す。また、全体の器形がわかる7を見ると胴部下半にタキ痕を残す。内面は、ハケメ・カキメ調整が施される。10・11はロクロ整形後、10のように調整を加えないものと11の胴部下半に手持ちヘラケズリ、内面にカキメ調整を施すものがある。図11-1・2は土師器の大型鉢の口縁部と底部である。1の外面には縦方向、内面には斜めにハケメが施される。2の底面には木葉痕が観察できる。

図11-3～10は須恵器杯である。いずれも器高は比較的低く、底部から口縁部までほぼ直線的に立ち上がる器形である。3については、他の資料に比べ、やや小型である。底部の切り離しは、いずれも回転ヘラ切りによる。これらの土器は底径／口径比が0.55～0.6、器高／口径比0.25～0.3に収まる土器(4・9・10)と底径／口径比が0.61以上、器高／口径比0.31以上(3・8)に分かれる。焼成はいずれも良好で堅緻なものが多く、4・5には火だすき痕が認められる。また、8・9については未還元のもので、色調が浅黄橙色を呈す。

図11-11は須恵器棱碗で体部に明瞭な稜を有す。同図12は中央が浅く窪んだ摘みをもつ蓋である。天井部はほぼ平坦に整えられているが、部分的にヘラ切り痕を残す。同図13は須恵器の鉢で、口縁部が「く」字状に外反し口端部が上方に摘み上げられている。

まとめ

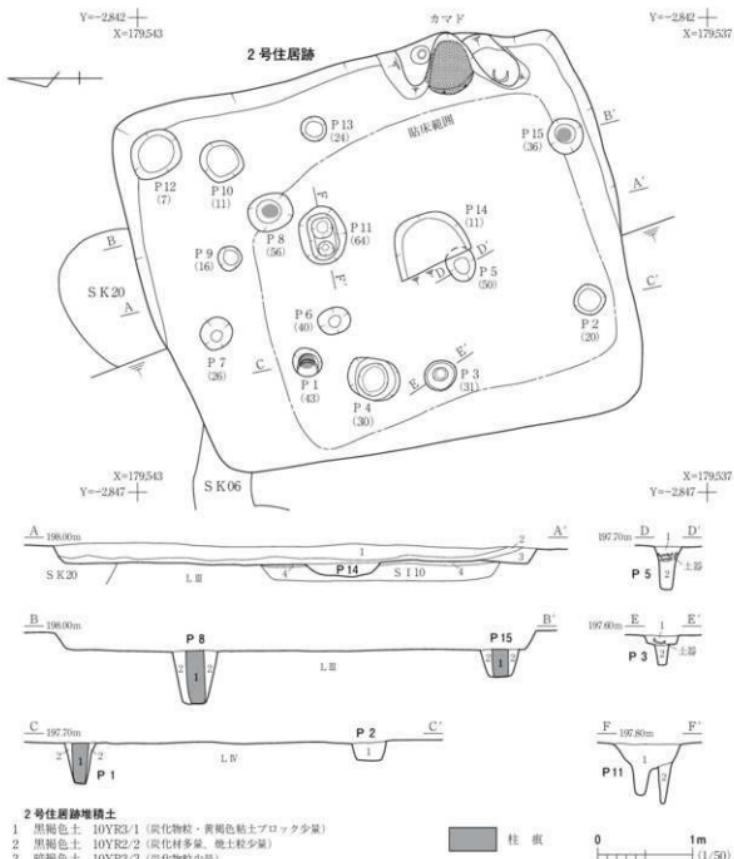
本住居跡は、南北3.5m、東西4m程の方形を呈する。住居内施設として、貯蔵穴と考えられるビットとカマドを検出した。出土遺物の多くはカマド周辺の床面やP1内から比較的まとまって出土している。これらのなかには、日常的な供養具や煮炊具の他に稜碗などの仏具系の遺物が出土していることが本住居跡の特徴である。本住居跡の所属時期については、遺物の特徴などから8世紀末葉～9世紀前葉頃と考えている。(大河原)

2号住居跡 S I 02

遺構(図12・13、写真7・8)

調査区東南部、P26・27グリッドに位置する。地形的には最上位段丘面に立地する。遺構検出面はLIII上面である。S110、SK20と重複関係にあり、本遺構が新しい。なお、SK06の溝状施設と重複しているが、この溝状施設については本住居跡に伴う可能性もある。また、本住居跡の西側壁および南北壁の一部は、遺構検出時に掘り過ぎてしまい遺存していない。

遺構内堆積土は3層に分層した。ℓ1・3については、壁際からの流入状態を示すことから自然堆積と判断した。ℓ2は、床面全体を直接覆う堆積土で、炭化材や焼土、粘土を多量に含む。土層



2号住居跡堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (炭化物粒・黄褐色粘土ブロック少量)
- 2 黒褐色土 10YR2/2 (炭化物多量、焼土粒少量)
- 3 黑褐色土 10YR3/3 (炭化物粒少量)
- 4 にふい・黄褐色粘土 10YR4/3 (焼土粒・黄褐色粘土少量、粘土理土)

P 1堆積土

- 1 黒褐色土 10YR3/1 (炭化物粒少量)
- 2 黄褐色土 10YR3/3 (にふい・黄褐色土ブロック少量)

P 2堆積土

- 1 黄褐色土 10YR3/3 (炭化物粒少量)

P 3堆積土

- 1 黄褐色土 10YR3/3 (焼土粒少量、にふい・黄褐色粘土含む)
- 2 黑褐色土 10YR2/3 (炭化物粒少量)

P 4堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/3 (焼土粒少量、にふい・黄褐色粘土含む)

P 5堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/3 (炭化物粒・焼土粒少量)
- 2 にふい・黄褐色粘土質土 10YR5/4 (炭化物粒少量)

P 6・7・9・10・12・13堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/2 (炭化物粒・焼土粒少量)

P 8堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/1 (炭化物粒少量)

- 2 黑褐色土 10YR2/2 (にふい・黄褐色粘土少量)

P 11堆積土

- 1 黄褐色土 10YR3/3 (炭化物粒少量、焼土粒多量)

P 14堆積土

- 1 黑褐色土 10YR2/3 (焼土粒多量、にふい・黄褐色粘土少量)

P 15堆積土

- 1 黑褐色土 10YR3/1 (炭化物粒少量)

- 2 黄褐色土 10YR4/4 (にふい・黄褐色粘土ブロック少量)

図12 2号住居跡（1）

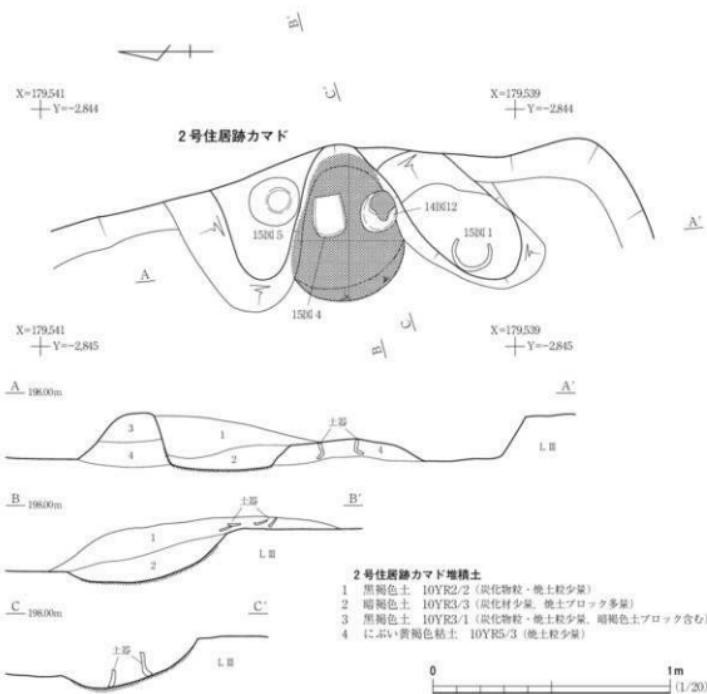


図13 2号住居跡（2）

の観察状況から、火災に起因する層と考えている。また、 ℓ_2 には焼成時の影響で形が歪んだ土師器甕が出土している。

平面形は遺存状況から方形を呈していたものと考えられる。規模は東西が遺存長で4.1m、南北5.1m。遺存する壁は比較的急な角度で立ち上がり、壁高は10~20cmを測る。床はS 110と重複する部分をにぶい黄褐色粘土で貼床を施し、それ以外はL III上面をそのまま床面として使用している。床面はほぼ平坦に整えられているが、細かい凹凸が認められ、全体的に軽く踏み締まっていた。

住居内施設として、カマドとピット15個を検出した。カマドは東壁南隅に位置する。袖部は住居内に50~70cm程張り出し、にぶい黄褐色粘土と黒褐色土で構築されている。袖部の芯材には、長胴甕が用いられていた。両袖の最大幅は1.4mを測る。右袖の構築土から、鉄製具の鋸具が出土した。カマド燃焼部は焚口の幅が約60cm、奥行き70cmを測る。底面は床面より5cm程掘り窪められている。底面の断面形は皿状を呈し、1cm程焼土化していた。煙道部は確認されなかった。

カマド内堆積土は2層に区分した。 ℓ_1 は住居内堆積土 ℓ_2 に相当する層である。 ℓ_2 はカマド

天井崩落土である。また、燃焼部底面からは長胴甕の口縁から胴部が倒立状態で出土している。燃焼面に据えられているものの、位置的に支脚とは考えられない。このため、カマド廃棄時に据えられたものと判断した。カマド天井を一度壊し燃焼部底面に倒立状態で設置した後、天井構築土で埋め戻したものと考えている。

ピットは住居跡床面中央周辺と壁際で検出した。このうちP 1・8・15については、柱痕が確認されたことと規模や位置などから主柱穴と考えられる。なお、P 2についても位置的に主柱穴と判断した。この他、P 4・5・11についても規模や位置などから主柱穴と考えている。また、P 11の土層断面の観察から柱の据え替えが確認でき、本住居跡については上屋の建て替えがあった可能性がある。P 4・5については、P 14との重複状況や検出時に本住居跡の床面を削平した段階で確認していることから、重複するS I 10に伴う可能性もある。西側壁中央に位置するP 3は、検出時に周辺の床面に黄橙色粘土が散らばっていた。P 3については、ピット断面形が漏斗状を呈していることから、いわゆるロクロピットの可能性がある。東壁北隅に位置するP 12は、比較的浅めのピットであるが規模や位置などから貯蔵穴的なピットと判断した。床面中央で検出したP 14は、多量の焼土粒を含む黒褐色土で埋め戻されていた。鍛治等に関係する施設と考えたが、鍛冶を行った痕跡や遺物などは確認できなかった。

遺 物 (図14~18、写真21・22)

出土遺物は土師器片5879点、須恵器片178点、鉄製品などが出土している。遺物は床面から遺構内堆積土②を中心に出土しているが、特に住居跡中央周辺からの出土が多く、二次的に比熱を受け器面が燃ぜているものや形が歪んだ土器も認められる。これらの遺物は短胴甕が多い。なお、土器の割れ方や器形の歪み状況から、住居内で製作したものか火災焼失の際に生じた産物ないし、住居廃絶後の窓地を利用した土器焼成坑の可能性を指摘しておきたい。

また、遺物のなかには、他の遺構S I 07、S K03の堆積土から出土したものと接合関係にあるものも認められ、出土層位や資料の遺存度などから、S K03と接合関係(図17-3)にあるものについては本遺構で、S I 07と接合関係にあるものはS I 07(図25-2)で報告した。

図14-1~5はロクロ整形の土師器杯である。1・3・4にはいずれもミガキ後に黒色処理が施されるが、2・5は黒色処理が施されていない。また、3の内面は密にミガキが行われている。器形的には、1・4の体部下半に丸みをもち、口縁部までは直線的に立ち上がるものの、3・4の体部下半に丸みを持ち、口縁が外傾しながら立ち上がるものの、2の体部下半から口縁部まで、外傾して立ち上がるものが認められる。口縁端部は外反するものが多いが、5のように内湾気味になるものも認められる。1・2・4の体部下半には回転ヘラケズリ再調整、3・5には手持ちヘラケズリ再調整が施されている。3・4の底部の切り離しは、回転糸切りによる。

図14-6は体部下半に丸みをもち、口縁部が緩やかに外反する土師器の小型鉢である。底部周辺に手持ちヘラケズリ再調整が施される。同図7は蓋、8は高杯でいずれも両面に丁寧なミガキが施され、内外面に黒色処理が施されている。図14-9~15、図15は土師器甕である。器形的には図

図14-10～13の胴部にやや丸みをもち、口縁部が「く」字状に外反する短胴甕。図14-14・15、図15-1～3の胴部上半に膨らみをもち、口縁部が「く」字状または大きく外反する長胴甕が認められる。なお、図化しなかったが、全体的に歪みがひどい短胴甕(写真21)が出土している。

甕の内外面の調整は、短胴甕はロクロ整形痕を残すものが多いが、図14-10・13のように胴部下半にヘラケズリ再調整が施されるものや、同図12・13のようにカキメ調整が施されるものも認められる。長胴甕については内外面ハケメやカキメ調整を施すものが多く、図15-3～5のように縱方向の手持ちヘラケズリを外面胴部中央から底部にかけて行うものも認められる。また、同図1・2には口縁部と胴部境にタタキの痕跡が認められる。同図7は体部中央に丸みを持つ土師器鉢型土器である。内外面の器面の調整は、縱方向のハケメ後にカキメを施す。また、外面の体部下半には、縱位の手持ちヘラケズリが密に行われている。図16-1・2は土師器の鍋で、いずれもタタキ整形後に内外面にカキメやハケメ調整が施される。2の体部下半には縦位の手持ちヘラケズリが施される。同図3は瓶の底あるいは、盤になるものと思われる。

図18-1～10は須恵器杯である。底部の切り離し技法は、いずれも回転ヘラ切りによる。器形的には、器高が低く底部周辺にやや丸みもち、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものがほとんどである。これらの土器はほぼ底径／口径比が0.55～0.6、器高／口径比0.26～0.3に収まるが、4の底径／口径比が0.62、同図7が0.51を測る。焼成は比較的良好なものが多いが、5～10は未還元のもので、色調が浅黄橙色を呈す。また、6の器面には爆ぜた痕跡が認められる。

図18-11は須恵器の高台付杯である。身の部分は浅く、高台は貼り付けによるもので、断面形は方形状を呈している。同図12・13は須恵器の高台付盤で、13の底面には「廣」の墨書きが施されている。同図14・15は須恵器の蓋で、いずれも中央が浅く窪む摘みをもつ。14の天井部はほぼ平坦に整えられているが、中央に向かい緩やかに傾いている。また、15の天井部から体部にかけて回転ヘラケズリが施される。形状は山笠状を呈している。

図18-16は須恵器の横瓶で外面にカキメ、内面にアテ具痕と円盤貼り付けの痕跡が認められる。同図17は土師器盤の底部である。内面にミガキが施され、底面には「廣」の線刻が認められる。

図16-4・5、図17は土管状土製品である。図17-1のように形状が土管状を呈すものと図16-4・5、図17-2・3のように土管を半分に割った形状のものが認められ、下部に円孔をもつものが多い。また、口縁部が「U」字状を呈している。図18-18は鉢形具の鉄製鉗具で、鉗具頭は隅丸方形状を呈している。

まとめ

本住居跡は平面形が方形を呈する堅穴住居跡である。規模は東西4.1m、南北5.1mを測る。土層の観察状況から、本住居跡は火災にあったものと考えられる。住居内施設としては、カマドと主柱穴などを検出している。本住居跡については、断面形状がロクロ状ピットに類似する施設なども確認されていることなどから、工房的な役割を持った住居跡の可能性が高く、所属時期については遺物の特徴などから8世紀末葉～9世紀前葉頃と考えている。

(大河原)

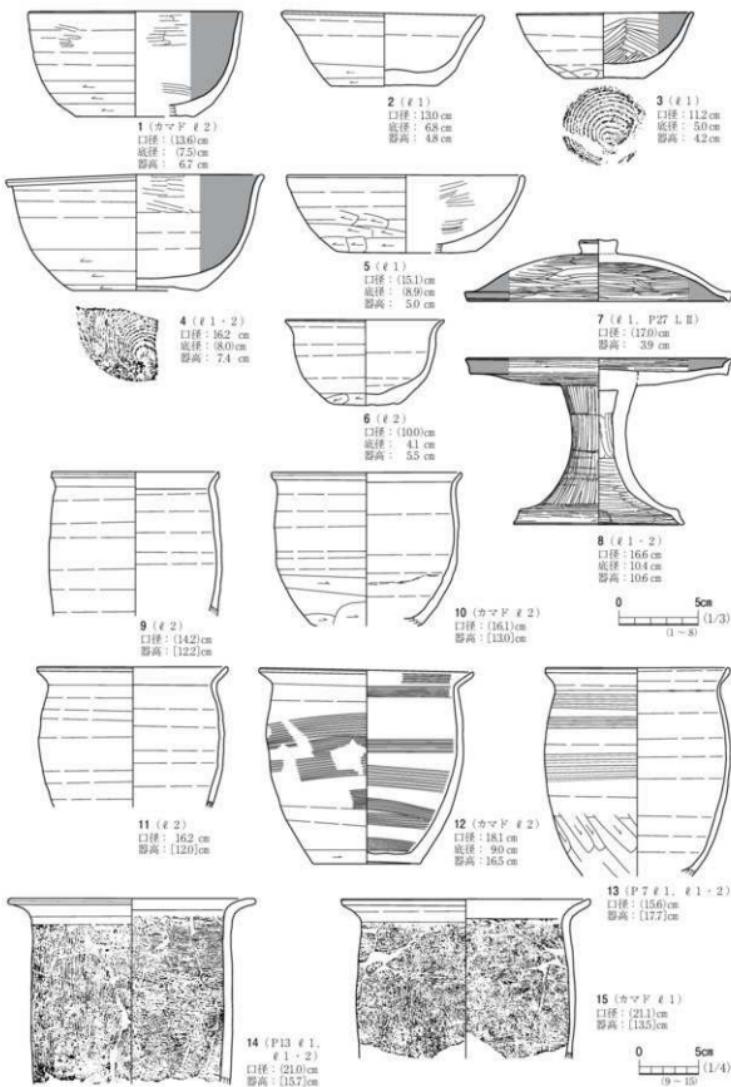


図14 2号住居跡出土遺物（1）

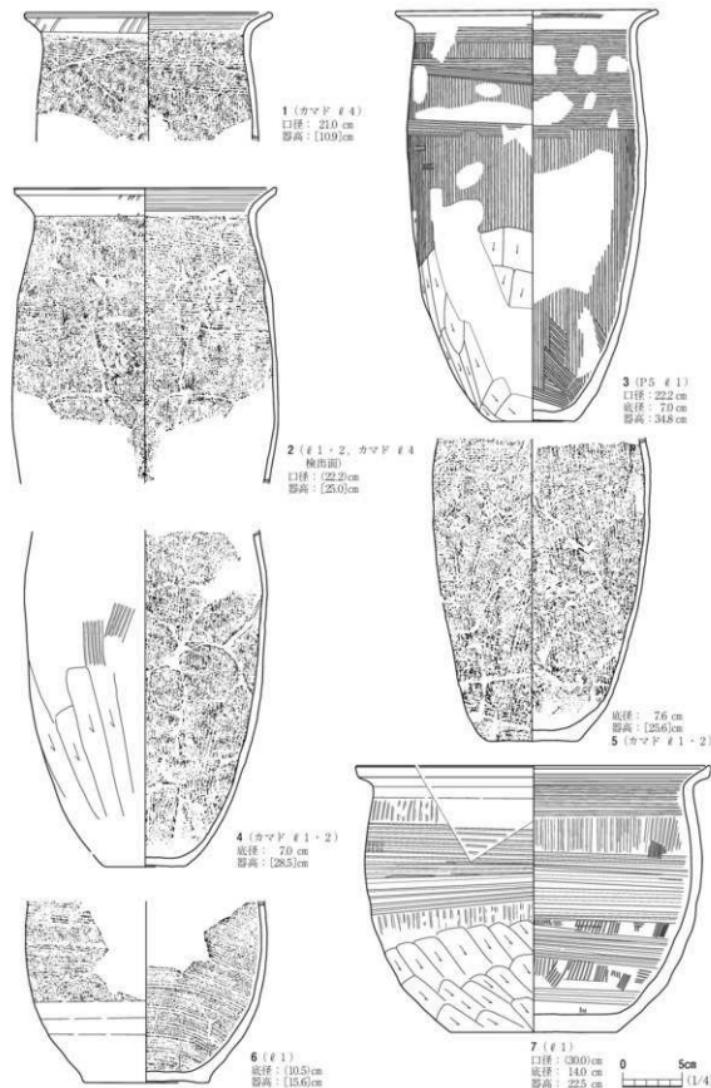


図15 2号住所跡出土遺物（2）

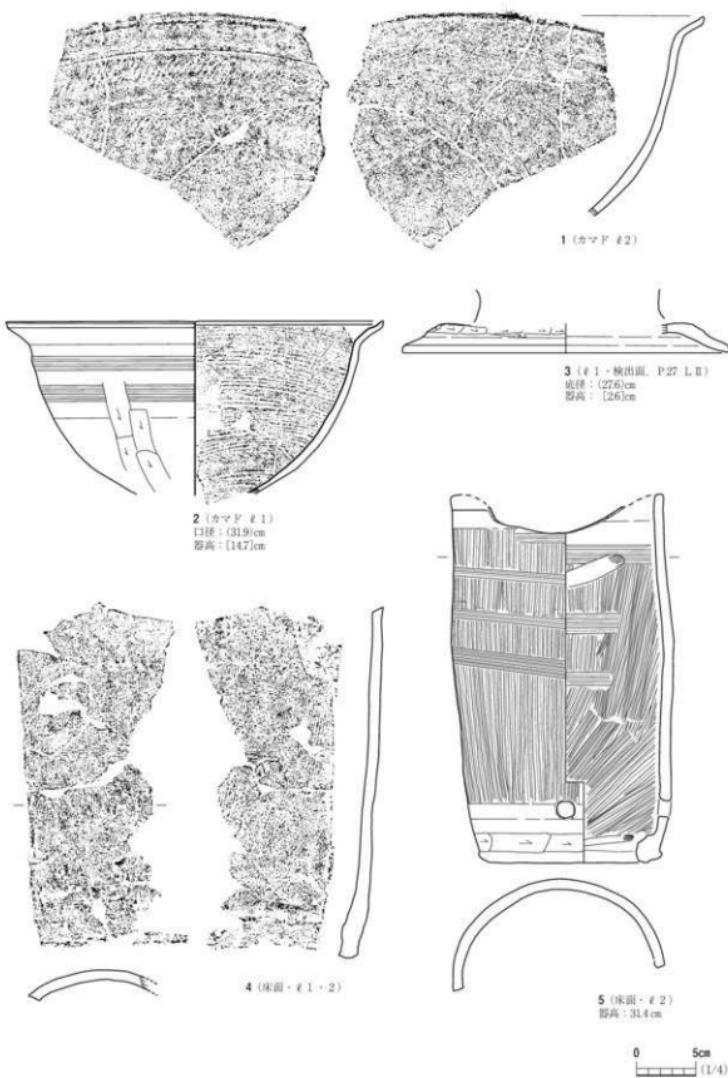


図16 2号住居跡出土遺物（3）

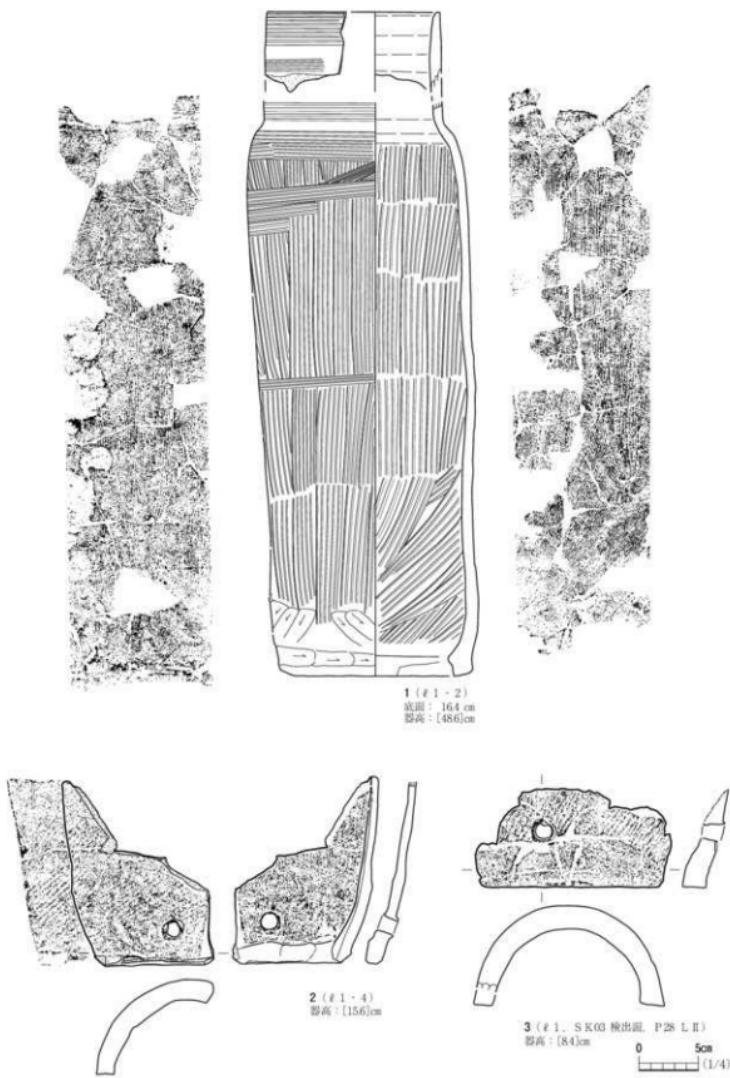


図17 2号住居跡出土遺物 (4)

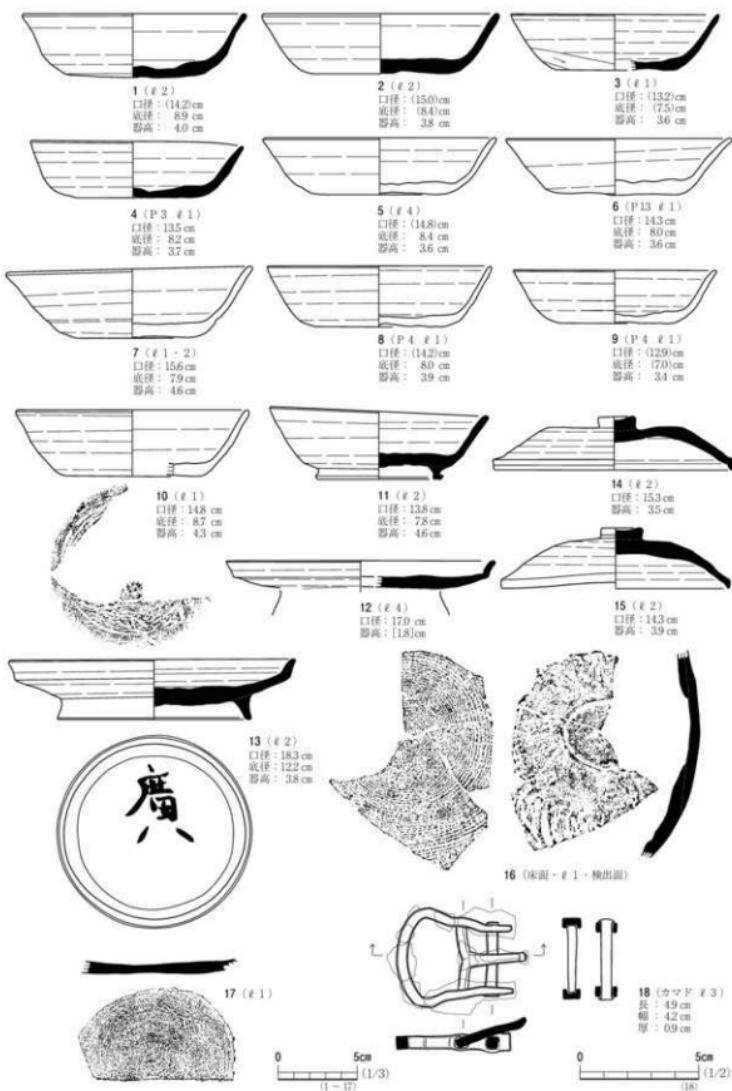


図18 2号住居跡出土遺物 (5)

3号住居跡 S I 03

遺構 (図19、写真9・10)

本住居跡は、調査区東南部、P・Q 28・29グリッドに位置し、地形的には最上位段丘面に立地する。遺構はL III上面で検出した。SD 02と重複関係にあり、本遺構が古い。また、住居跡の南側については、調査区外に延びているため調査は行っていない。

堆積土は2層に分かれ、いずれも壁際からの流入状況を示すことから、自然堆積と判断した。本住居跡の平面形については、全体を調査していないため明確ではないが、方形を呈しているものと考えられる。規模は全体が検出できた北側の壁で約4mを測る。検出できた壁は比較的急な角度で立ち上がり、壁高は20cmを測る。床は黄色褐色粘土を含む暗褐色土で貼床を施し、全体的に平坦に整えられている。また、踏み締まりなどは確認できなかった。

住居内施設として、ピット3個と壁溝を検出した。検出したピットについては、住居跡全体を調査していないためその機能は特定できないが、位置や規模などから支柱穴的なものと考えている。

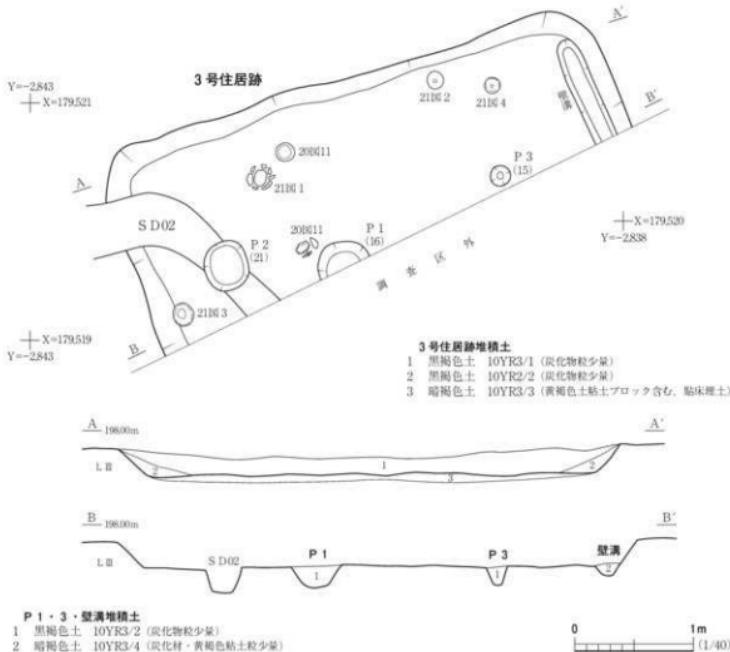


図19 3号住居跡

壁溝は東側の壁に沿って検出した。検出した壁溝の規模は、長さ1m、幅20cm、深さ10cmを測る。

この他の住居内施設は確認されなかった。

遺物 (図20~22、写真23)

出土遺物は土師器片405点、須恵器片52点、鉄滓、繩文土器片43点等が出土している。遺物は床面から須恵器杯や蓋が出土している。また、住居跡中央から東側の壁際の①下層から、須恵器の大甕と横瓶が土圧で押しつぶれたような状態で出土している。

図20-1は土師器杯である。底部周辺には回転ヘラケズリ再調整、内面には井桁状にミガキが行われ、黒色処理が施されている。同図2は蓋の摘みで、内外面に黒色処理が施されている。同図3・4は土師器の甕である。3は外面上半にロクロ整形痕、下半には縦位の手持ちヘラケズ再調整が認められ、内面にはカキメが施される。4は内外面に縦位のハケメが行われている。同図5は土師器の大型甕と考えている。外面には密に縦位のハケメが施される。

図20-6~11は須恵器杯である。底部の切り離しは、同図6~9が回転ヘラ切り、同図10・11は回転糸切りである。7の底部周辺は部分的にヘラケズリ再調整が行われている。器形的には、底部周辺に丸みをもち、体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものが多い。これらの土器は底径/口径比が0.57~0.6、器高/口径比0.24~0.28(6・9・11)と底径/口径比が0.61以上(7・9)に大きく分かれる。焼成は良好で堅く焼き締まっているが、8~11は未還元のもので色調が浅黄橙色を呈している。また、7の内面には火だすき痕が認められる。

図20-12・13は須恵器高台付杯である。器形的に身が浅く小型の12と身が深く大型の13に大別できる。12の外面には自然釉が認められる。また、13の外面の体部中央には、沈線が巡らされている。同図14は須恵器小壺で、焼成時の影響で口縁部が歪む。底部には回転糸切り痕が認められ、底部中央は穿孔されている。この穿孔は焼成前に外側から行われていた。また、外面底面まで自然釉が認められる。

図21-1~4は須恵器の蓋である。摘みは2・4のように中央が浅く窪むものと、1・3の窪みがほとんどないものが認められる。天井部はほぼ平坦に整えられているが、4のように天井部から口縁部にかけて丸みを帯び、山笠状を呈しているものも認められる。

図21-5は須恵器の甕である。器形的には胴部中央に膨らみをもち、頸部から口縁端部まで緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる器形となる。外面には、胴部下半から上半にかけてカキメ、下半から底部には、ハケメ調整が認められる。また、胴部上半と底部周縁にタタキ痕を残す。内面には、全体的に波状文が認められ、下半にハケメ調整が施される。また、外面に自然釉が認められる。同図6は須恵器横瓶で、器形は俵型を呈す。口縁部資料については出土していないが、外面にタタキ痕が押しつぶされた部分が認められることから、この部分に口縁部が作られていたものと思われる。外面にはタタキとカキメ、内面には波状文が認められる。製作技法は、片面閉塞によるもので、円盤貼り付けの痕跡が認められる。なお、未調査部の住居跡南側部分に接合可能な横瓶の破片が出土する可能性もあるため、今回は接合可能な破片資料を基に復元実測している。

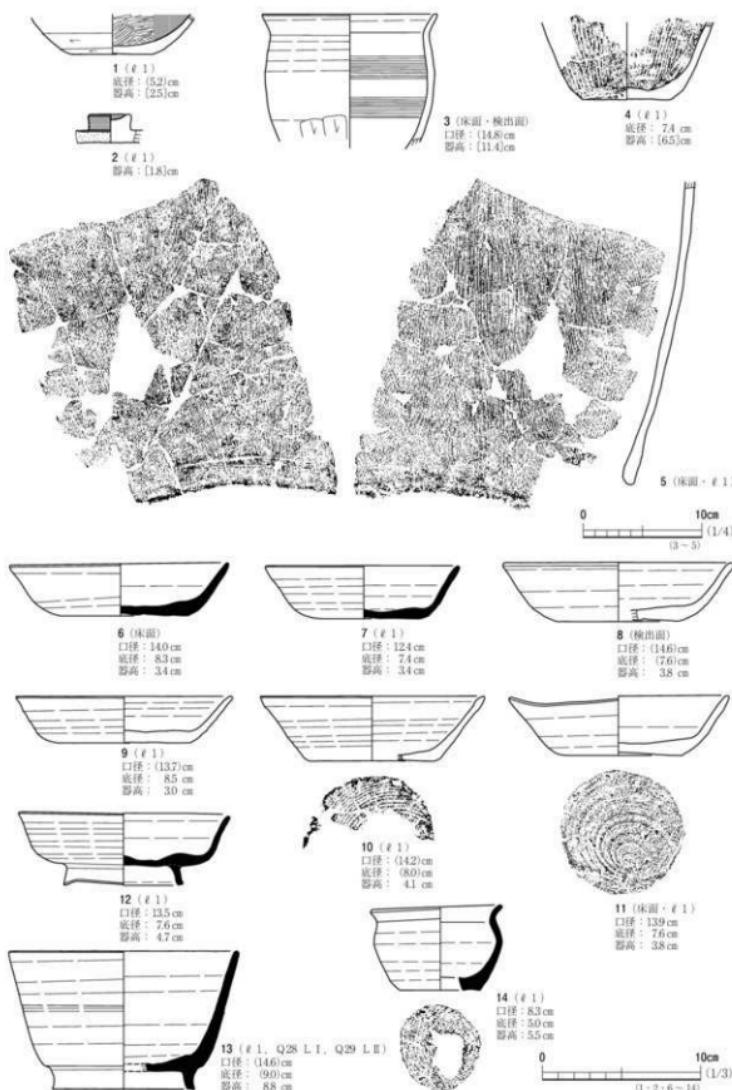


図20 3号住居跡出土遺物（1）

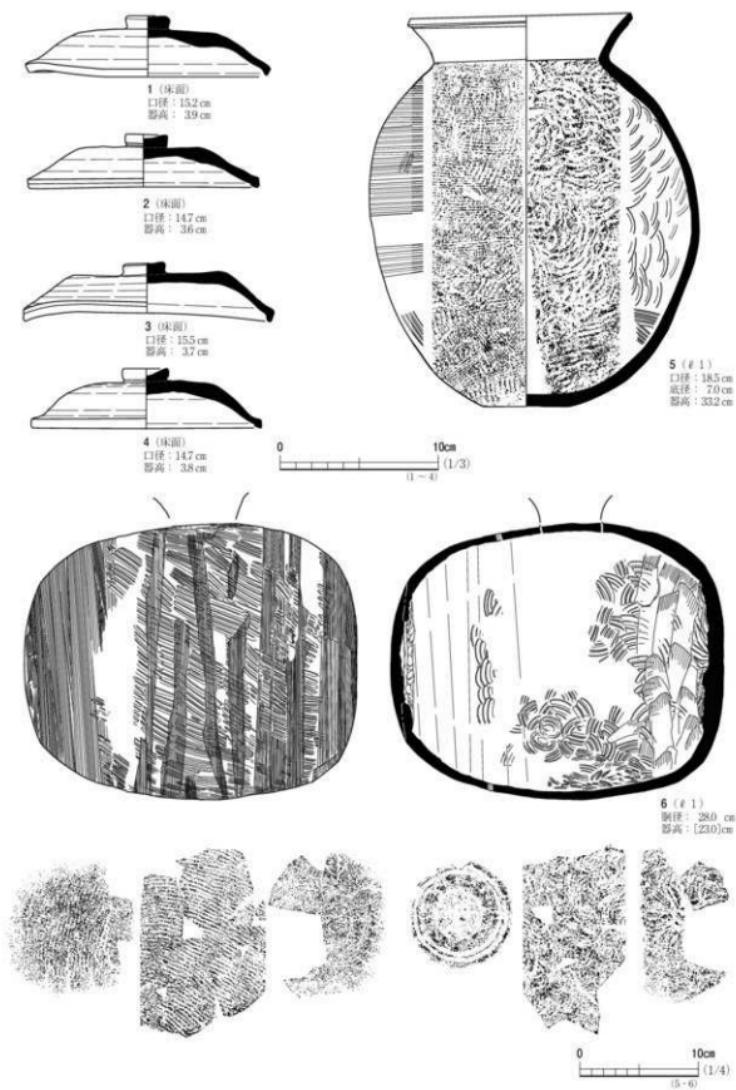


図21 3号住居跡出土遺物（2）

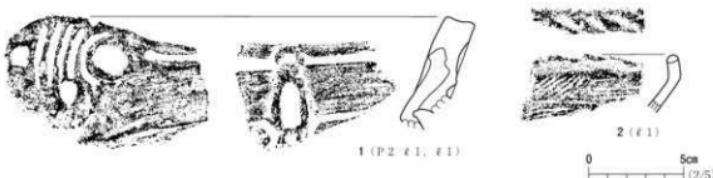


図22 3号住居跡出土遺物（3）

図22-1・2は縄文土器で同図1は口縁部直下に沈線を巡らせ、口縁部と胴部の文様を沈線と刺突で構成する。同図2は単節斜縄文が施され、口唇部には棒状工具による圧痕が加えられる。

まとめ

本遺構は南側の大半が調査区外にあたるため、平面形や内部施設など不明な点が多い。本遺構については、今回検出した遺構の規模や内部施設の支柱穴と考えられるピットや壁溝などから、堅穴住居跡として報告した。遺物は須恵器杯、蓋、甕、横瓶などが出土している。本住居跡の所属時期については、遺物の特徴などから8世紀末葉～9世紀前葉頃と考えている。（大河原）

7号住居跡 S I 07

遺構（図23、写真11・12）

本遺構は、調査区東南部、Q27グリッドに位置し、地形的には最上位段丘面に立地する。遺構はLⅢ上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが、西側にS I 02・10とSK03が隣接する。なお、本遺構については、規模やカマドなどが検出されなかしたことなどから、堅穴状遺構と判断した。

堆積土は3層に分かれる。 ℓ 2については多くの遺物と白色粘土塊や炭化材を多量に含むものの壁際からの流入状況を示すことから、自然堆積と判断した。なお、これらの遺物については、埋没過程の窓地に廃棄されたものと考えている。

本遺構の平面形は方形を呈し、規模は南北が22m、東西で1.9mを測る。壁は急な角度で立ち上がり、高さは20～30cmを測る。底面はLⅣ層をそのまま利用し、ほぼ平坦に整えられている。なお、貼床などは施されていないが、全体的に踏み締まっている。

本遺構の施設として底面中央で焼土面、北側の壁でピット2個、西側の壁から溝状施設を検出した。焼土面は底面の中央から南側にかけて南北0.7m、東西1.3mの範囲で検出した。平面形は不整な橢円形を呈し、底面から5cm程焼土化している。焼土面周辺からは遺物などは出土していない。ピットは北側の壁中央でP1、北壁西隅でP2を検出した。P1は北壁中央から外側に20cm程張り出す。いずれのピットも平面形が直径30cm程の円形状を呈している。

溝状施設は西側壁の中央から北壁西隅に位置する。検出時に平面的な遺構の重複関係が認められなかったことや堆積土の観察などから、本遺構に伴う施設と判断した。溝状施設については、堅穴

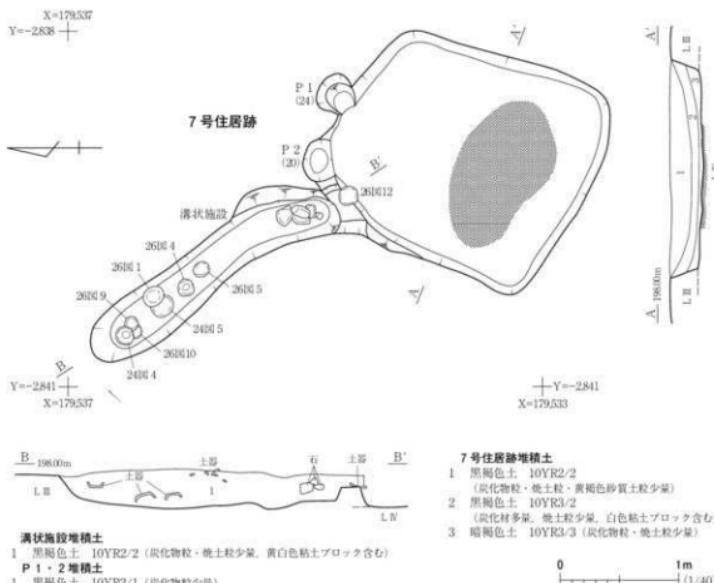


図23 7号住居跡

状構との接する部分で粘土塊と礫がまとまって出土したため、カマドとその煙道部の可能性も考えたが、焼上面や袖の痕跡などは確認されなかったため、溝状施設として報告する。溝状施設は遺構の外側に24m程延び、幅は30~50cm、深さは30cmを測る。断面形は鍋底状を呈し、凹凸が認められる。また、堆積土中にはほぼ完全な形の土師器および須恵器の杯がまとまって出土している。

遺 物 (図24~26、写真24~25)

出土遺物は土師器片1268点、須恵器片99点、スサ入りの粘土塊などが出土している。遺物は遺構内堆積土②と溝状施設内からの出土が多い。特に溝状施設からはほぼ完全な形の土師器および須恵器の杯がまとまって出土している。遺物の器種も豊富で杯、碗、蓋、壺の他、瓶や壺、大型鉢や手捏ね土器がある。また、遺物のなかには、S I 01(図24-8)、S I 02(図25-2)の堆積土から出土したものと接合関係にあるものも認められ、これらについては、出土層位や資料の遺存度などから、本遺構で報告する。

図24-1~5、図26-9は土師器の杯である。図24-1・2・4は底部周辺に回転ヘラケズリ再調整が行われる。これらの土器は、いずれも丁寧にミガキが施され、器面に光沢をもつものが多い。同図3は内外面ともに丁寧にミガキが施されている。同図5の底部の切り離しは回転糸切りによる。1・5は内面黒色処理が行われている。図26-9の底面は、手持ちヘラケズリ再調整で平坦

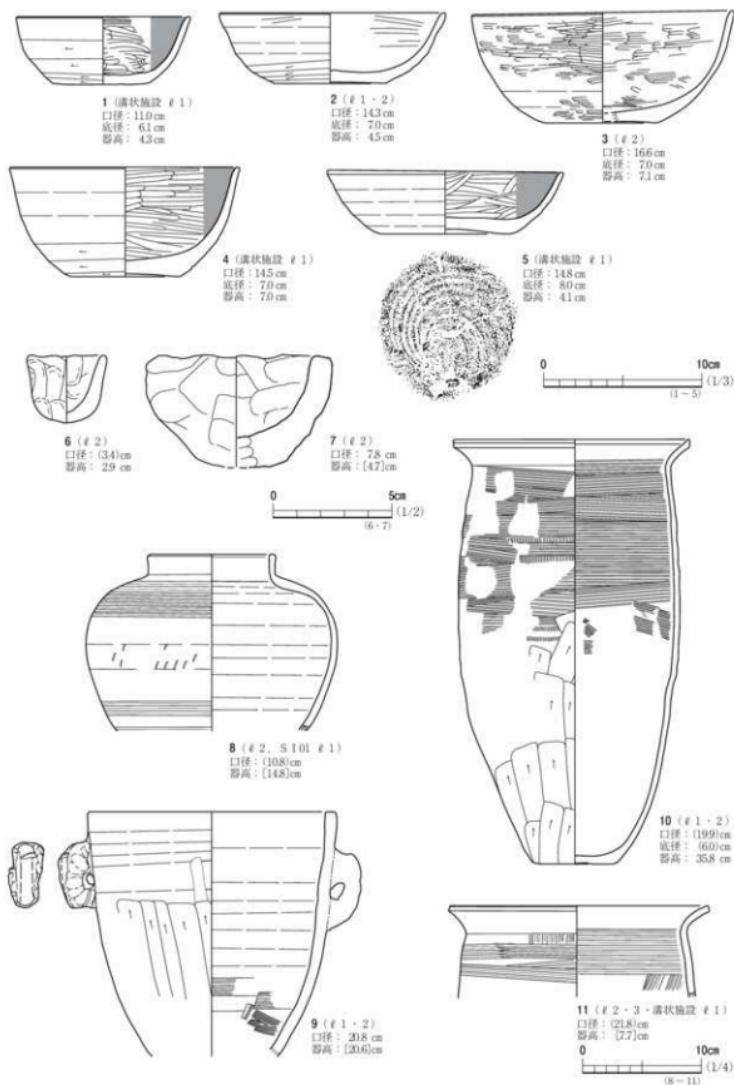


図24 7号住居跡出土遺物（1）

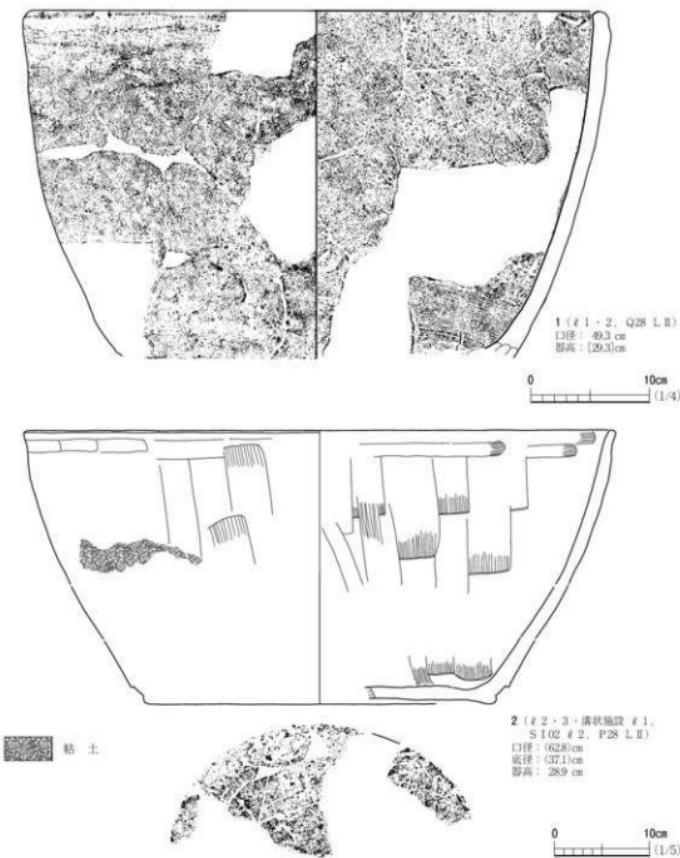


図25 7号住居跡出土遺物（2）

に整えている。また、器面は爆ぜており、非常に脆弱である。

図24-6・7は手捏ね土器で、指頭によるナデや押さえで器面を整えているが、7の器面は凹凸が激しい。同図8は土師器の短頭盞である。体部上半に膨らみをもち、頭部が直立する器形である。体部をタタキで整形、その後カキメで体部を丸く整えている。同図9は土師器の瓶で、体部両側に把手をもつ。外面の体下半には、縦位の手持ちヘラケズリ調整が施される。同図10・11は土師器の長胴甌で、いずれも内外面に縦および斜め方向のハケメが施された後にカキメ調整が行われる。また、10の胴部下半から底部にかけては手持ちヘラケズリ再調整が行われる。

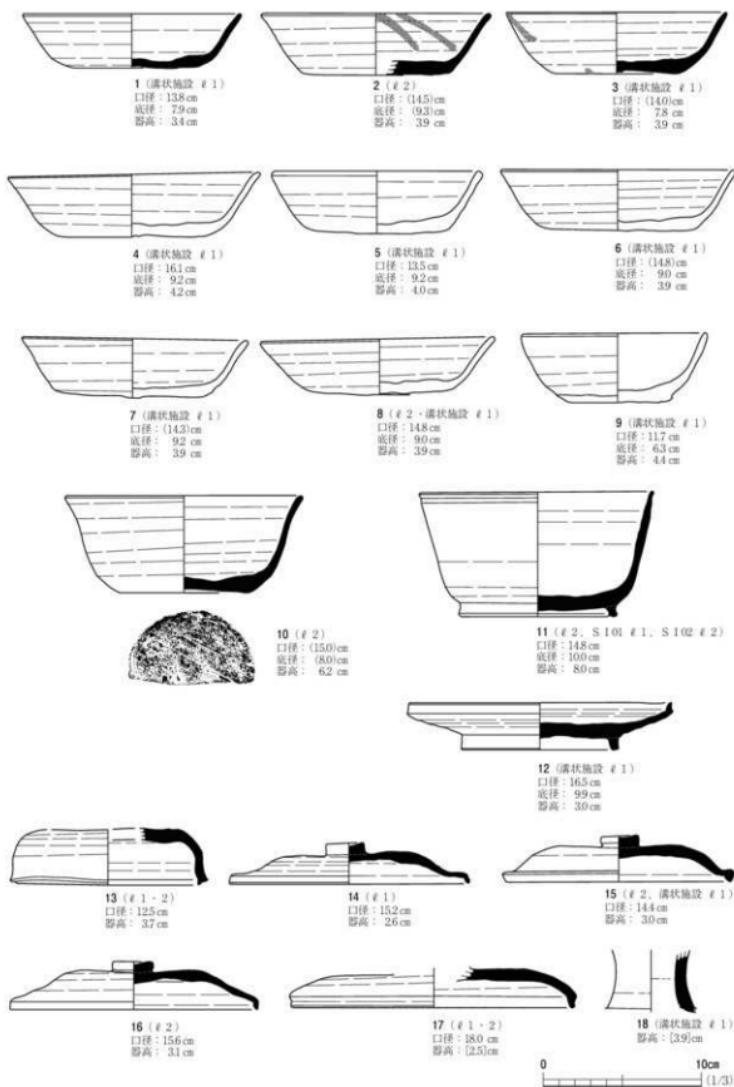


図26 7号住居跡出土遺物（3）

図25-1・2は土師器の大型鉢である。器形は、いずれも底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら直線的に立ち上がる。内外面の調整は、1が縱方向のハケメ、2にはヘラナデが施されている。また、2の底面には木葉痕が認められる。

図26-1～8・10は須恵器の杯である。器形的には、10以外いずれも器高が比較的低く、底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁端部がやや外反する。底部の切り離し技法は、いずれも回転ヘラ切りによる。これらの土器は、底径／口径比が0.55～0.6、器高／口径比0.25～0.3以下に収まる土器(1・3・4・6・8)と底径／口径比が0.61以上、器高／口径比0.27～0.3以下(2・5・7)に分かれるが、同図10は底径／口径比が0.55、器高／口径比0.41を測る。焼成は比較的良好なものが多いが、4～8は未還元で色調は浅黄橙色を呈す。また、2・3には火だしき痕が認められる。

図26-11は高台付杯で、口縁部下端に沈線が巡る。高台は貼り付けによるもので、底面の縁辺部に設けられている。同図12は須恵器盤で体部外面に明瞭なロクロ整形痕を残す。高台は11と同様に底面の縁辺部に設けられている。同図13～17は須恵器の蓋である。天井部は平坦に整っているが、部分的に切り離しの痕跡を残すものも認められる。13は天井部に摘みをもたず、口縁部に段を有す。14～16は中央部が浅く窪む摘みをもつ。17は大型の蓋で、壺等に用いられたものと考えられる。同図18は長頭瓶の頸部資料と思われる。

まとめ

本遺構は南北が22m、東西で1.9mの平面形が方形を呈した堅穴状遺構である。本遺構に伴う施設として、焼土面とピット2個、溝状施設を検出した。本遺構については、遺構底面に顯著な焼土面を有し堆積土中にスサ入りの粘土塊などを含むことから、土器焼成坑の可能性がある。なお、本遺構の所属時期については、遺物の特徴から8世紀末葉～9世紀前葉頃と考えている。(大河原)

10号住居跡 S I 10

遺構(図27、写真13)

本遺構は、調査区東南部、P 26・27グリッドに位置し、地形的には最上位段丘面に立地する。本遺構はS I 02調査時に検出しているが、西側の一部はS I 02調査時に同時に掘り込んでしまった。S I 02で検出したP 4・5については本遺構に伴う可能性もある。S I 02と重複し本遺構が古い。

本遺構については、規模や内部施設としてカマドなどが検出されなかったことから、S I 07と同様に堅穴状遺構として報告する。

本遺構の堆積土は暗褐色土1層である。堆積過程は判断できないが、同一面上で重複するS I 02構築時に埋め戻された可能性が高い。平面形は方形を呈し、規模は南北が3.6m、東西で3mを測る。壁は急な角度で立ち上がり、高さは10～20cmを測る。底面には貼床などは施されず、掘り込んだLIV層をそのまま利用している。底面は全体的に踏み締まっていて、細かな凹凸が認められる。

本遺構の施設としてピット1個を南壁の中央際で検出した。P 1は直径が25cm程の円形を呈し、

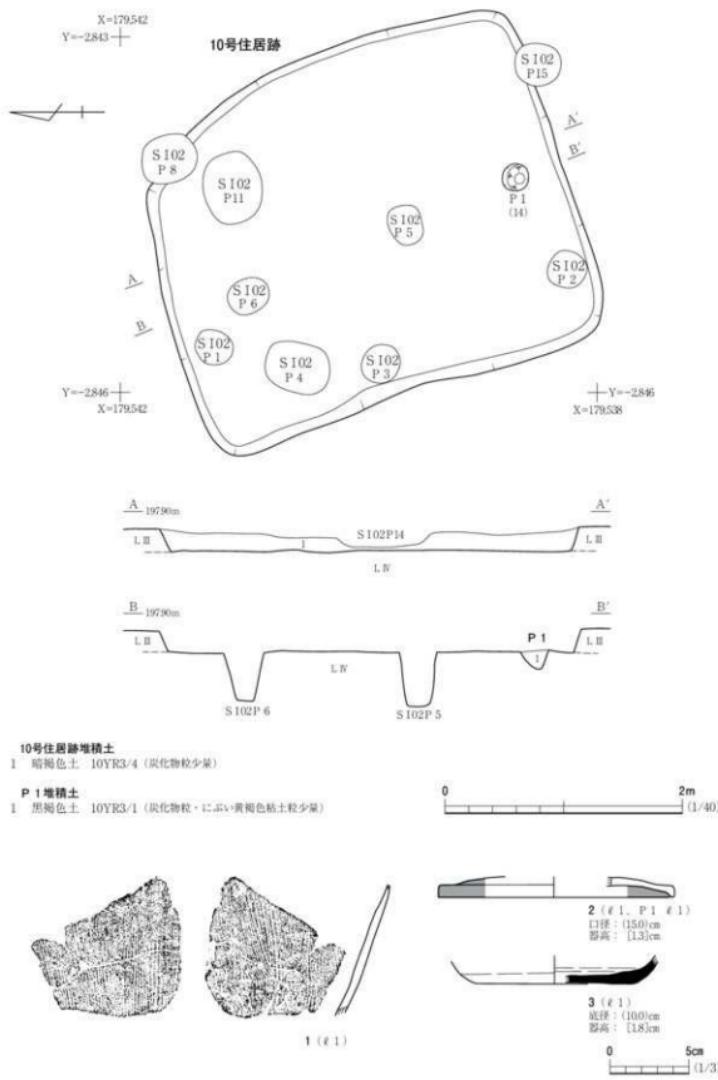


図27 10号住居跡、出土遺物

深さは14cmを測る。なお、S I 02で検出したP 4・5については本遺構に伴う可能性もある。この他、本遺構に伴う施設は確認できなかった。

遺 物 (図27)

出土遺物は土師器片127点、須恵器片7点が出土している。遺物は堆積土中から散在的に出土している。図27-1は内外面にハケメ調整が施された土師器壺の胴部資料、同図2は蓋で内外面に丁寧なミガキ調整が行われ黒色処理が施されている。同図3は須恵器杯の底部資料で、底部には回転ヘラケズリ再調整が施されている。

ま と め

本遺構は南北が3.6m、東西で3mの方形を呈した堅穴状遺構である。本遺構に伴う施設として、ピット1個を検出した。本遺構の所属時期については、遺構の重複関係よりS I 02より古い時期の所産と考えている。(大河原)

第4節 溝 跡

調査I区で検出した溝跡は6条である。検出した溝跡については、削平の影響やいざれも調査区外に延びているため、全体の形状や規模が明確に把握できていない。このうち1号溝跡は南北、その他の溝跡は東西に配されている。また、1号溝跡については、調査区の南端から北端にかけて広域に検出され、他の溝跡との関連も考えられることから、全体図の他に2・3・6～8号溝跡の平面図中にもあわせて掲載した。

溝跡の所属時期は、出土遺物や検出層位等から奈良・平安時代に所属するものと考えている。

1号溝跡 S D 01 (図28、写真15・16)

本溝跡は、N 8、O 11～29グリッドに位置し、調査を行った最上位段丘面の裾部に沿って検出された。なお、溝跡南北端は調査区外に延びている。遺構検出面はL III上面であるが、削平を受けL IIIが欠損する部分についてはL IVで検出している。他の遺構との重複関係は、S D 03・07・08と重複し本溝跡が新しいが、堆積土の状況や出土遺物などから大きな時期の差はないものと考えている。なお、S D 02は平面および断面での重複関係は認められなかった。このため、S D 02については、S D 01とはほぼ同時期に機能していたものと考えている。

本溝跡は、最上位段丘面の縁辺部の地形に沿って南北に構築されているため、溝跡は直線的ではなく、蛇行するように南北に延びている。なお、部分的に削平を受け遺存していない場所や沢地形で段丘縁辺が大きく内湾する場所では一度調査区外に延び、再び調査区内で検出される場所も認められた。調査区内における本溝跡の規模は全長約213m、幅約1～1.4m、深さ10～40cmを測る。

周壁は緩やかに立ち上がっている部分が多い。また、底面は凹凸が激しく、なかには楕円形状に窪む部分も見られ、北から南に向かい緩やかに傾斜している。なお、O 21・24グリッド周辺では部

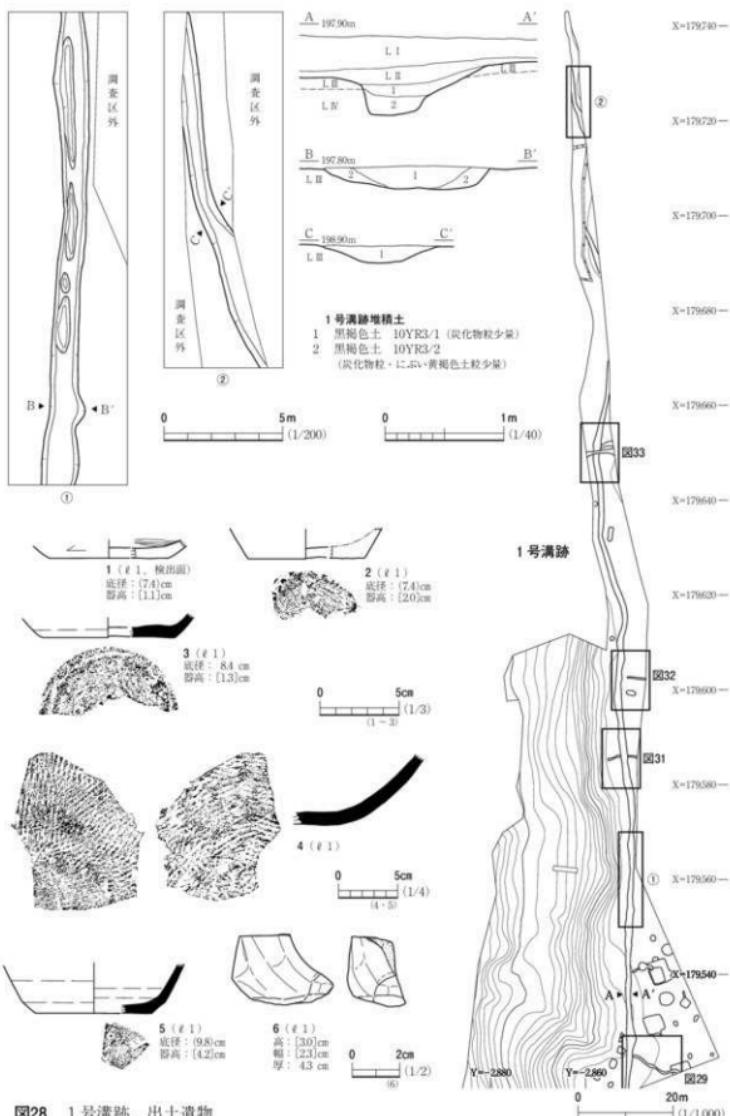


図28 1号溝跡、出土遺物

分的に南から北に向かい緩やかに傾斜している。溝跡北端と南端底面の比高差は約1.7m。また、断面形を見ると鍋底状と皿状を呈す部分とが見られ、部分的に底面の掘り込みに違いが見られる。

堆積土は場所によって単層の部分も認められるが、ほとんどの場所で2層に分層され、いずれも壁際からの流入状況が観察されることから自然堆積土と判断した。なお、底面からは粘性の堆積土などは確認されなかった。このため、當時湛水していたとは考えにくい。

遺物は、堆積土中から土師器片692点、須恵器片35点などが出土している。ほとんどの遺物はO 22~29グリッドから出土しているが、特に遺構の密度が高いO 27~29グリッドから多く出土している。また、遺物は特にまとまった出土状況ではなく、検出面から堆積土上層にかけて散在的に出土している。図28-1は内面が黒色された土師器杯で、底部に回転ヘラケズリ再調整が行われている。同図2は土師器壺の底部資料で、底面には回転糸切り痕を残す。同図3は須恵器杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。底面には切り離した後に「×」状の線刻が施されている。同図4は須恵器大甕の底部資料で、外面にタタキ痕、内面にアテ具痕を残す。また外面には部分的に自然釉が認められる。同図5は須恵器の瓶あるいは壺の底部資料で、底面に回転糸切り痕が認められる。内外面には部分的に自然釉がかかる。同図6は土師製の獸脚片である。

本溝跡の所属時期については、他の遺構との重複関係もあるものの、出土遺物等に大きな時期差は認められないことから、8世紀末葉~9世紀前葉頃に属するものと考えている。溝跡の機能としては、降雨などによる水が直接段丘崖に流れ込まないための排水用の溝と考えられる。また、溝跡が検出された最上位段丘縁辺部は最近まで林道として使用され、明治期の丈量帳には本溝跡とほぼ同じ場所に最上位段丘北端部から阿賀川へ続く道が記されている。このため、本溝跡は道と排水を兼用して使用していたものと考えている。

(大河原)

2号溝跡 SD 02 (図29・30、写真14・26)

本溝跡は、東南部のO 28、P 28・29グリッドに位置し、L III上面で検出した。なお、削平を受けL IIIが欠損する部分についてはL IVで検出している。他の遺構との重複関係は、S I 03と重複し本溝跡が新しい。また、S D 01については平面および断面での重複関係は認められなかったため、本溝跡とほぼ同時期に機能していたものと考えている。

本溝跡が検出された周辺地形は東から西にかけて緩やかに傾斜する地形に位置し、東から西に向かい蛇行しながらS D 01へと続く。溝跡の東端は調査区外に延びている。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約40cm。調査区内における本溝跡の規模は全長約10m、幅約25~60cm、深さ20~60cmを測る。周壁は比較的急な角度で立ち上っている部分が多い。また、底面は平坦で、東から西に向かい緩やかに傾斜している。溝跡東端と西端底面の比高差は約40cmを測る。また、断面形を見ると鍋底状を呈している部分が多い。堆積土は場所によって単層の部分も認められるが、大半が2層に分層でき、レンズ状の土層堆積状況が観察されることから自然堆積土と判断した。

遺物は、堆積土中から土師器片33点、須恵器片1点などが出土している。遺物の大半がS I 03と

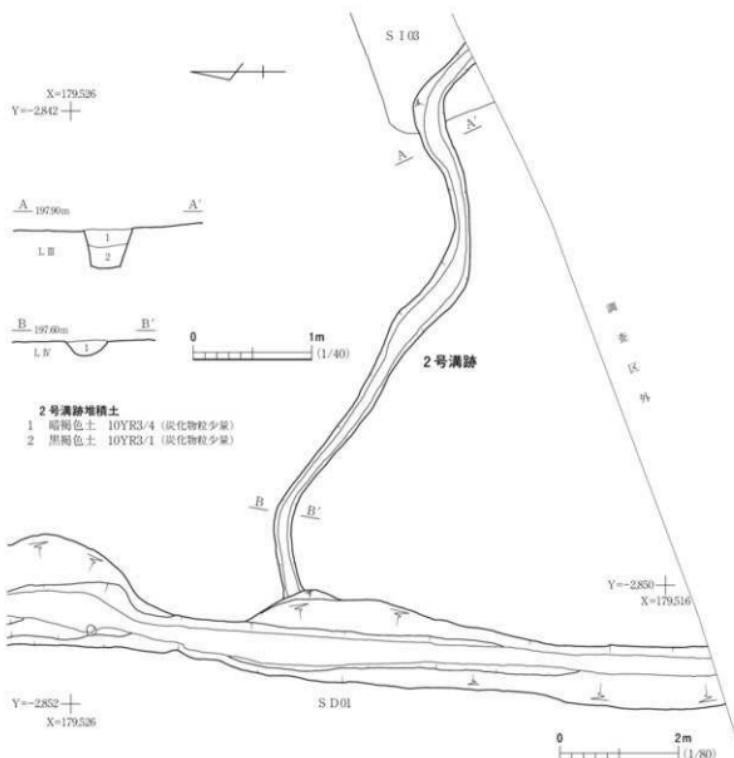


図29 2号溝跡

重複する部分で出土している。また、これらの遺物は S I 03 床面から溝跡内に流れ込んだ状況で出土しており、本来は S I 03 に帰属するものと考えている。図30-1は内外面に縦方向のハケメが施された大型の鉢である。外面には縦方向にヘラケズリ再調整も部分的に施される。同図2は須恵器大甕の口縁部資料、同図3は須恵器蓋の摘みである。同図4は内外面黒色処理された高台付杯の高台部資料である。

本溝跡の所属時期は、遺構の重複関係から S I 03 より新しい時期と考えられ、機能は降雨時などの排水用の溝と考えている。また、段丘崖の沢地や湧水地などの自然流路に直接排水するのではなく、位置的な関係から本溝跡から S D01 に排水していたものと考えられる。
(大河原)

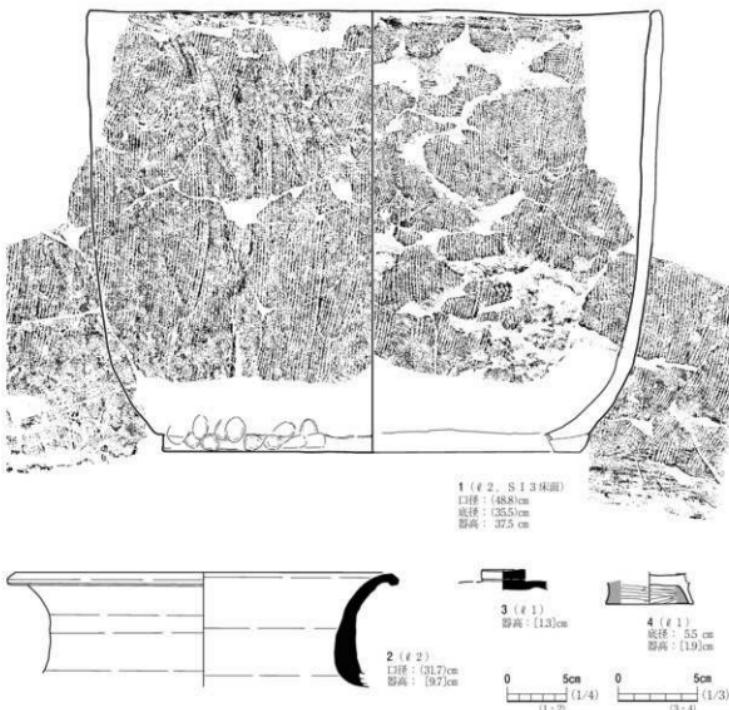


図30 2号溝跡出土遺物

3号溝跡 SD 03 (図31, 写真14)

本溝跡は、調査区中央南側のO・P 22グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係は、SD 01と重複し本溝跡が古い。

本溝跡は東から西にかけて緩やかに傾斜する地形に位置し、東から西に向かい緩やかに曲がりながら段丘崖へと続くが、溝跡東端は調査区外に延びている。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約70cm。調査区内における本溝跡の規模は全長約6.4m、幅約50~60cm、深さ7~50cmを測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がっている部分が多い。底面はほぼ平坦で、東から西に向かい緩やかに傾斜している。溝跡東端と西端底面の比高差は約20cmを測る。溝跡の断面形は鍋底状を呈している。堆積土は3層で、いずれもレンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積土と判断した。本溝跡から遺物は出土していない。



図31 3号溝跡

本溝跡の所属時期については、遺構の重複関係からSD01より古い時期と考えられる。溝跡の機能としては他の溝跡と同様に降雨時などに備えた排水溝と考えている。また、溝跡西端が段丘崖へ伸びて途切れ、周辺に沢地や湧水地などの自然流路が認められることから、段丘崖の自然流路に直接排水したものと考えられる。

(大河原)

6号溝跡 SD06 (図32、写真14)

本溝跡は、調査区中央南側のO・P20グリッドに位置する。遺構はLIII上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが、西側にSD01が近接する。

本溝跡は東から西に向かいほぼ直線的に配されている。東端は調査区外に延びているため、溝跡全体の形状は不明である。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約20cm。調査区内における本溝跡の規模は全長約4.4m、幅約30~40cm、深さは5~10cmを測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がり、溝跡の断面形は鍋底状を呈している。底面は東から西に向かい緩やかに傾斜し、東西端の底面の比高差は約10cmを測る。堆積土は1層で、堆積状況から自然堆積土と判断した。本溝跡から遺物は出土していない。

本溝跡の所属時期については、出土遺物や重複する遺構がないため特定することはできないが、遺構検出面や周囲の遺構の分布状況から奈良~平安時代に属するものと考えている。溝跡の機能としては他の溝跡と同様に降雨時などに備えた排水溝と考えられる。また、段丘崖の沢地や湧水地など

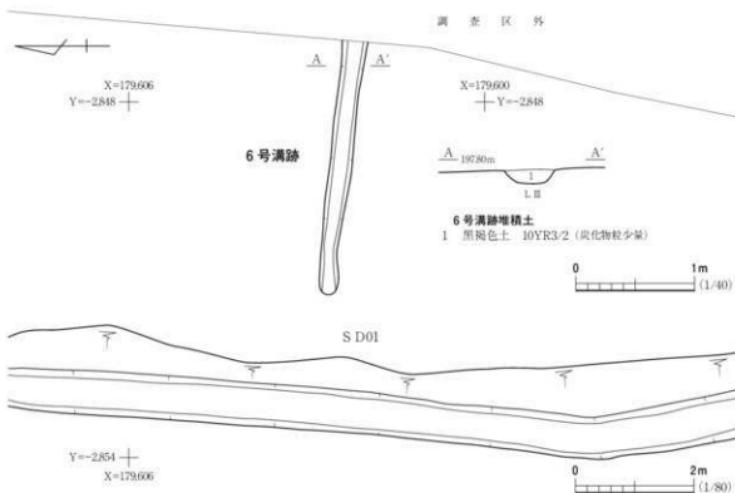


図32 6号溝跡

の自然流路に直接排水するのではなく、位置的な関係から本溝跡から SD 01 に排水していた可能性が高い。
(大河原)

7号溝跡 SD 07 (図33, 写真14)

本溝跡は、調査区中央のO 15・16グリッドに位置し、L III上面で検出した。SD 01重複し本溝跡が古い。また、北側にSD 08が隣接する。

本溝跡は東から西にかけて直線的に配されている。東西端部は調査区外に延びているが、東端は基盤層まで削平を受けていたため遺存していない。また、西端は調査区外の段丘崖に続いている。溝跡東端と西端の検出面の比高差は約30cm。調査区内における本溝跡の規模は全長約6m、幅約0.5~1.6m、深さ50cmを測る。周壁は底面から急な角度で立ち上がるが、東西端部では壁上半から検出面向かい緩やかに外傾している。底面はほぼ平坦に整えられ、東から西に向かい緩やかに傾斜している。溝跡東端と西端底面の比高差は15cmを測る。溝跡の断面形は漏斗状を呈している。

堆積土は5層で、このうち ℓ 2~5については、にぶい黄褐色を基調とした砂質土と粘土が交互に堆積していることから、人為堆積と判断した。なお、 ℓ 2上面はほぼSD 01底面と同じ高さに整えられていることから、SD 01構築時に本溝跡を埋め戻して再利用していたものと考えている。

遺物は、 ℓ 1から土師器片1点が出土している。図33-1は内外面にカキメ調整が施された甕の口縁部資料である。

本溝跡の所属時期は、遺構の重複関係からSD 01より古い時期と考えている。溝跡の機能は他の

溝跡と同様に降雨時などに備えた排水用の溝と判断した。なお、溝跡西端が段丘崖へ延びるため、段丘崖の沢地形などの自然流路に排水したものと考えられる。また、本遺構堆積土 ℓ 2上面とSD01の底面が同一の高さに整えられていることから、SD01構築時に再利用していた可能性が高く、SD01に集められた水を段丘崖に排水する機能を有していたものと考えている。
(大河原)

8号溝跡 SD08 (図33、写真14)

本溝跡は、東南部のO15グリッドに位置し、LIII上面で検出した。SD01と重複し検出時の平面形の確認では本溝跡が古いと判断したが、配置的にSD01と同時に機能していた可能性があり、本溝跡がSD01より先に埋没したものと考えられる。また、南側にSD07が隣接する。

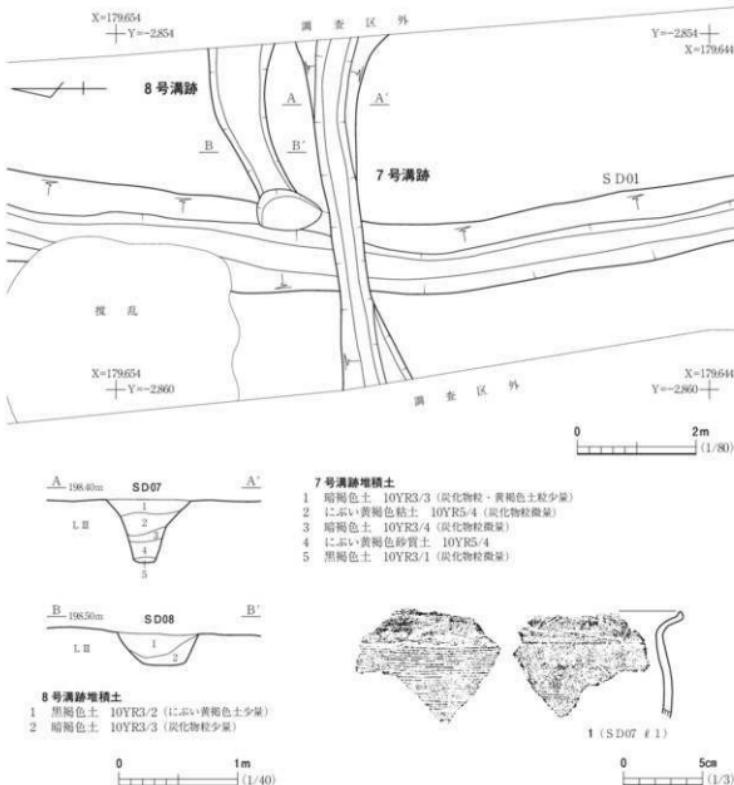


図33 7・8号溝跡、出土遺物

本溝跡は東側から西側にかけて曲線を描くように配置されている。東端部は調査区外に延びているが、既に基盤層まで削平を受けているため遺存していない。西端部はS D01の東壁に取り付く。東端と西端の検出面の比高差は約15cm。

調査区内における本溝跡の規模は全長約3.2m、幅約0.6~1.1m、深さ5~30cmを測る。周壁は比較的急な角度で立ち上がる。また、底面は平坦で東から西に向かい緩やかに傾斜しているが、S D01と重複する部分には浅い橈円形状の崖みをもつ。溝跡東端と西端底面の比高差は約15cmを測る。溝跡の断面形は鍋底状を呈している。堆積土は2層で、レンズ状の堆積状況を示すことから自然堆積土と判断した。遺物は出土しなかった。

本溝跡の所属時期については、出土遺物がないため特定できないが、検出層位などから他の溝跡とはほぼ同時期の所産と考えている。

溝跡の機能としては降雨時などに備えた排水用の溝と判断した。なお、S D01との関係から本溝跡を経由しS D01に排水していたものと考えられる。(大河原)

第5節 土 坑

調査I区で検出した土坑は20基である。所属時期は、縄文時代に所属する土坑が2基、それ以外はいずれも奈良・平安時代に所属するものと考えている。検出された土坑は縄文時代の落し穴と考えられるSK08を除き、いずれも最上位段丘面に分布している。最上位段丘面で検出された土坑は、住居跡が検出された調査区の南東部周辺に密に分布している。

また、出土遺物のうち、未還元の須恵器杯については、須恵器窯ではなく土器焼成坑で焼成されたと考えられる土器も認められるが、調査区内で出土する還元化した須恵器杯と製作技法、器形などが変わらないことから、これらを比較するため須恵器の項目で報告している。これらの土器については、須恵器系土器などの名称を用いて報告されることもあるが、これらの土器は近年10世紀前半の土器に使用される場合が多く、今回は未還元といった呼称を使った。これらの土器については、断面を白抜きし還元化した須恵器と区別している。以下、土坑について個別に報告を行う。

1号土坑 SK01(図34・40、写真17)

本土坑は、調査区南東部のQ28グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢ上面である。重複する遺構はないが、西側にSK02が近接する。平面形は東西0.9m、南北1.2mの不整な橈円形状を呈している。検出面から底面までの深さは25cmを測る。壁は比較的急な角度で立ち上がり、断面形は鍋底状を呈している。また、底面はほぼ平坦に整えられている。堆積土は2層で、 ℓ_2 に黄褐色粘土をブロック状に含むことから、人為堆積土の可能性が高い。

遺物は、堆積土中から土師器片7点が出土している。図40-5は胴部中央に膨らみをもつ土師器の壺である。外面上半にはカキメ調整が施される。また、胴部下半に粘土が付着しているため、粘

土で胴部下半から底部を固定して使用されていた可能性がある。

本土坑の所属時期については、検出面や出土遺物などから8世紀末葉～9世紀前葉に属するものと考えている。
(大河原)

2号土坑 S K02 (図34, 写真17)

本土坑は調査区南東部のQ 28グリッドに位置し、L III上面で検出した。重複する遺構はないが、西側にS I 03が、東側にS K01が近接する。平面形は楕円形を呈し、規模は東西0.9m、南北1.1mを測る。検出面から底面までの深さは25cmを測る。壁は緩やかな角度で立ち上がり、断面形は皿状を呈している。また、底面はほぼ平坦に整えられているが、中央に向かい緩やかに窪んでいる。遺構内堆積土は2層で、壁際からの流入状況が観察されることから、自然堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の所属時期については、遺物が出土していないため特定できないが、検出面や周囲の遺構の分布状況などから、奈良～平安時代に属するものと考えている。
(大河原)

3号土坑 S K03 (図34・39・40, 写真17・26)

本土坑は調査区南東部のP 27グリッドに位置し、L III上面で検出した。重複する遺構はないが、南西側にS I 01、北側にS I 02・10、東側にS I 07が近接する。また、平面形は不整な方形を呈している。規模は東西3m、南北2.7mを測る。検出面から底面までの深さは35cm。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がり、断面形は鍋底状を呈している。底面はほぼ平坦に整えられているが、細かな凹凸が認められる。遺構内堆積土は3層に分けられ、いずれも底面と平行するような堆積状況を示すことから、人為堆積と判断した。

遺物は、ℓ 1・2を中心土師器片1,741点、須恵器片80点、粘土塊が出土している。出土遺物の細片が多く、器面が焼けた状態のものも認められる。図39-1～5は須恵器杯である。底面の切り離しは、いずれも回転ヘラ切りによる。焼成はいずれも良好であるが1～4は未還元で色調が浅黄橙色を呈している。同図6・7は須恵器の蓋である。天井部中央に浅く窪んだ摘みをもつ。天井部は平坦なもの、形状は山笠状に近い。同図8～10は須恵器壺片である。外面には平行線タタキ、内面には波状文やハケメが認められる。

図39-11・12は土師器杯である。11は内面に黒色処理が施されている。底部には回転糸切り痕が認められる。12は内面にミガキが行われているが、黒色処理は施されていない。また、底部には回転ヘラケズリ再調整が行われている。同図13は土師器蓋である。内外面にミガキが施されているようだが、器面が焼けており、観察できない。

図39-14～17は土師器の壺である。破片資料であるため、全体の器形を知ることはできないが、いずれも口縁部が「く」字状に外反し、胴部が14・15のように膨らみをもつものと、16のように直線的なものとが認められる。内外面には、ハケメやカキメ調整が施されている。16はタタキとロク



図34 1~4号土坑

口で成形し、その後カキメ調整で形を整えている。図40-1は壺あるいは瓶と考えられ、胴部下半から口縁部にかけて直線的に立ち上がる器形となる。外面には縦方向のハケメ、内面にはカキメが施される。同図2は壺あるいは土管状土製品と思われる。外面にタタキ、内面にはカキメ後、斜め方向にハケメが施される。同図3は土師器の大型鉢で、外面には縦方向のハケメ後、部分的にケズリ調整が施される。内面は全体的に縦や斜め方向にハケメを行い、部分的にカキメ調整が認められる。同図4は砥石で、各面に研磨作業時の線状痕が認められ一部には溝状の部分もある。

本土坑の所属時期は、出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから8世紀末葉～9世紀前葉に属するものと考えている。機能としては廐棄坑または、熱を受けた痕跡が認められなかったものの、粘土塊や器面が焼せた土器も認められることから、土器焼成坑の可能性もある。
(大河原)

4号土坑 SK04 (図34・40、写真17・26)

本土坑は調査区南東部のO 29グリッドに位置し、L III上面で検出した。重複する遺構はないが、土坑西側半分は林道により削平され遺存状況は悪い。また、北側にSK05、西側にSK07、東側にSD01が近接する。平面形は、遺存状況から方形形状を呈していたものと思われる。また、北側の壁に張り出し部を伴う。土坑の規模は、遺存長東西1.15mで、南北1.1m。検出面から底面までの深さは35cmを測る。

壁はいずれも比較的急な角度で立ち上がり、断面形は鍋底状を呈している。なお、南北の両壁は熱を受け1cm程焼土化していた。底面は部分的に黄褐色粘土ブロックを多量に含む暗褐色土で埋め戻され、その上面を平坦に整えている。また、底面の北東隅でピット1基を検出した。ピットは直径30cm程の円形を呈し、深さ15cmを測る。北壁の張り出し部は、遺存長で東西40cm、南北60cm、深さ10cmを測る。土坑の堆積土は4層に分けられ、このうちℓ 4は底面の掘形埋土である。また、ℓ 1～3については、いずれも底面と平行するような堆積状況を示すことから、人為堆積と判断した。

遺物は、土師器44点、須恵器7点、縄文土器2点が出土している。これらの遺物の多くは、ℓ 1からの出土が多い。図40-6・7は須恵器の杯である。6の内外面には火だしき痕が認められる。7は焼成時の影響で底部が焼せて破損している。未還元で、器面は浅黄橙色を呈している。8は高台付杯で、外面に回転ヘラケズリ再調整が施される。同図9は土師器の短胴壺で、内外面にロクロ形痕を残す。

本土坑の所属時期は、出土遺物などから8世紀末葉～9世紀前葉に属するものと考えている。本土坑の機能については、壁の一部に熱を受けた痕跡が認められることと、堆積土中に多量の木炭粒を含むことなどから、木炭焼成とを考えている。なお、出土遺物や土坑の形狀がSK07に類似する点が多いことから、本土坑については土器焼成坑の可能性も指摘しておきたい。
(大河原)

5号土坑 SK05 (図35・41, 写真17・26)

本土坑は調査区南東部のO 28グリッドに位置する。遺構は、L III上面で検出した。重複する遺構はないが、土坑の西側半分は林道や擾乱により削平され遺存状況は悪い。また、北側にSK13、南西側にSK07、南側にSK04が近接する。平面形は、東側の壁が膨らむ不整な方形状を呈している。規模は、遺存長で東西215m、南北23mを測る。検出面から底面までの深さは10～20cmを測る。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がる。底面は平坦に整えられているものの、東から西にかけて緩やかに傾斜し、部分的に浅い皿状の窪みが認められる。また、土坑の底面から焼土面とピットを検出した。焼土面は南側の壁際に位置している。平面形は東西80cm、南北70cmの不整な楕円形状を呈し、底面から2cm程焼土化している。ピットは東側の壁中央に位置する。ピットの平面形は直径30cm程の円形を呈し、深さが15cmを測る。土坑の堆積土は2層で、いずれも底面と平行するような堆積状況を示すことから、人為堆積と考えている。

遺物は、 ℓ 1を中心土器片333点、須恵器片5点、縄文土器片6点が出土している。図41-1は口縁部が「く」字状に外反する土器器壺の口縁部片である。外面の口縁部と胴部の境にはタキ痕が部分的に認められる。タキ整形後に縦方向のハケメ調整を行っている。内面も縦方向のハケメ調整とカキメ調整が認められる。同図2は、底部から口縁部までは直線的に立ち上がる鉢型土器である。内外面にはハケメ調整が施される。同図3は、高台付杯の口縁部片と思われる。両面にミガキが施され黒色処理も部分的に確認できるが、器面が爆ぜているため観察しにくい。同図4～7は未還元の須恵器の杯である。歪みはあるものの、いずれも器高が低く、底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら立ち上がる器形になる。底部の切り離しは回転ヘラ切りによる。焼成は比較的良好であるが、器面は浅黄橙色を呈している。同図8は須恵器の蓋である。天井部はロクロ整形で平坦に整えられ、摘みは中央部が浅く窪む。

本土坑の所属時期には、出土遺物などから8世紀末葉～9世紀前葉に属するものと考えられる。土坑の機能については、底面に熱を受けた痕跡が認められることや堆積土中に焼成があまく、器面が爆ぜた遺物なども認められることから、土器焼成に関係する施設と考えている。
(大河原)

6号土坑 SK06 (図35・41, 写真17・26)

本土坑は調査区東南部P 26グリッドに位置する。遺構検出面は、L III上面である。S I 02と本土坑の溝状施設が重複しているが、溝状施設についてはS I 02に伴う可能性もある。

平面形は、直径が約17mの円形を呈し、東西側に溝状の施設が伴う。検出面から底面までの深さは70～80cmを測る。壁は急角度で立ち上がり、底面は平坦に整えられている。断面形は鍋底状を呈している。堆積土は4層で、いずれも壁際から流入し、レンズ状の堆積を示すことから自然堆積と判断した。

また、本土坑の東西で溝状施設を検出した。検出時、平面形および堆積土の観察から本土坑に伴

う施設として調査を行ったが、溝状施設の東端がS I 02・10の西壁隅に位置することから、S I 02・10に伴う可能性もある。溝状施設は東側が「L」字状を呈し、土坑を挟んだ西側では直線的に配されている。溝状施設の規模は東側で東西1.4m、南北1.4m、西側で1.8mを測る。幅は20～80cm、深さは10～20cmを測る。壁は東側で緩やかに立ち上がるが、西側は比較的急な角度で立ち上がっている。底面は、ほぼ平坦に整えられているが、西側では土坑に向かい緩やかに傾き、土坑と接する部分では階段状を呈している。溝状施設の堆積土は2層で、壁際からの流入が認められることから、自然堆積と考えている。

遺物は、土坑堆積などから縄文土器片10点、土師器片14点、須恵器片1点、溝状施設から土師器片5点が出土している。図41-9は口縁部が大きく外反する土師器甕の口縁部片で、外面にロクロ整形痕、内面にはカキメ調整が認められる。同図10は未還元の須恵器杯で、器形は器高が低く、底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら立ち上がる。底部の切り離しは回転糸切りによる。

本土坑の所属時期については、出土遺物などから8世紀末葉～9世紀前葉に属すものと考えられる。なお、本土坑の機能については、土坑底面に粘性的堆積土が確認できなかったが、西側の溝状施設底面が土坑に向かい傾斜していることや、調査時に降雨後土坑に水が溜まり、数日間貯水していたことなどから、簡易の水溜用の施設と考えられる。

(大河原)

7号土坑 S K07 (図36・42～44、写真18・27)

本土坑は調査区南東部のO 29グリッドに位置し、LV上面で検出した。重複する遺構はないが、南側と東側の壁の一部は搅乱を受け遺存していない。また、東側にSK04・05が近接する。平面形は、方形を呈しているが、南北壁の中央に半梢円形状の張り出しをもつ。規模は、遺存部分で東西約1.4m、南北約1.1mを測る。検出面から底面までの深さは40cmを測る。周壁は急な角度で立ち上がっている。なお、北側と西側の壁の一部は熱を受け、2cm程焼土化していた。土坑の底面は平坦に整えられ、断面形は鍋底状を呈している。南北壁の張り出し部の規模は、遺存状況が良い北側の壁で幅70cmを測り、壁から外側に15cm程張り出している。深さは15cmを測る。

土坑の堆積土は5層に分かれ、ℓ 4・5については壁土崩落などに起因する自然堆積土と考えているが、ℓ 1～3については床面と平行に堆積し、ℓ 2上面からℓ 1にかけて多量の遺物を含むことから人為堆積土と判断した。また、ℓ 3下層からは伏せられた状態で土師器杯が出土している。

遺物は、ℓ 1層を中心とし土師器片74点、須恵器片30点、縄文土器片2点が出土している。出土遺物は未還元の須恵器杯が多い。これらは形が歪み、器面が爆ぜ、底部が抜け落ちた状態で出土しているものがほとんどである。この他に須恵器楕や土師器杯、甕、瓶、大型鉢、土管状土製品などと遺物の器種は豊富である。

図42-1～3は内面黒色処理が施された土師器杯である。いずれも、体部下半に回転ヘラケズリ再調整が施されている。1・2の外側の口縁部周辺に部分的ミガキ調整が加えられているが、1は器面が粗く、ほとんど観察できない。同図4～9は土師器の甕である。4は胴部上半に膨らみをも

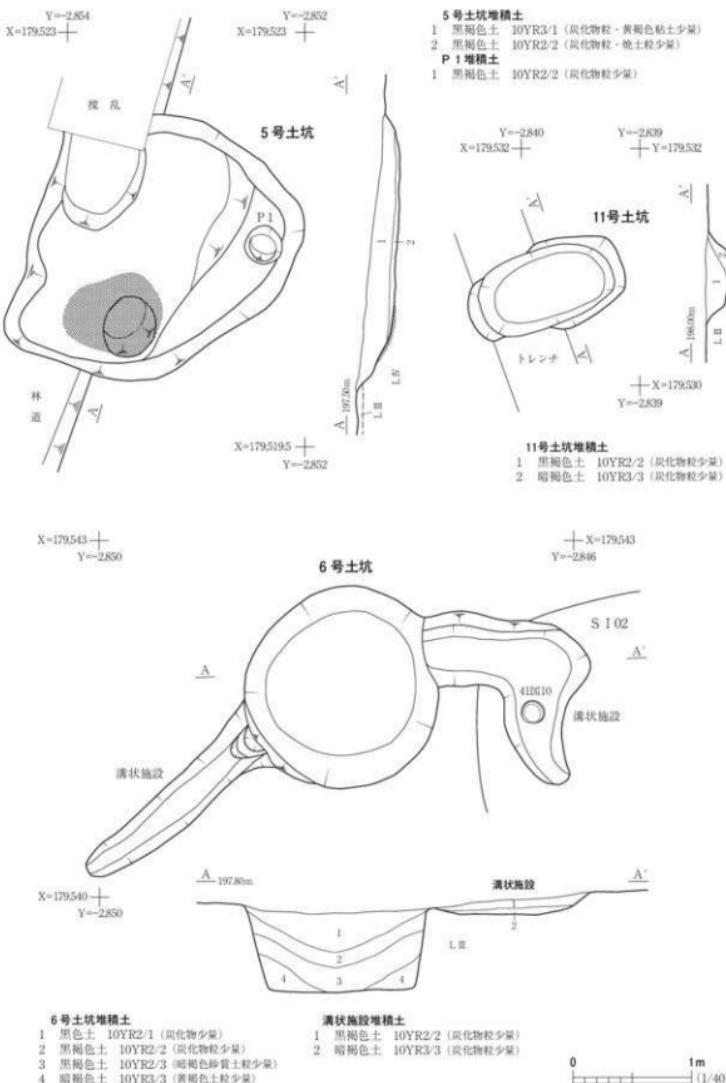


図35 5・6・11号土坑

つ短胴甕、5～8は長胴甕で、内外面はハケメとカキメ調整によるものが多く、中には5・8のようにヘラケズリ再調整が施されるものも認められる。5・6は胴部から口縁部にかけてタタキ痕が認められる。9は短胴甕あるいは、鉢になるものと思われる。同図10は内外面にハケメ調整が施された大型鉢の底部である。特に底部から体部下半を整形する際に強めのハケメ調整が施されており、外面の凹凸が激しい。

図43-1・2は土師器の瓶である。いずれも、器面の調整にハケメやカキメを施す。1の体部下半から底部周辺に指押さえの痕跡が認められる。2は外面に縱方向のハケメ後、内外面にカキメ調整が施される。同図3は、半円形状の土管状土製品である。外面にはタタキ調整が認められ、底部付近に円孔が施されている。

図43-4～14、図44-1～11は未還元の須恵器の杯である。焼成時の影響で形が歪み底部が破損し、器面が爆ぜたものが大半である。器形は器高が比較的低く、底部から口縁部まで緩やかに外傾しながら立ち上がり、口縁短部がやや外反する。底部の切り離し技法は回転ヘラ切りによるが、図43-12は静止糸切り、図44-9は回転糸切りである。いずれも、調査区で出土している還元焼成された須恵器杯と製作技法や器形に変わりは認められない。復元可能な土器から観察すると、底径／口径比が0.55～0.6、器高／口径比0.25～0.3に収まる土器(図43-4～9、図44-5～7・9)が最も多く、底径／口径比が0.6以上、器高／口径比0.25～0.3(図43-10・11、図44-8)、底径／口径比が0.55以下、器高／口径比0.25～0.3(図44-1・4)に大きく分かれる。焼成は比較的良好なものも認められるが、いずれも還元化しておらず、色調は浅黄橙色を呈している。図44-12は須恵器の高台付杯である。身の部分が深く、高台は底面の縁辺部に貼り付けで設けられている。

本土坑の所属時期については、出土遺物などから8世紀末葉～9世紀前葉に属すものと考えられる。本土坑の機能については、壁面に熱を受けた痕跡が認められることや堆積土中に還元化されず器面が爆ぜた遺物なども認められること、壁際に張り出し部をもつ形状が土器焼成坑に類似する点から、底面に焼面は認められなかったものの、土器焼成坑と考えている。
(大河原)

8号土坑 S K08 (図36、写真17)

本土坑は調査区南西部のL31グリッドに位置している。本調査区内で検出した土坑はいずれも最上位段丘面の平坦部に分布するのに対して、本土坑は段丘崖の狭い平坦部から検出されている。遺構検出面はLV上面である。重複する遺構はなく、周辺の遺構の密度は希薄である。

土坑の平面形は長方形状を呈し、規模は東西1.15m、南北0.55mを測る。壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がっている。底面はほぼ平坦であるが、中央に高まりをもつ。検出面から底面までの深さは最も深い部分で75cmを測る。また、底面中央でピット1個を検出した。ピットは、直径が8cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。土坑内の堆積土は5層に分けた。ℓ1～3は、レンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積と判断した。また、ℓ4はピット内堆積土、ℓ5は掘形埋土である。本土坑から遺物は出土しなかった。

本土坑は形状などから、縄文時代の落し穴と考えられる。所属時期の詳細については、出土遺物がないため特定できない。
(大河原)

9号土坑 S K09 (図36、写真17)

本土坑は調査区中央南側のP 21 グリッドに位置する。遺構はLⅣ上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが、西側にS D01、北側にS D06が近接する。本土坑の平面形は、不整な楕円形状を呈している。規模は東西約23m、南北約14m。検出面から底面までは最も深い土坑中央部で75cmを測る。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は細かな凹凸が認められ、北側に向かい緩やかに傾斜している。堆積土は3層で、いずれも壁際からの流入状態が認められることから、自然堆積と考えている。本土坑からは、遺物は出土しなかった。

本土坑の所属時期については、遺物が出土していないため特定できないが、検出面や形状などから縄文時代に属すものと判断した。
(大河原)

11号土坑 S K11 (図35、写真18)

本土坑は調査区南東部のP・Q 27 グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢ上面である。重複する遺構はないが、土坑南北壁の一部はトレンチで削平してしまい遺存していない。また、S I 07が北側に隣接する。平面形は方形を呈し、規模は東西13.5m、南北0.8mを測る。検出面から底面までの深さは20cmを測る。壁は緩やかな角度で立ち上がり、断面形は鍋底状を呈している。また、底面はほぼ平坦に整えられているが、北側に向かい緩やかに傾斜している。堆積土は2層で、壁際からの流入状況が観察されることから、自然堆積土と判断した。本土坑から遺物は出土していない。

本土坑の所属時期については、遺物が出土していないため特定できないが、検出面や周囲の遺構の分布状況などから、奈良・平安時代に属すものと考えている。
(大河原)

12号土坑 S K12 (図36・41、写真18・27)

本土坑は調査区南東部のP 27・28 グリッドに位置する。遺構検出面はLⅢ上面で、本土坑と重複する遺構はない。なお、S I 01が西側に近接する。平面形は、直径が80cmほどの円形を呈している。検出面から底面までの深さは20cmを測る。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がっている。また、断面形は鍋底状を呈し、底面はほぼ平坦に整えられている。堆積土は2層で、壁際に沿ってレンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積土と判断した。

遺物は、土師器片154点、須恵器片3点が①上面からまとめて出土している。図41-11は未還元の須恵器杯である。底部の切り離しは回転糸切りによる。同図12は土師器壺の底部資料で、底部内面に「×」字状の線刻が認められる。同図13は土師器長胴壺の胴部下半の資料である。内外面にはハケメ、また外側の底部周辺には手持ちヘラズりが密に施されている。

本土坑の所属時期については、出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから8世紀末葉～9世紀前



図36 7~9・12・19号土坑

葉に属するものと考えている。

(大河原)

13号土坑 SK13 (図37・38、写真18)

本土坑は調査区南東部のO 28グリッドに位置する。遺構は、L IV上面で検出した。重複する遺構はないが、西側半分は林道や擾乱により削平され遺存していない。また、北側にSK14・15が、南側にSK05が接する。平面形は、遺存状況から不整な方形を呈していたものと考えられる。規模は、遺存長で南北1.8m、東西1.6mを測る。検出面から底面までの深さは15cmを測る。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がっている。底面は細かな凹凸が認められ、西側に向かい緩やかに傾斜している。また、土坑の底面からピット3個を検出した。ピットは底面中央と北側壁中央に位置する。ピットはいずれも直径30cm程の円形を呈し、深さは土坑底面から15~20cmを測る。土坑の堆積土は2層で、いずれも壁際からの流入状況を示すことから、自然堆積土と考えている。

遺物は、 ℓ 1から土師器片88点、須恵器片1点、粘土塊が出土しているが、細片が多い。図38-1は大型鉢の部品資料で、内外面に縱方向のハケメ調整が施されている。

本土坑の所属時期については、周囲の遺構の分布状況や出土遺物などから8世紀末葉~9世紀前葉に属するものと考えられる。なお、本土坑の機能については、遺存状況が悪いため、その詳細を特定することはできないが、周辺に土器生産に関連する遺構が隣接しており、粘土塊なども出土していることから、それらに関連する施設と考えている。

(大河原)

14号土坑 SK14 (図37、写真19)

本土坑は調査区南東部のO 28グリッドに位置し、L IV上面で検出した。SK15と重複し本土坑が新しい。また、西側半分は林道により削平され遺存していない。平面形は、遺存状況から楕円形を呈していたものと考えられる。規模は、遺存長で東西0.5m、南北1.2mを測る。検出面から底面までの深さは20cm。壁は比較的緩やかな角度で立ち上がり、土坑の底面は東側に向かい緩やかに傾斜している。堆積土は黒褐色土1層で堆積過程は不明である。遺物は出土しなかった。

本土坑は、重複関係からSK15より新しい。また、時期については出土遺物がないため特定できないが、周囲の遺構の分布状況などからほぼ同時期の所産であると考えている。

(大河原)

15号土坑 SK15 (図37、写真19)

本土坑は調査区南東部のO 28グリッドに位置する。遺構検出面は、L IV上面である。他の遺構との重複関係は、SK14と重複し本土坑が古い。また、西側半分については林道や擾乱により削平、南側はSK14と重複し遺存していない。平面形は、遺存状況から円形ないし楕円形を呈していたものと思われる。規模は遺存長で南北約1m、東西0.4m。検出面から底面までの深さは10cmを測る。壁は緩やかな角度で立ち上がる。また、土坑底面は一部掘り過ぎてしまったが、ほぼ平坦に整えられている。堆積土は黒褐色土1層で堆積過程は不明である。遺物は堆積土中から土師器片5点が散

在的に出土したが、細片であったため図示しなかった。

本土坑の所属時期については、重複関係からSK14より古い。また、時期については、周囲の遺構の分布状況などから、ほぼ同時期に属するものと考えている。
(大河原)

16号土坑 SK16 (図37・44、写真19・26)

本土坑は調査区南東部のP26グリッドに位置する。LⅢ上面で検出した。他の遺構との重複関係は認められないが、南側に、SI02・10、SK06・17・20が近接する。平面形は不整な梢円形状を呈し、規模は東西1.45m、南北1.7mを測る。検出面から底面までの深さは25cm。壁は比較的急な角度で立ち上がっている。土坑底面はほぼ平坦に整えられ、断面形は鍋底状を呈している。堆積土は3層で、いずれも壁際からの流入状況を示すことから、自然堆積と判断した。

遺物は、ℓ1から土師器片46点、須恵器片3点が散在的に出土した。図44-13・14は未還元の須恵器の杯である。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、焼成は比較的良好であるが、色調が浅黄橙色を呈す。同図15は須恵器大甕の口縁部片である。外面に窯壁が付着し、破断面に自然釉が認められる。同図16・17は土師器の甕で、いずれも内外面にカキメ調整が施されている。

本土坑の所属時期については、出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから8世紀末葉～9世紀前葉に属するものと考えている。
(大河原)

17号土坑 SK17 (図38、写真19)

本土坑は調査区南東部のP26グリッドに位置し、遺構検出面はLⅢ上面である。他の遺構との重複関係は認められないが、東側の一部は調査区外に延びている。また、西側に、SI02・10、SK06・16・20が位置している。平面形は調査区内で検出した状況から、直径25m程の円形状を呈しているものと思われる。検出面から底面までの深さは95cmを測る。壁は比較的急な角度で立ち上がっている。土坑底面には細かな凹凸があり、中央に向かい緩やかに傾く。また、断面形は鍋底状を呈している。堆積土は5層に分層した。いずれも壁際に沿って流入し、レンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積と判断した。

遺物は、ℓ1から土師器片15点が散在的に出土している。図38-3は須恵器の杯である。底部の切り離しは、回転ヘラ切りによる。

本土坑の所属時期については、出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから、8世紀末葉～9世紀前葉に属するものと考えられる。なお、土坑の機能については特定できないが、西側に位置するSK06と規模などが類似することから、同様の機能を持ったものと考えられる。
(大河原)

19号土坑 SK19 (図36、写真19)

本土坑は調査区南東部のO19グリッドに位置している。遺構検出面はLⅣ上面である。重複する遺構はないが、東側にSD01が近接する。なお、遺構の分布状況は希薄である。本土坑の平面形は、

直径が90cm程の不整な円形状を呈している。壁は比較的急な角度で立ち上がる。また、南側周壁は熱を受け、2cm程焼土化していた。底面はほぼ平坦で、断面形は鍋底状を呈している。検出面から底面までの深さは10~25cmを測る。土坑の堆積土は炭化物粒を多量に含む黒褐色土1層で、堆積過程については不明である。本土坑から土師器片2点が出土しているが、細片のため、図示できなかった。

本土坑の時期については、出土遺物がないため特定できないが、周囲の遺構の分布状況などから奈良・平安時代に属するものと考えている。また、本土坑の機能については、壁に熱を受けた痕跡が認められ、堆積土中に多量の木炭粒を含むことから、木炭焼成坑と考えている。
(大河原)

20号土坑 SK 20 (図37、写真19)

本土坑は調査区南東部のP 26グリッドに位置する。遺構はL III上面で検出した。S I 02と重複し、新旧関係では本土坑が古い。また、西側壁の一部は削平してしまい、遺存していない。

平面形は遺存状況から、西側が膨らむ不整な楕円形状を呈していたものと思われ、規模は南北1.6m、東西が遺存長で1.4mを測る。検出面から底面までの深さは70cm。壁は急な角度で立ち上がる。土坑底面は、東側に向かい緩やかに傾いている。また、断面形は鍋底状を呈している。堆積土は4層に分層した。いずれも壁際に沿った堆積状況が認められることから、自然堆積と判断した。遺物は、ℓ 1から土師器片14点が出土しているが、細片のため図示できなかった。

本土坑の所属時期については、遺構の重複関係から、S I 02より古く位置づけられる。なお、土坑の機能については特定できない。
(大河原)

27号土坑 SK 27 (図38、写真19)

本土坑は調査区南東部のO 17グリッドに位置し、L IV上面で検出した。重複する遺構はないが、南側の一部は擾乱を受け遺存していない。なお、西側にS D01が近接しているが、遺構の分布状況は希薄である。土坑の平面形は、長方形状を呈している。規模は南北が遺存長で3m、東西0.9mを測る。検出面から底面までの深さは15cm。壁は比較的急な角度で立ち上がり、東西壁中央の壁以外は、いずれも熱を受け1cm程焼土化していた。底面は凹凸が認められ、南側に向かい緩やかに傾斜している。また、南北両端の底面は熱を受け、1~3cm程焼土化していた。土坑の堆積土は2層で、いずれも底面に平行に堆積していることから、人為堆積と考えている。

遺物は堆積土中から、須恵器片1点が出土した。図38-2は須恵器の壺あるいは瓶で、外面にクロ整形痕、内面にカキメ調整が認められる。

本土坑の時期については、出土遺物や周囲の遺構の分布状況などから奈良・平安時代に属するものと考えている。また、本土坑の機能については、壁と底面に熱を受けた痕跡が認められ、堆積土中に多量の炭化物粒を含むことから、木炭焼成坑と考えている。
(大河原)

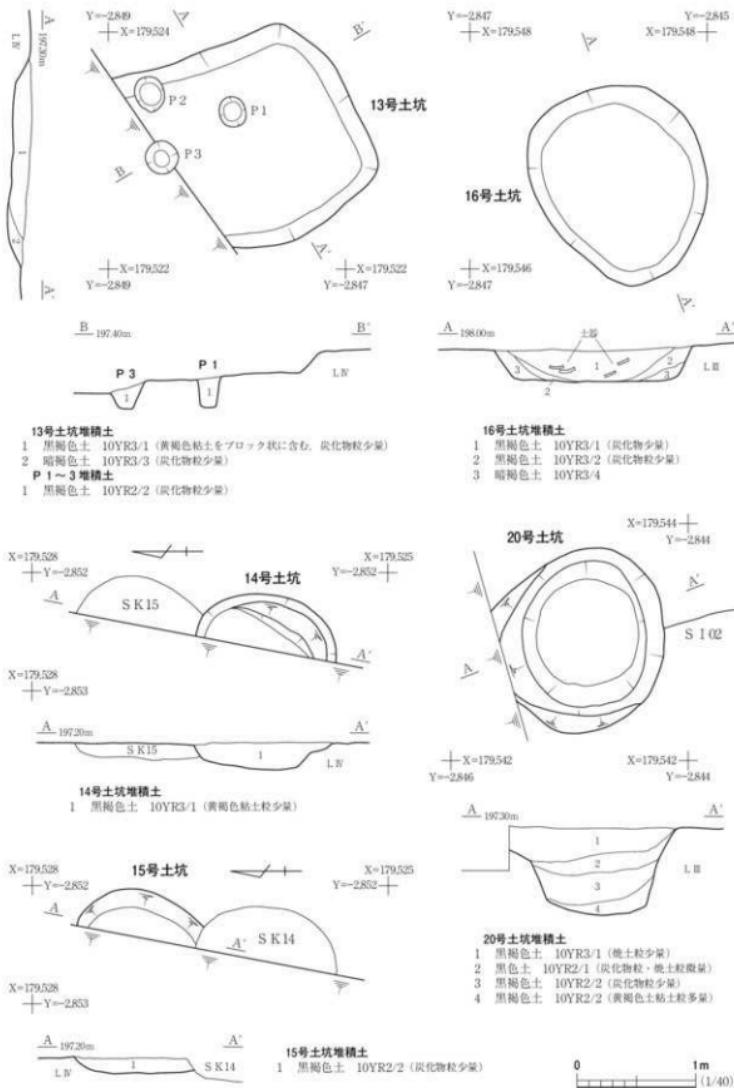


図37 13～16・20号土坑

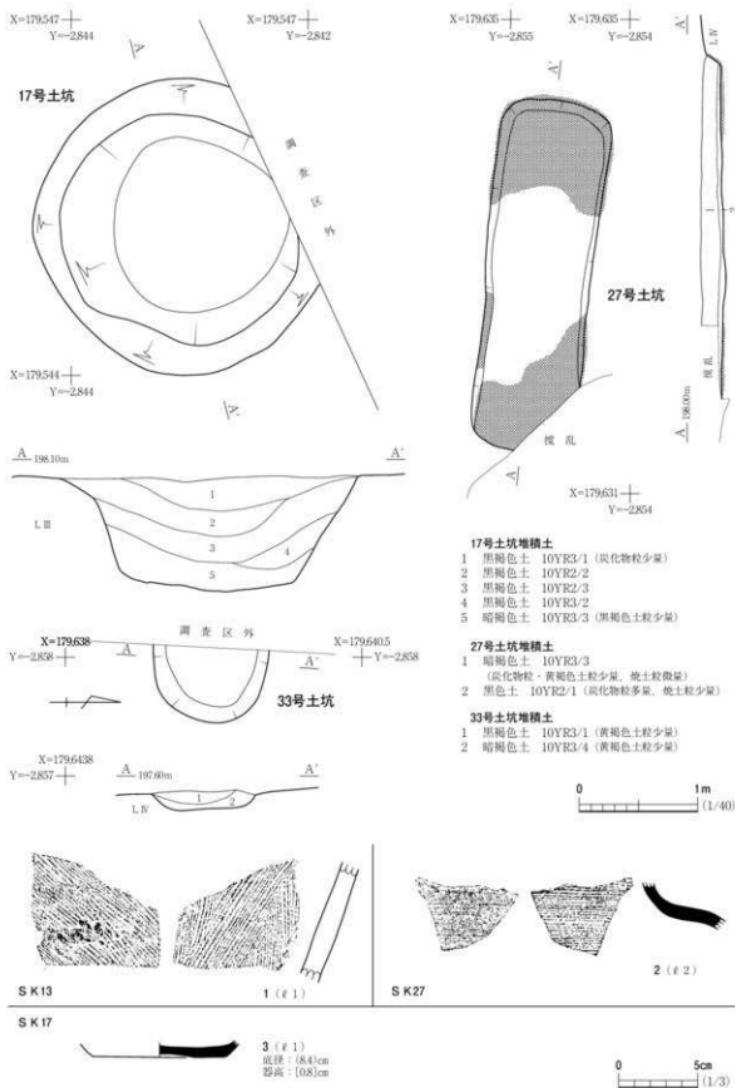


図38 17・27・33土坑、土坑出土遺物（1）

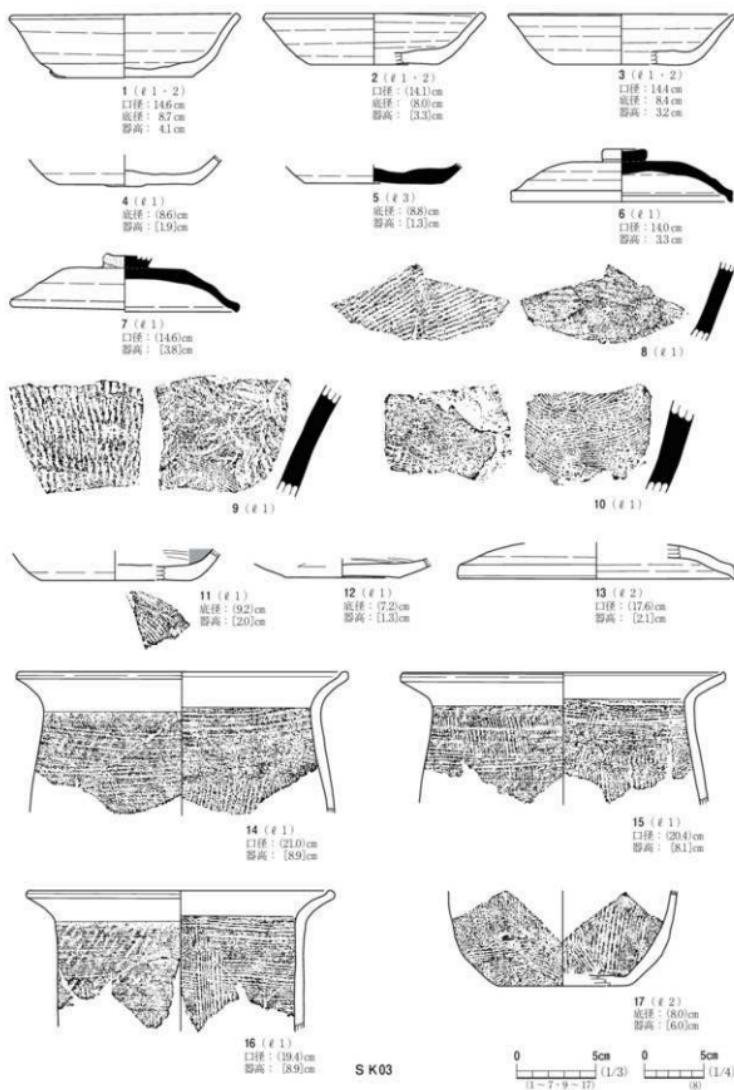


図39 土坑出土遺物（2）

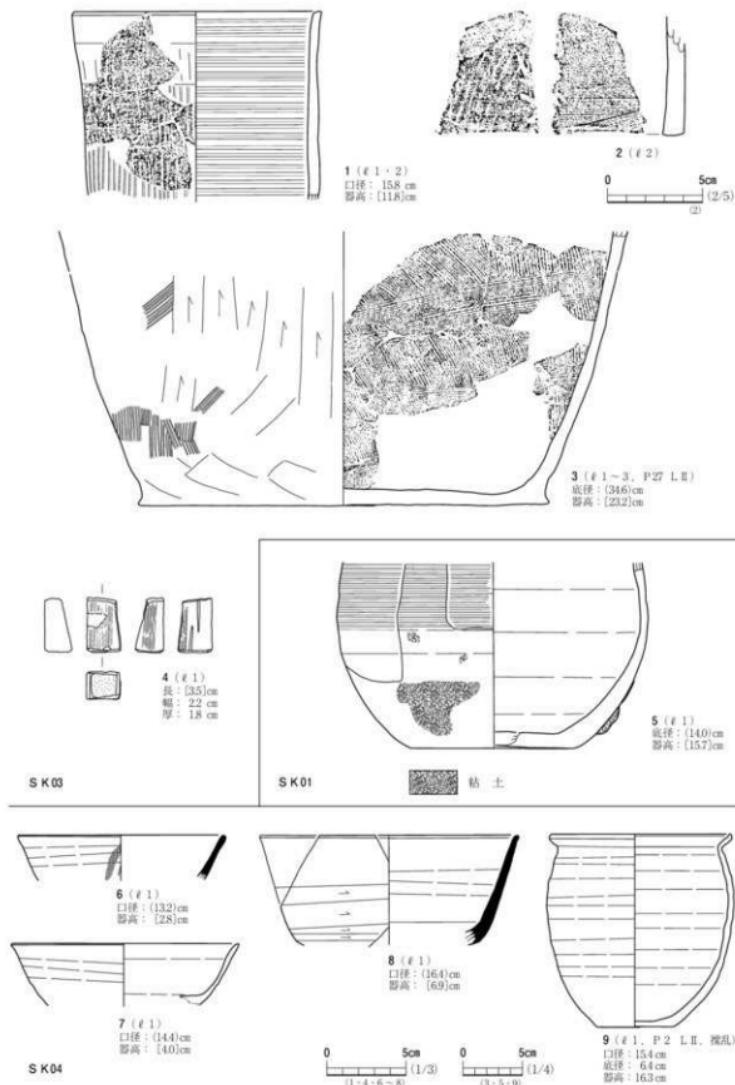


図40 土坑出土遺物（3）

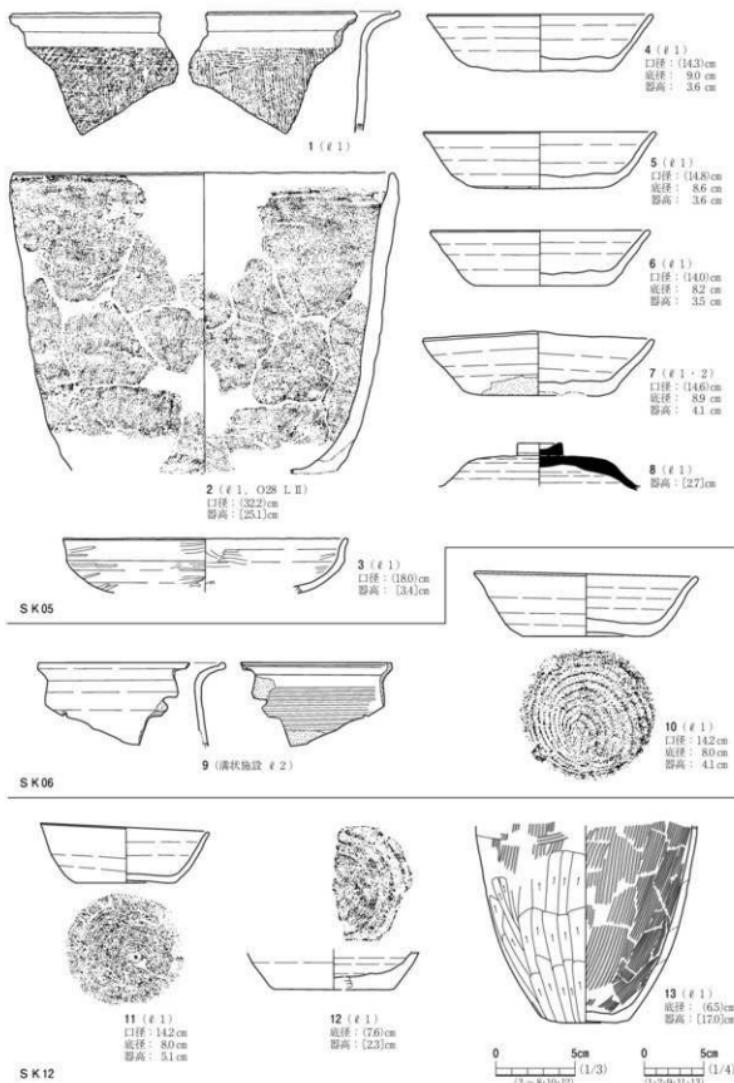


図41 土坑出土遺物 (4)

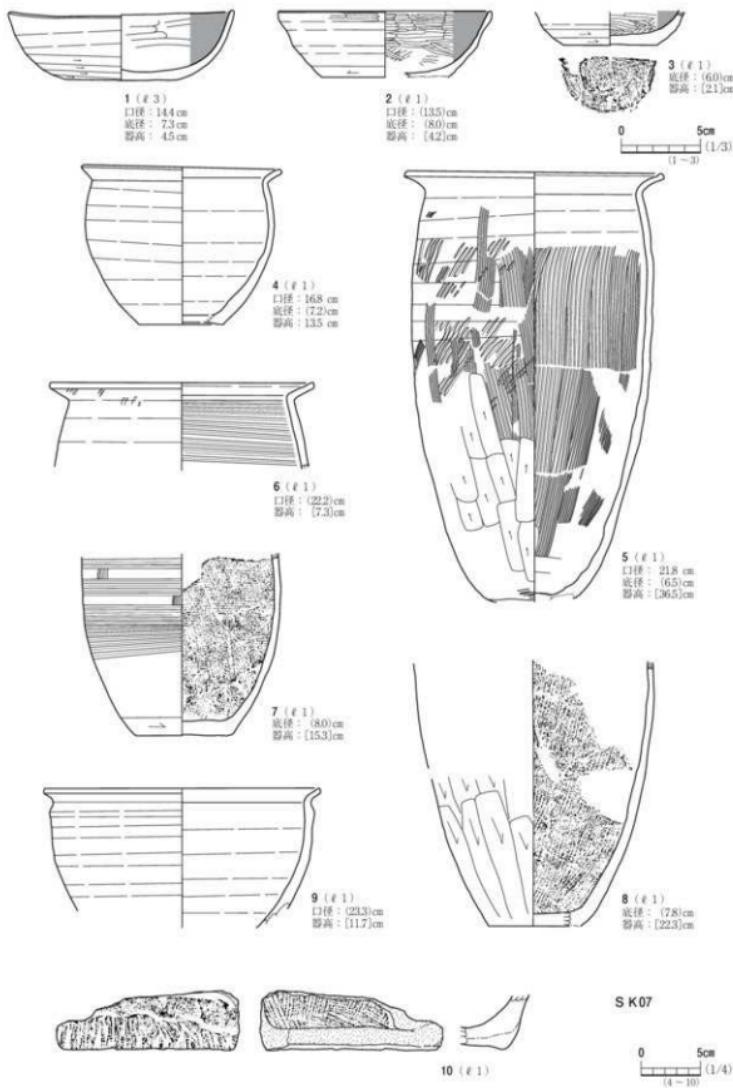


図42 土坑出土遺物（5）

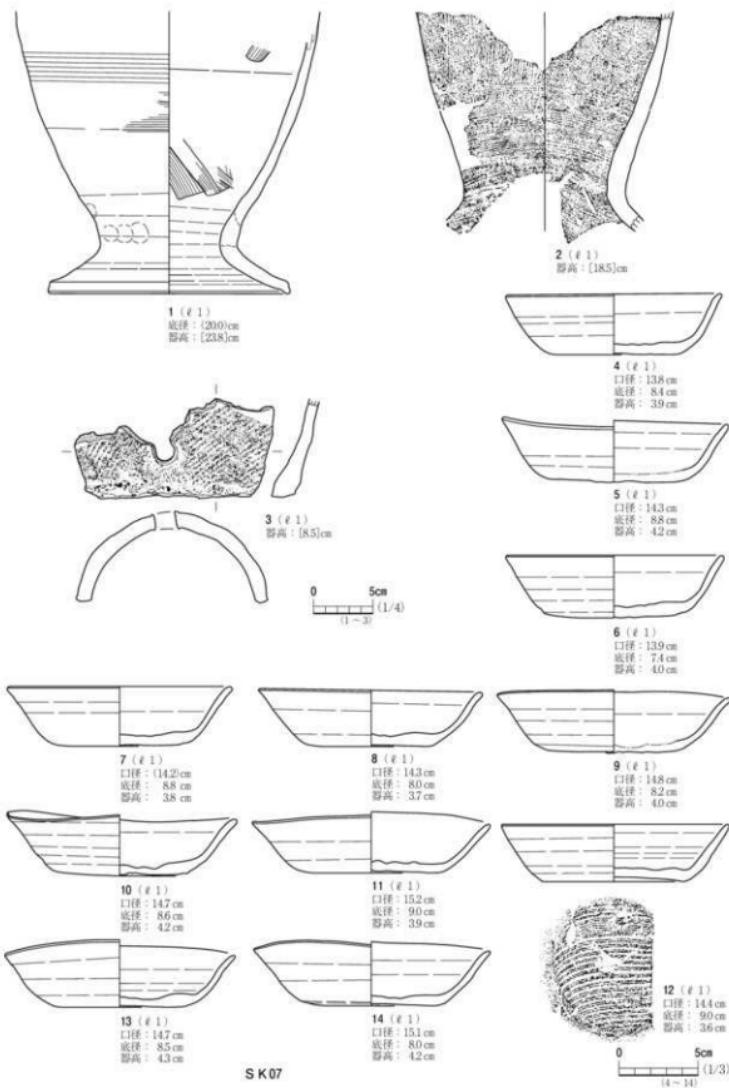


図43 土坑出土遺物（6）

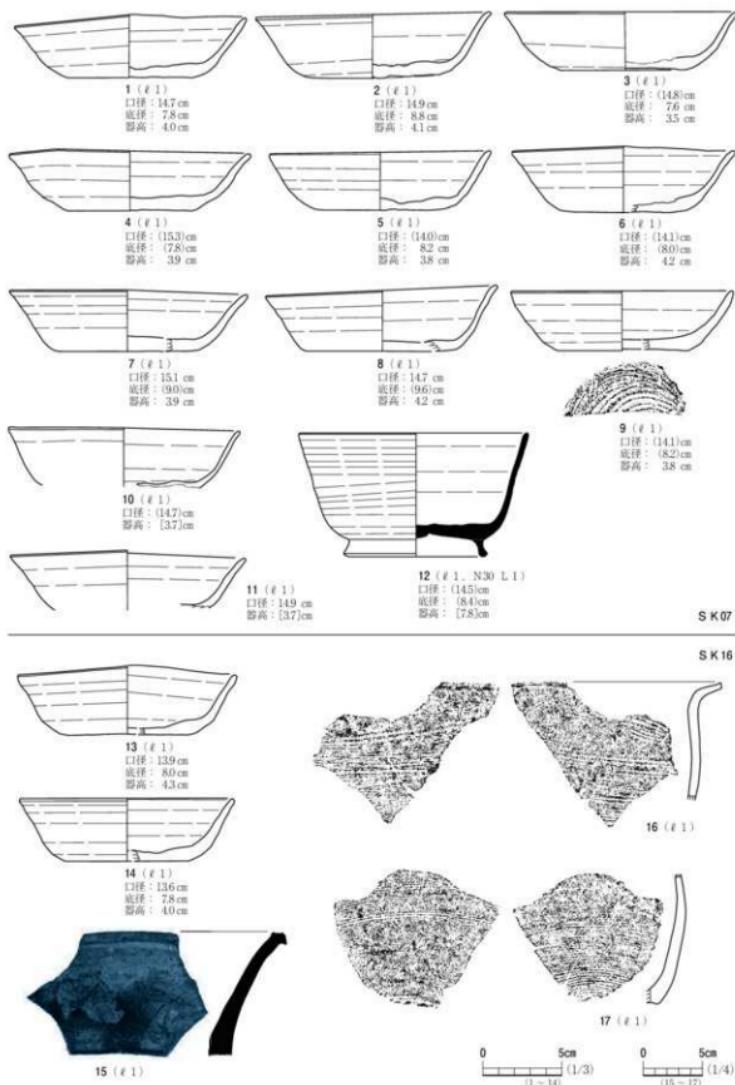


図44 土坑出土遺物（7）

33号土坑 S K 33 (図38、写真19)

本土坑は調査区中央部のO 17グリッドに位置している。遺構検出面はL IV上面である。重複する遺構はないが、土坑西側は調査区外に延びている。また、東側にS D01が近接しているが、周辺の遺構の分布状況は希薄である。本土坑の平面形は、検出状況から橢円形状を呈しているものと思われる。調査区内で検出した土坑の規模は、東西0.6m、南北約1mである。壁は緩やかな角度で立ち上がり、底面は凹凸している。検出面から底面までの深さは15cmを測る。土坑の堆積土は2層で、レンズ状の堆積状況が認められることから、自然堆積と判断した。本土坑から遺物は出土しなかつた。

本土坑の時期については、出土遺物がないため特定できないが、周囲の遺構の分布状況などから奈良・平安時代に属するものと考えている。
(大河原)

第6節 小穴

調査I区で検出した小穴は1基である。検出された周辺を精査したが、他の小穴は確認できなかつた。所属時期については、遺構検出面や周囲の遺構分布状況から奈良・平安時代に所属するものと考えている。

Q 28グリッドP 1 (図45)

本小穴は、調査区南東部のQ 28グリッドに位置し、L III上面で検出した。重複する遺構はないが、南側にS K 01が近接する。平面形は直径50cm程の不整な円形形状を呈している。検出面から底面までの深さは、30cmを測る。壁は南側で比較的急な角度で立ち上がるが、北側では開口部付近で外傾している。堆積土は1層で、堆積過程は不明である。遺物は土師器片8点、須恵器片1点が出土しているが、いずれも細片のため図示できなかつた。

本小穴の所属時期については、検出面や周囲の遺構の分布状況などから、奈良・平安時代に属するものと考えている。
(大河原)

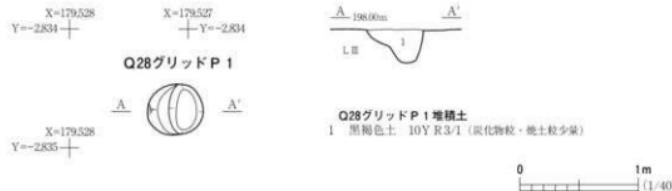


図45 小穴

第7節 遺物包含層

調査I区における遺物包含層としては、L I b・L IIの2層が確認されている。遺物は、L I b・L IIおよび耕作等により浮上し再包含されたL Iも含め縄文土器、土師器、須恵器、土製品、石器・剥片などが出土している。時期的には、縄文時代前期～晚期、奈良・平安時代と各時期にわたって出土しているが、奈良時代末～平安時代初頭の遺物が主体を占める。なお、縄文時代の遺物では、中期中葉～後期前葉の遺物が多い。

なお、包含層から出土した遺物のうち、未還元の須恵器杯については、須恵器窯ではなく土器焼成坑で焼成されたと考えられる土器も認められるが、調査区内で出土する還元化した須恵器杯と製作技法、器形などが変わらないことから、これらを比較するため須恵器の項目で報告している。

これらの土器については、須恵器系土器などの名称を用いて報告されることもあるが、これらの土器は近年10世紀前半の土器に使用される場合が多く、今回は未還元といった呼称を使った。これらの土器については、断面を白抜きし還元化した須恵器と区別している。

層序と分布

遺物包含層と基本層序の関係については「本章第2節」で述べたとおりである。本調査区内ではL I b・L IIの2層が遺物包含層に該当する。これらの遺物は、最上位段丘面と下位の段丘崖の沢部に比較的良好に堆積している。

次に、各層から出土する遺物と検出遺構から各層の堆積時期を概観する。L I bは、調査区の東南部のM・N 29グリッド周辺部に堆積する層である。奈良・平安時代の遺物を少量含むが、堆積状況等からL IVの再堆積層と考えられ、出土遺物については上方からの流れ込みによる再包含と思われる。形成時期については、本層下位でL IIが確認されていることから、L II堆積後に形成された層である。L IIは調査区全体に堆積する層である。縄文時代、奈良時代末～平安時代初頭の遺物を包含するが、縄文時代の遺物の出土量は少ない。なお、奈良時代末～平安時代初頭の遺構が本層下位のL IIIで検出されていることから、L IIについては平安時代以降に形成されたものと思われる。なお、L IIIについては、沼沢火山の噴火に起因する軽石を含むことから、縄文時代前期後葉以降に堆積した層と考えている。

遺物出土(L I～II出土)平面分布状況を見ると、出土した遺物のうち、土師器40%、須恵器27%については遺構が密に分布する最上位面O・P 26～28グリッドから出土している。これらの土器の大半はL IIからの出土である。この他、出土した土師器の22%、須恵器の28%が段丘崖にあたるM・N 29グリッドで出土しているが、これらはいずれもL Iからの出土である。また、縄文時代の土器の40%が最上位段丘面縁部にあたるO 28グリッドから出土している。なお、遺構密度が希薄なN～P 18～25、N・O 6～17グリッドからはほとんど遺物は出土していない。

土器・土製品（図46～53、写真28～30）

遺物包含層から出土した土器は、L I b・L IIおよび耕作等により浮上し再包含されたL I も含め破片数にして縄文土器片約340点、土師器片約13,400点、須恵器片約1,260点が出土している。

縄文土器（図46～48、写真28）

図46～図48－1～6は縄文土器である。縄文時代の遺物は、縄文時代前期前葉～晩期の土器が出土しているが、後期前葉の土器の出土量が最も多く、次いで中期中葉の土器となる。いずれも破片資料であるため、全体の器形を知ることはできないが、ほとんどが深鉢形土器になるものと思われる。以下、各時期の土器についての説明を行う。

図46－1・2は縄文時代前期前葉に比定される土器で、1には羽状縄文、2は連続する刺突文で口縁部文様帯を構成する。区画された無文帯にコンパス文が施されている。図46－3～12は中期中葉に比定される土器である。3は隆線、4～12は沈線で模様を構成する。

図46－13～19、図47－1～10は後期前葉に比定される土器である。図46－13～15は口縁部と胴部を隆帯で区画するもので、13の隆帯上に小突起をもつもの、14・15の口縁部から端部に直孔をもつ棒状隆帯が垂下するものがある。また、14・15の口唇部には刺突文が施されている。同図16・17は口縁部直下に沈線が巡らされる。口縁部文様帯は幅広く、16のように無文になるものと17のように沈線で曲線を描くものが認められる。図46－19、図47－1・2は口縁部が内屈する土器で、図46－19のように幅広の口縁部文様帯内に沈線が施されるものと、図47－1・2のように無文部を形成するものがある。胴部には、いずれも多条沈線が施される。図47－3～10は多条沈線が施された胴部資料である。同図11は平行沈線間に列点状の刺突が施された土器で、後期前葉～中葉の資料と思われる。

図47－12～17は晩期に比定される土器である。12～15には網目状撚糸文（13～15は同一個体）、16・17は同一個体で条線文が施される。図47－18～21、図48－1～6は地文のみが施された土器を一括した。いずれも斜行縄文が施されている。図47－18は口縁直下に円孔、同図19は沈線が施される。図48－6は底部片で、底面に網代編み圧痕が認められる。図48－7は、土器片製円盤である。周縁を打ち欠き、円形状に形を整えている。

土師器（図49、写真29）

包含層から出土した土師器を器種別に見ると、破片数であるが甕類が最も多く、杯類は少ない。また、他の器種は瓶や鉢、壺、盤類も少量ながら出土している。

1～7は杯で、底部が遺存する資料については、いずれも回転ヘラケズリ再調整が施されている。1・2には黒色処理が施されていないが、内外面にミガキが行われている。外面のミガキは口縁部周辺のみで、外面のミガキは7にも施されている。6は、ベンガラが付着した口縁部片である。8は壺状の器形になると思われ、口縁部に浅い切込みが認められる。9は高杯あるいは高台付盤である。高台部に透かし状の切込みが施される。

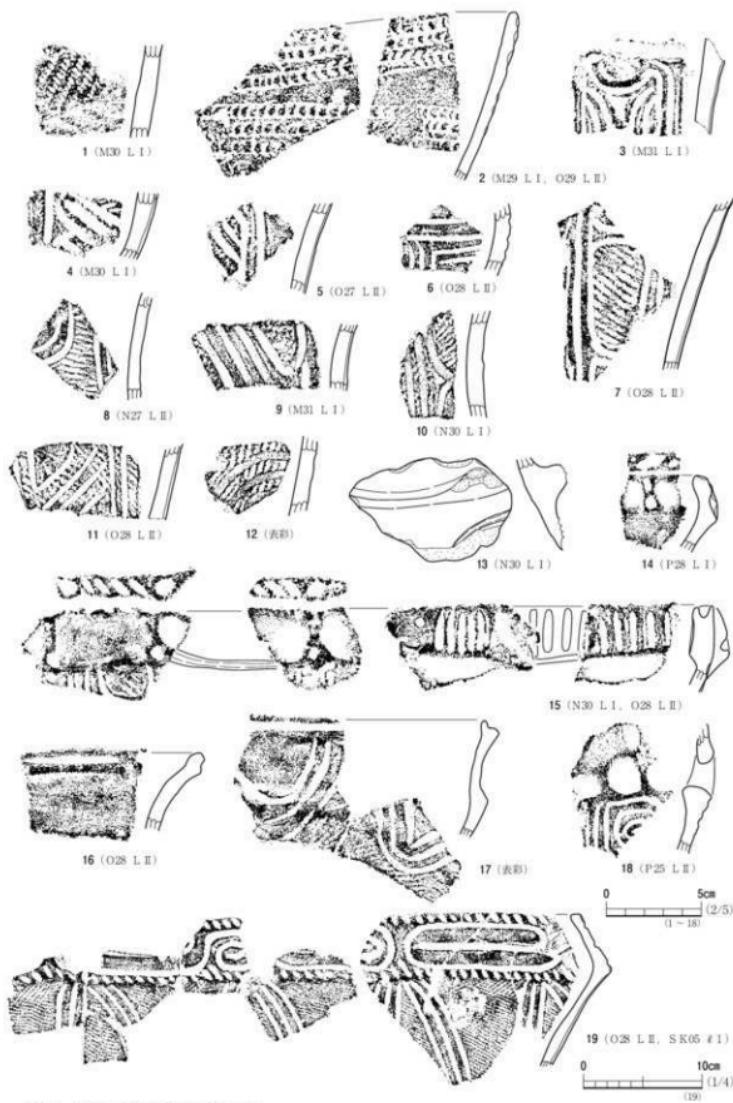


図46 遺物包含層出土遺物（1）

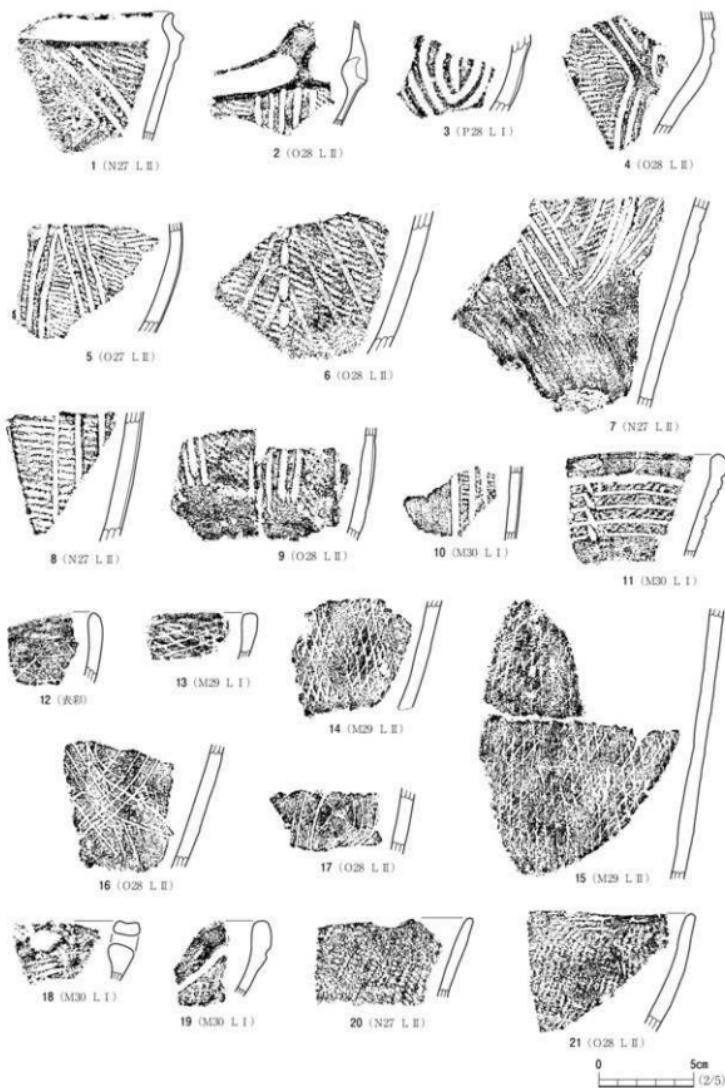


図47 遺物包含層出土遺物（2）

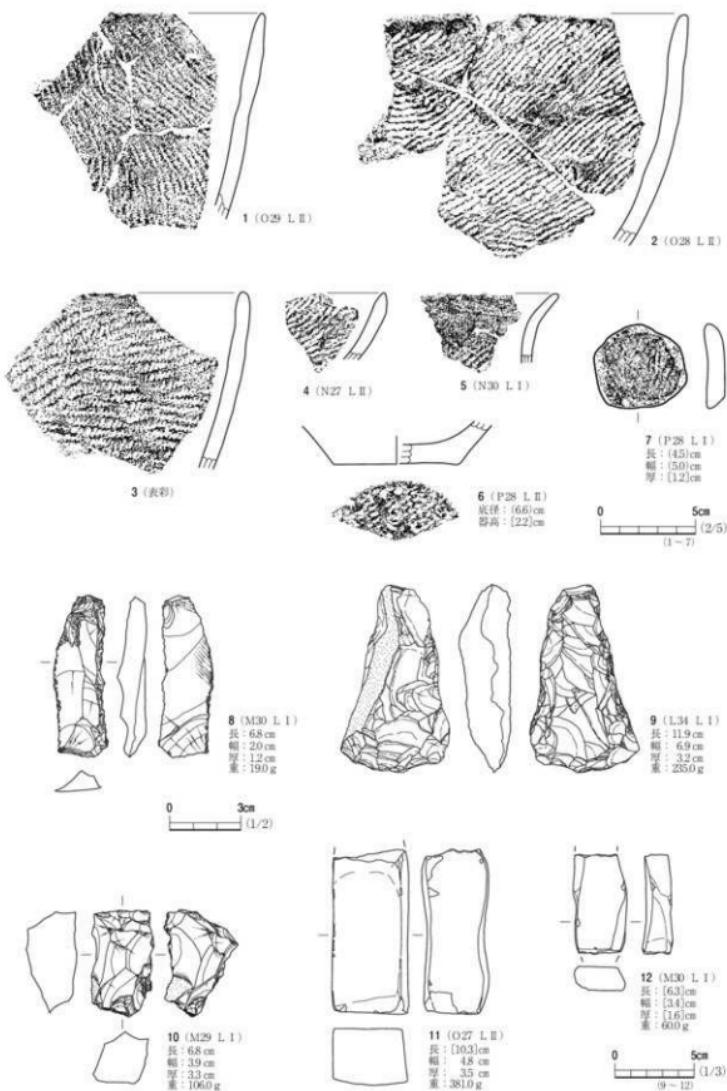


図48 遺物包含層出土遺物（3）

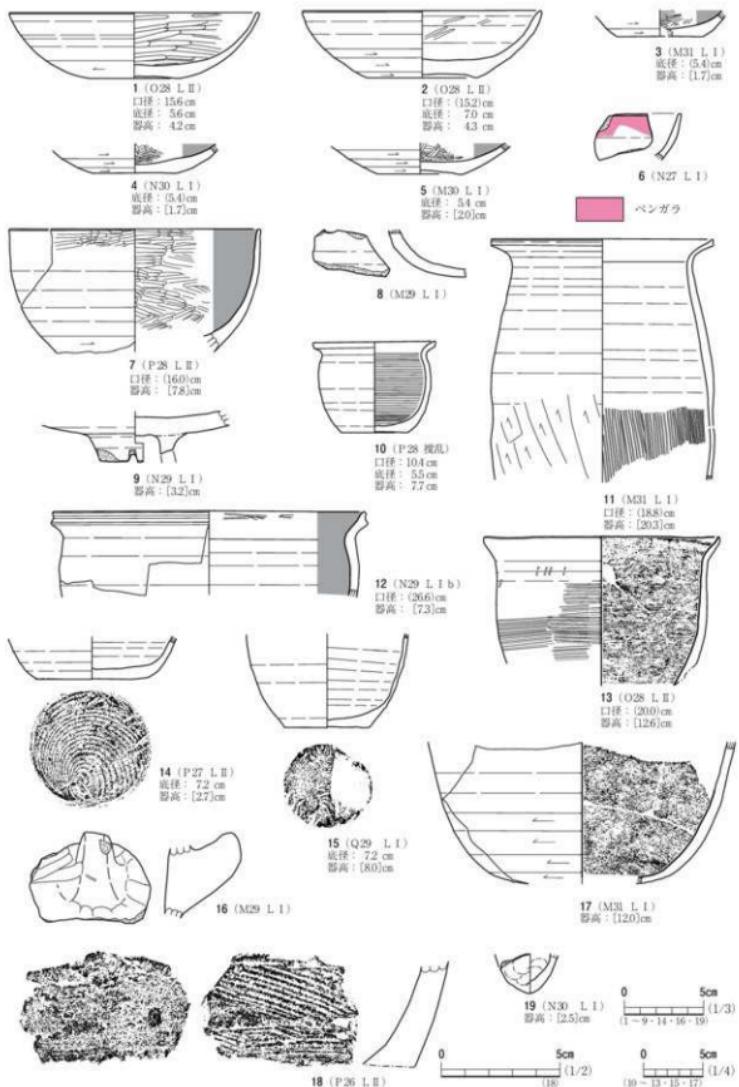


図49 遺物包含層出土遺物（4）

10～15は壺である。10・12・13は短胴壺、11は長胴壺になるものと思われる。10は外面にロクロ整形痕、内面にカキメ調整が施される。12は内面に黒色処理、13は口縁部と胴部境をタタキで整形した後、外外面をカキメで整えている。11は内外面の胴部上半にロクロ整形痕、外面下部に手持ちヘラケズリ、内面下部にはハケメ調整が縱方向に施される。14・15は胴部下半から底部の資料で、底部の切り離しは、回転糸切りによる。16は突起状を呈した懶の把手部である。

17・18は鉢で、17の外外面部下半には回転ヘラケズリ再調整、内面にはカキメ調整が施される。18は大型の鉢の破片で外面に襷痕が認められる。19は手捏ね土器である。

須恵器（図50・51、写真29）

出土した須恵器を器種別に見ると、破片数であるが杯類が最も多く、次いで壺類である。他の器種では蓋、小壺なども認められるが、瓶類はほとんど出土していない。なお、遺構内からは、この他に鉢類、横瓶、高台盤なども出土している。

図50-1～7は杯で、このうち5～7が未還元のものである。器形はいずれも、器高が低く底部から口縁部にかけて外傾しながら直線的に立ち上がるが、7は焼成時の影響で口縁部が波打つほどに大きく歪んでいる。7の底部の切り離しは回転糸切りであるが、その他は回転ヘラ切りによる。焼成はいずれも比較的良好である。同図8・9は高台付杯で、いずれも身の部分は浅く、高台部は底面縁辺に設けられている。同図10・11は蓋で、天井部が水平で浅く、中央が浅く窪んだ摘みをもつ。同図12～14は小壺で、外外面にロクロ整形痕を残すが、14は上半に明瞭な棱を有している。外外面に自然釉が認められる。底部は回転糸切り技法で切り離されているが、12・13の底面には焼成前に穿孔がなされている。同図15は瓶類の高台付底部資料で、高台外面に稜を有している。

図50-16、図51は壺類である。図50-16は口縁部が外反し、胴部が球形を呈した大壺である。外外面に平行タタキが認められ、外面には自然釉がかかる。図51は壺類の破片資料である。1は沈線で波状文が施された頸部片である。他の資料は胴部資料で外外面は平行タタキ、格子目、菱形、波状文などが認められる。なお、10の外外面には自然釉が認められ、内面に窓壁が付着する。焼台に転用された可能性もある。

土製品（図52・53、写真30）

出土した土製品は約15点。内容としては瓦塔、瓦、獸脚、土錘、土器片製円盤などがある。なお、土器片製円盤については、繩文土器内で報告した。

図52-1・2は、土師製の獸脚である。手捏ねで形を整えた後にヘラ状の工具で表面を平滑にしている。なお、2は二次的に熱を受けたためか、表面が脆弱である。これらの獸脚は器と接する断面の状況から、盤などの浅い器種類ではなく、鍋など容器下半に膨らみをもつ器種に付属するものと思われる。図52-3・4は瓦塔の屋蓋部破片資料である。半裁竹管状の工具で押し引きし瓦を表現している。瓦は継ぎ目も表現されており、3・4で瓦の長さに違いが認められる。同図5・6は布目瓦である。図53-1～3は筒型の土製品である。形状は1・2の半円柱状、3の半柱状を呈するものが認められる。用途は不明である。これらの土製品は、内面にはヘラナデ調整が施されるも

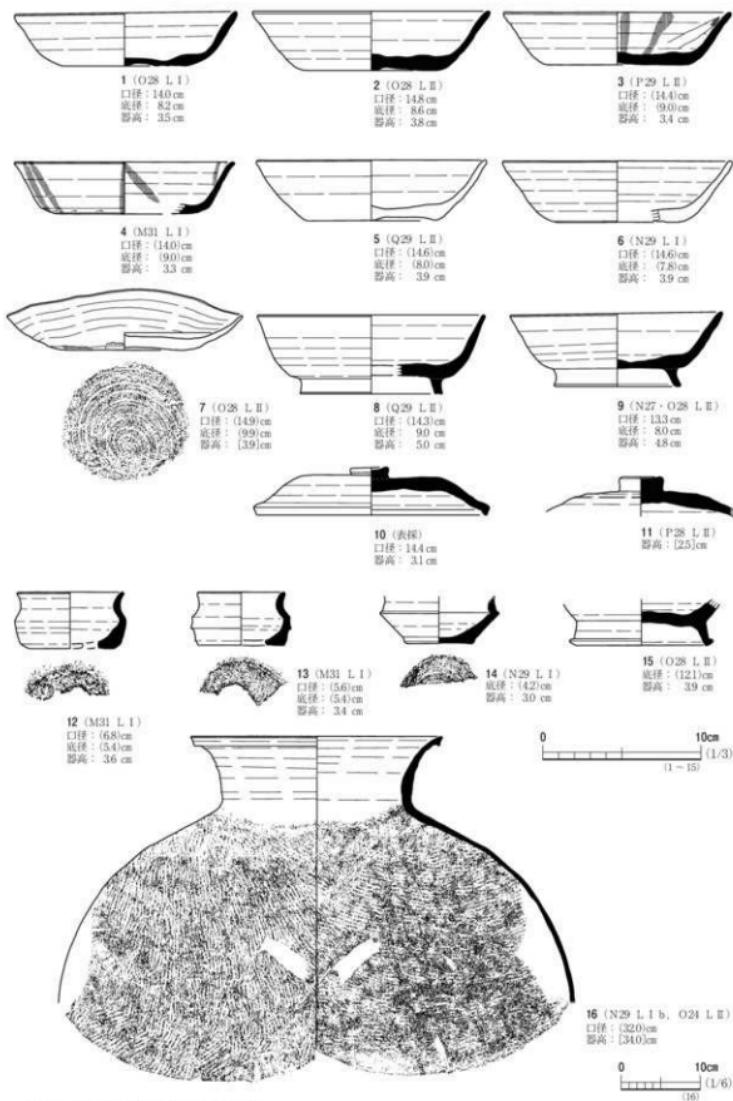


図50 遺物包含層出土遺物（5）

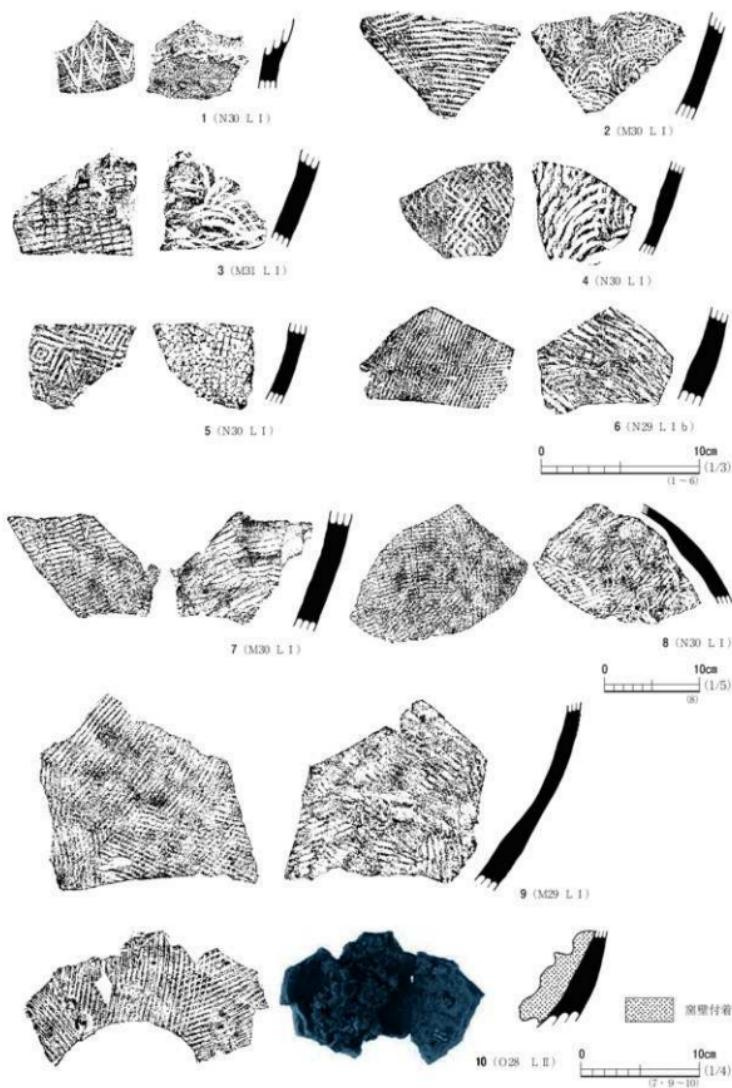


図51 遺物包含層出土遺物（6）

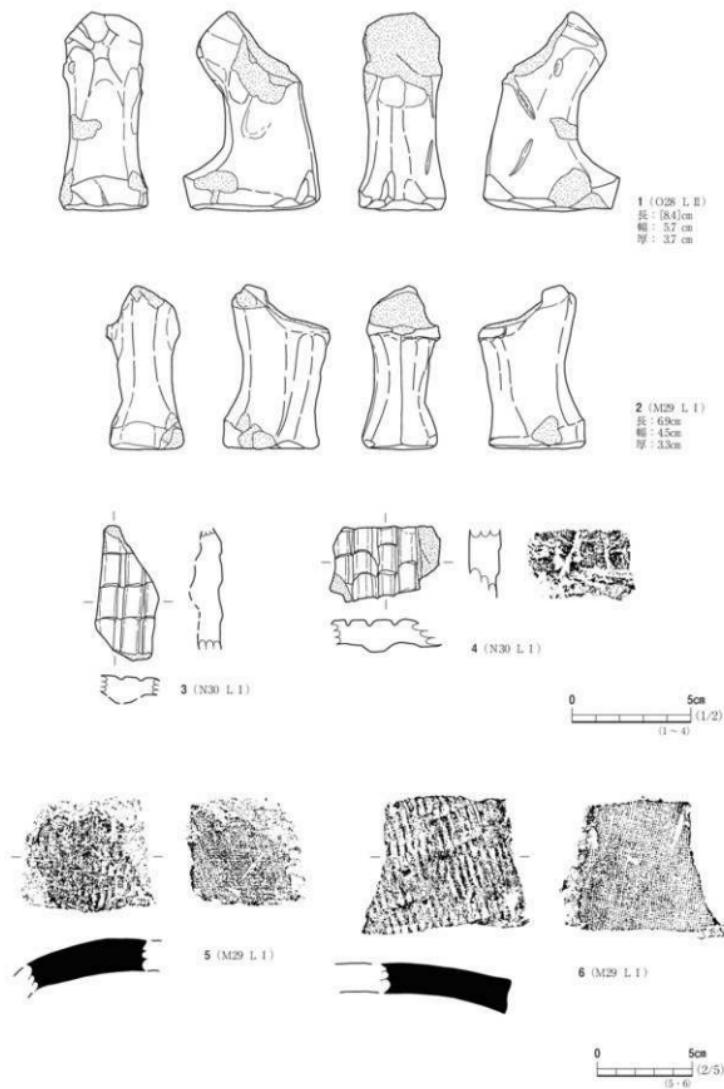


図52 遺物包含層出土遺物（7）

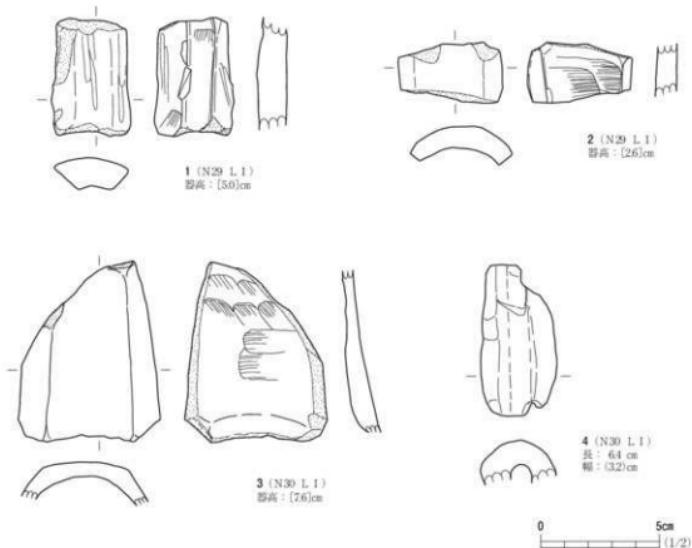


図53 遺物包含層出土遺物（8）

のが多く、外面をミガキ調整などで平滑にしている。同図4は管状土錐である。表面は、ヘラケズりで調整されているが、凹凸が目立つ。

石器・石製品（図48、写真28）

遺物包含層からは、石器・石製品は剝片類も含め16点が出土している。8は削器としたものである。縦長の剥片の縁辺部に刃部を作り出すための簡単な剝離調整が行われている。9は打製石斧である。剥離成形は全体に施されているが、素材全体の厚みを取り切れず自然面を残す。また、刃部は凸刃状を呈している。10は石核である。打面を頻繁に転移させながら剥片剝離を行っている。11・12は砥石で、各面に磨痕が認められる。

(大河原)

第8節 まとめ

調査I区では、8世紀末葉～9世紀前葉の集落を確認した。遺構の分布状況などから、集落の中心部分は調査区東側に広がる台地上に形成されているものと考えている。集落の南側は、昭和40年代後半に須恵器資料が採集されている小田高原窯跡推定地にあたるが、今回の調査では小田高原窯跡に關係する遺構は確認されなかった。なお、調査区内からは土器焼成坑と考えられる土坑も確認され、集落内で須恵器生産と焼成坑による土器生産が併せて行われていたものと想定される。

集落内で出土した遺物は、供膳具、煮炊具、貯蔵具の他に、仏具と考えられる穰梳、瓦塔、獸脚なども確認されている。鉄製品の中には鎧帶具の釦具も出土しており、出土遺物の内容から見ても一般的な集落とは様相が異なる。本集落は出土遺物や水運の要所などに営まれていることから、当地域の拠点的な集落の一つといえる。

本節では、今回調査I区で確認された奈良・平安時代の遺物や集落についてまとめる。

1. 遺物について

調査I区から出土した奈良・平安時代の遺物は、土師器片約24,780点、須恵器片約1,780点である。この他、土製品、石器・石製品、鉄製品も少量ながら出土している。以下では、遺構内から比較的まとまって出土した資料を中心に、調査I区の遺物の特徴について述べる。

1) 土 器

① 土師器

杯 杯には内黒処理されるものと、ミガキが施されるが内面黒色処理されないものがあるが、全体的な出土量は少ない。ミガキ処理だけのものは、内外面に施されるものも認められる。外面調整技法では、回転ヘラケズリ再調整を行うものとロクロ整形のみのものがある。回転ヘラケズリ再調整は体下半を中心に行われるが、回転ヘラケズリの範囲が広いものと幅の狭いものが混在する。これらの土器は、回転ヘラケズリ再調整によるためか、外面に光沢をもつことが多い。底部の切り離しは、再調整で確認できないものが多いが、回転糸切りによるものと思われる。

器形は、底径が大きく身が低いもの(図10-2)と身が比較的高く椀状を呈するもの(図14-4)、比較的小型のもの(図14-3)が認められる。また、器形による内面黒色処理および外面再調整などの違いはほとんど認められないが、内外面に丁寧なミガキを施すものには、椀状を呈するものが多い。

甕 煮炊具およびロクロ土師器の中で最も出土量が多い。なお、非ロクロの甕は出土していない。住居跡から出土した甕は、器形的特徴から大きく長胴系のものと短胴系のものに大別できる。なお、これらについては、口縁部の形態や調整方法、法量的なことからさらに分類可能であるが、今回は細分せずに大まかな甕の特徴について述べる。

長胴甕では、胴部中央から上半膨らみをもち、口縁部が「く」字状に外反するものと真横に引き

出されるものが認められる。底部はいずれも平底である。口縁端部は、摘み出しを行わないものとわずかに摘み出されるものとが認められる。法量的には、口径が20~23cm、器高約35cm、底径約7cmとほぼ同一規格である。製作は、整形にロクロとタキを併用し、器面の調整にハケメとカキメを用いる。タキの痕跡を部分的に残すものも認められるが、多くはハケメとカキメおよび手持ちヘラケズリ調整により、その整形痕を消されている。なお、手持ちヘラケズリ調整は密に行われるものが多く、そのため胴部下半が砲弾状を呈するものも認められる。また、長胴壺のタキ整形は、北陸の長胴壺と共通する部分がありその影響が窺える。

短胴壺では、胴部上半に膨らみをもち、口縁部が「く」字状に外反ものが多い。底部はいずれも平底である。口縁端部は、ほとんど摘み出しが行われていない。法量的には、口径が14~18cm、器高8~16cm、底径7~10cmで、器高に差が見られる。内外面調整技法は、主にロクロ整形のみで、少量ながらカキメや手持ちヘラケズリが施されるものも認められる。

大鉢 出土量は多くないが、全体の形が分かる資料がS I 107、SD02から出土している。器形的には底部から口縁部までは直線的に立ち上がるものと、体下半に丸みをもつものが認められる。底部は平底で、本葉痕を残すものもある。法量的には、口縁部径が30cm程度のものと約50cmのものとが認められる。製作技法は、非ロクロによる。内外面調整技法は基本的に長胴壺と同じで縦および斜めのハケメ調整を施すが、カキメ調整は認められない。内外面ヘラナデのみ施されたものも認められる。なお、内面に粘土が付着した痕跡が確認できるものもある。

②須恵器

還元杯 供膳具の主体となるが、出土量的には後述する未還元のものが多い。底部の切り離しは、いずれも回転ヘラ切りによる。なお、部分的にヘラナデを施すものも認められる。器形的には、いずれも底径が大きく、器高が低いものとなる。法量的には、底径/口径比が0.55~0.6、器高/口径比0.25~0.3に収まる土器が多く、他に底径/口径比が0.6以上、器高/口径比0.25~0.3のものもある。また、S I 01図11-3のように底径/口径比が0.6、器高/口径比0.34になるものも認められる。

未還元杯 須恵器系土器などの名称を用いて報告されることもあるが、これらの土器は10世紀前葉の土器に使用される場合が多く、今回は未還元といった呼称を使った。これらの杯については、焼成土坑で焼かれた製品と考えている。器形、製作技法いずれも集落内で確認される還元杯と焼成以外変わりはほとんど認められない。焼成土坑で焼かれた根拠の一つとして、SK07で一括出土した資料がある。これらの資料の多くは形が重み、器面が爆ぜ、底部が抜け落ちた状態で出土しており、焼成坑で出土する所謂「ハネモノ」と同じ状態である。

これらの土器については、調査区内で出土する還元化した須恵器杯と製作技法、器形などがほとんど変わらず、この時期の須恵器杯の優越性やこの土器が生産地での須恵器杯の補完を目的としたものと考えられることから、今回は須恵器の項目で報告(断面を白抜きし還元化した須恵器と区別)したが、焼成過程および須恵器出自のロクロ土器の展開などを考慮すれば、既に指摘されている

ように土師器の範疇で捉える方(菅原:1997)がこの土器については理解しやすい。

なお、内黒ロクロ土師器杯の系譜については、安積郡と接する当該地域の集落内から比較的多く出土していることから、安積郡を含む陸奥国内の他地域と考えられて(山中:2002)いる。

また、これらの土器については、先述したように一般消費地の供給ではなく生産集落内の須恵器工人が自給用として焼成したもの(菅原:1997)と考えられている。本遺跡でも調査I区内の1~3号住居跡内から出土した還元・未還元杯の復元可能な個体でその出土数を見ると、未還元杯が4~7割と高い状況を示し、生産地の自給用品として使用されていたことを窺わせる。

以下、SK07出土の復元可能な資料からこれらの土器を観察する。法量的には、還元杯と同じく底径/口径比が0.55~0.6、器高/口径比0.25~0.3に収まる土器が最も多い。この他に底径/口径比が0.61以上、器高/口径比0.25~0.3のもの、底径/口径比が0.55以下、器高/口径比0.25~0.3のものが認められるが、焼成時の歪みなどを考慮すれば、ほぼ同一の規格内で製作されていたものと考えられる。底部の切り離しは、ほとんどが回転ヘラ切りによるが、回転糸切りが1点、静止糸切りが1点認められる。なお、数は少ないが、他の遺構からも回転糸切りによる底部切り離しが認められた。

当地域の8世紀後葉~9世紀における小型品の底部切り離し技法の相違については、大戸窯跡群の操業と供給面から、窯業生産体制の中で須恵器・土師器工人の二極分化が指摘(菅原1997)されている。これらの土器に回転糸切りや静止糸切りが少なからず認められている点では、須恵器工人と土師器工人との係わりが窺える。当地域では、8世紀末葉~9世紀前葉にかけて土師器の壺も非ロクロからロクロ整形に転換することが指摘(山中:2002)されており、須恵器生産地で在地工人集団(土師器工人)への技術教化(ロクロ技術の伝播)が行われ、ロクロ土師器工人が組織化(石本:1996)していくことによって、当地域における9世紀中葉以降の内黒ロクロ土師器杯の普及に繋がっていった可能性がある。

高台付杯 数は少ないものの、ほぼ完全な形の資料がS102・03・07、SK07などから出土している。身が浅いものと深いものに大別でき、後者は口縁部下端や体部中央に沈線を巡らす。喜多方市史4に報告されている資料はいずれも身の浅い高台付杯である。高台はいずれも貼り付けによるもので、底部外縁に設けられている。高台断面形は方形状を呈している。法量的には、身が浅いものでは口径が13~14cm、身が深いものでは口径が14.5~15cmに収まる。

蓋 須恵器のなかでは、杯に次いで出土量が多い。特にS103(住居北側の部分のみ調査)からは、床面から4つの蓋が出土している。形状は中央が窪む摘みをもつ平蓋状のものと数は少ないが、同様の摘みをもつ山笠状を呈するものも認められる。なお、S107からは形状が杯を呈した蓋が1点出土している。蓋の天井部については、切り離しの痕跡を丁寧に消すものが多い。

法量は、口径が15~15.5cmのものと14.4~14.7cmのものに分かれる。器高は3.5~4cmのものが多い。これらの蓋は高台杯に伴うものと思われ、法量的にみて前者は身の浅い高台付杯、後者は身の深い高台付杯とセットになるものと考えている。また、蓋外面縁辺部にのみ全周して残る自然釉

の痕跡から、正位高台杯+倒立蓋+正位蓋+倒立高台杯の重ね焼き(北野:1998)が推測される。

小壺 出土量は少ない。S I 03と遺構外から出土している。全体の形が分かるものでは、図20-14がある。形状的には、小型短頭壺と思われるが、底面に焼成前に外側から穿孔しているものが多い。底部の切り離しは回転糸切りによる。これらは焼成前に底面穿孔が行われていることから、実用的なものではなく、先述したように仏具もしくは窯の焼台の可能性がある。また、多孔壺などの特殊器種に付属するものとも考えたが、底面まで焼成されていることや、接合痕なども認められなかつたことから、そのような用途ではないものと思われる。

瓶類 出土量は少ない。長頸瓶では頸部と底部の出土である。このうち、遺構外出土の底部資料は、高台の特徴が大戸窯跡M H 33号窯に似た特徴を持つ。この他にS I 02・03から横瓶が出土している。製作技法は、いずれも片面閉塞によるもので、円盤貼り付けの痕跡が認められる。

2) 土製品・鉄製品

①土管状土製品

出土量は少ないと器形が分かる資料がS I 02から数点出土している。器形的特徴から土管状を呈するもの、それを分割したものが認められる。前述したものは器高が約50cmと比較的大型である。口縁部は実測図で復元しているが、玉縁状を呈していたものと思われる。後述したものは器高が30cm程度で体部下半に円孔を有し、口縁部は「U」字状を呈している。玉縁状や「U」字状の口縁および体部下半の円孔などについては、これらを複数個連結させて使用するためのものと考えられる。内外面の調整技法は、いずれもハケメ、カキメを施す場合が多いが、分割したものでは、外面に整形時のタタキ痕を残すものも認められる。

このような土製品については、形状は違うものの7世紀頃には県内および他県でも確認され、主にカマドを構成する施設の一部として使用されたことが指摘(丹治:2001)されている。新潟県山三賀遺跡では、土管状を呈したものが出土しており、同じくカマドを構成する施設の一部として報告されている。周辺地域では、喜多方市塙川町内屋敷遺跡から分割した形状のものが遺構外から出土している。なお、本遺跡においては、大半が遺構内堆積土からの出土であり、その性格を特定するような出土状況は認められなかった。また、時代は異なるが奈良県飛鳥寺では、土管状土製品が暗渠の土管として使用されている例も認められる。

②瓦塔

遺構外Iから瓦塔の屋蓋部2点が出土している。周辺の遺跡では、喜多方市塙川町内屋敷遺跡から9世紀中葉頃の屋蓋、軸部、基壇部が、鏡ノ町A遺跡からは9世紀前葉頃の相輪部が出土している。内屋敷遺跡出土の屋蓋部と本遺跡出土の屋蓋部を比較すると、半裁竹管状工具で押し引きし瓦を表現している点は共通するが、本遺跡では瓦の継ぎ目も表現されているのに対し、内屋敷遺跡では継ぎ目が表現されていない点が異なる。

③鉄具

S I 02カマド構築土から出土した。鉄製で鉄具頭は隅丸方形状を呈している。周辺地域の鎧帶具

の出土事例は、喜多方市塩川町鏡ノ町B遺跡の溝状遺構（8世紀末葉～9世紀初頭）堆積土から石製丸瓶が出土している。また、新編会津風土記第七十七卷には会津美里町の「いしあい」で火葬壺内から10点の石製鎧帶具（巡方、丸瓶、鉈尾）が出土した記載が認められる。「いしあい」の事例は、副葬品として腰帶が火葬壺内に収められた可能性があるが、本遺跡および鏡ノ町B遺跡の場合は、カマド構築土や溝跡から単体で出土している。単独で出土する鎧帶具については、「腰帶から飾金具を取り外し、象徴的に分有していた。」（田中：2003）。この他に山間部小規模集落から出土する事例からは「在地社会の支配体制を強固にするため、位階を示す鎧帶具を分配し、地域社会での身分秩序を擬制させていた可能性がある。」（福田：2009）ことが指摘されている。

本遺跡の鋏具については、出土状況から本来の腰帶としての機能はなく、単体で持ち込まれていたものと考えられる。また、カマド袖構築土内から出土していることから、この行為を行った時点で上記指摘のような性格を持ち合わせない。県内でも住居跡のカマド内部（白河市佐平林遺跡）、貼床埋土（福島市鏡塚遺跡）、柱穴の埋土（郡山市柿内戸遺跡）などからの出土事例が報告されており、意識的に埋設された状況で出土するものについては、住居内祭祀を含め今後検討が必要である。

④土器の年代観

ここでは、上記報告の土器の年代観について簡単にまとめる。調査I区の土器の特徴として、①竪穴住居内において供膳具は数的に須恵器杯が主体で内黒土師器杯が少ないと、煮炊具は土師器長胴甕と短胴甕が主体となること、須恵器の器種が豊富であること、②須恵器杯は底径／口径比が0.55～0.6、器高／口径比0.25～0.3に収まる土器が多いこと、③土師器杯の外面調整には回転ヘラケズリが行われ、幅の広いものと狭いものが混在していること、④長胴甕では非クロコのものが認められないこと、⑤長胴甕胴部下半にタキキ整形痕を残す北陸系のものが認められること、⑥長胴甕の内外面調整は縦位の手持ちヘラケズリも認められるが、多くはハケメとカキメ調整であること、⑦蓋の天井部に切り離しの痕跡を残さないこと、⑧未還元須恵器杯（須恵器出自の所謂須恵器系土器）が含まれることなどが上げられる。これらの特徴の多くは、当地域における土師器、須恵器の8世紀末葉～9世紀前葉の特徴として指摘（会津若松市教育委員会：1994、石田：2000、山中：1999・2000・2003）されている。なお、竪穴住居跡の土器の構成や調整技法などは、周辺遺跡で見ると喜多方市塙田A遺跡25号竪穴住居跡と共通している。また、須恵器高台杯、蓋、稜挽などの器形的特徴や法量は、大戸窯跡MH33号窯期、KA12号窯期に共通する部分が多く、調査I区の土器については、概ね8世紀末葉～9世紀前葉に属するものと考えている。

2. 集落について

調査I区で確認された遺構は、竪穴住居跡5軒（内2軒は竪穴状遺構）、土坑20基、溝跡6条などである。なお、昭和40年代に発見された須恵器窯跡については、今回の調査では確認されなかった。確認された遺構は、重複関係が認められた遺構もあるが、多くは前述したように8世紀末葉～9世紀前葉に所属するものと考えている。限られた範囲の調査であったため、集落の全体像を把握する

ことはできない。ここでは、検出された遺構などから、集落像の一端を垣間見たい。

本集落については、検出された遺構や以前発見された須恵器窯跡から、生産集落跡と考えられる。今回確認された遺構のうち、S I 02についてはロクロ状ピットが確認されていること、その周辺の床面に粘土が散在していたことや規模などから、工房的な施設と考えている。なお、焼成が甘く歪んだ状態の土器師短胴窯が出土しているが、これらについては工房内で製作したものが、火災焼失の際に生じた産物の可能性もある。また、S I 02の周辺には土器焼成坑と考えられるS I 07、SK 07が位置している。この他、SK 04・05・13についても同様の施設と考えられるが、これらについては、県内で報告されている土器焼成坑のように底面や周壁に顯著な被熱面は認められず、全てを焼成坑と判断するには問題がある。なお、顯著な被熱面が認められないことについては、本遺跡の土器焼成坑が他地域に供給することが目的ではなく、主に集落内での自給用品の生産であれば、生産頻度が少ないため、顯著な被熱面が形成されなかつたものと考えられる。また、集落内で確認された土器焼成坑については、平面形が方形を呈し、SK 07のように壁に張り出しを伴うことが特徴といえる。

調査区内で確認された土器焼成坑については、消費地への供給より生産地での自給を目的としたものと考えられるが、会津坂下町三本木遺跡6号住居跡で報告されている土器器杯が本遺跡の未還元須恵器杯に類似しており、生産地周辺には少なからず、供給されていた可能性はある。

工房施設や焼成坑の南西側には、小田高原窯跡が位置していたものと推測され、須恵器窯跡周辺に比較的まとまって生産関連遺構が営まれていたと考えられる。なお、集落全体の調査を行っていないため、その生産規模を知ることはできないが、今のところ小型製品を中心とした須恵器生産と集落内で消費する杯などを生産するための焼成坑が付随する小規模な生産集落と考えている。

須恵器生産については、会津北西部地域周辺において8世紀末葉～9世紀中葉まで大戸窯の製品と盆地西縁部の製品が相互補完したことが指摘(山中：2002)されており、本集落はその一端を担ったものと言える。当該期は会津郡から耶麻郡が分置したと考えられる時期と重なる。また、当地域は郡境に位置し、水上交通の要所に営まれている。8世紀に操業した盆地周縁の須恵器窯跡が衰退するなかで、小田高原窯跡および近接する喜多方市西新田窯跡や会津坂下町萩ノ窪窯跡が9世紀以降も引き続き営まれていることは、このような時代背景や立地条件などもその要因の一つであると考えられる。なお、この時期の小田高原窯跡で生産された製品の供給先とその範囲が今後の課題となる。

須恵器窯操業の背景としては、当地域においては会津郡の設置など当時活発化する陸奥国の大官衙整備が挙げられる。窯操業の運営には、官と繋がりを持つ在地勢力が関与したと考えられ、当地域においては山崎横穴群と関係する在地勢力の関わり(山中：2002)が指摘されている。なお、鎧帶具が出土する開拓集落については、律令の末端に連なる在地勢力が開拓指導したもの(村松：1989)と考えられ、本遺跡においても鉄具が出土しており、官との繋がりが窺える。本集落の經營者は、律令制が弛緩するなかで力をつけた官と繋がりを持つ在地有力者と考えられる。

今回の調査では、これら経営者が居住する建物跡や倉庫などは確認されなかった。集落の中心となる遺構については、調査区東側に広がる小田高原台地上に営まれているものと思われる。なお、阿賀川沿いには、在地有力者クラスの居宅跡が確認されており、生産場所と区別して営まれていることも想定される。出土遺物には瓦塔や獸脚、稜椀などの仏具も含まれることから、仏堂的施設などを集落内に有していた可能性がある。また、S I 01からは稜椀も出土しており、集落内での仏教信仰の受容も窺える。

当地域では9世紀前葉頃に慧日寺、勝常時が創建され、仏教の普及と拡大が認められる。仏堂的施設や瓦塔などは、喜多方市内屋敷遺跡、鏡ノ町A・B遺跡や会津若松市東高久遺跡など官衙関連施設や在地有力者クラスの居宅跡などで確認され、その時期は8世紀後葉～9世紀中葉頃である。今回の調査では、仏堂的施設は確認されていないものの、他の地域とほぼ同じ時期に集落内に仏教信仰が受容されたものと考えられる。仏教が受容される背景については、信仰的な側面の他に集落開発に伴い経営者が労働力の編成と確保、集落内の秩序維持、民衆統率のための規範づくりといった集落経営的な面からも積極的に受容されていったことが指摘(平野：1996)されている。

なお、本遺跡では、仏具系の遺物に対して墨書、刻畫土器が各1点と少ない。周辺の遺跡においても、鏡ノ町A遺跡Ⅰ期、鏡ノ町B遺跡Ⅱ期、内屋敷遺跡4a～c期にあたる8世紀後葉～9世紀前葉の時期は本遺跡と同様に墨書土器の出土が少ない傾向にある。鏡ノ町B遺跡では、Ⅱ期にあたる9世紀前葉以降に墨書土器が多量に出土しており、集落内での宗教活動の変容が窺える。

以上、確認された遺構や遺物などから集落について概観した。今回の調査からは、小規模な須恵器生産を主体とした生産集落であることが確認できた。遺跡の立地を見ると会津盆地の主流河川阿賀川沿いに位置し、集落が営まれている場所が盆地の出入口であることから、河川における物資の流通の拠点であったことも推測される。陸奥南部の郡都等の立地条件として河川等の水上交通が指摘(荒木：2000)されており、当地域においても8世紀後半以降に阿賀川およびその支流沿いに官衙関連施設が営まれ、その重要性が窺える。本遺跡調査Ⅱ・Ⅲ区にあたる集落の西側は阿賀川に面しており、継続して調査が行われる予定である。これらの調査区内からは、水上交通における流通の拠点であったことを示す遺構が確認される可能性もあり、今後の調査に期待したい。 (大河原)

第3章 調査II区の遺構と遺物

第1節 概要

調査II区は、調査対象全区の北西部に位置する。調査II区の面積は6,900 m²である。調査II区の基点はE 2 グリッド杭(公共座標:X=179,710・Y=-2,960)とし、東方向はLグリッド列(~Y=-2,890)、南方向は17グリッド列(~X=179,640)までが調査II区のおよその範囲である。

調査II区の立地は概ね2段の段丘下位面であり、流路に接して河川敷状のなだらかな地形が広がる。調査前は畠地・山林などに利用されていた。調査II区の北側はV字状の細い谷によって分断されるが、谷の北側にも河川敷状の地形がさらに続いている。なお、調査II区の北側については平成22年度に試掘調査が行われたが、遺構・遺物は確認されていない。

調査II区の東側には段丘斜面が迫る。段丘上位面から調査II区までの比高は24m以上である。同段丘斜面は降雨・融雪等の浸透による土砂崩れが発生しやすい地質で、9月の秋雨時期にも地滑り状に斜面が崩れて調査II区内に多量の土砂が流れ込んだ。また、調査II区の西半部は、河川氾濫時の高水敷になっている。調査II区の地盤は、主に東側の段丘斜面の崩落土・西側の洪水砂の供給によって形成されている。

今回、調査II区において7,900 m²相当の発掘調査を実施している。調査期間は6月10日～12月17日である。調査面積の内訳は、中世の遺物包含層を対象とした1,000 m²と、平安時代の遺物包含層・文化面を対象とした6,900 m²である。中世の遺物包含層は調査II区の北西部で確認した。調査II区の検出遺構は、堅穴住居跡6軒、須恵器窯跡3基、溝跡2条、土坑7基、竪状遺構1カ所である。堅穴住居跡はいずれも平安時代のものであるが、カマドが明確に認められたのはS I 08のみである。他の住居跡は遺存状態が悪く、構造的に不明な点が多い。

旧地形を概観すると、調査II区のほぼ中央を幅10m前後の狭長な平坦面が南北に延びており、H 8～12グリッド付近では平坦面の東側が崖んで堤状の地形が形成されている。平坦面の西側は阿賀川に向かって比較的急な斜面になっている。今回、検出した堅穴住居跡はこの平坦面に立地しており、居住・作業場域を形成していたものと思われる。調査II区の東部では西向きの谷が開き、調査II区のほぼ中央に窪地を形成している。J 11グリッド杭を中心とする一帯は、遺構・遺物が認められない空白域である。

須恵器窯跡は調査II区の北東部で確認され、段丘斜面の裾部を利用して造られている。各窯跡は遺存状態が悪く構造的に不明な点が多いが、比較的大規模な土砂崩落を受けたと思われ、その影響によって窯跡の南側は大きく開析されている。この須恵器窯跡は平安時代であるが、その時期は出土遺物からS I 08よりも古い可能性がある。今回、調査の対象とした平安時代の文化面の下に、洪水層を挟んでさらに平安時代の文化面があることが確認されている。下位の平安時代の文化面が須

恵器窯跡の時期に相当する可能性がある。

調査II区の南部は谷地形となっており、比較的遺構・遺物の密度が低い箇所である。なお、調査II区南東部のJ 18グリッドで竪穴住居跡と考えられる遺構の一部が確認され、遺構の大半が調査区外とした区域に潜り込んでいる。

調査II区の南端部で検出したS X02は溝が平行に並ぶ遺構で、東西方向に畝立てが行われた畑跡の可能性があるものである。S X02は洪水砂で覆われていたが、同砂は調査III区で確認された近世頃の洪水砂に類似しており、S X02の時期についても近世頃の可能性がある。
(香川)

第2節 基本土層

調査II区における堆積土の状況は地点によって異なる。調査II区の東域は丘陵斜面からの影響が大きく、斜面崩落による浸食・埋積が著しい。一方、西域は河川堆積物が重層しており、調査II区の基本土層は複雑な様相を呈する。なお、調査II区では基盤層までの深さが2mを超える箇所もあり、簡易ボーリング機による地層採取を併用しながら基本土層の確認を行った。

調査II区における基本土層は、喜多方市教育委員会によって平成21年度に実施された試掘調査の報告(2010:『喜多方市文化財報告書第8集』)に従い、調査II区中央のH 10グリッドに位置する2号トレンチ(以後、2T)の成果をまず基準とした。

2Tの堆積土は第1~9層に分けられ、第4・6層で平安時代の遺構・遺物が確認されている。SK 10は、喜多方市教育委員会が2Tの第4層面で発見した遺構である。第6層は、第4層から約60cm下がり、焼土面が発見されている。間の第5層は洪水砂層である。第2・3層では遺構・遺物が確認されていないが、比較的安定した土層であることから周辺に遺構が存在する可能性を指摘している。したがって、第1層=L I、第2層=L II a、第3層=L II b、第4層=L II cとした。また、L II cを平安時代の第1遺物包含層、2Tの第6層を第2遺物包含層(L III E等)とした。

L II cは暗~黒褐色のシルト質層であるが、比較的粒径は大きく砂層に近い。L II c内には微量の炭化物粒・焼土粒を均等に含む。L II cから土師器が出土したが、比較的下位で確認されたものが多い。L II cの分布は、およそS 108~12が立地する南北方向の平坦面および東側地域に広がる。I 6~13グリッド杭を結ぶ基本土層観察用畔では、およそI 7グリッドから連続的にL II cが堆積しているのが認められた。

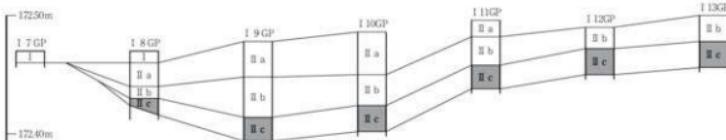


図54 I 7~13列土層柱状図

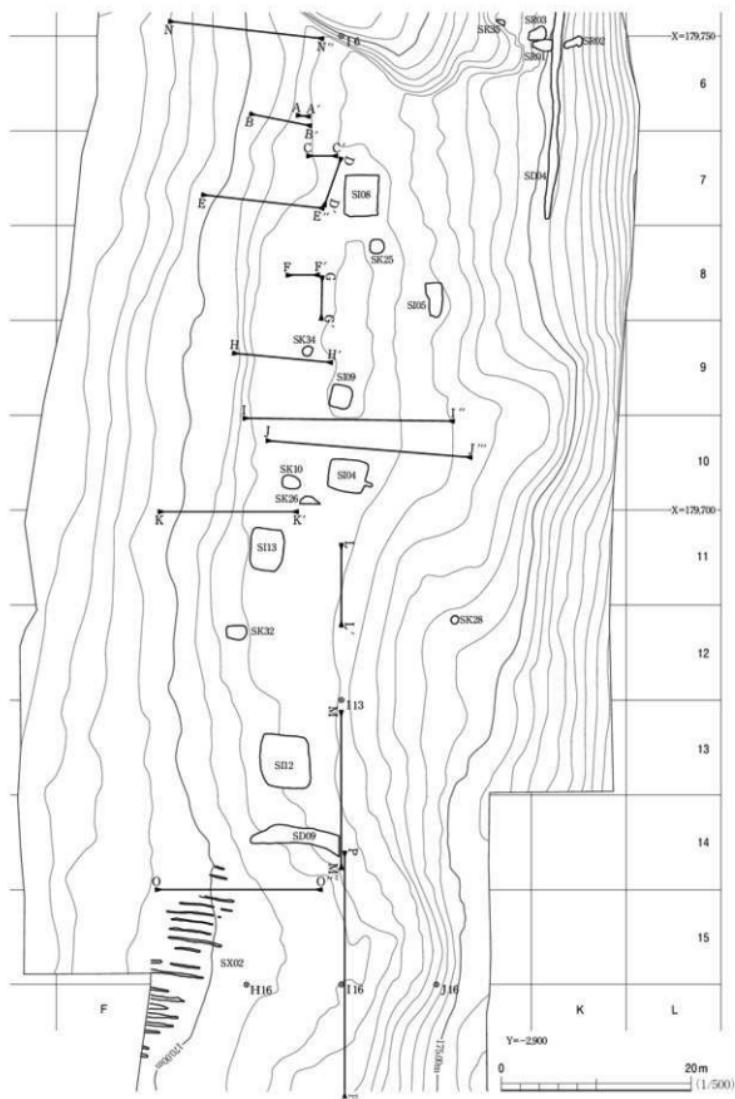


図55 II区基本土層観察地点

調査II区東部のJ 11グリッド付近から西向きの谷地形が扇状に開くが、I 8～11グリッド付近で谷の外縁が緩やかに隆起するため窪地を形成している。H 10～12グリッド杭を結ぶ基本土層観察用畔(I - I")では、西からL II cがレンズ状に堆積しているのが確認される。しかし、中央部平坦面よりも西側の斜面域ではL II cの存在が明確でない。H - H'・K - K'では平坦面の西側堆積土をL II A～Cに分けたが、東側のL II a～cとの対応関係は不明である。調査区北西部のB - B'ではL II cを確認しており、同層から土師器が出土している。しかしB地点よりも西側では、L II a・bが確認できるものの、L II cが浸食された可能性がある。なお、I - I"の東部ではL II a上にL I bが厚く堆積する。L I bは明黄褐色の混合土で、東丘陵斜面から地滑り的に流入した崩落土である。L I bの層厚はJ 11グリッド付近で約1.2mを測る。

13グリッド列以南もおよそ西向きの谷地形であり、斜面崩落土と考えられるL I Bが確認される(O - O"・P - P")。調査区南部ではL II cが確認できず、また平安時代の第2遺物包含層としたL III Eも谷によって刻まれ断続している様子が窺える。谷の堆積土を沢ℓ 1～18に分けたが、沢ℓ 4は段丘礫と思われる石、沢ℓ 10は黄褐色土塊を含んでおり、比較的大きな斜面崩落が繰り返されたものと推測される。また、沢ℓ 3は洪水等による河川堆積物と考えられ、阿賀川からの影響も認められた。なお、沢ℓ 3はSX02を覆う堆積層であるが、調査III区のL II Rに類似し、近世頃にSX02が埋没した可能性が考えられる。

遺構等の存在の可能性が指摘されたL II aであるが、同層は暗褐色のシルト質層で、地点により層中に炭化物粒・焼土粒を含む箇所がある。今回の発掘調査ではL II a・bから遺構・遺物は確認できなかったが、調査II区北西部のL IIコ(N - N")とした層から瓦器・小刀が出土しており、L II cよりも新しい遺物包含層を確認している。しかし、第1次調査ではL IIコとL II a～cの対応関係を明確にできなかった。

第2遺物包含層関連の発掘調査は、来年度以降に予定されている。第2遺物包含層としたL III E、またはL III Eに相当すると考えられるL IIIエ・サ(E - E")の上には洪水砂(L III D・三ウ・三コ)が堆積する。この洪水砂は2Tの試掘調査で示された第5層に相当し、第2遺物包含層を確認する際の指標となる層である。第2遺物包含層の分布は概ね第1遺物包含層に等しく、調査II区中央の平坦面を中心とする範囲に広がっているものと推測される。H - H'・K - K'の観察では、L III Eは平坦面突端部で収束しており、西側斜面には及んでいない。S I 08の西側にD - D'を設定したが、L IIIイ面がS I 08の検出面である。L IIIイの約25cm下で、L III Eに相当するL IIIエが堆積する。また、L IIIケでも遺物および焼土面を確認している。E - E"の観察では、L IIIエ・ケはL IIIオ付近で途絶えるが、L IIIオの成因については不明である。L IIIエは、断続的にL IIIサとして続く可能性がある。

なお、喜多方市教育委員会の試掘調査では、G 8グリッドに設定された4Tから平安時代の遺物包含層が2層(第4・11層)確認されているが、L III Eとの対応関係を明確にできず、来年度以降の調査の課題として残る。

(香川)

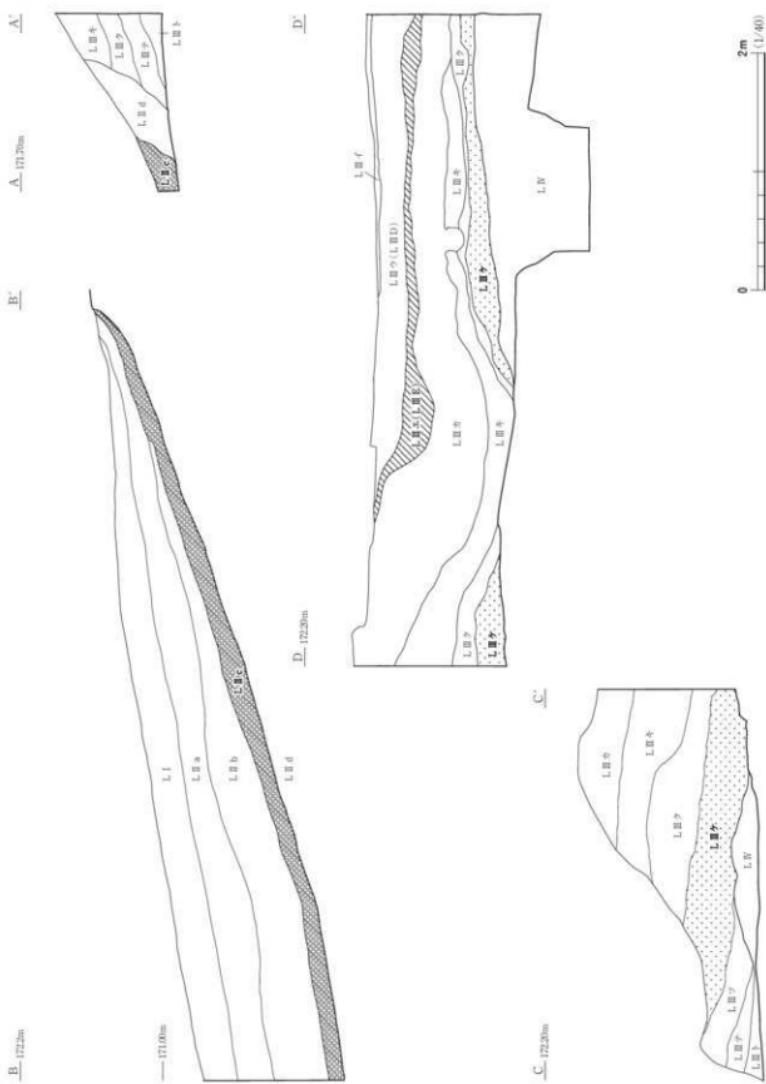


図56 II区8列以北基本土層（1）

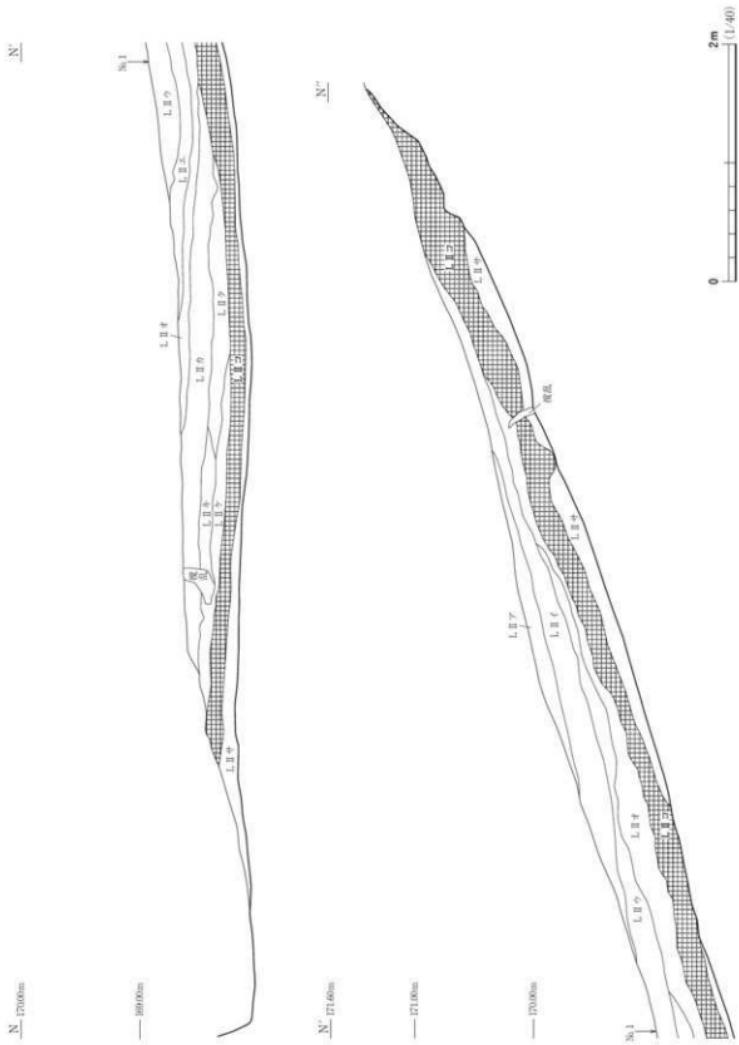


図57 II区8列以北基本土層（2）

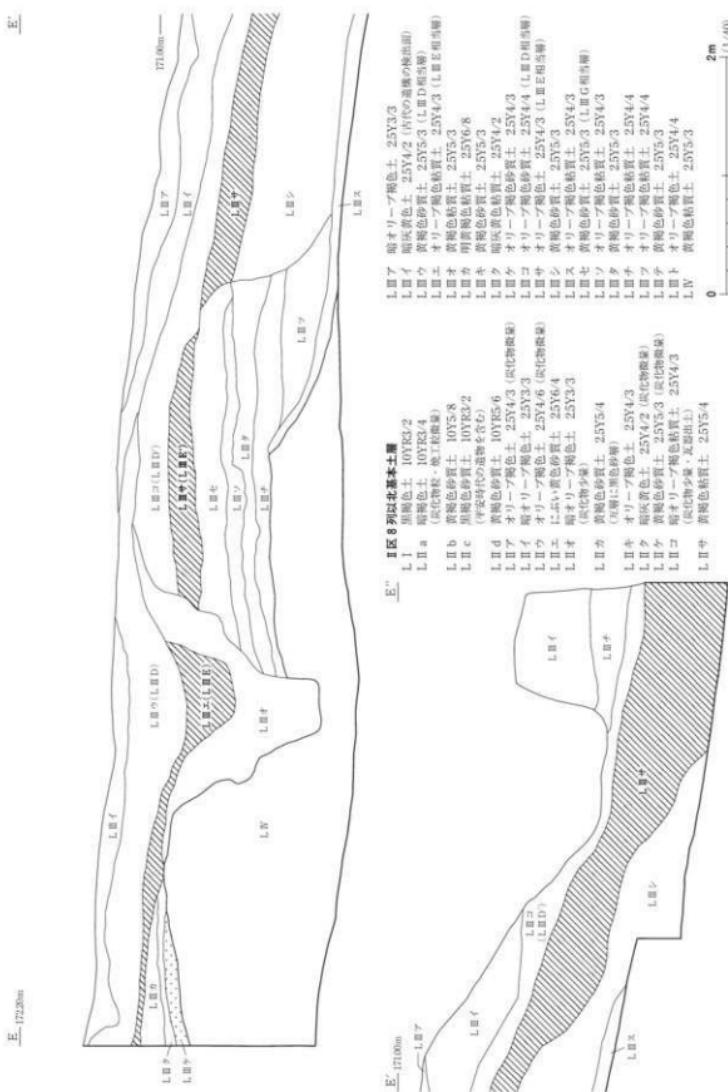


図58 II区8列以北基本土層（3）

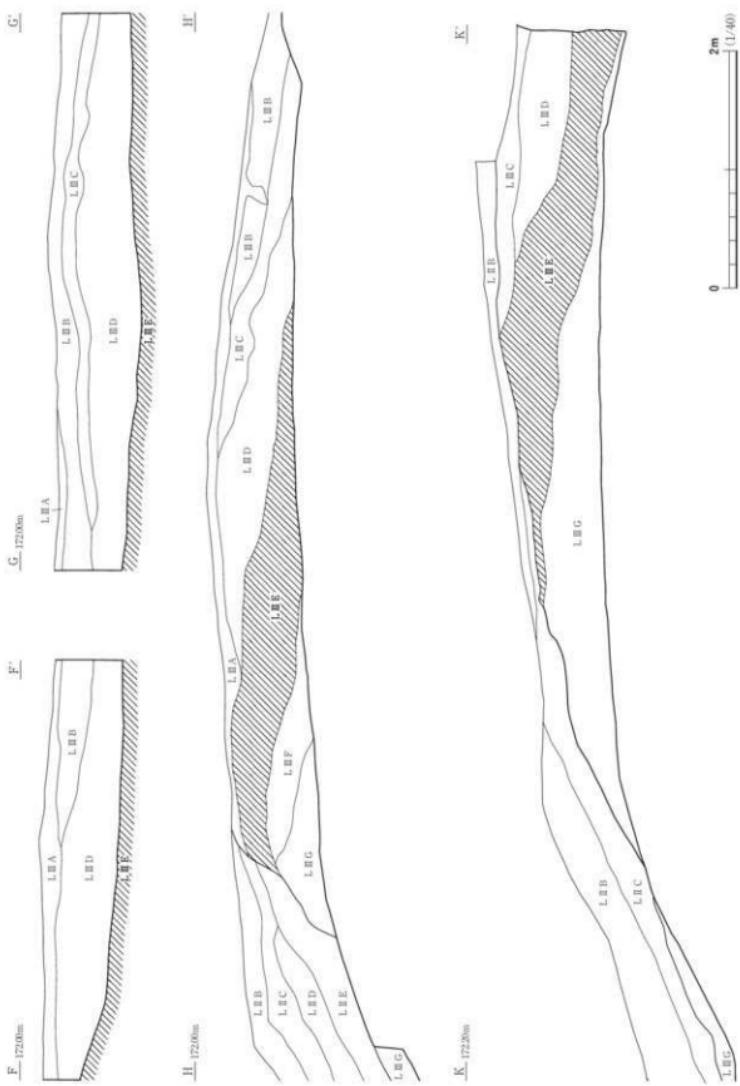


図59 II区8列以南基本土層（1）

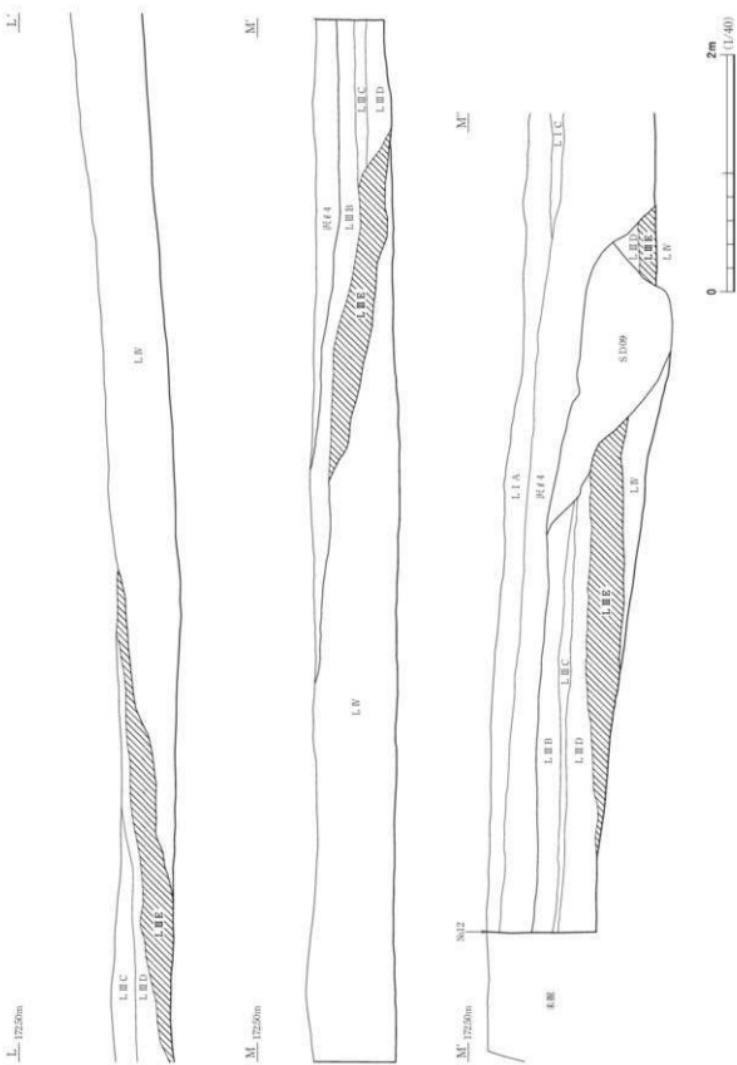


図60 II区8列以南基本土層（2）

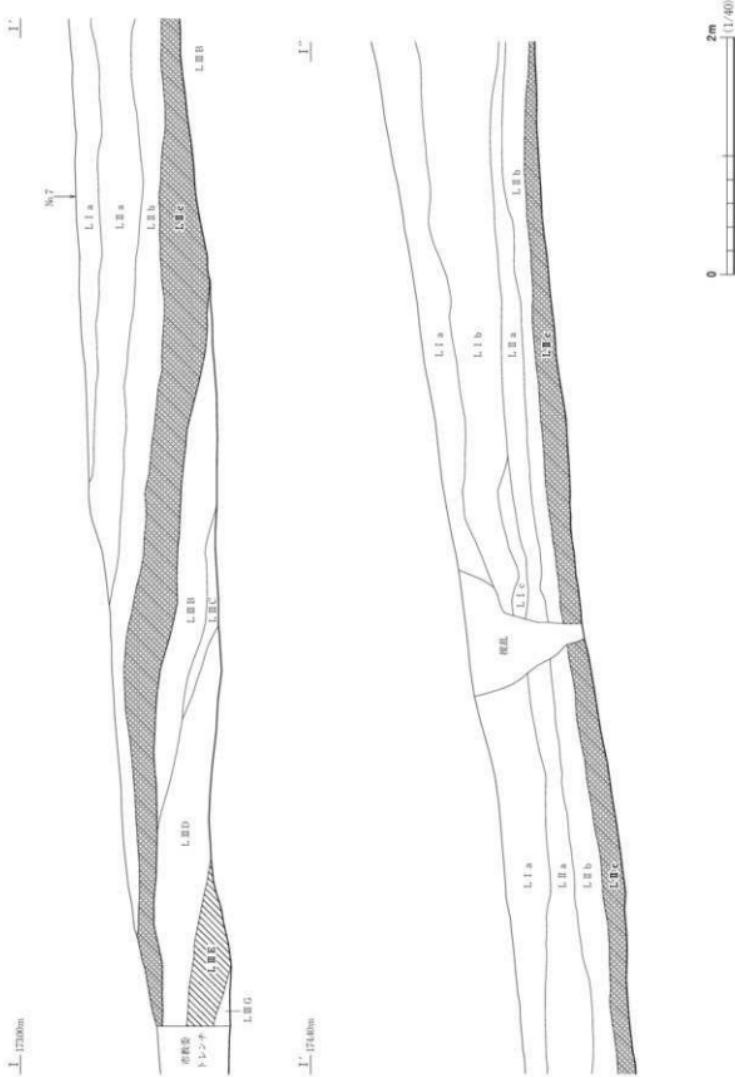


図61 II区 8列以南基本土層（3）

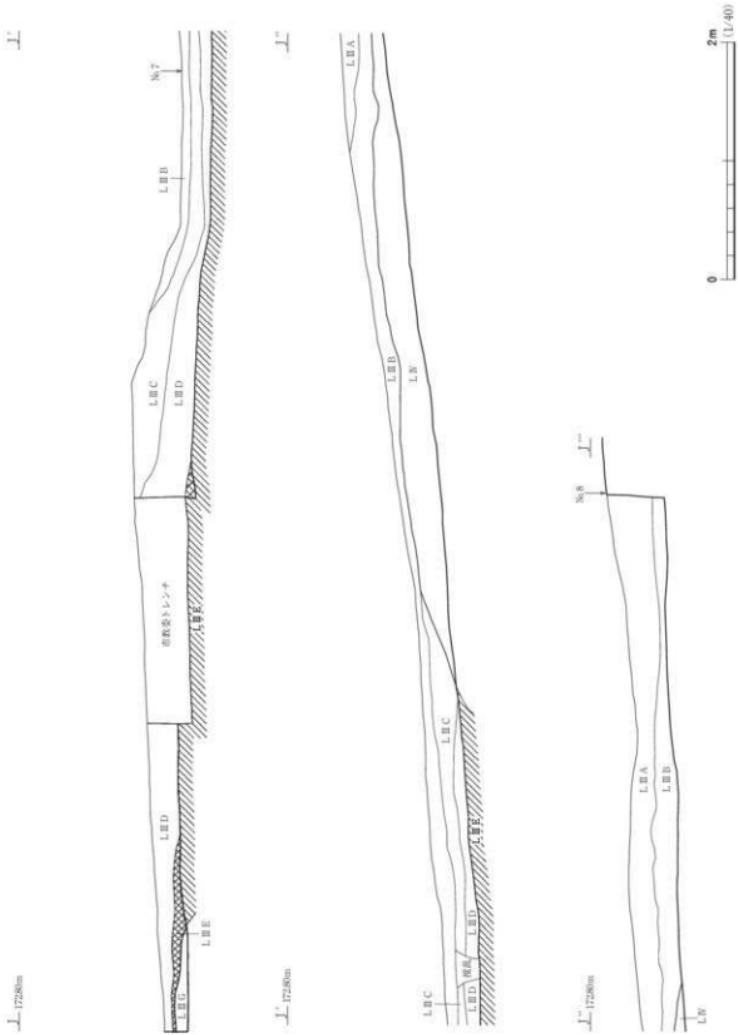


図62 II区8列以南基本土層（4）

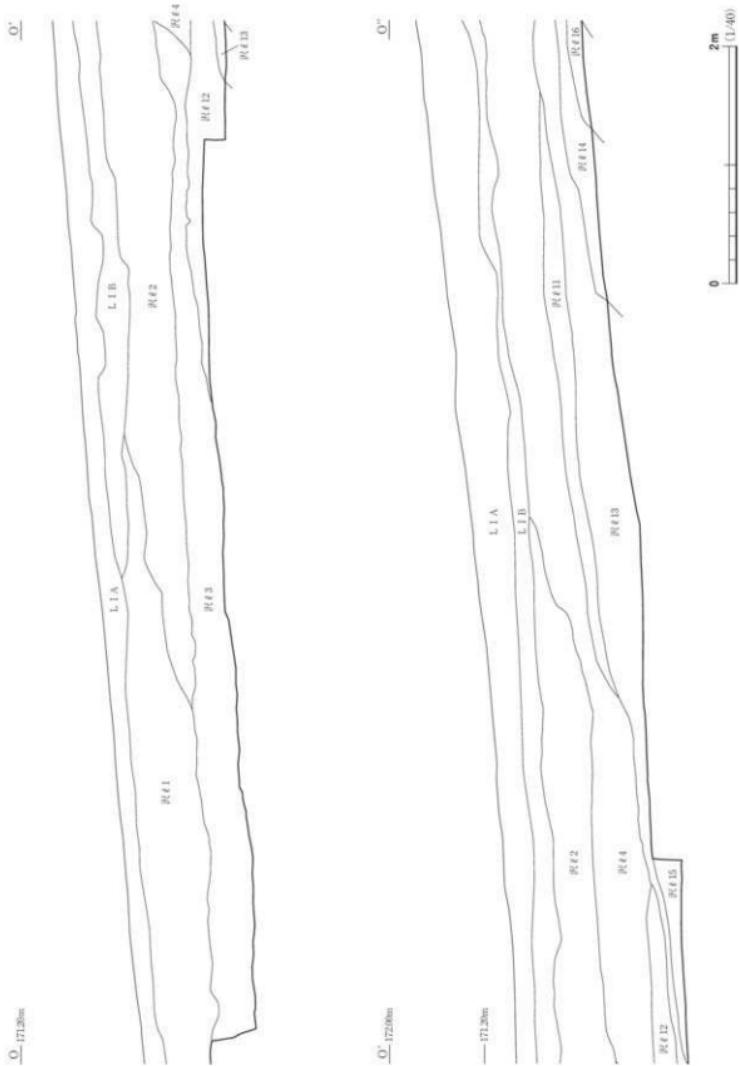


図63 II区8列以南基本土層（5）

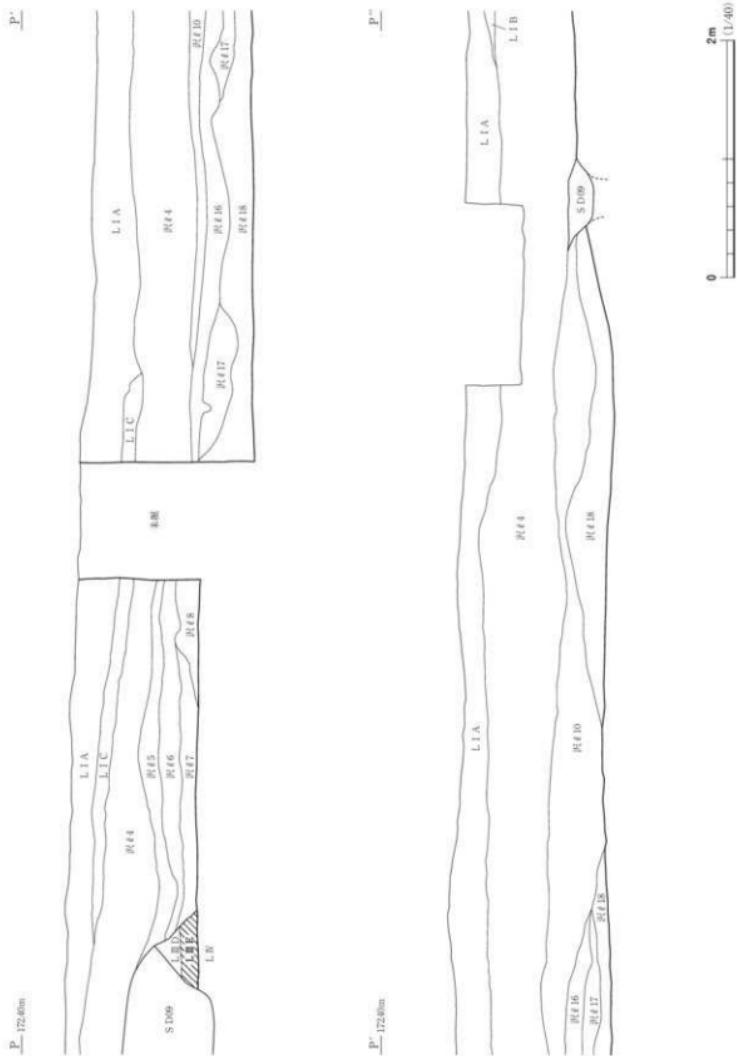


図64 II区8列以南基本土層（6）

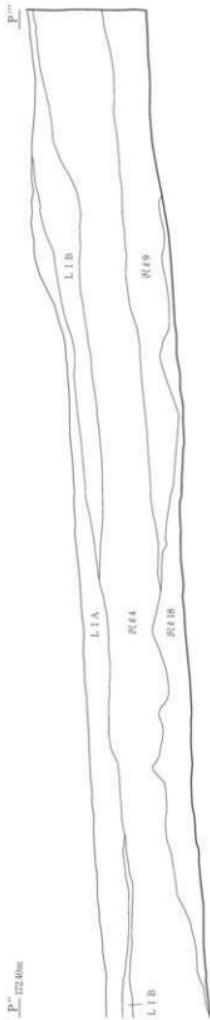


図65 II区8列以南基本土層（7）

【区8列以南基本土層

- L.I.A 黄褐色土。JOYR2/2 (柱状圖の崩落土塊少見)
 L.I.B 黄褐色粘土質頁土。JOYR6/8 (東斜面の崩落土塊少見)
 L.I.C 黄褐色土。JOYR2/2 (崩落少見)
 L.I.D 黄褐色質土。JOYR3/4
 L.I.E 黄褐色質土。JOYR2/3 (上部・底部)
 L.I.F 黄褐色砂粘土。JOYR3/3 (上部・底部あり)
 L.I.G 黄褐色砂質土。JOYR4/2
 L.I.H 黄褐色砂質土。JOYR4/4
 L.I.I 黄褐色砂質土。JOYR3/3
 L.I.J 黄褐色質土。JOYR4/3 (柱状圖の崩落少見)
 L.I.K 黄褐色質土。JOYR4/4 (クリップド地盤少見)
 L.I.L 黄褐色質土。JOYR4/4 (柱状圖の崩落少見)
 L.I.M 黄褐色質土。JOYR4/4 (柱状圖の崩落少見)
 L.I.N 黄褐色砂層。JOYES6 (場所によっては崩落質土。JOYR4/4 として記載なる)
 L.I.O 黄褐色砂層。JOYR6 (L.I.N と重複多見。場所に2つっては黄褐色砂層土。JOYR6/Mを示した例になる)
 L.I.P 黄褐色土。JOYR6/6
 L.I.Q 黄褐色砂層。JOYES4 (場所によっては黄褐色砂層土。JOYES6を示した例になる)
 L.I.R 黄褐色質土。JOYR4/4
 L.I.S 黄褐色質土。JOYR6/6 (場所によっては黄褐色質土。JOYES6を示した例になる)



- 【区14～17列 沼泥質土】
 泥質1 黏泥質質土。JOYRA/6 (4mm未だの砂礫質)
 泥質2 黄褐色沙土。
 泥質3 黄褐色沙土。JOYRA/4 (5mm未だの砂礫質)
 泥質4 黄褐色沙土。JOYR3/3 (上部砂片微細)
 泥質5 黄褐色質土。JOYR4/4
 泥質6 黄褐色質土。JOYR3/4
 泥質7 黄褐色質土。JOYR3/4
 泥質8 黄褐色土。JOYR4/6
 泥質9 1.25m黄褐色質土。JOYR4/3 (上部砂片・5mm未だの砂礫質)
 泥質10 1.25m黄褐色土。JOYR4/3 (上部砂片微細)
 泥質11 黄褐色土。JOYR3/4 (上部砂片微細)
 泥質12 黄褐色質土。JOYR4/4
 泥質13 1.25m黄褐色質土。JOYR4/3
 泥質14 黄褐色質土。JOYR4/4
 泥質15 黄褐色砂質土。JOYR2/3
 泥質16 黄褐色土。JOYR3/3 (上部砂片・5mm未だの砂礫質)
 泥質17 黄褐色土。JOYR4/4
 泥質18 黄褐色質土。JOYR4/6

第3節 壊穴住居跡

調査II区において、計6軒の平安時代の壊穴住居跡(S I 04・05・08・09・12・13)を検出した。各住居跡の遺存状態は全般的に悪く、構造的に不明な点も多い。また、当該期の住居跡はカマドの付設が一般的であるが、同燃焼部を明確に認めることができたのはS I 08のみである。

S I 12・13については、検出時の平面形・規模等から壊穴住居跡として調査を行ったものの、カマド等の痕跡を確認することができなかったことから壊穴状遺構にも含められるが、本節で取り扱うこととする。

4号住居跡 S I 04

遺構(図66、写真36・37)

調査II区中央のH・I 10グリッドにまたがって位置する住居跡である。遺構検出面はL III B上面である。標高約172.0mの平坦面上に構築されており、暗褐色砂質土の長方形広いプランとカマドの煙道部分を検出した。重複する遺構はない。西側にSK 10が、南西側にSK 26が近接する。また北側約6mのところにS I 09がある。

遺構内堆積土は、色調から6層に分けた。 ℓ 1は3mm大の炭化物粒を含む暗褐色砂質土、 ℓ 2～4はにぶい黄褐色砂質土で、 ℓ 6は褐色土である。一部搅乱が認められるもの、 ℓ 1・3・6がレンズ状堆積をなすと考えられることから各層は自然堆積層と判断した。

上端規模は、東西4.00m、南北3.40mを測り、平面形は東西が長い隅丸長方形を呈する。長軸方向はE 13° Sである。検出面から底面までの深さは、東壁の中央で42cmを測る。壁は約45°の角度で直線的に立ち上がる。床面の規模は、東西3.48m、南北2.90mを測る。床面は概ね水平で平坦である。貼床は認められず、L III D面を床面として利用している。

付属施設としては、東壁のやや南寄りにカマドがあった可能性があり、東壁に長さ87cmの煙道と思われる溝状の掘り込みが認められた。ただし、屋内の壁面や床面に熱を受けた痕跡は認められず、堆積土にも焼土やカマド構築材と考えられるような土は混入していなかった。その他、北壁中央の北側に直径40cm、深さ16cmのP 1を検出したが、S I 04との関連性は不明である。床面からは、柱穴・貯蔵穴などの付属施設は検出されなかった。

遺物(図67、写真52・53)

出土遺物は、土師器杯類841点、土師器甕類799点、鉢1点、器種不明の土師器片39点である。須恵器類その他は出土していない。このうち図示したのは67図の11点である。1～4は杯類である。1～3はいずれも高台を有し、内面にはヘラミガキ・黒色処理が、外面にはロクロナデが施される。4は高台をもたない資料で、外面には底部～体部に回転ヘラケズリが施されている。4の内面は熱を受けて黒色処理が消失した可能性がある。4の底部外面のほぼ中央には、細い釘状の工具

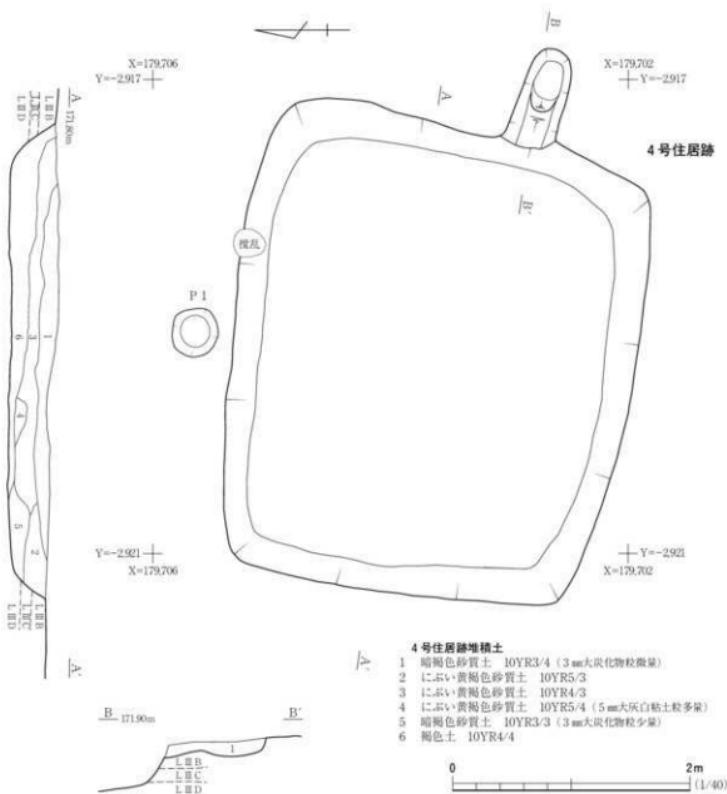


図66 4号住居跡

で「×」印が描かれている。

5～10は甕類をまとめた。5～9の口縁部～胴部上半にはロクロナデが施され、7・10の胴部下位外面にはタタキメが見られる。11は胴部側位に焼成前の穿孔が観察される資料であるが、その器種については不明である。

まとめ

本住居跡は東壁にカマドがあったと考えられる長方形基調の竪穴住居跡である。床面からは柱穴などは検出しており、上屋構造などは不明とせざるを得ない。また、カマドについても煙道のみの遺存で、本遺構内からカマド構築土や熱酸化面が認められず不明点が多い。

本住居跡は、出土遺物から9世紀末～10世紀前葉頃の所産と考えられる。 (宮田)

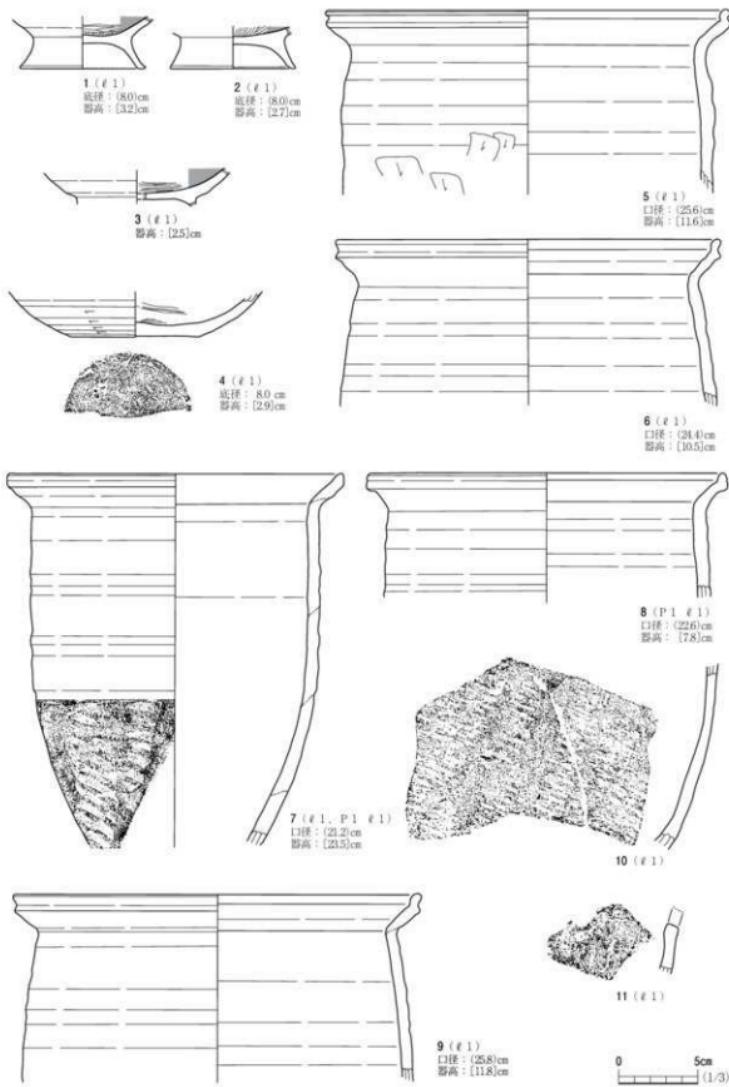


図67 4号住居跡出土遺物

5号住居跡 S I 05

遺構 (図68、写真38・39)

I・J 8グリッドに位置する住居跡である。検出面はL III B上面である。S I 05は西方向に下る比較的緩やかな斜面地に構築されており、その標高は約1724mである。遺存状態が非常に悪く、住居跡の西半部が消失していた。発見状況は、X=179.720を東西に通過する幅40cmのトレンチを設定したところ、同北側断面にS I 05の床面・堆積土を確認した。また、L III Bのにい黄褐色土面に対し長方形形状の落ち込みが認められた。なお、トレンチの南側断面では痕跡は確認できなかった。重複遺構はない。北西側約6mにS K25、約9mにS I 08がある。

遺構内堆積土は1層のみで、 ℓ 1内には焼土粒・炭化物粒を含むが、いずれも微量である。 ℓ 1の観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず、自然に埋没した可能性が高いと考えられる。平面形は、遺存部の形状から方形または長方形であったと推測される。壁は東壁が唯一遺存していた。東辺の方向はほぼ真北を指し、立地斜面の等高線とはほぼ平行している。東壁の遺存長は3.27mを測る。本遺構の南辺は、トレンチ断面の観察からX=179.720を超えない範囲にあったものと推測される。東壁から西方向に遺存する床面範囲は、最大で1.70mである。東壁の立ち上がり角度は約60°である。東壁の遺存高は、最大で約10cmである。床面は概ね水平に造られており、トレンチ断面等の観察から本遺構の西半部は自然の力で浸食されたものと推測した。



図68 5号住居跡

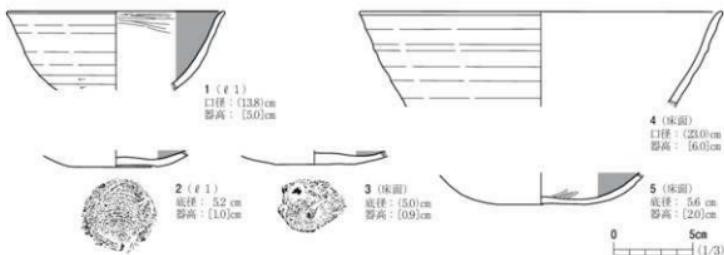


図69 5号住居跡出土遺物

S I 05の南東部で焼土面を確認した。焼土面の周囲には、西側を除いて硬く縮まる黄褐色土が巡っている。焼土面は皿状に窪んでおり、強く熱を受けて地表から約3cmの深さまで赤褐色に熱変していた。焼土面の性格については、炉・カマドなどが推測される。焼土面の規模は東西55cm×南北40cmである。本遺構から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺 物 (図69, 写真52・53)

遺構内から土師器の杯類19点・甕類5点が出土したが、そのほとんどが細片である。1～3・5はいずれも内面に黒色処理・ヘラミガキが施された杯である。1の体部下端には回転ヘラケズリによる調整が行われている。2・3はいずれも回転糸切痕が認められる。2の底部外面は無調整であるが、3はロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリ調整が施されている。

4は東壁中央の床面から出土した資料で、その口径は推定値で23.0cmを測る。4の遺存度は約20%であり、底部の形態は不明である。体部の器厚は4mm前後で、同図1・5とほぼ同じである。4の内面は磨耗しており、その調整は不明である。

ま と め

S I 05は遺存状態が悪く不明点が多いが、平面形状が方形または長方形の遺構であったと推測される。本遺構の南東部で焼土面を確認し、その位置からカマドの可能性も考えられる。柱穴は確認することができず、上屋の有無・構造等については不明である。遺構の時期については、平安時代前期末～中期初め頃と推測される。
 (香 川)

8号住居跡 S I 08

遺 構 (図70・71, 写真40・41)

I 7グリッドに位置する住居跡である。検出面はL IIIイ上面である。調査II区のはば中央を南北に細長く延びる平坦地形の最北部に立地しており、その標高は約171.8mである。S I 08の西側は、阿賀川に向かって比較的急な斜面になっている。S I 08の西部はトレンチによって破壊されていたが、同断面の観察から住居跡床面が確認された。重複する遺構はない。南側約2.5mの地点にSK 25がある。

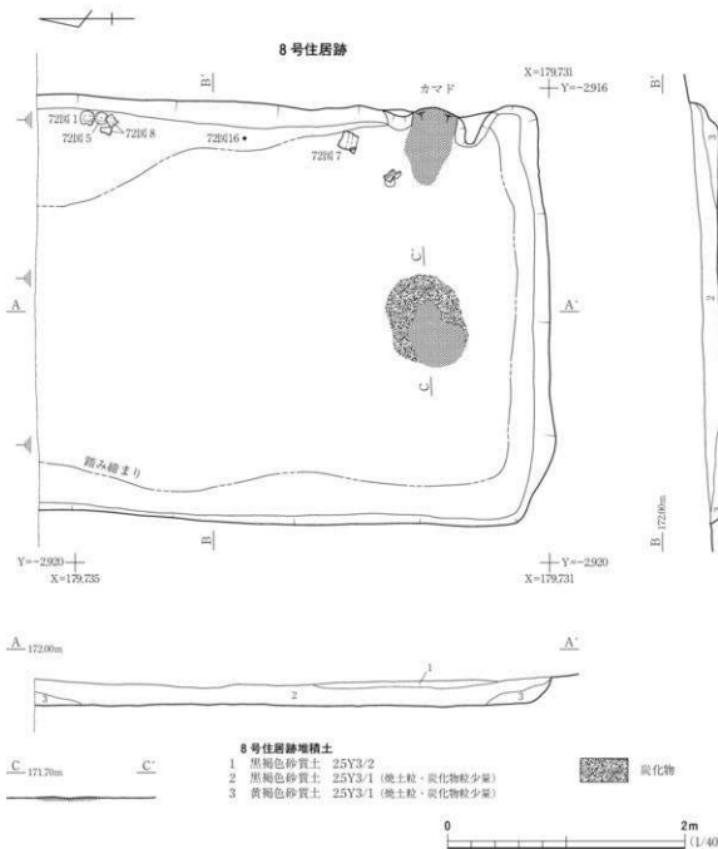


図70 8号住居跡（1）

遺構内堆積土は3層に分けた。 ℓ 1は住居跡の南部で確認したもので、炭化物・焼土等の含有物はほとんど認められなかった。 ℓ 2は、床面のほぼ全面を覆う黒褐色の砂質土である。 ℓ 2内には0.5~5.0cmの消し炭状炭化物と2mm前後の焼土粒を少量含み、下層ほど炭化物の形状が大きくなる。 ℓ 3は壁際で三角状に堆積する黄褐色砂質土である。 ℓ 1~3の状況から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず、自然に埋没した可能性が高いと考えられる。

住居跡平面形は、遺存部の形状から長方形であったと推測される。長軸方向はN 3° Eで、真北方に近い。規模は、長軸長が遺存値で4.35m、短軸長が3.53mである。壁の断面は曲線的である。

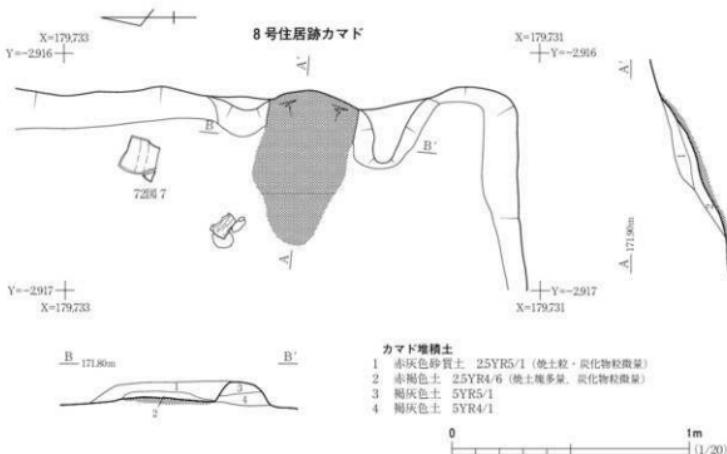


図71 8号住居跡（2）

壁の遺存高は、東壁中央部で23cm、西壁中央部で8cmを測る。床面はLIIIウ面を直接利用しており、壁際を除いて硬く踏み締まっていた。床面南部で白色粘土・黄色粘質土の散布が認められ、部分貼床の可能性も考えられた。しかし、散布範囲がカマドに近いことや明確な掘形等が確認できなかつたことから、部分貼床の痕跡ではないと判断した。

カマドは東壁南部に造られている。カマドの遺存状態は非常に悪く、火床面の範囲によって燃焼室のおよその位置が推測できた。カマドの右袖は色調によって2層(③・④)に分けたが、両層とも硬く締まる。右袖の遺存長は、東壁から西側へ27cmである。火床面は赤褐色の硬化面が舌状に広がっており、焚口側から奥壁へ約20°の角度で傾斜している。火床面の範囲は東西66cm×南北37cmで、上面から約3cmの深さまで熱変していた。奥壁の東側には煙道があったものと推測されるが、その痕跡を確認することはできなかった。

カマドの西側1.2mの地点で、東西56cm×南北55cm、深さ約3cmの赤褐色に硬化した焼土面を検出した。この焼土面上を通過する土層観察壁(A-A')から後世に掘り込まれたような痕跡は確認できなかつたため、S I 08に伴うものと判断した。同焼土面の周囲には炭化物が散らばっていたが、他に採取物はなくその性格は不明である。

S I 08から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかつた。

遺物 (図72、写真54・55)

遺構内から土師器の杯類432点・壺類140点、刀子1点が出土した。須恵器は出土していない。

1は東壁沿いの床面北東部から口縁部を上に向いた状態で出土した土師質の杯で、器面の色調は灰白～淡黄色である。1の器形は内湾気味の体部から口縁部がわずかに外反し、底部／口径の比率

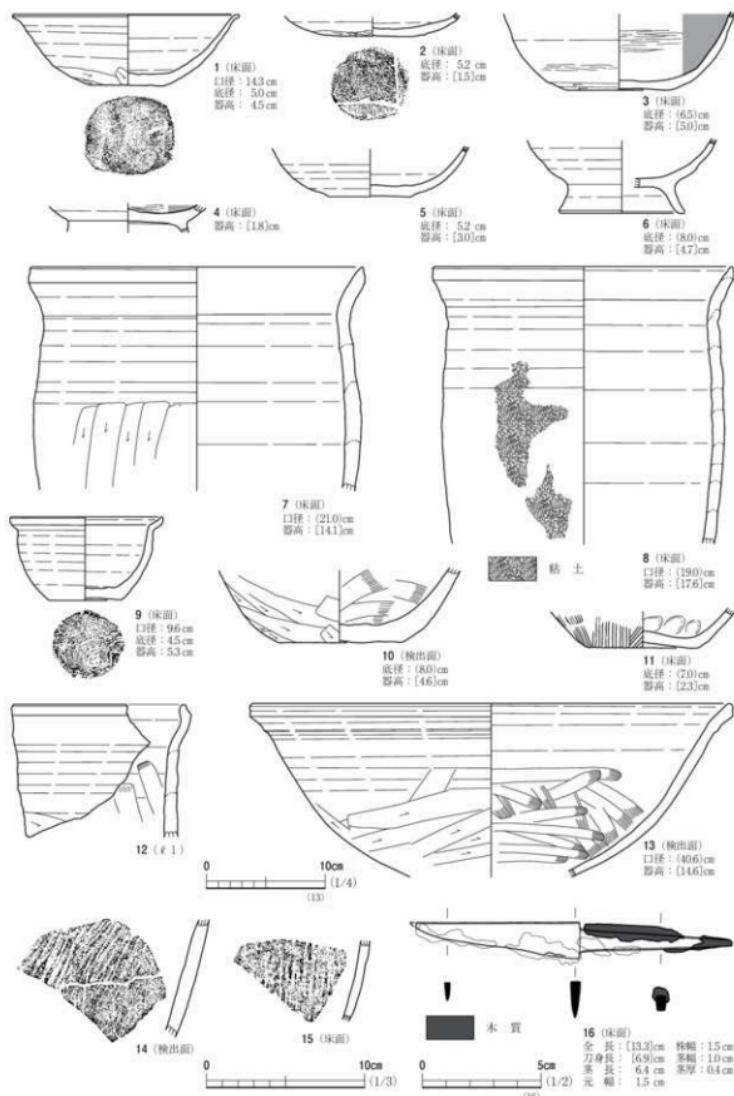


図72 8号住居跡出土遺物

は0.35と比較的数値が小さい。1の底部～体部下端は、ロクロからの回転糸切り後に手持ちヘラケズリ再調整が行われている。1の内面調整はロクロナデである。2も体部下端に手持ちヘラケズリ再調整が施されている。3は内湾の度合いが著しい椀状の器形で、体部外面に回転ヘラケズリ・ヘラミガキが施されている。3の内面は黒色処理・ヘラミガキ調整が施されている。4・6は床面から出土した高台付杯であるが、いずれも小片のため器形・調整の詳細は不明である。

7・8の長胴甕は、わずかに窄まる頸部から口縁部が直線的に開き、その口唇部は上方に突き上げられている。7の胴部下半にはヘラケズリ調整が、8の胴部下半には化粧土が認められた。9の小甕はカマドから北側へ約1m離れた床面から出土したもので、口縁部の反りは7・8や12の長胴甕と違って屈曲が著しい。10は、外面にヘラケズリ調整、内面にヘラナデ調整が施された甕の底部破片である。11も甕の底部破片で、外面にタタキメ、内面に指圧痕が認められる。

13は全体の約30%が遺存する鉢で、遺構の検出時、カマドの南東側約60cmの地点から出土したものである。底部の形状は不明であるが、遺存部から丸底の可能性が高い。13の胴部は内湾しながら立ち上がるが、口縁部では直線的に短く開く。外面にはケズリ調整、内面にナデ調整が施されている。14・15は比較的薄手の甕破片で、外面にはハケメが認められる。

16は東壁際の床面から出土した刀子である。切先部分がわずかに欠損しているが、遺存状態は比較的良好である。刃区と棟区の比はおよそ1:1である。茎には柄の痕跡と考えられる木質が付着している。

まとめ

S I 08は西壁が失われているが、調査II区では比較的住居跡の構造がわかる遺構である。平面形は長方形と推測され、カマドが南東角に付設されている。同様の住居跡には調査III区の6号住居跡がある。貼床は認められなかったが、床面は非常に硬く縮まっていた。カマドの西側から地床炉状の焼土面があり、生産的な行為に使用された可能性も考えられる。柱穴は確認することができず、上屋の有無・構造等については不明である。遺構の時期については、出土した遺物の年代から10世紀前後と考えられる。

(香川)

9号住居跡 S I 09

遺構(図73、写真42)

H・I 9グリッドに位置する住居跡である。検出面はL III C上面である。S I 09は窪地に堆積したL III Bを掘り込んで構築され、西側は堤状に盛り上がった地形となっている。S I 09付近の標高は約171.4mである。遺存状態は非常に悪く、東壁は検出段階ですでに失われていた。発見状況は、L III Cの褐色土面に対し不明瞭であったが、方形の落ち込みが認められた。重複遺構はない。南側約5.5mの地点にS I 04、北西側約4.0mの地点にS K 34がある。

遺構内堆積土は ℓ 1の単層とした。 ℓ 1内には微量の炭化物粒を含む。 ℓ 1の色調はL II cよりも明るいが、両層の土質は類似している。 ℓ 1の観察から人為的に埋め戻されたような痕跡は確認

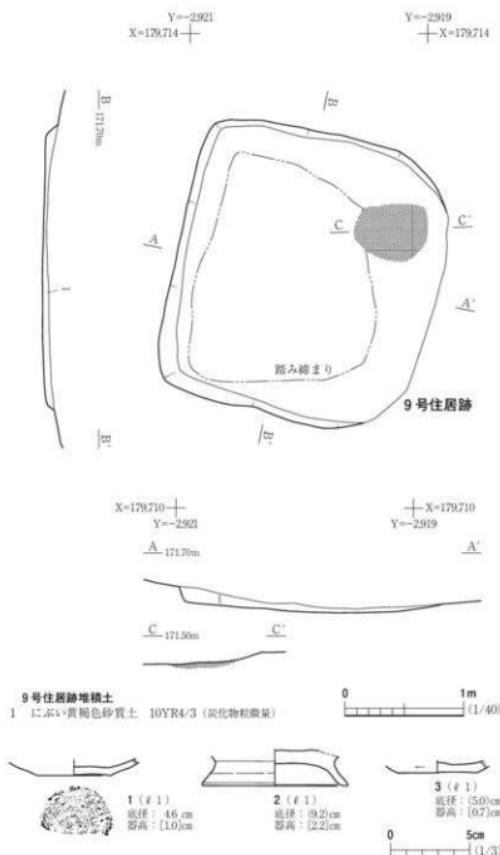


図73 9号住居跡、出土遺物

の熱変は床面から約4cmまでの深さまで及んでおり、非常に強い熱を受けたものと考えられる。S I 09から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺 物 (図73、写真53)

遺構内から土師器片が83点出土したが、大半が細片である。1~3はいずれも内面に黒色処理・ヘラミガキが施された杯類である。1・3の底部外面には回転糸切りによるロクロからの切り離し後、回転ヘラケズリ調整が施されている。2は、直線的に開く高台付杯である。

できず、自然に埋没した可能性が高いと考えられる。

住居跡平面形は、遺存する北西・南西角の形状がやや丸みを帯びており、方形に近い形状であったと推測される。北壁・南壁の中央を結んだ軸線の方向はN 10° Eである。規模は、東西方向が遺存長で2.20m、南北方向が2.44mである。壁の遺存状態は西壁が最も良好で、床面から約60°の角度で立ち上がる。検出面から床面までの深さは、西壁中央の最深部で14cmを測る。床面はL III C面を直接利用しており、その中央部がわずかに窪んでいる。床面の状況は炭化物の付着が認められ、また部分的に硬く踏み締まって

いた。

S I 09の北東部で赤褐色の焼土面を確認した。焼土面は概ね梢円形で、平面規模は東西60cm×南北48cmを測る。焼土面の東側の床面は緩やかに立ち上がっている。焼土面

まとめ

S I 09は遺存状態が悪く不明点が多いが、床面の北東部にカマドの可能性も考えられる焼土面が検出され、本遺構は壁穴住居跡として機能した可能性が考えられる。遺構の時期については、出土した遺物の年代から平安時代前期末～中期初め頃と考えられる。

(香川)

12号住居跡 S I 12

遺構(図74、写真44・45)

H13グリッドに位置する遺構である。検出面はL III C上面である。東側の段丘斜面から平坦部となる地点に構築されており、その標高は約171.5mである。重複遺構はない。南側約4mの地点に

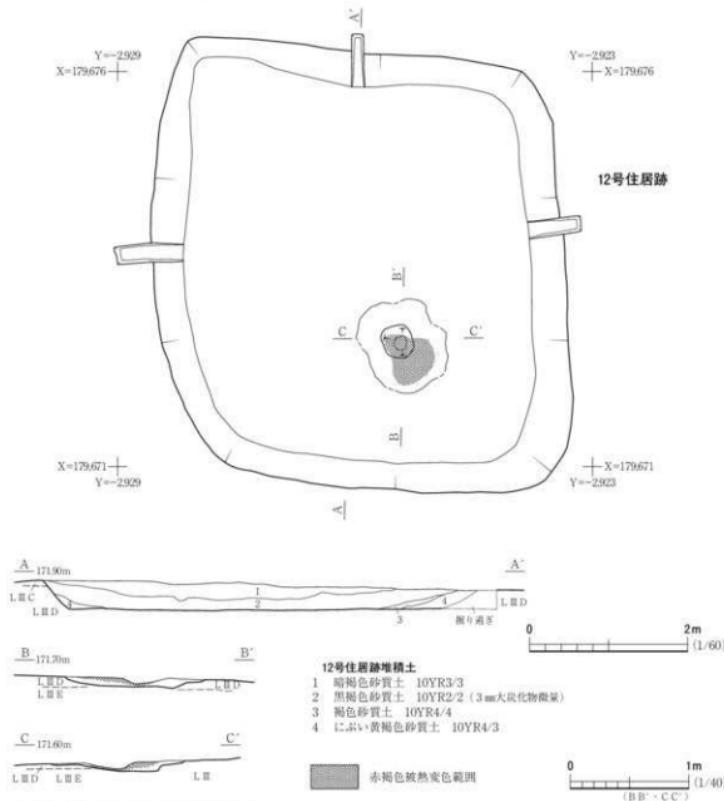


図74 12号住居跡（壁穴状遺構）

はS D09がある。遺構内堆積土は4層に分けた。 ℓ 3内には微量の炭化物を含む。 ℓ 4は壁際の床面上に堆積する黄褐色系の砂質土で、壁崩落土の可能性もある。 ℓ 1～4の各層はレンズ状に堆積しており、自然に埋没した可能性も考えられる。

平面形は隅丸方形に近い。南北の軸線方向はN 3°Wで、立地する斜面とはほぼ平行している。規模は、東西長5.20m、南北長5.50mである。壁は約45°の角度で立ち上がる。検出面からの深さは、最深部の北壁中央部で40cmを測る。床面はL III D面を直接利用しており、ほぼ水平に造られている。

床面の中心から南東側約1.5mの地点で焼土面を確認した。焼土面の下部には楕円形に広がる起伏があり、起伏の埋没後に焼土面が形成されたようである。起伏内の堆積土は住居跡内堆積土の ℓ 2に類似していた。焼土面の形状は不定形で、東西50cm×南北55cmを測る。

なお、S I 12から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺 物 (図75)

遺構内から土師器の杯類6点・甕類31点、刀子1点が出土した。1はロクロ土師器の小片で、杯の口縁部破片であるが、磨耗が著しく内面の調整は不明である。2は床面から出土した刀子であるが、遺存状態が悪く切先と茎の大部分を失っている。

ま と め

S I 12は、調査II区において堅穴状の掘形をもつ遺構のなかでは最も規模が大きい遺構である。床面の中心からやや南東部の地点で焼土面を確認したが、堆積土の状況等から埋没過程で火が焚かれた可能性がある。S I 12からカマドと考えられるような痕跡は確認できなかった。また上屋を推測させるような柱穴等も認められなかった。遺構の掘形は堅穴住居跡に類似するが、出土遺物等も多く、同遺構の性格については不明である。遺構の時期については、出土した遺物の年代から平安時代前期末～中期初め頃と考えられる。

(香 川)

13号住居跡 S I 13

遺 構 (図76、写真43)

H 11グリッドに位置する遺構である。検出面はL III C上面である。南北に延びる狭長な堤状の頂部付近を掘り込んで構築しており、その標高は約171.5mである。重複遺構はない。北東側約7.5mの地点にはS I 04がある。また、南西側約6.5mの地点にはS K 32がある。

遺構内堆積土は2層に分けた。 ℓ 1はレンズ状に堆積している。 ℓ 2は西部付近の床面を覆うように堆積している。 ℓ 1の状況から遺構の重複等が考えられたが、堆積土の観察から他遺構や人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できなかった。

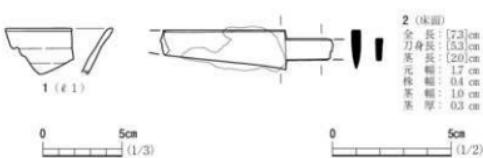


図75 12号住居跡出土遺物



図76 13号住居跡（壁穴状遺構）

平面形は隅丸長方形である。長軸線の方向はN 2° Eで、真北に近い。平面形の規模は、東西350cm、南北438cmである。壁の形状は、東壁は約45°の角度で立ち上がるが、西壁は皿状となっている。壁の遺存高は、北壁中央部で30cmを測る。

床面は、貼床等の痕跡は確認できず、L III E面を直接利用している。床面はほぼ平坦に造られているが、東から西方向へわずかに傾斜している。

S I 13から柱穴・貯蔵穴と考えられるような痕跡は確認できなかった。

遺 物 (図77・78、写真56)

遺構内から土師器の杯類115点・壺類224点、須恵器片10点が出土した。遺物の大半が住居跡東半部のℓ 1上位で出土している。図77-1～8は土師器杯で、いずれの底部も回転糸切痕が認められる。1は比較的大型の杯で、底部外周～体部下端には回転ヘラケズリ調整が施されている。体部下端の回転ヘラケズリ調整は2・4・6・8でも認められる。4の器形はやや重んでいる。3・5・7の内面の調整痕は、摩耗のため観察することができなかった。

図77-9～12は土師器の長胴壺である。9は比較的小型の底部破片で、底部外面に回転糸切痕

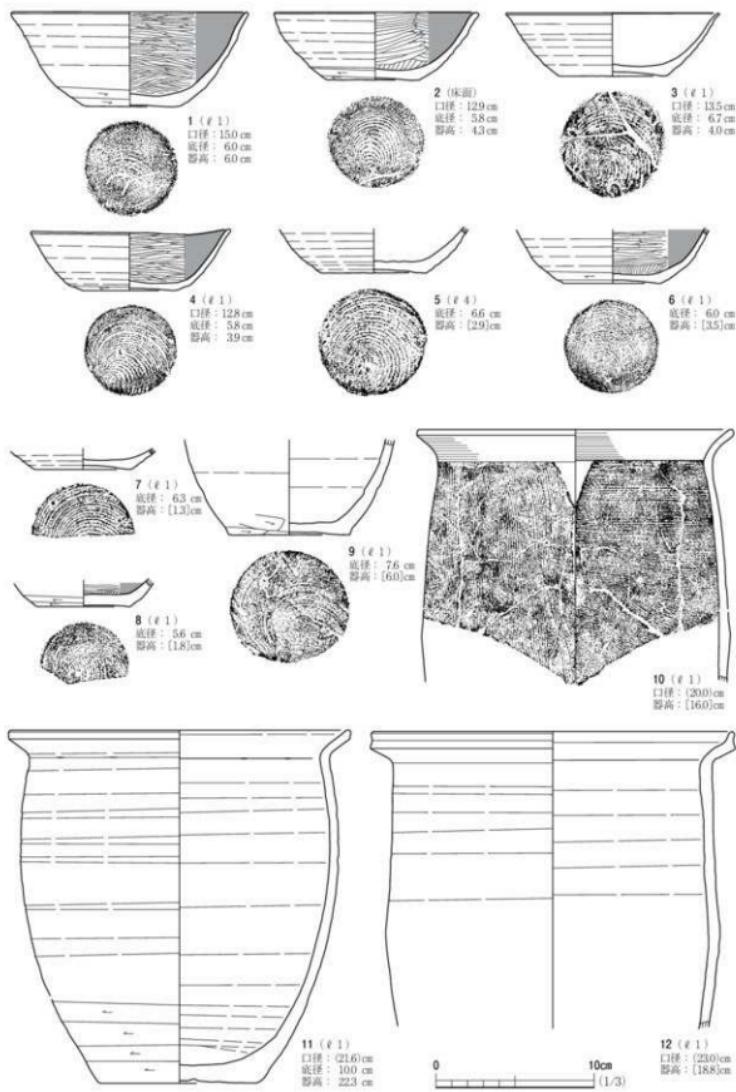


図77 13号住居跡出土遺物（1）

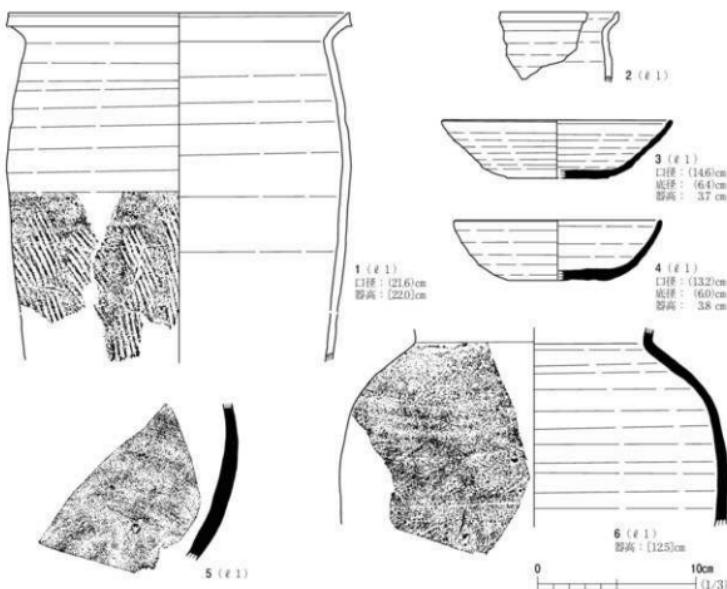


図78 13号住居跡出土遺物（2）

が観察される。10の器厚は比較的薄く、胴部外面は縦位のハケメ、内面には横位のハケメ調整が施されている。11は全体の45%が遺存するもので、口縁部は頭部から直線的に開いている。12は、口唇部が上方に突き出している。図78-1・2も土師器の長胴壺の破片資料である。1の胴部下半は、タタキによる調整後にケズリ調整が施されている。2は小型の壺で、その口唇部は上方に摘み上げられている。

図78-3～6は須恵器である。3・4は杯で、3の体部は直線的に開くが、4の体部は内湾気味に立ち上がっている。3・4の底部外面には、いずれも回転ヘラ切痕が認められる。5・6は壺の破片資料である。6の胴部上半は比較的丸みが強い器形である。

まとめ

本遺構は、検出段階で遺物が比較的多く出土し、壁穴住居跡の可能性を考えて調査を行った遺構である。しかし、本遺構から住居跡の根拠となるようなカマドや柱穴等の施設を確認することができなかった。また、堆積土中の遺物量に対しても床面出土の遺物は非常に少なく、本遺構については不明な点が多い。遺構の時期については、出土した遺物の年代から平安時代前期後半と考えられる。

(香川)

第4節 須恵器窯跡

調査II区の北東端部において、1～3号須恵器窯跡(S R01～03)を検出した。S R01～03が立地する丘陵斜面は地盤が脆弱で、雨水等による浸食が繰り返された地形であると考えられる。また、S R01～03の周辺は後世の擾乱も受けしており、各窯跡の遺存状態は非常に悪い。

検出当初は、S R01・02を分離せず同一遺構として取り扱った。しかし、SD04の重複や遺存状

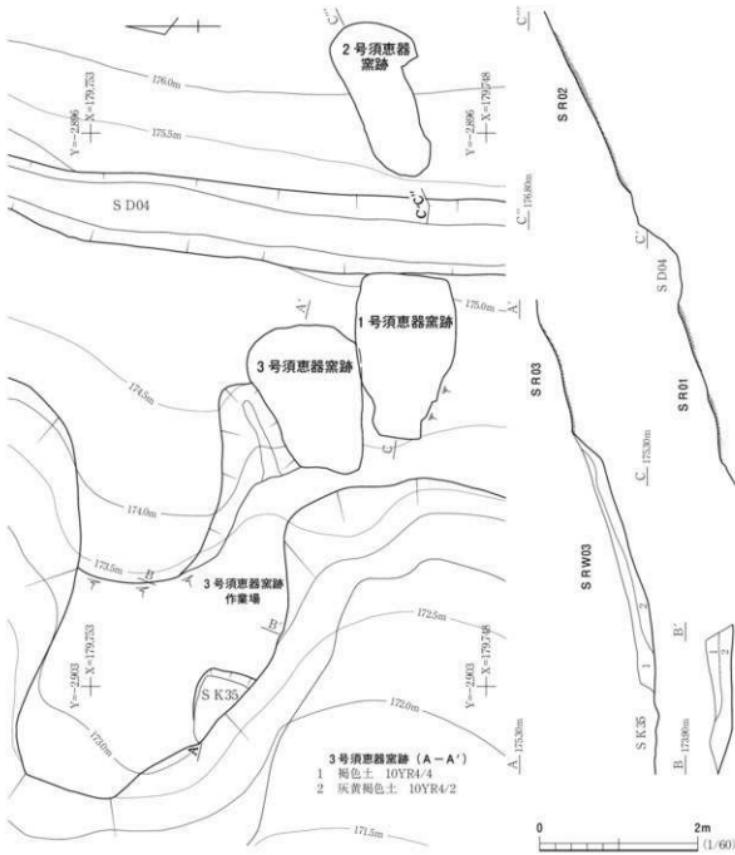


図79 1～3号須恵器窯跡

態の悪さから一連性を把握することができなかつたため、西側を S R01、東側を S R02とした。

S R03は、S R01とほぼ同規模の燃焼面が広がる遺構で、その重複状況からS R03の方が古いと判断した。S R03の北西側に灰原状の堆積範囲を確認したが、その下面是整地されたような平坦面になっていたためS RW03とした。

1号須恵器窯跡 S R01

遺構 (図79・80、写真46・48)

K 6 グリッドに位置する窯跡である。検出面はL IV上面である。立地は西向き丘陵斜面の裾部で、その標高は175.0m前後である。しかし、周辺は浸食作用や重機等の擾乱によって旧地形を失っており、立地斜面は切り通し状に削平されている。検出状況は、搅乱土を除去したところ、羽子板状の落ち込みと須恵器片の散布が認められた。S R03と重複するが、S R01の方が新しい。またSD 04とも重複するが、本遺構の方が古い。

遺構内の堆積土をℓ 1～6とした。各層はいずれも炭化物粒を少量含む。ℓ 2～6は焼土粒・塊を含み、特に西部に堆積するℓ 2・6は焼土塊を多量に含んでいた。ℓ 1～6から窯壁と考えられるような塊は確認できなかった。ℓ 7はS R03の廃業後に整地されたと考えられる層で、その上層は赤褐色に変色しており、S R01の操業時の熱を受けたものと推測される。ℓ 7はS R03のℓ 1と同一層である。ℓ 1～6から、人為的に埋めたような痕跡を確認することはできなかつた。また、各堆積土の観察から、S R01に伴う下部構造は確認できなかつた。ℓ 8～11は、遺構の西側の比較的急な斜面に堆積していた層である。ℓ 8の上は重機等による搅乱を受けていた。ℓ 8・10は黄褐色系の砂質土で、東側の丘陵から流れ込んできたものと推測される。ℓ 9・11は、焼土粒・炭化物粒を微量含む層である。ℓ 9から遺物は出土しなかつたが、ℓ 11内から須恵器が出土している。ℓ 11は灰原層の可能性もあるが、地形の状況からS R01の浸食後にℓ 8～11が堆積した可能性もある。

遺存形は、西側が窄まった羽子板状である。長軸方向の遺存長は206mである。最大幅は西端部から約1.7mの地点にあり、1.24mを測る。長軸方向はE 3° Sである。西端部から東側へ約50cmまでの底面幅は55cm前後とほぼ一定で、焚口に相当すると考えられる。焚口の壁は底面から直線的に立ち上がり、その遺存高は最大で20cmを測る。焚口の底面・壁面は、明赤褐色(5YR5/6)に熱変している。焚口付近はわずかに傾斜しており、その角度は約5°である。

焚口を過ぎると底面の色調が変わり、最大幅を測る1.7m付近までにぶい赤褐色(2.5YR4/4)に熱変していた。また底面には炭化物が少量付着しており、同部は燃焼部に相当する可能性がある。燃焼部の底断面は皿状である。燃焼部の西半部はℓ 7を、東半部は直接地山を利用している。燃焼部は直線的に立ち上がり、その角度は約20°である。

遺構の東端部では底面の色が暗赤褐色(2.5YR3/2)に変色し、非常に硬く焼き締まっていた。同部については焼成部の可能性もあるが、SD 04の重複から焼成部の詳細については不明である。また、

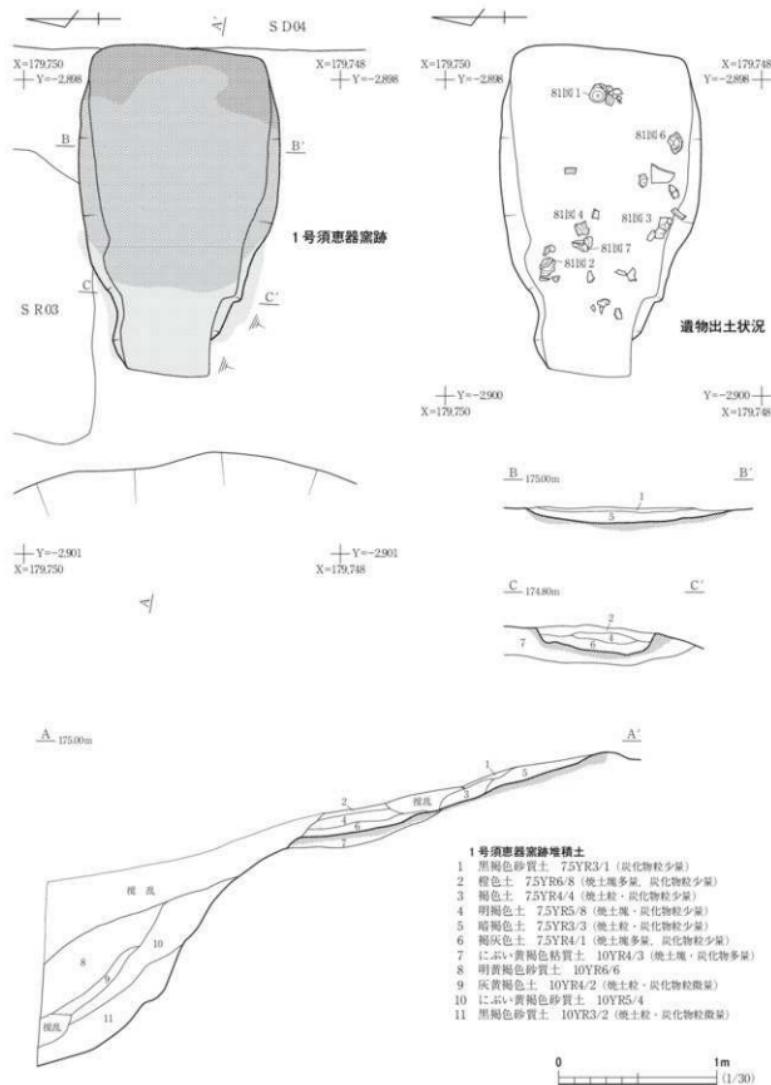


図80 1号須恵器窯跡

焚口から西側についても、攪乱等によって削平を受けていたため、その状況は不明である。

遺物 (図81～83、写真57・58)

遺構内から須恵器杯類670点・甕類36点、土師器片13点が出土した。出土量は、杯が全体の約93%を占める。杯の器形は、体部の断面形が曲線的なもの(図81-2など)と直線的なもの(図81-3など)に大きく分けられる。口縁部の形状は体部の形に連続するものが多く、図82-7・8のように口縁部で短く外反する器形は比較的の少數である。遺存率が50%以上の杯の計測値は、口径126～143cm(平均値13.4cm)・底径5.8～7.8cm(平均値6.8cm)・器高2.7～3.8cm(平均値3.3cm)である。底径/口径比は、最大が図81-1の0.57、最小が図82-10の0.41である。

杯のロクロからの切り離しは、回転糸切り・回転ヘラ切り技法の2種類が認められる。回転糸切りのもの(図81-11・図82-1)は非常に少なく、切り離し痕が確認できた資料の大半が回転ヘラ切りのものである。図82-1の底部は無調整で、回転糸切り技法に特徴的な底部の反り上がりが顕著である。回転ヘラ切り資料には、図81-2・6などのように底部と体部の境が不明瞭なものもある。回転ヘラ切り痕には胸状の突起や螺旋状痕、また図81-8・図82-5のように低い平高台状となった底部がある。しかし、図81-2・20・21など比較的丁寧なナデ調整等によって切り離し痕のほとんどが消されたような資料もある。

掲載した50点のうち、およそ還元色を呈するものは46%(図81-15など)で、他は焼き締まった赤黒～褐色が24%(図81-13など)、土師器のような浅黄橙～淡黄色が30%(図81-14など)である。還元色は灰～灰白色で、黄みを帯びた色調のものが多い。

出土杯の中には、器面に所謂火だすき痕が認められた資料がある。図82-7は、赤灰色の器面と同色だが艶のある紐状の筋が口縁～底部外面を巡る。同図23は内外面で火だすき痕が認められ、灰白色の器面に黒色の筋が通る。また、図81-5・10・23、図82-2・10・11・13・16の口縁部は帶状に体部の色調と異なっており、所謂重焼きの痕跡が確認できる。

図81-1～4・6・7は燃焼部の底面から出土した資料であるが、2次的に熱を受けたらしくいずれも器面の劣化が著しい。特に7の外面には爆ぜたような小穴や剥落が認められる。また、燃焼部底面に接した側に蒸発したような白色の付着物が認められる。1は燃焼部の東部中央で底部外面を上に向かって出た状態で出土したもので、器面の色調は、内面が灰色、外面が部分的にぶい橙色になっている。2は焚口に近い地点で出土したもので、器面の色調は内外面ともやや黄みを帯びた灰色である。2の底部外面にはミガキ調整状の筋が認められるが、ナデ等の調整後、比較的乾燥してから再度ナデ調整を施した痕跡の可能性がある。3の底部外面は調整が著しく、ロクロからの切り離し技法は不明である。3の体部は概ね灰色であるが、底部は内外面とも橙色である。

図81-12は口縁の一部が大きく歪んだ資料で、2次的に強い熱を受けたらしく器面の劣化が著しい。12の外面は体部が還元色、底部が酸化色を呈し、底部に火だすき痕と思われる灰色の筋が観察される。内面は体部が酸化色、底部が還元色を呈し、外面の色調と反転している。図82-4も歪みによって器形が大きく崩れた資料である。図81-19は焼成前に口縁部の一部が破損したもので、

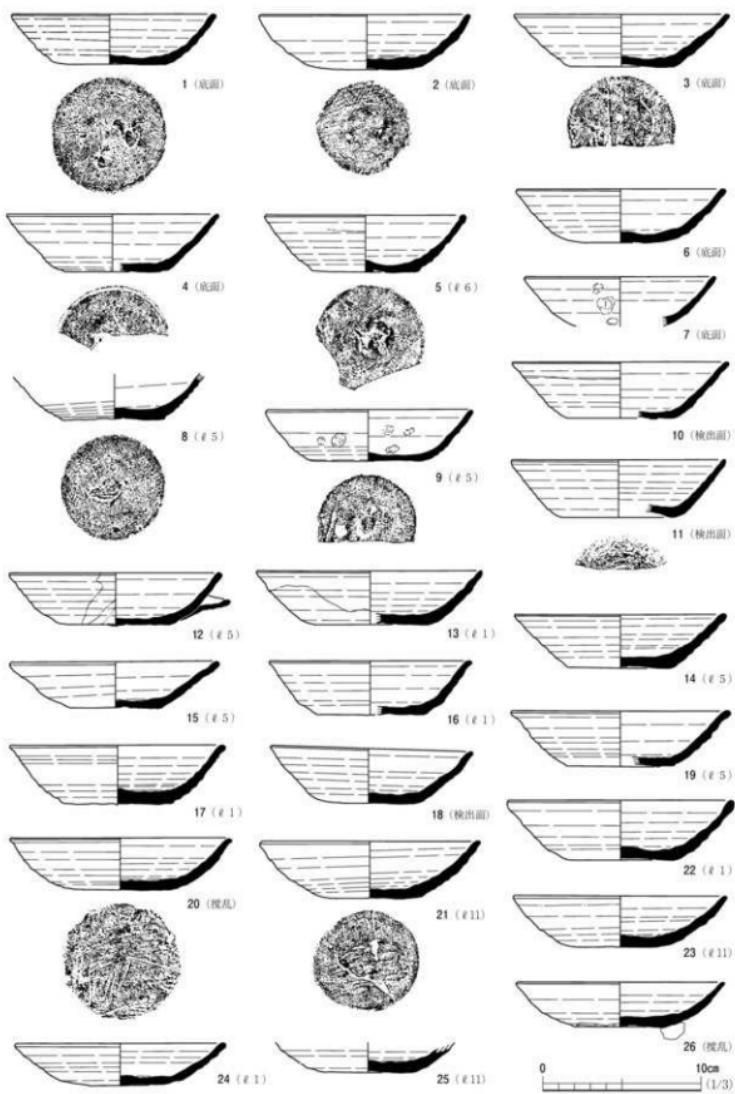


図81 1号須恵器窯跡出土遺物（1）

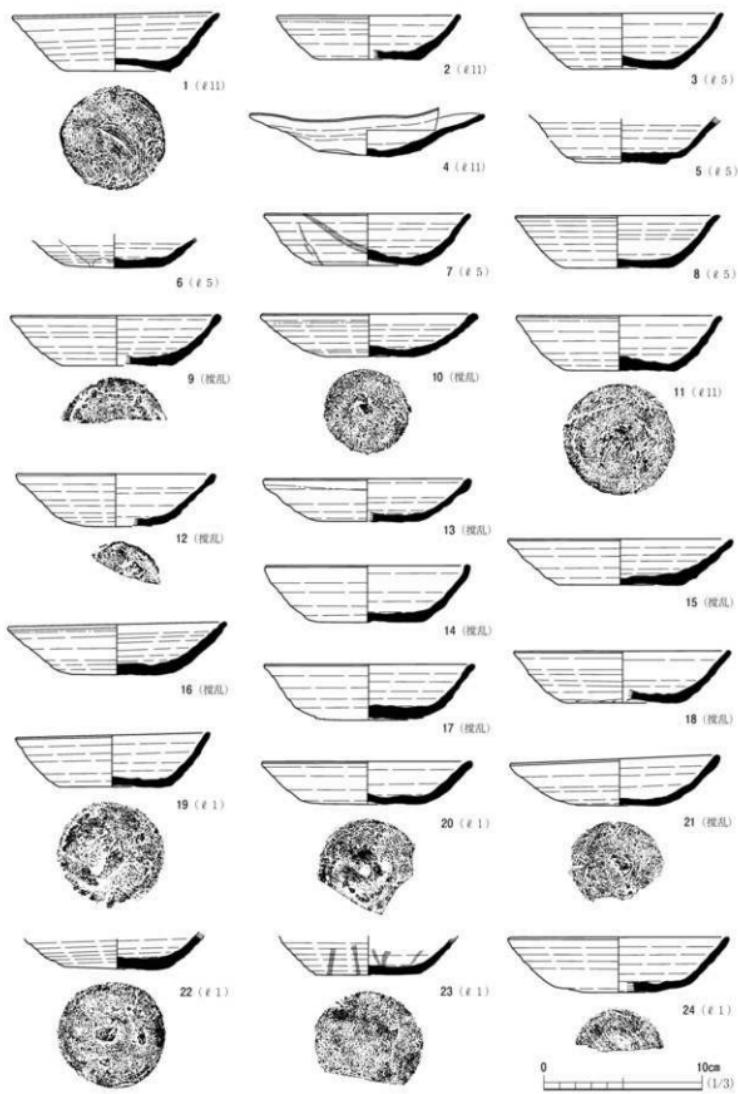


図82 1号須恵器窯跡出土遺物（2）

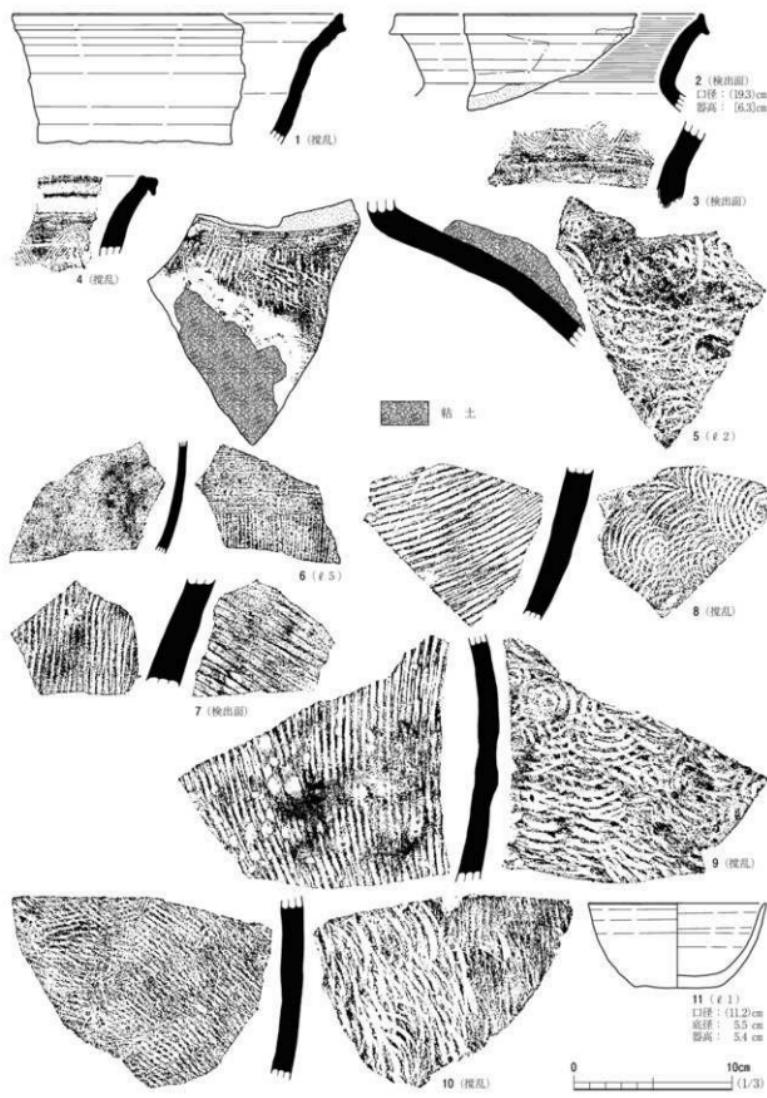


図83 1号須恵器窯跡出土遺物（3）

体部外面には砂が付着している。図81-26の体部下端には砂塊が付着している。

図83-1~10は須恵器壺の資料であるが、ℓ 7・10上の搅乱土や検出面から出土したものが多い。1は橙色の酸化色を呈するが、形状から須恵器の口縁部と推測した。2は比較的小型の資料で、外面には自然釉の付着、内面にはカキメが認められる。3・4は横描波状文が施されている。5は胴部上位の破片で、外面にスサ入りの粘土塊が付着している。2次的に強く熱を受けたらしく、器面の一部が劣化している。6は底面に近いℓ 5から出土した胴部破片で、内面に横・縦のナデ調整が施されている。7~10は内外面にタタキ・当て具痕が認められる胴部破片である。

図83-11はℓ 1から出土した土師器の小型碗である。底部の切り離しは回転糸切りによる。摩

表8 1号須恵器窯跡出土遺物観察表

()：推定値。〔 〕：残存値。単位：cm

回	No.	場所	層位	形態	口径	外径	高さ	分類	色調(外面)	底面切削	調整	備考
81	1	S801	底面	杯	(12.9)	7.4	3.2	B1	赤褐色～灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	2	S801	底面	杯	(12.4)	7.0	3.5	B2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ・ケズリ	
83	3	S801	底面	杯	(12.6)	6.7	3.3	C1	体部灰色・底部橙色	不明	ロクロナダ、底部ナデ	
81	4	S801	底面	杯	(12.4)	6.0	3.6	D1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	5	S801	£ 6	杯	(12.7)	6.8	3.6	A1	灰色～黄褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	重焼直
81	6	S801	底面	杯	(12.2)	7.4	3.4	B2	灰褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	7	S801	底面	杯	(12.0)	-	[21]	B2	灰色	不明	ロクロナダ	
81	8	S801	£ 5	杯	-	6.6	[27]	-	黄褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	2次の受熱直
81	9	S801	£ 5	杯	(12.1)	6.8	3.2	B1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	2次の受熱直
81	10	S801	檢出面	杯	(12.6)	7.0	3.6	B1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ	重焼直
81	11	S801	檢出面	杯	(12.4)	7.0	3.7	A1	黑褐色～灰色	回転糸切	ロクロナダ、底部無調整	
81	12	S801	£ 5	杯	(12.3)	6.8	3.3	B2	灰～浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナダ	並み調査、外表面火搏
81	13	S801	£ 1	杯	(12.4)	7.4	3.4	B1	暗赤褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	自然釉
81	14	S801	£ 5	杯	(12.4)	6.6	3.4	C1	黄褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	15	S801	£ 5	杯	12.2	6.0	3.0	C1	灰～暗赤褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	16	S801	£ 1	杯	(12.8)	7.0	3.4	A2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	17	S801	£ 1	杯	(12.6)	6.8	3.7	A2	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナダ・底部ナデ・ケズリ	
81	18	S801	檢出面	杯	(12.8)	7.0	3.6	A1	灰褐色～黄色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	19	S801	£ 5	杯	(12.6)	6.8	3.5	C1	灰～浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	20	S801	檢出	杯	(14.0)	7.4	3.3	H2	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	2次の受熱直
81	21	S801	£ 11	杯	14.0	6.6	3.6	C2	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
81	22	S801	£ 1	杯	(12.3)	6.6	3.8	D1	灰褐色～黄褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ・底部ナデ・ケズリ	
81	23	S801	£ 11	杯	12.5	6.3	3.3	C2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	重焼直
81	24	S801	£ 1	杯	(12.3)	6.0	2.7	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ	
81	25	S801	£ 11	杯	-	6.0	[1.9]	2	暗赤褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	自然釉
81	26	S801	檢出	杯	(12.2)	5.8	2.9	C2	褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ・底部ナデ・ケズリ	底部、砂塊付着
82	1	S801	£ 11	杯	11.6	6.6	3.7	D1	灰～暗赤褐色	回転糸切	ロクロナダ、底部無調整	2次の受熱直
82	2	S801	£ 11	杯	11.6	6.6	2.8	B2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	重焼直
82	3	S801	£ 5	杯	(12.6)	6.6	3.5	A2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
82	4	S801	£ 11	杯	-	6.6	2.7	-	黄褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	並み調査、砂付着
82	5	S801	£ 5	杯	-	5.6	[3.0]	1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
82	6	S801	£ 5	杯	-	6.2	[1.8]	-	灰褐色～灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	2次の受熱直
82	7	S801	£ 5	杯	(12.0)	7.0	3.3	B2	灰褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	外表面火搏
82	8	S801	£ 5	杯	(12.0)	7.0	3.3	B2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
82	9	S801	檢出	杯	(12.3)	6.8	3.1	B2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ	重焼直
82	10	S801	檢出	杯	(12.7)	5.6	2.7	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
82	11	S801	£ 11	杯	(12.0)	7.0	3.5	A2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	重焼直
82	12	S801	檢出	杯	(12.6)	5.8	3.3	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ	
82	13	S801	檢出	杯	(12.2)	6.6	2.7	B2	黄褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ・底部ナデ・ケズリ	重焼直
82	14	S801	檢出	杯	(12.0)	7.0	3.6	A2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ・ケズリ	2次の受熱直
82	15	S801	檢出	杯	(14.2)	7.8	2.9	B1	褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	2次の受熱直
82	16	S801	檢出	杯	(12.8)	7.5	3.4	B2	灰褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	重焼直
82	17	S801	檢出	杯	(12.3)	6.8	3.5	B2	黄褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	2次の受熱直
82	18	S801	檢出	杯	(12.8)	7.0	3.3	B1	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
82	19	S801	£ 1	杯	(12.2)	6.5	3.6	D1	灰色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	
82	20	S801	£ 1	杯	(12.4)	7.0	2.7	B1	黑褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	自然釉、砂付着
82	22	S801	£ 1	杯	-	6.7	[2.1]	-	褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	内面火搏
82	23	S801	£ 1	杯	-	6.7	[2.5]	-	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	内面火搏
82	24	S801	£ 1	杯	(14.0)	4.4	3.5	2	暗赤褐色	回転ヘラ切	ロクロナダ、底部ナデ	2次の受熱直

滅が著しく内面の調整痕を明瞭に観察することができなかつた。

まとめ

S R01は、立地斜面・遺存部等の状況から須恵器窯跡の焚口～燃焼部が確認されたものと推測される。燃焼部に対して焚口幅は1/2程度窄まる。燃焼部は赤褐色に変色しており、底面に炭化物が吸着していた。燃焼部の底面から2次的に強く熱を受けたような土器が出土しており、2回以上の操業が行われたと思われるが、燃焼部の堆積土から操業回数等を確認することはできなかつた。焚口の西側は浸食を受けた影響もあり、灰原についても明瞭に確認することができなかつた。

S R01は遺存状態が悪く窯構造の全容については不明であるが、S D04付近で斜度が変わり、統くS R02が本窯跡の焼成部であった可能性もある。

出土土器は杯が大半である。杯の色調は浅黄～淡黄色の資料も多いが、意図的なものか、それともS R01の構造的な要因によるものか明らかではない。大型壺の破片も出土しているが、焼台として利用された可能性も考えられるだろう。

遺構の時期については、出土土器の特徴などから平安時代前期後半と考えられる。(香川)

2号須恵器窯跡 S R02

遺構(図79・84、写真47・49)

K 6グリッドに位置する窯跡である。検出面はL IV上面である。立地は比較的急な斜面で、その

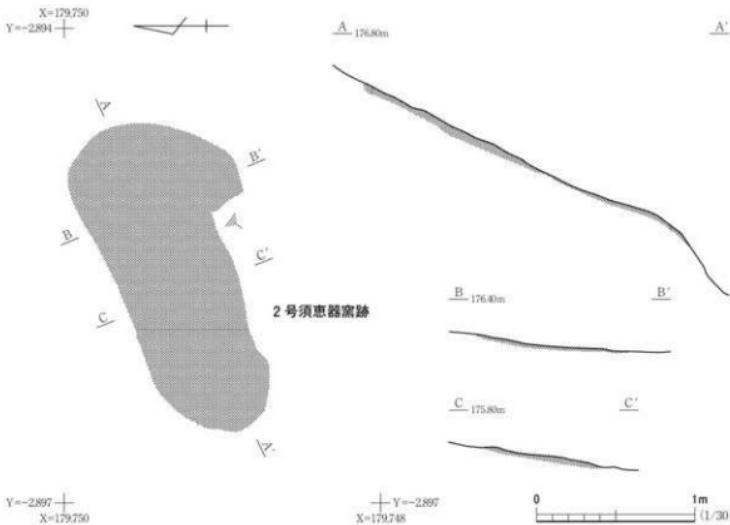


図84 2号須恵器窯跡

標高は176.0m前後である。検出当初、本遺構はSR01に連続するものとしていたが、確実ではないため本遺構をSR02として単独で取り扱った。他に重複遺構はない。

SR02の遺存状態は非常に悪く、底面～上部構造を失っている。かろうじて精円状に広がる赤褐色の変色面から遺構の存在がわかった。赤褐色の変色面は東西に長く、その規模は東西2.05m、南北が最大で1.03mを測る。遺構が立地する斜面の傾斜は約25°である。本遺構に関連するような遺物は確認できなかった。

まとめ

本遺構は底面を含むすべての構造を消失している。しかし、赤褐色の熱変範囲から、須恵器窯跡に関連する施設が存在した可能性を推測させる。検出当初はSR01との関連性も考えられたが、遺存状態の悪さから、SR02の全容は不明である。遺構の時期については周辺遺構との関連性から、平安時代前期後半頃と考えられる。

(香川)

3号須恵器窯跡 SR03・SRW03

遺構 (図79・85、写真46・49)

J・K5・6グリッドに位置する窯跡である。検出面はLIV上面である。SR01の底面の断ち割りを行ったところ、下層から焼土面を発見しSR03とした。SR01・03の新旧関係は、本遺構の方が古い。東側約70cmの地点にはSD04がある。

SR03の南西～西側は、浸食・搅乱により旧地形を失っている。北西側は浸食を免れており、灰原状の堆積物で覆われていた。同堆積物の下面は整地されたような平坦面になっていたため、作業場的な可能性から同部をSRW03とした。SRW03・SK35は重複しており、その新旧関係はSK35の方が新しい。

SR03内の堆積土は2層に分けた。 ℓ 1・2は、いずれも多量の焼土塊・炭化物・土器を混入する層である。また、 ℓ 2内には青灰色に硬化したササ入りの窯壁塊が少量含まれていた。しかし、 ℓ 1では窯壁の混入がほとんど認められなかった。 ℓ 1・2は、混入物の状況から遺構破棄後に形成された整地層の可能性がある。

本遺構とした焼土面の平面形は、最小幅の西端部から東に向かって直線的に開く台形状である。SR03の北西部は削平されており、堆積土の状況から廢棄時に破壊されたものと考えられる。焼土面の規模は、長軸長が1.95mである。最小幅は西端部にあり、0.73mを測る。最大幅は東部にあり、1.45mを測る。長軸方向はE 9°Wである。

窯壁は確認できなかった。底面は西端部から約80cmの地点までは曲線的に立ち上がるが、その後は約17°の角度で直線的に傾斜している。東側は急角度の斜面になっているが、浸食等による削平を受けた痕跡と思われる。

SRW03は、SR03から北西側へ半島状に突き出た台状地形を呈する。SR03の西側やSK35の削平状況から、SRW03の平坦面は南側に広がっていたものと推測される。SRW03の堆積土は

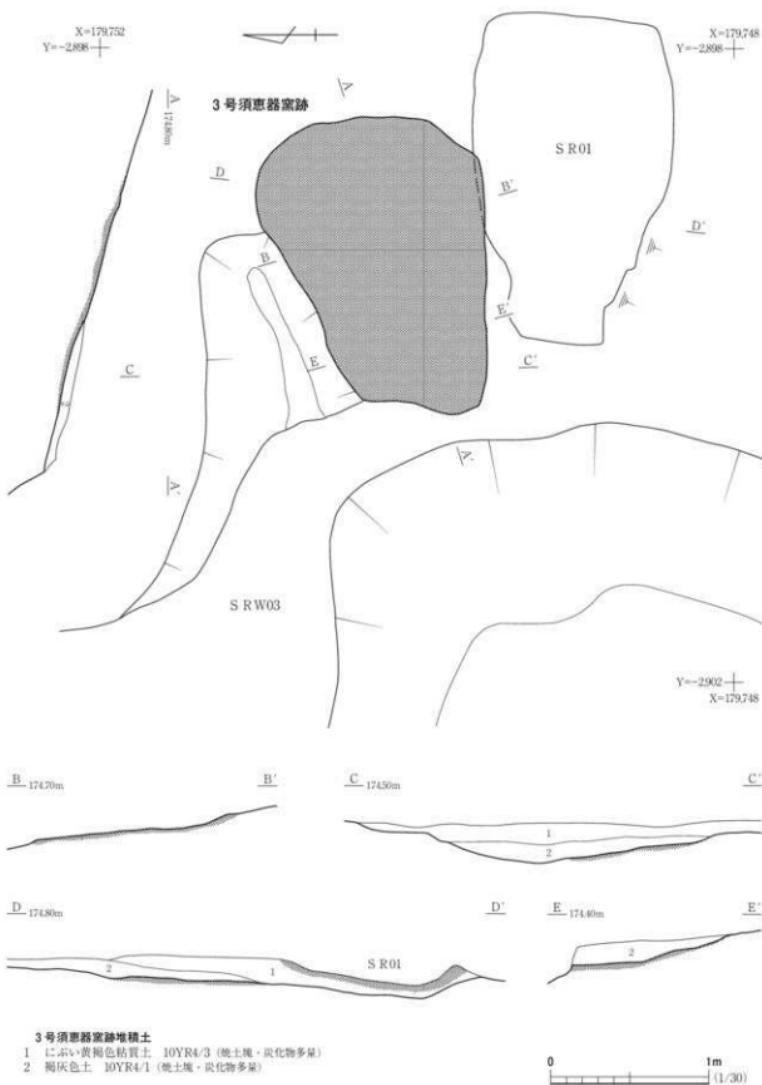


図85 3号須恵器窯跡

2層に分けた(図85)。ℓ1・2は灰原層の可能性も考えられるが、SR03のℓ1・2と土質・混入物が類似しており、SR03破壊後の整地層の可能性が高いと考えられる。SRW03において、柱穴状の小穴は確認できなかった。

遺物(図86～88、写真59～61)

SR03から須恵器杯類253点・甕類5点、土師器片2点が出土した。SRW03から須恵器杯類690点・蓋類1点・甕類12点、土師器片25点が出土した。遺存率が50%以上の杯の計測値は、口径12.2～14.8cm(平均値13.3cm)・底径5.8～7.4cm(平均値6.4cm)・器高2.7～4.0cm(平均値3.3cm)である。底径／口径比は、最大が図87-11の0.53、最小が図87-24・28の0.41である。

杯のロクロからの切り離し技法は、切り離し痕が確認できた資料のすべてが回転ヘラ切りによるものである。掲載した61点のうち、およそ還元色を呈するものは44%(図86-7など)で、他は焼き締まった赤黒～褐色が25%(図87-17など)、土師器のような浅黄橙～淡黄色が31%(図86-1など)である。

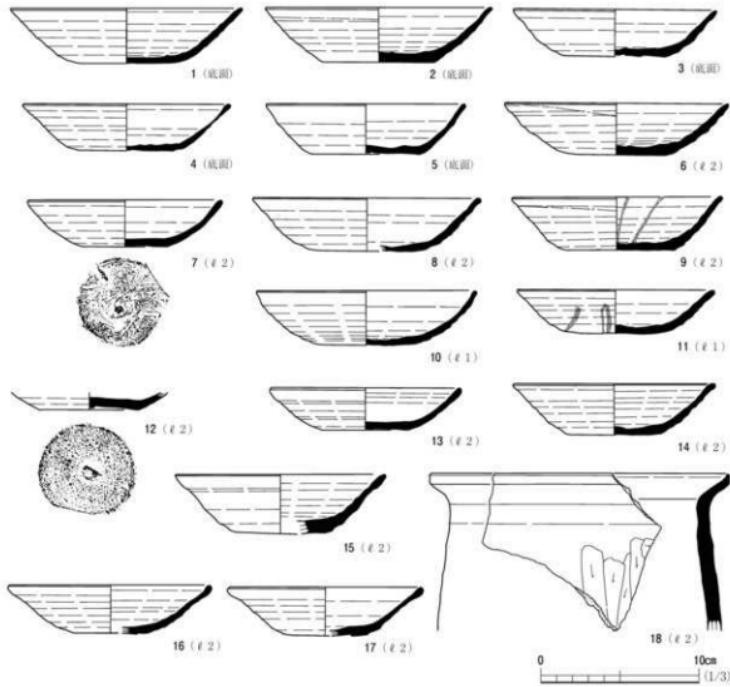


図86 3号須恵器窯跡出土遺物(1)

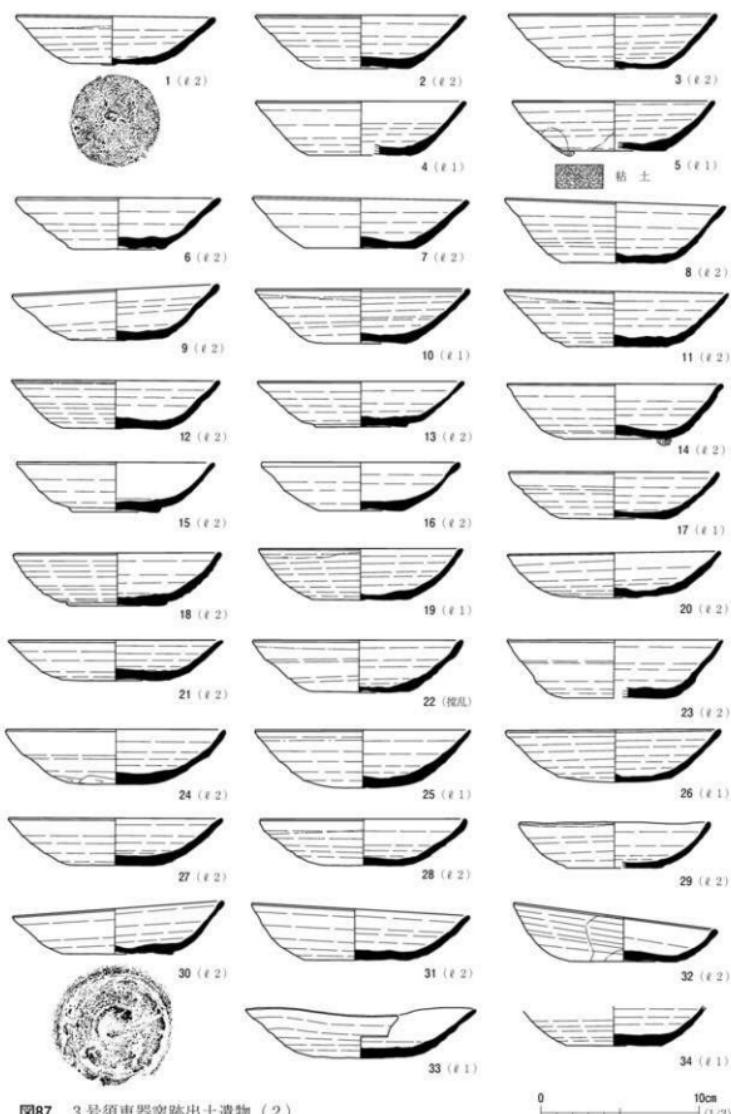


図87 3号須恵器窯跡出土遺物（2）

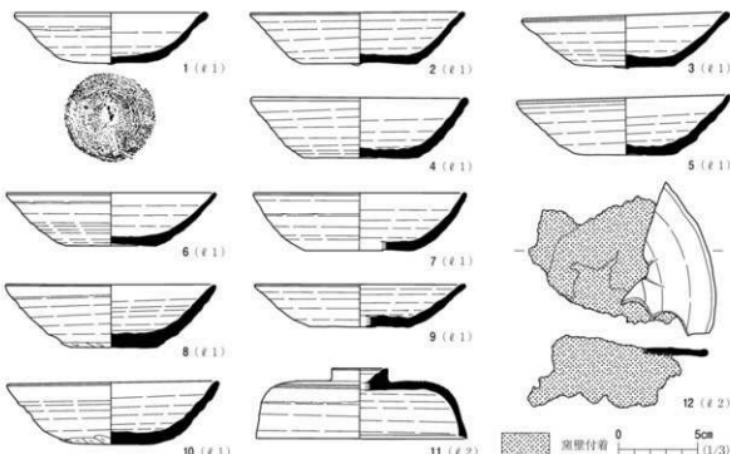


図88 3号須恵器窯跡出土遺物（3）

図86-1～5は、SR03の底面から出土したものである。1・2は器形・調整・色調が類似するもので、その口径は14cmを超える。出土資料の中では大型の部類に属する。1・2の底部調整は比較的丁寧なナデ調整が施され、回転ヘラ切りの切り離し痕がほとんど消されている。1・2と同様の資料には同図6・10があり、いずれも器面の色調が淡い黄色の酸化色を呈する。2の口縁部には重焼きの痕跡が確認できる。3・5は2次的に強く熱を強く受けており、器面の劣化が著しい。

図86-6～18は、SR03のℓ1・2から出土したものである。6の底部外面はナデ調整により回転ヘラ切り痕が消され、またヘラミガキ状の調整痕も認められる。10の体部から口縁部の断面は曲線的で、底部と体部の境界はやや不明瞭である。9は内面に、11は外面上に火だすき痕が認められる。また9の口縁部は帯状に変色しているが、重焼きの痕跡と考えられる。13は口径が12.2cmと小型の部類に属する資料である。18は須恵器の長胴甕で、口唇部が上方に摘み上げられており、脇部外面には縦方向のケズリ調整が施されている。18の胎土は杯と比べて砂粒を多く含む。

図87-1～34は、SRW03のℓ1・2から出土したものである。体部～口縁部の形状は1～14が直線的、15～29が曲線的に立ち上がるが、器形の違いから規模・調整法等に大きな差異は認められない。5の体部外面に自然釉が付着しており、底部にはスサ入りの小さな粘土塊が付着している。14の底部にも同様の粘土塊が付着している。13・15・18は低い平高台状の底部になっている。9・25の底部中央には爆ぜたようなひび割れが入り、焼成中に破損したようである。22～24の体部上位に段が付く。24の底部は、ナデ・ケズリ調整によって回転ヘラ切り痕が消され、また丸底風になっている。25の底部も丁寧なナデ調整等によって回転糸切り痕が消され、丸みを帯びた底部になっている。30～33は歪みによって器形が傾いた資料である。

図88-1~10はSRW03のℓ1から出土したものである。ℓ1の遺物出土量は、ℓ2と比較して少ない。1の底部外面にはヘラで付けたような筋が認められるが、意図的なものかはわからない。3・8の底部には弾けたようなひび割れが認められ、破損品と思われる。8・10の底部外面は比較的丁寧に調整を受けて、回転ヘラ切り痕が消されている。

図88-11はSRW03のℓ2から出土した蓋である。歪みが比較的強い。摘みは2段に窪められている。天井から肩には2条一組のカキメ状の筋が付けられている。体部外面には自然軸の付着が認められる。

図88-12は杯の口縁部破片で、扁平に反り上がった杯の外面がスサ入りの窓壁塊に接着している。杯の色調は灰白色に還元している。

まとめ

SR03は遺存状態が悪く不明な点が多いが、SR01と同様の須恵器窓跡の可能性が高いと考えら

表9 3号須恵器窓跡出土遺物観察表(1)

図	No.	場所	部位	形種	口径	底径	厚高	分類	色調(外面)	底面切り離し	() : 推定値, [] : 残存値, 単位: cm	
											測定	推定
86	1	SRW03	底面	杯	14.8	6.2	3.5	C1	淡黄色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	重焼直
86	2	SRW03	底面	杯	14.4	7.4	3.5	B1	浅黄色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	2次の受熱顯著
86	3	SRW03	底面	杯	12.9	6.5	3.0	B2	面白~褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
86	4	SRW03	底面	杯	(12.0)	(6.0)	3.0	C1	黄灰色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
86	5	SRW03	底面	杯	(12.6)	7.0	3.2	B2	灰白色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	2次の受熱顯著
86	6	SRW03	ℓ2	杯	14.2	7.4	3.3	B2	浅黄色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	重焼直
86	7	SRW03	ℓ2	杯	(12.4)	5.4	3.0	C2	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ	
86	8	SRW03	ℓ2	杯	(14.5)	(7.0)	3.4	C2	灰白色	回転ヘラ切	クロロナデ	内部火輝、重焼直
86	9	SRW03	ℓ2	杯	13.4	7.0	3.4	B1	灰白色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ・ケズリ	
86	10	SRW03	ℓ1	杯	(14.0)	(7.0)	3.5	B2	浅黄色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	外側火輝
86	11	SRW03	ℓ1	杯	(12.5)	6.6	2.8	B2	褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
86	12	SRW03	ℓ2	杯	-	6.2	[1.1]	-	灰白色	回転ヘラ切	クロロナデ	
86	13	SRW03	ℓ2	杯	(12.2)	5.4	2.7	C2	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ	
86	14	SRW03	ℓ2	杯	(12.8)	6.0	3.3	C1	灰褐色~褐色	回転ヘラ切	クロロナデ	2次の受熱顯著
86	15	SRW03	ℓ2	杯	(12.4)	(5.6)	3.8	D1	灰黄色	不明	クロロナデ、底部ケズリ	2次の受熱顯著
86	16	SRW03	ℓ2	杯	(12.9)	(5.9)	3.1	C2	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ	
86	17	SRW03	ℓ2	杯	(12.4)	(5.4)	3.1	C1	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ	
86	18	SRW03	ℓ2	蓋	(19.0)	-	[10.0]	-	灰色	-	クロロナデ・ヘラ削り	筋付鉢多
87	1	SRW03	ℓ2	杯	12.7	5.6	3.2	C1	黄褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	重焼直
87	2	SRW03	ℓ2	杯	(12.4)	(6.0)	3.4	C1	黄褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	2次の受熱顯著
87	3	SRW03	ℓ2	杯	13.2	6.5	3.5	C1	面白色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
87	4	SRW03	ℓ1	杯	(12.4)	(6.6)	3.4	C1	面白色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	2次の受熱顯著
87	5	SRW03	ℓ1	杯	(12.9)	6.6	3.2	B2	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ	粘土付付着
87	6	SRW03	ℓ2	杯	13.0	6.0	3.3	C1	褐色	回転ヘラ切	クロロナデ	2次の受熱顯著
87	7	SRW03	ℓ2	杯	13.7	7.0	3.3	B1	ぶい褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ・ケズリ	
87	8	SRW03	ℓ2	杯	14.0	6.8	4.0	D1	灰黄色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
87	9	SRW03	ℓ2	杯	13.2	6.5	3.6	D1	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
87	10	SRW03	ℓ1	杯	(12.6)	6.5	3.5	C1	面白色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	底部中央ひび 重焼直
87	11	SRW03	ℓ2	杯	14.2	6.5	3.6	C1	灰黄色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	底部中央ひび 重焼直
87	12	SRW03	ℓ2	杯	(12.2)	6.8	3.1	B1	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	底部中央ひび、重焼直 重焼直
87	13	SRW03	ℓ2	杯	(12.2)	5.8	2.9	C1	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ	
87	14	SRW03	ℓ2	杯	(12.6)	6.4	3.5	C1	黒~灰色	回転ヘラ切	クロロナデ・底部ナデ	粘土付付着
87	15	SRW03	ℓ2	杯	(12.6)	5.8	3.2	C2	褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
87	16	SRW03	ℓ2	杯	12.6	5.3	3.1	C2	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
87	17	SRW03	ℓ1	杯	(12.2)	6.7	3.0	B2	赤黒~褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ・ケズリ	
87	18	SRW03	ℓ2	杯	(12.4)	6.4	3.4	C2	褐色~灰色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	重焼直
87	19	SRW03	ℓ1	杯	(12.0)	6.0	3.3	C2	灰色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
87	20	SRW03	ℓ2	杯	12.6	6.0	3.0	C2	淡黄色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
87	21	SRW03	ℓ2	杯	(12.6)	6.8	2.6	B2	褐色	回転ヘラ切	クロロナデ・底部ナデ	
87	22	SRW03	楕丸	杯	13.4	6.9	3.4	B2	褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	重焼直
87	23	SRW03	ℓ2	杯	(12.6)	6.4	3.7	D2	黄灰色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	
87	24	SRW03	ℓ2	杯	(12.8)	5.6	3.5	C2	浅黄色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ・ケズリ	
87	25	SRW03	ℓ1	杯	13.6	6.8	3.7	D2	黑褐色~灰白色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ	底部中央ひび、重焼直
87	26	SRW03	ℓ1	杯	(12.7)	7.1	3.4	B2	褐色	回転ヘラ切	クロロナデ、底部ナデ・ケズリ	

表10 3号須恵器窯跡出土遺物観察表(2)

() : 検定値、〔 〕 : 残存値、単位: cm

No.	場所	層位	器種	口径	底径	高さ	分類	色調(外面)	底部切り離し	測定	備考
87	27 SRW03	ℓ 2	杯	(13.6)	5.6	3.0	C2	灰~灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	
87	28 SRW03	ℓ 2	杯	13.0	5.4	3.0	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	重焼痕
87	29 SRW03	ℓ 2	杯	(12.2)	(6.1)	3.0	C2	灰~灰褐色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	重焼痕
87	30 SRW03	ℓ 2	杯	13.4	6.9	3.4	-	灰~白色付着	回転ヘラ切	ロクロナデ	口縁部ヒビ
87	31 SRW03	ℓ 2	杯	13.8	6.6	3.6	-	灰~灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	
87	32 SRW03	ℓ 2	杯	13.0	7.0	3.7	-	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ、ケズリ	自然釉
87	33 SRW03	ℓ 1	杯	-	6.6	3.3	-	暗赤褐色、白色付着	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	歪み銀歯
87	34 SRW03	ℓ 1	杯	-	6.2	[2.6]	-	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ、ケズリ	
88	1 SRW03	ℓ 1	杯	12.2	5.8	3.2	C2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ケズリ	重焼痕
88	2 SRW03	ℓ 1	杯	13.6	7.3	3.3	B1	青灰~淡黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ	
88	3 SRW03	ℓ 1	杯	(13.2)	6.4	3.3	B1	褐灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	底部中央ヒビ、重焼痕
88	4 SRW03	ℓ 1	杯	13.8	7.2	3.8	A1	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	
88	5 SRW03	ℓ 1	杯	13.4	6.2	3.8	D1	浅黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	底部中央ヒビ、重焼痕
88	6 SRW03	ℓ 1	杯	(13.3)	(5.7)	3.4	C2	灰白色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	重焼痕
88	7 SRW03	ℓ 1	杯	(13.4)	(6.8)	3.7	A2	灰色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	重焼痕
88	8 SRW03	ℓ 1	杯	13.4	5.6	4.0	D2	淡黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ、ケズリ	底部中央ヒビ、重焼痕
88	9 SRW03	ℓ 1	杯	(13.4)	(6.4)	2.7	C2	半黑色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ	
88	10 SRW03	ℓ 1	蓋	13.4	5.8	4.0	D2	淡黄色	回転ヘラ切	ロクロナデ、底部ナデ、ケズリ	底部中央ヒビ
88	11 SRW03	ℓ 2	蓋	掩36	13.3	4.4	-	灰色	-	ロクロナデ	短頭付蓋
88	12 SRW03	ℓ 2	杯	-	-	-	-	灰色	-	ロクロナデ	短頭付蓋

れる。また今回検出したS R03の遺存部についても、S R01と同様に焚口～燃焼部付近であったものと考えられる。

S RW03は平坦面になっているため作業場的な施設が考えられるが、上屋の有無については不明である。S RW03上の堆積土については灰原の可能性も推測されたが、燃焼部の堆積土と明確な差異が認められなかったため、S R03廃棄後の整地層と考えられた。出土土器は杯が大半であり、S R01の状況と類似している。S R01の時期については、出土土器の特徴等から平安時代前期後半と考えられる。

(香川)

第5節 溝 跡

調査II区からS D04・09の2条の溝跡を検出した。S D04は調査II区の北東部で確認したもので、河岸段丘の斜面が緩やかになる変換部を切り通すようにして造られた比較的溝幅の狭い構造である。S D09は調査II区の南部に位置し、西の阿賀川方向に向かって延びる比較的幅広の溝跡である。

4号溝跡 S D04

遺構(図89、写真50)

K 5～7グリッドに位置する。検出面はLIV上面である。S D04は、急峻な段丘斜面の傾斜が緩やかになる裾部を切り通すようにして造られた南北に長い溝跡である。標高は175.2m前後である。北側は阿賀川に注ぐ「V」字状の流路になっており、丘陵斜面が分断されている。S R01と重複関係にあるが、本遺構の方が新しい。なお、S R01と重複する部分で壁から底面に熱を受けたような痕跡を確認することはできなかった。

遺構内堆積土はℓ 1の単層とした。ℓ 1は灰黄褐色の粘質土で、土質・土色等から東側の丘陵斜

面の崩落土と判断した。全長は28.0mを測るが、さらに南側へ延びていた可能性がある。遺構の北端部と南端部の比高は約1mである。

溝幅は遺存状態によって45~90cmと一定ではない。壁は曲線状で、底面は比較的平坦に造られている。検出面から底面までの深さは、遺存状態が比較的良好なSR01付近で20cmを測る。

遺 物 (図90、写真53)

本遺構の①から須恵器片が76点出土した。1~4の杯はいずれもSR01~03の近辺から出土したもので、須恵器窯跡から混入したものと推測される。1~3の体部・口縁部の器形は、いずれも内湾しながら立ち上がる。3の口径は12.0cmで、比較的小型の杯である。4の底部外面には回転ヘラ切り痕が認められ、中央に脣状の突起が観察される。

5は壺の胴部破片で、内面に当て具痕、外面上にタタキ目が認められる。6は平坦な底部から胴部が内湾気味に立ち上がる壺の破片である。

7は壺の頭部付近の破片で、タタキ調整後にカキ目調整が施されている。8の外面にはタタキ目が格子状に交錯している。8の内面は縦横にナデ調整が施されている。

ま と め

S04は丘陵裾部に沿って南北方向に延びる遺構である。検出当初は、SR01~03に通じる作業道の可能性も考えられたが、重複関係からS04の方が新しいと判断した。

S04の性格としては、比較的幅の狭い小道であった可能性が考えられ、遺構北側の水が流れる谷筋までの通路であった可能性が考えられる。遺構の時期は、SR01との重複関係から平安時代以降である。

(香 川)

$+ X=179761$
 $+ Y=-2900$

$+ X=179761$
 $+ Y=-2896$

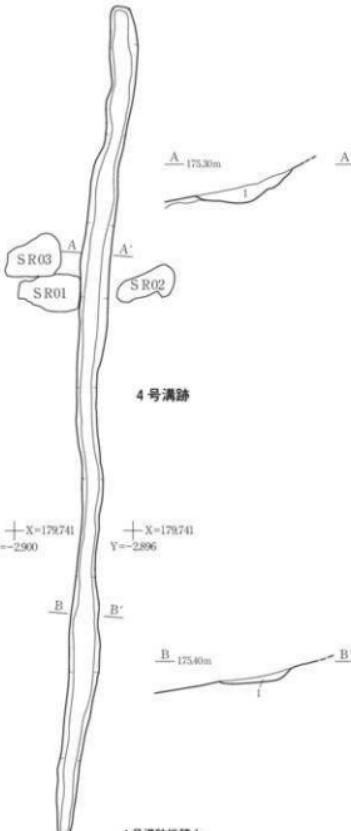


図89 4号溝跡



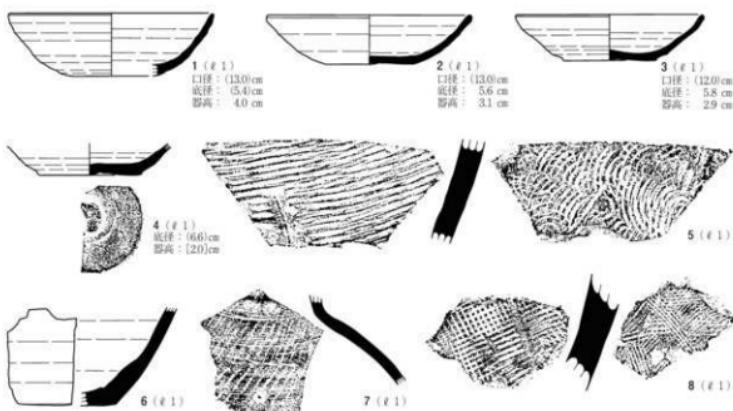


図90 4号溝跡出土遺物

9号溝跡 S D 09

遺構 (図91、写真50)

H 14グリッドに位置する。検出面はL III B上面で、標高は約170.9 mである。S D 09は、西側に開く谷状地形の落ち際を利用して造られた溝跡である。東部は削平によって失われている。重複造構はない。北側約4 mの地点にはS I 12がある。

遺構内堆積土は4層に分けた。最下層のℓ 4は、やや粘質のシルト質土である。ℓ 1～4は、土層観察から自然堆積土の可能性が高い。遺構の埋没後、東側の丘陵斜面からの崩壊土によって、遺構の上端と南壁の一部が削平されている。

S D 09の断面は舟底状で、北壁では中ほどで段差が付いている。検出面から底面までの深さは、北部で1.0mを測る。平面形は、立地する谷地形の縁辺に沿うように弧状を描く。遺存長は9.45 mである。最大幅は、東部で1.95 mを測る。

遺構内の堆積土から平安時代の土器片が6点出土したが、いずれも細片で図化できなかった。

まとめ

S D 09は、上端幅約2 m、深さ約1 mの比較的大型の溝跡で、谷を迂回するようにして阿賀川方向に進んでいる。断面形は浅い「V」字状で、上端幅に対し底面幅が非常に狭い。S D 09の性格については流路等の可能性が考えられるが不明である。遺構の時期については、L III Bを少なくとも掘り込んでいることから、平安時代以降と考えられる。

(香川)

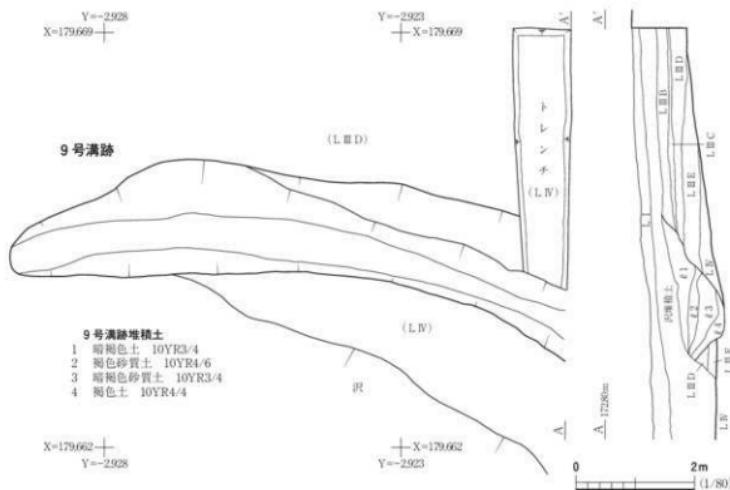


図91 9号溝跡

第6節 その他の遺構

調査II区において計7基の土坑(S K10・25・26・28・32・34・35)と、平行に溝が並ぶS X02を確認した。S K10・25・32は燃焼の痕跡が確認され、土師器等が多量に出土していることから生産関連遺構の可能性がある土坑である。S X02は、文献の可能性から文献状遺構としたものである。

10号土坑 S K10 (図92・94、写真51)

II区のはば中央、H 10グリッドに位置する。検出面はL III C上面である。周辺にはS I 04、S K26が存在する。S K10が確認されたのは標高171.7mの平坦面である。遺構内堆積土は2層に分け、 ℓ 1は炭化物粒を微量含む。 ℓ 1から比較的多くの土師器が出土した。 ℓ 2はL III C起源と思われる黄褐色土粒を含む。 ℓ 1・2の観察から、人為的に埋め戻されたような痕跡を確認することはできなかった。

平面形は東西に長い楕円形で、上端の規模は東西192cm、南北140cmを測る。検出面から底面までの深さは18cmである。底面の規模は東西156cm、南北117cmである。底面はほぼ水平で、壁の立ち上がりは緩やかである。底面の南部が褐色になっており、熱を受けた可能性がある。

遺構内からは土師器杯類65点、同壺類13点、同器種不明のもの28点が出土したが、その大半が細片である。遺物は図94-1~3に示した。1は杯の小破片で、内湾気味の体部から口縁部がわず

かに外反する。1の内面は黒色処理・ヘラミガキが施されているが、2次的に熱を受けたらしく黒色処理が消えかかっている。2は小型甕の底部と考えられる資料で、底部外面に回転糸切り痕とヘラ状工具の側面で刻んだような筋が観察される。3は甕の口縁部破片である。3の口唇部は「S」字状に外反している。3も2次的に熱を受けたらしく、器面の一部が剥落している。

S K10の性格については確実ではないが、土師器焼成遺構の可能性も考えられる。遺構の時期については、出土遺物から9世紀中頃の可能性がある。
(宮田)

25号土坑 S K25 (図92・94、写真51・62)

II区北部のI 8 グリッドに位置する。検出面はL III A上面で、土師器を多量に混入する暗褐色土の広がりとして確認した。北へ約25mのところにS I 08がある。S K25が確認されたのは標高171.7m前後の西向き緩斜面である。遺構内堆積土は2層に分けた。ℓ 1は炭化物を比較的多く含む暗褐色砂質土で、土師器片を混入する。ℓ 2は炭化物を主体とする黒色砂質土で、ℓ 1と同様に土師器片を混入する。図92に示した検出状況はℓ 2上面での図化である。

平面形は円形で、上端の直径は約150cmである。検出面から底面までの深さは23cmである。底面の規模は東西126cm・南北130cmの不整形をなし、壁の立ち上がりは急角度である。L III A面を直接底面としており、熱変化による焼成化した部分が見られる。

遺構内からは土師器壺類221点、同甕類25点、同器種不明1点が出土した。須恵器その他は出土していない。遺物は図94-4~11に示した。4は高台をもち、内外面にロクロ整形が施される。内面は2次的に熱を受けており、ヘラミガキや黒色処理の有無については不明である。6も高台付杯であるが、高台が剥落している。6の内面はヘラミガキ・黒色処理の痕跡が確認できるが、2次的に熱を受けており黒色処理が消えかかっている。5・7は高台をもたない杯で、いずれも2次的に熱を受けて器面が劣化している。5は底部から体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。5の内面にはわずかにヘラミガキの痕跡が確認できる。7の外表面は無調整に近く、底部外表面は軽いナデに止まる。

8~11は甕類を一括した。8・11は胴部上位の資料である。内外面ともにロクロ整形が施される。9は外面にロクロ整形、内面に横位のヘラナデが施される。10は胴部下半から底部にかけての資料で、9と同一個体の可能性がある。10の外表面にはタタキ調整後、縦位のヘラケズリが施されている。12は外面に墨書銘のある杯の小破片であるが、判読できなかった。

S K10は、底面の熱酸化や土器の出土状況から土師器焼成土坑と考えられる。時期は、出土土器から9世紀末~10世紀前葉に位置づけられよう。
(宮田)

26号土坑 S K26 (図92、写真51)

H 10 グリッドに位置する。検出面はL III A上面である。北東側約2mの地点にS I 04、北西側約1mの地点にS K10がある。重複遺構はないが、土坑の南側を破壊されている。遺構内堆積土は2

層に分けた。ℓ 1・2はいずれも炭化物粒を微量含む。ℓ 1・2の土質はL II cに類似しており、SK26は自然に埋没したものと考えられる。

平面形は不明であるが、遺存部の形状から楕円形の可能性もある。規模は東西210cm、南北84cmである。検出面から底面までの深さは、最深部で16cmを測る。底面はほぼ平坦である。壁は丸みを帯びて、緩やかに立ち上がる。遺構の堆積土から、土師器片28点、須恵器片16点が出土したが、すべて細片であり図化できなかった。

SK26の性格は遺存状態が悪く不明である。時期については、出土土器等から平安時代前末期～中期初め頃と考えられる。

(香川)

28号土坑 SK28(図92、写真51)

J 12グリッドに位置する。検出面はL III A上面である。重複遺構はない。遺構内堆積土は暗褐色土の単層とした。L IV塊を少量混入するが植物等による影響と思われ、SK28は自然に埋没したものと推測される。

平面形は、直径約80cmの円形である。壁は急角度で立ち上がり、特に東部では垂直に近い。検出面から底面までの深さは、最深部で40cmを測る。底面はほぼ平坦である。遺構から遺物は出土しなかった。

SK28は単独で立地する遺構で、その性格は不明である。時期については、西側で展開する遺構とはほぼ同時期の平安時代に位置づけられる可能性がある。

(香川)

32号土坑 SK32(図92・95、写真51・62)

G 12グリッドに位置する。検出面はL III G上面で、にぶい赤褐色砂質土の広がりを確認した。標高171.2mの西向き緩斜面上にある。重複遺構はない。北側約5mの地点にS I 13がある。遺構内堆積土は3層に分けた。ℓ 1は焼土層で、一部ℓ 2上に堆積する。ℓ 3はの北東部で観察されたにぶい黄褐色砂質土である。ℓ 1～3の堆積状況は不明である。

平面形は東西に長軸をとるやや不整な楕円形を呈し、上端の規模は東西約213cm、南北約150cmを測る。検出面から底面までの深さは14cmである。底面の規模は、東西203cm、南北130cmを測り、東から西へ緩やかに下がっている。東端と西端の比高は23cmである。

SK32から出土した遺物は土師器杯類13点、壺類178点、須恵器片9点である。このうち9点を図95に示した。1は杯である。外面にロクロ整形を、内面に横位のハケメが認められ、内外面とも熱を受け器面が脆くなっている。2は壺の胴部下半である。内外面に縦位のハケメが認められ、内外面とも熱を受け器面が脆くなっている。3は壺の口縁部資料である。ロクロ整形で頸部外側の屈曲部にタタキメが残っている。口唇部は上外方に摘み上げられ、内面に明瞭な稜が付く。内面はカキメ状のナデが施されている。4も外面にタタキメ、内面にカキメ状のナデが施された資料である。5は壺の底部である。内面に横位のハケメが、外面にはタタキが施される。6は内面に横位の、外面に縦位のタ

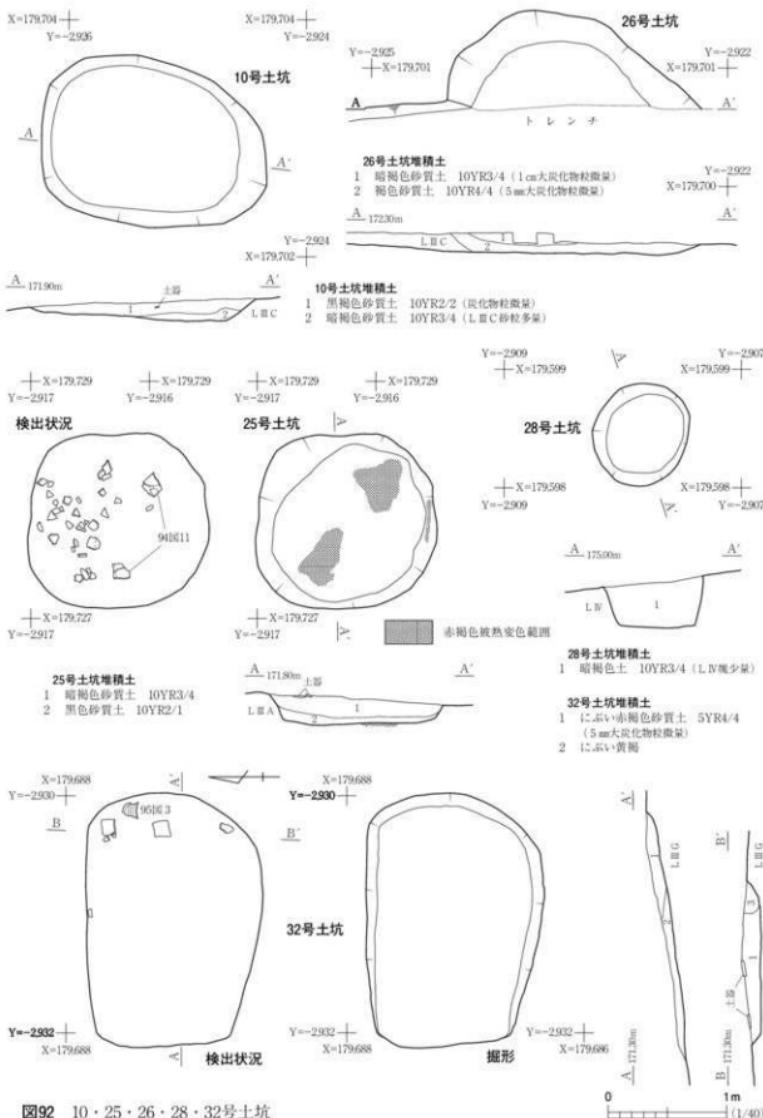


図92 10・25・26・28・32号土坑

タキメがみられる。7は須恵器壺の胴部である。内面に横位のナデが、外面にタタキ調整の後縫位のナデが施される。8は外面に格子状のタタキメが見られる。9は須恵器大型壺の胴部である。内外面にタタキ調整が施される。

S K32は遺存状態が悪くその構造は不明であるが、焼土層や土師器・須恵器が比較的多く出土したことから、土器生産に関連した遺構の可能性がある。遺構の時期については、出土遺物から9世紀代と考えられる。
(宮田)

34号土坑 S K34

遺構 (図93、写真51)

H 9グリッドに位置する。検出面はL III A上面である。S K34は、南北に延びる狭長な堤状地形の東側肩部を掘り込んでいる。重複遺構はない。南東側約4.5mの地点にはS I 09がある。

遺構内堆積土はℓ 1の単層とした。ℓ 1の観察から、人為的に埋め戻されたような痕跡は確認できず、遺構は自然に埋没した可能性が高いと考えられる。遺構内から遺物は出土しなかった。

平面形は、ほぼ橢円形である。規模は、長軸長1.15m、短軸長0.98mである。壁は底面から60°前後の角度で立ち上がる。壁の遺存高は、最も良好は南東部で32cmを測る。底面はほぼ平坦であるが、西から東に向かってわずかに傾斜している。S K34の時期は、遺構検出面等から周辺に展開する住居跡とほぼ同時期の平安時代前期末～中期初め頃と考えられる。
(香川)

35号土坑 S K35

遺構 (図93、写真51)

J 5グリッドに位置する。本遺構はS RW03と重複関係にあり、S RW03の堆積土を掘り込んでいることから、S K35の方が新しい。遺構の南から西部は崩落等によって消失している。

遺構内堆積土は、消し炭状の炭化物を多量に含むℓ 1の1層である。平面形は、遺存部から方形または長方形であったと推測される。遺存長は、長軸95cm、短軸53cmである。壁の遺存高は東壁で10cmを測る。底面はやや起伏があるが、ほぼ水平に造られている。底面の一部が熱を受けて赤褐色に変色している。

遺構内から遺物は出土しな

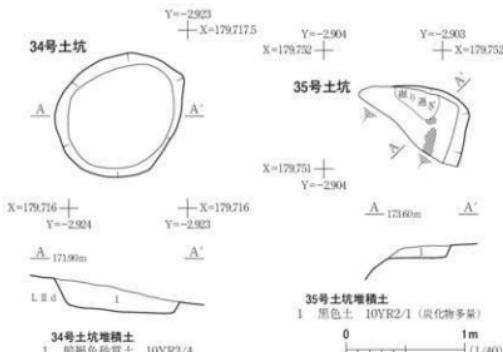


図93 34・35号土坑

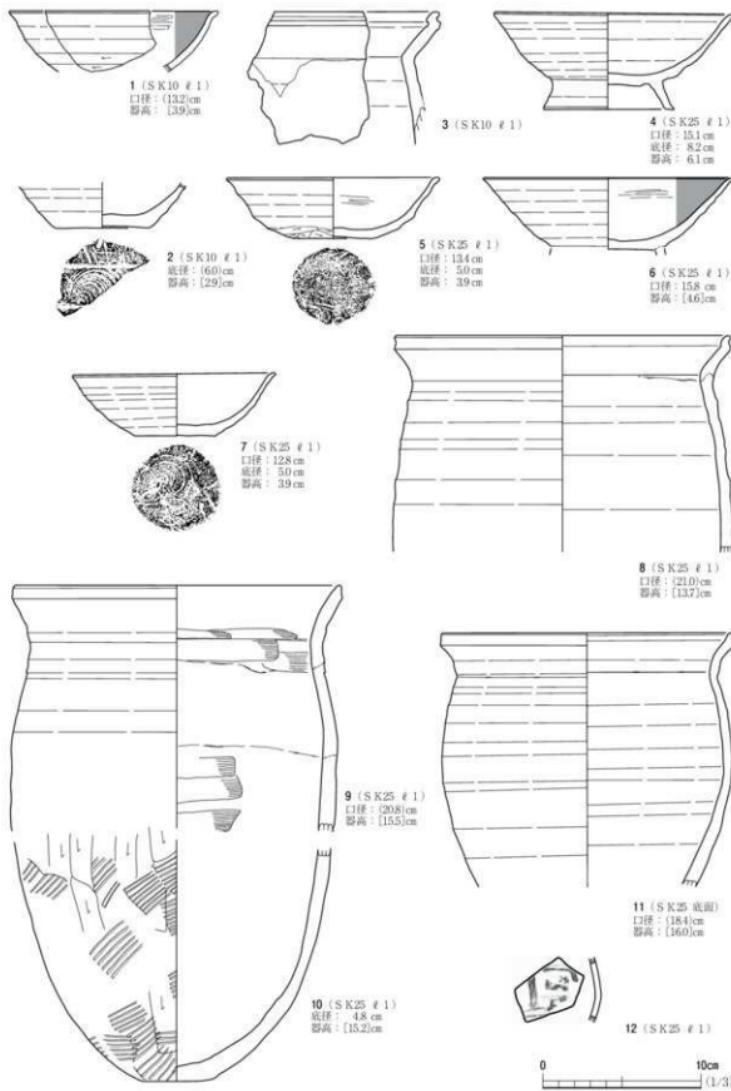


図94 土坑出土遺物（1）

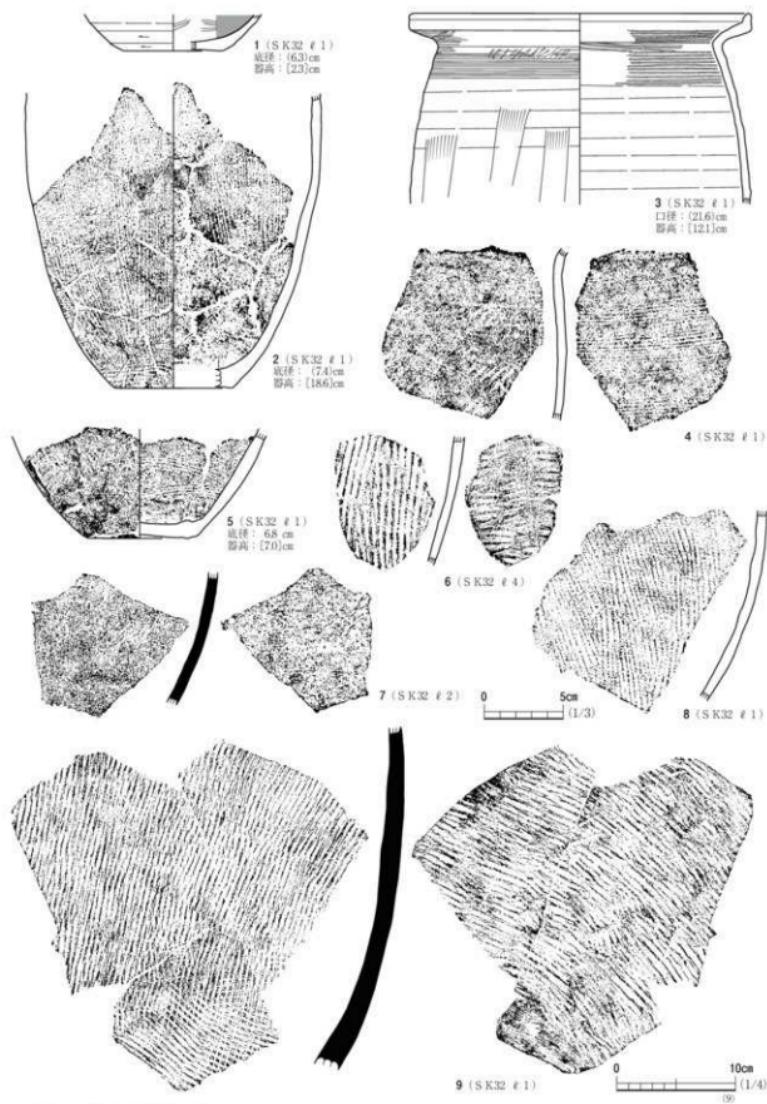


図95 土坑出土遺物（2）

かった。

S K 35 は ℓ 1 の炭化物から木炭等の焼成が行われた可能性がある。遺構の時期は、S R W03 との重複関係から平安時代以降と考えられる。(香川)

畝状遺構 S X 02

遺構 (図96、写真50)

F 16, G 14~16 グリッドの平坦部に位置する。東側の丘陵斜面は、比較的大規模に崩れて谷状地形となっており、その後、川岸まで再堆積土によって覆われている。再堆積土を15層(沢 ℓ 1~15)に分けたが、沢 ℓ 12 面において平行に溝が並ぶ本遺構を検出した。

S X 02 の溝は計19条確認した。各溝の上端幅は20cm前後、検出面から床面までの深さは10cm前後である。溝の断面は舟底状となっている。各溝内は黄褐色の砂で覆われていたが、同砂はⅢ区で確認された近世頃の洪水砂に類似している。各溝はおよそ東西方向に延びており、立地面の等高線と概ね直交している。遺存長は、最も長いもので5.8mを測る。

S X 02 の性格については、平行に並ぶ溝状の形態から縱畝の可能性が考えられ、畝跡と推測される。畝幅は0.4~1.0mであ

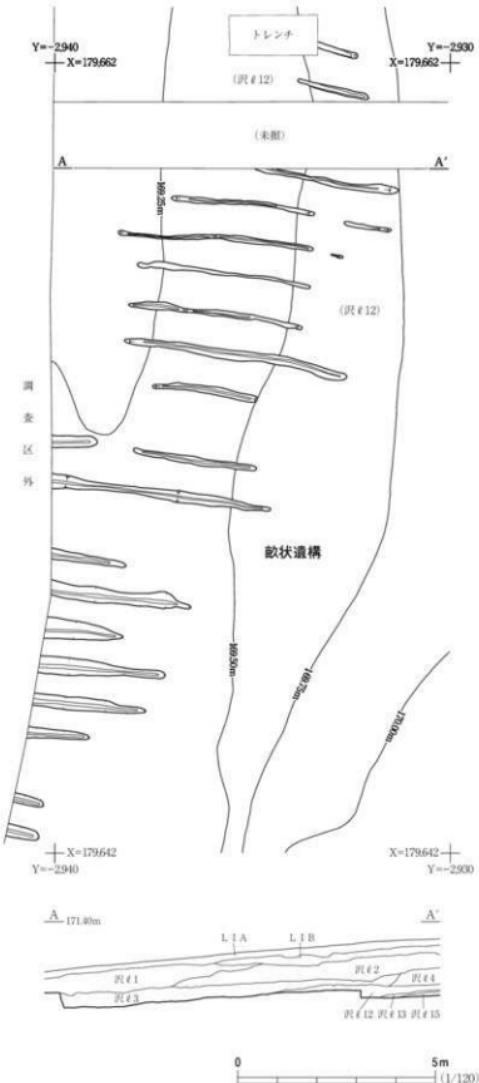


図96 畝状遺構

る。本遺構は、調査区外の西側へさらに広がっていると推測される。遺構の時期は、出土遺物がないため判然としない。しかし、各溝を覆う砂が近世頃の可能性があることから、本遺構についてもほぼ同時期の可能性がある。

(香川)

第7節 遺構外出土遺物

調査II区のL I・IIから、土師器の杯類3,389点・甕類1,686点・器種不明292点、須恵器の杯類837点・甕類71点、陶器7点、鉄製品3点が出土した。L IIはさらに細分され、各地点で複雑な堆積状況を示すが、L II出土の遺物のうち、L II cのものが約91%を占める。L II c出土の遺物の時期は9世紀代を中心である。調査II区の北西部ではL IIコとした層から瓦器・小刀が出土しており、中世の遺物も少量であるが確認している。

土 師 器 (図97・98、写真62・63)

図97-1～9・11は平底の杯である。1～6は口径に対して底径が比較的短い資料である。1～5の器高は4.0cmを超え、比較的深みのある器形である。1・3・5の体部下端は手持ちヘラケズリが施されている。1・2・6の内面は黒色処理・ヘラミガキ調整が施されているが、2次的に熱を受けたためか黒色処理のはほとんどが消失している。4・6の底部周縁～体部下端には回転ヘラケズリ調整が施されている。2の底部は無調整である。4の体部下半のヘラミガキ調整痕は口縁部と比べて幅広である。7は底部外面に調整が施され、回転糸切り痕がほとんど消失している。8・11はほぼ無調整の底部破片である。9は雨水等による影響を受けたためか、器面がやや摩滅している。

図97-10・12～16は高台付杯の破片資料である。10の体部下端にはヘラケズリ調整が施されている。12は高台が剥落した資料で、回転ヘラケズリによる再調整が行われた底部外面に2条の筋が刻まれている。13は断面が三角の短い高台が付き、接合部に菊花状のオサエ痕が認められる。14は比較的大型の高台破片で、底部内面に黒色処理・ヘラミガキ調整が施されている。底部外面はケズリ・ナデ調整によってロクロからの切り離し痕が消失している。15の底部外面には回転糸切り痕が観察され、16は再調整によって回転糸切り痕がほとんど消失している。

図97-17～19は長胴甕の破片資料である。17・19は口縁部の外反が比較的弱く、内面側の口唇部にも明確な稜をもたない。18は調査II区北西端部のL IIコとした地層から出土したもので、口縁部の外反が比較的強く、また口唇部が内傾している。

図98-1～7も甕の資料である。1の胴部下半にはタタキ痕とケズリ調整が認められる。2は比較的粗製の資料で器形がやや歪んでおり、熱を強く受けて器面が脆くなっている。底部は丸みを帯びた平底で、胴部が直線的に立ち上がる。口縁部は指先で摘んだように短く外傾する。調整は口縁部が横ナデ調整、胴部がケズリ・ナデ調整である。3の胴部外面にはカキメ状のナデ調整、底部外面には回転糸切り痕が認められる。4の底部資料は外面に木葉痕認められるもので、土師器ではない可能性もある。5の底部～胴部下端の調整は、外面がケズリ調整、内面が指によるナデ調整が施

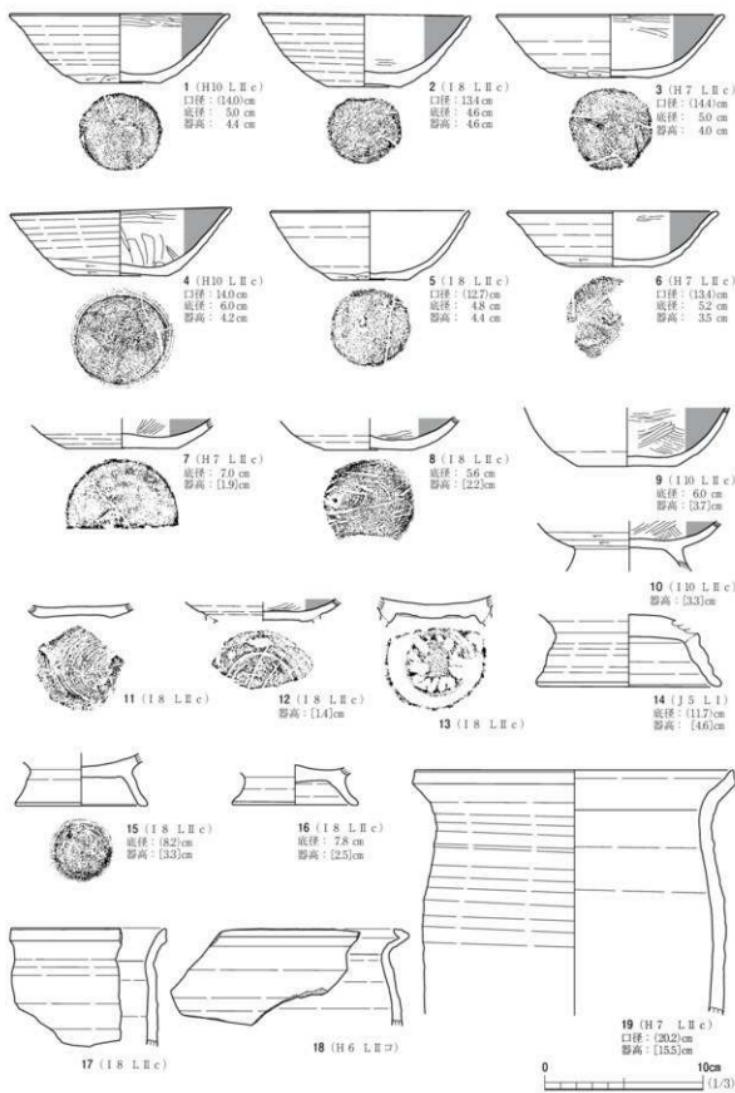


図97 造構外出土遺物（1）

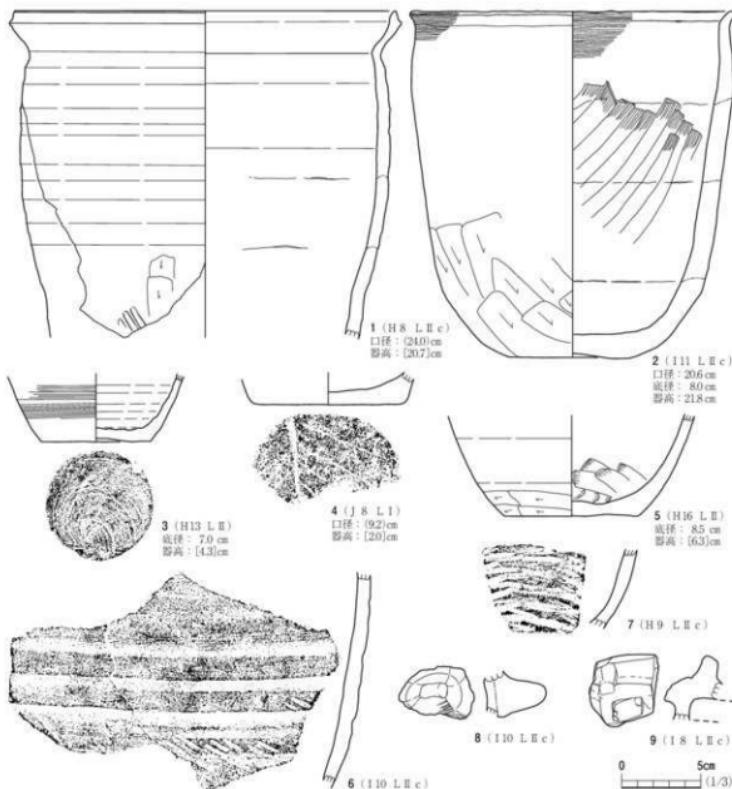


図98 遺構外出土遺物（2）

されている。6は下部にタタキメが認められる資料であるが、胸部の縦ぎ目付近の破片と思われる。ロクロナデによってタタキメが一部消失している。7も体部下端の資料で、タタキ調整が施されている。図98-8は瓶の把手と考えられるもので、ほぼ水平に張り出している。同図9は口縁部付近の破片で、外面と思われる側に断面が四角形の剥落痕が認められる。小片のため9の器種は不明であるが、鉄鍋模倣の把手付近の破片の可能性がある。

須恵器 (図99, 写真63・64)

図99-1~15は須恵器で、掲載資料のほとんどが調査II区北東部の須恵器窯跡周辺から出土したものである。杯のロクロからの切り離しは、1~5・7が回転ヘラ切り技法、6が回転糸切り技法である。6・7は歪みが生じて著しく変形したもの、10は窯壁塊に底部外面が着した資料である。

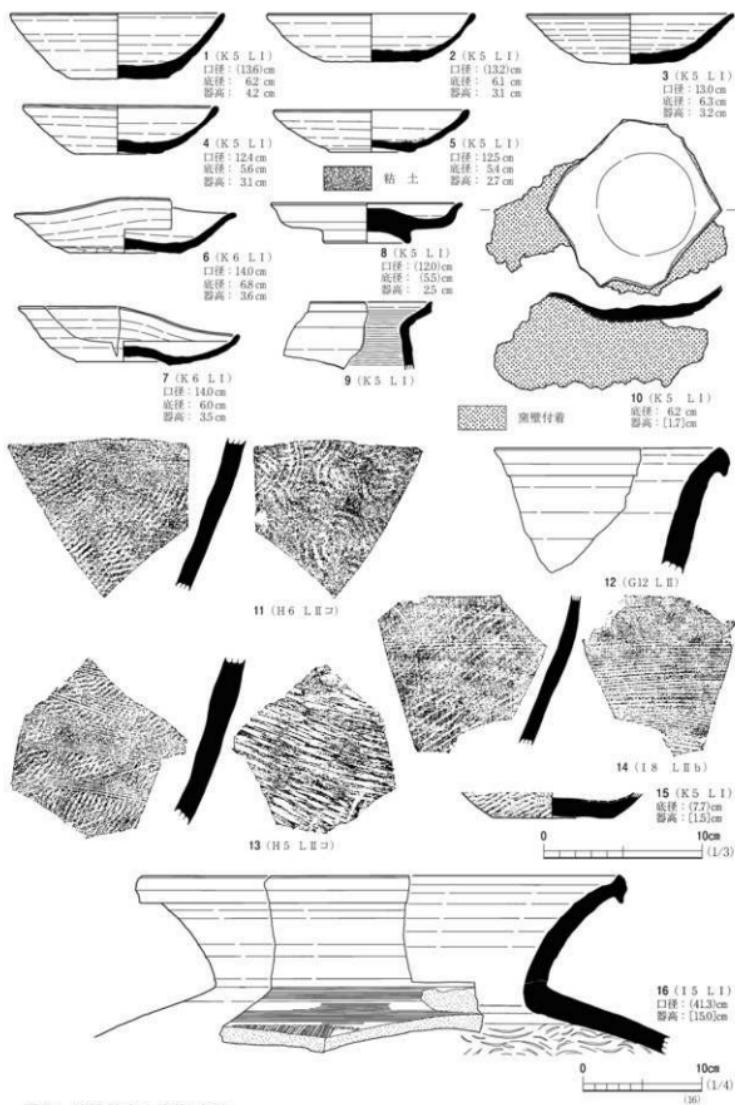


図99 遺構外出土遺物（3）

8は盤であるが、底部が肥厚して盛り上がっている。部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で短く外反する。9は灰色に還元した長胴壺の口縁部破片で、内面の調整はカキメ風のナデが施されている。11・13・14～16はタキ調整が施された壺である。16は灰白色の大型壺の破片で、頭部にカキメが施されている。内面には當て具痕が残る。

瓦 器 (図100-1～9, 写真64)

1～9は、調査II区北西部のK5, H6グリッドから出土した瓦器である。1～9の出土層位はLIIコである。同北西部では、LIIコの下層から平安時代の遺物包含層を確認している。1～9は底部外面が無調整で回転糸切り痕が認められるものの、いずれも器面がやや摩滅しているため細部の調整が明瞭に観察できない。1～3は器形が復元できた資料で、平高台状の底部から部が直線的に開く。9は、比較的厚みのある部が底部から直接立ち上がる。

鐵製品 (図100-10・11, 写真50・64)

10はLIIcから出土した刀子で、平安時代の所産と推測される。切先付近が遺存するが、やや内反りの刀身である。11は、調査II区北西部の斜面から出土した小刀である。出土層位はLIIコで、同層からは上記の瓦器が出土している。11の刀身は、鍛がない平造りである。また、身幅は比較的広く、寸詰まりな包丁形である。茎の端部は窄まり、目釘孔は茎の中央にあり、目釘や柄と思われる木質が付着している。

(香川)

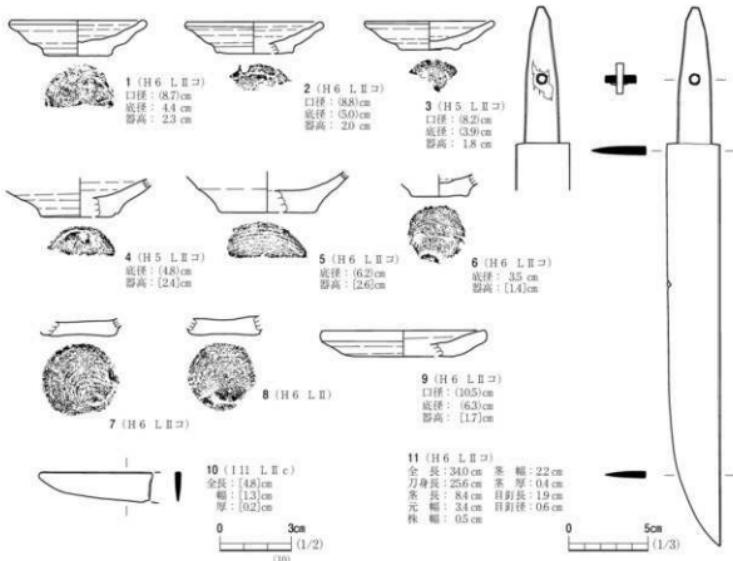


図100 遺構外出土遺物 (4)

第8節 まとめ

調査II区における平安時代の遺構には、竪穴住居跡・須恵器窯跡・土坑がある。SK10・25・32の各土坑は土師器を焼成した可能性があるもので、調査II区の成果としては須恵器・土師器の土器生産に関連した遺構の発見に代表される。

調査II区では平安時代の遺物包含層LIIc・IIIeを確認しており、少なくとも同時代の生活面が2時期以上あったものと推測される。平成22年度の第1次調査では主にLIIcを対象としたが、出土土師器を見る限りではLIIIe関連の土器も含まれているようである。そこで本節では調査II区から出土した土師器について概観し、土器の特徴から検出遺構の対応関係を確認する。

1. 土師器について

調査II区において、比較的まとまった量の土師器が出土した遺構はSI08・13、SK25である。しかし、出土土師器の遺存状態が全般的に悪いため、特に土器の分類は行わない。ここでは遺構単位で杯類を中心に出土土師器の特徴をまとめることとする。

SI08 杯類は、無台杯(図72-1～3・5)・高台付杯(同図4・6)の2種類が認められる。無台杯1の特徴は、内外面ともロクロナデ調整が施された土師質の土器(赤焼土器)であること、器面の色が灰白～淡黄色を呈すること、底径／口径比0.35、器高／口径比0.31であること、体部が内湾し口縁部で短く開く器形であること、底部～体部下端に手持ちヘラケズリによる再調整が施されていることなどである。他の杯類については遺存状態が悪く、詳細は不明であるが、SI08では内面黒色土師器と赤焼土器が混在する。その他の器種では、長胴壺の中に口縁部の屈曲が比較的弱いものが(図72-7・8)見られる。また遺構検出面の出土ではあるが、同図13のような丸底の大型鉢が出土している。SI08と同様の組成は、調査III区のSI06の出土資料に近い。

SI13 図77・78の掲載資料はその大半がℓ1からの出土品であるため、一括資料の抽出は困難である。しかし、SI13出土の土師器杯は未掲載遺物も含めて内面黒色の無台杯が主体であり、底部周縁～体部下端にかけて回転ヘラケズリ再調整を施しているものが多い。器形は、体部～口縁部まで内湾気味に開くか、または口縁部が微妙に外反する。また、図77-1のように器高が比較的深いものもある。長胴壺の口縁部は、頸部からの屈曲が比較的強い(図77-11・12、図78-1)。なお、ℓ1から須恵器杯(図78-3・4)も出土している。

SK25 SK25は、土師器焼成土坑の可能性が考えられる遺構で、遺構内堆積土にも破損品と思われる土器が含まれる。杯類は、無台杯(図94-5・7)・高台付杯(同図4・6)がある。各杯の内の調整は2次的に熱を受けたらしく不明なものが多いが、5・6についてはヘラミガキ・黒色処理が観察された。5の底部周縁から体部下端に手持ちヘラケズリが施されている。長胴壺の9は口縁部の屈曲が比較的弱い。SK25の出土資料は、SI08資料に類似する。

調査II区の3遺構から出土した土師器は、形態的な特徴からS I 08・S K25とS I 13に大きく分けることが可能である。ロクロ土師器の無台杯については、時期差を推測する一つの方法として法量変化に着目し、一般的な傾向として底径／口径比の縮小化が指摘されていることは周知のとおりである。表11は調査II区における無台杯類の底径／口径比、器高／口径比の度数分布表であり、比較資料として調査III区のS I 06・11のデータを併せて掲載した。また、図101は調査II区資料の底径／口径比、器高／口径比の合成図で、3カ所の楕円はそれぞれS I 06土師器・S I 11土師器・S I 11須恵器の分布エリアを示す。なお、S I 06・11は重複関係にあり、S I 06の方が新しい。

図101から、S I 06土師器エリアにS I 08・S K25・L II c 資料、S I 11土師器エリアにS I 13土師器資料、S I 11須恵器エリアにS I 13須恵器資料がおよそ含まれ、それぞれ器形の類似性が指摘される。このことから、S I 13の ℓ 1出土の土師器・須恵器は同時期性が予想される。また、S I 06・11の新旧関係から、S I 13よりもS I 08・S K25・L II cの方が新しいことが推測される。なお、S I 06・08・S K25で採取した炭化物の放射性炭素年代測定では、それぞれ近接した年代観が得られており(付章参照)、理科学的にも3遺構の同時期性に矛盾はない。

表11の底径／口径比について、S I 08・S K 25・L II cの土師器は、そのほとんどが0.34～0.39に取まる。L II cは喜多方市教育委員会が設定した2Tの第4層に対応し、調査II区における平安時代の第1遺物包含層としたものである。L II cから出土した土師器杯類には無台杯・高台付杯の2種類があり、無台杯の底径／口径比はおよそ0.40を境界としてS I 13と分離される。この傾向は調査III区のS I 06・11の関係とほぼ同様である。L II c出土杯類の口縁部は、外方に開くものと開

表11 底径·器高/口径比度数分布表

風速：●：SR01 ○：SR03 ◎：SRW03, □：S111, △：S113 土壌温：◎：S106, □：S108, △：S111, ▲：S113, ▲：SK25, ▲：L100

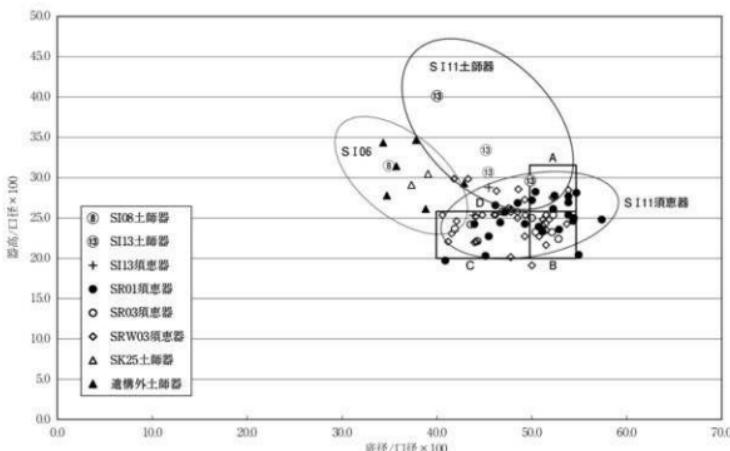


図101 調査II区出土杯指数分布

かないものが見られる。なお、図97-4については、体部下半の膨らみが弱い逆台形状の器形からS I 13資料に近いと推測され、底径/口径比についても0.43を示す。同4はおそらくL II cに混入したものと推測され、L II cの杯類はS I 06・08と同様に椀形が基本形である。杯類の再調整技法には手持ちヘラケズリ・回転ヘラケズリの2種類があり、無調整品は比較的少ない。この再調整から、L II cの出土土器は宮城郡2群土器(村田: 1995)以前に比定されるだろう。

L II c出土の高台破片は末広に開くもの(図97-15・16など)や、同図13のように断面が三角の短い高台破片がある。13の底部外面には高台との接合部に菊花状の接着痕(村田: 1995)が認められ、この調整痕からL II cの上限を9世紀第4四半期に置くことが可能になるかと思われる。その他、L II cから鉄鍋模倣の可能性がある把手状の小破片(図98-9)が出土している。

一方、S I 13出土資料は、第1遺物包含層に先行するものと推測され、杯類は無台杯を中心である。また、須恵器杯の出土から、S I 11・SR 01~03との関連性も窺える。なお、S I 13に近い本土層(図59: K-K')の堆積状況からS I 13出土とした遺物は、第2遺物包含層のL III E(第2遺物包含層)に起因する可能性もある。

S I 13資料には比較的器形が深い図77-1が含まれていたが、S I 11資料の器高/口径比を見るとおよそ0.31~0.36、0.41~0.45に二分され、土器器杯については大きく2種類の形状的な規格があったものと推測される。S I 11出土土器器杯の口縁部は内湾気味の体部からそのまま立ち上がるものが多いため、S I 13資料では口縁部がわずかに外反するものが認められるため、S I 11・13は椀形杯への直前段階の時期に位置づけられるであろうか。土器器の本格的な磁器指向型開始は9世紀中頃とされる(菅原: 1996)。

2. 須恵器について

S R01～03は遺存状態が非常に悪く、窯体の構造を復元することは困難である。立地斜面や遺存部の状況から半地下式の窯窓であったと推測されるが、天井部の構架材などは確認できなかった。また、灰原についても浸食された可能性がある。

S R01・03・S RW03から確認された器種は無台杯・盤・蓋・甕であるが、出土数から生産の主体は杯である。杯のロクロからの切り離し技法は大半が回転ヘラ切りであり、当該期の土師器と異なる。須恵器杯には火だすき(図82-7など)や、口縁部に幅1cm前後の変色帯(図81-10など)が巡るものがあり、重焼きによる焼成であったと推測される。焼台や平石などは出土していない。窯跡の内外から大型の須恵器甕の破片が出土しているが、焼台として利用された可能性もある。

須恵器杯の還元色は灰色または黄みを帯びた色調が多く、全般的に還元焰焼成は良好でない。また堅緻な赤褐色を呈し、一度も還元焰焼成を経ていないものも多い。土師器のような浅～淡黄色を呈する杯の中には、比較的の遺存状態が良好なものも認められた。窯跡周辺から出土する杯は性格上、大半が破棄品と思われるが、還元不良品についても流通には乗らなかった可能性がある。

調査II区から出土した須恵器杯の分類については、山中編年案(1999)に準拠し、底径/口径比が0.50～0.55で、器高/口径比が0.27～0.32のものをA類、0.20～0.26のものをB類とした。底径/口径比が0.40～0.50で、器高/口径比が0.20～0.26のものをC類、0.27～0.32のものをD類とした。A～D類は、山中編年案のD～G類にそれぞれ対応する。また、体部の形状から直線的なものを1類、曲線的なものを2類としたが、明確な傾向は見出せない。

調査III区S I 11の須恵器杯(図116)は、器高/口径比のピークが0.29にあり、A・D類を主体として、他にB類が認められる。土師器・須恵器杯の法量的な構成から、S I 11資料は山中編年の「ホ」グループに類似する可能性がある。一方、調査II区の須恵器杯は、器高/口径比が0.26以下となるB・C類が主体的である。B・C類は、山中編年案のE・F類に対応するもので、当該期の中通り地方では不在とされる須恵器杯である(山中：2000)。

以上、出土土師器・須恵器類から調査II区の成果を要約すると、以下のとおりである。

- ① 関連遺構：S I 08・S K25(土師器焼成土坑)・第1遺物包含層(L II c)

時 期：9世紀後半～10世紀前葉

器 種：土師器(含赤焼)無台杯・有台杯(器形：椀形、回転糸切)

底径/口径比0.34～0.39、器高/口径比0.25～0.35

- ② 関連遺構：S I 13・S R01～03(須恵器窯跡)・第2遺物包含層(L III E)

時 期：9世紀中葉～後葉

器 種：土師器無台杯(器形：杯形、椀形、回転糸切)、須恵器無台杯(回転ヘラ切)

土師器…底径/口径比0.40～0.50、器高/口径比0.30～0.40

須恵器…B・C類(器高/口径比0.20～0.26)主体

(香川)

第4章 調査Ⅲ区の遺構と遺物

第1節 概要 (図102)

調査Ⅲ区は今回の事業に関連する調査範囲の中では南西部にあたる部分である。グリッドとしては、東西がG～Lグリッド列、南北が17グリッド列以南となる。地形的には調査Ⅰ区に位置する3段目の中段丘面から落ちる急傾斜の崖面、2段目の中段丘面、最下位の平坦面を含む。25グリッド列以北においては2段目の中段丘面の形成が顕著であり、最下位の平坦面までが調査範囲となる。26グリッド列以南では平坦面は形成されず、北西に向かって下る比較的緩やかな斜面となる。この部分では最下位の平坦面は遺跡範囲から除外されている。平成22年度の調査範囲は、このうち調査Ⅲ区北部の17グリッドの調査Ⅱ区との境界から23グリッド列までの3,000m²となっており、2段目の中段丘および最下位の平坦面までが調査対象となる。

2段目の中段丘は、標高が175～176.5m程度の棚状の平坦面である。東側の3段目の中段丘面との高低差が15m程あり、西側は最大1.5m程の高低差をもって最下位の平坦面へと繋がる。東西10～18mの幅をもち、南北の全長は80m程度の長さに及ぶ。中段丘上も単純に平坦ではなく、20～24グリッド列は東からの沢2、南東からの沢3とする沢地形があり、高さにして1m程周囲から窪んでいる。この中段丘は、次節でも述べる断ち割り調査によって、阿賀川による洪水堆積物に加え、崖面上位の斜面崩壊による堆積物が、河岸段丘状に取り残されたことにより形成されたものと想定される。最下位の平坦面は、標高170～173mを測る、西方に向かって下る緩斜面である。洪水堆積土である砂・シルトのみが認められ、斜面からの崩落土は認められない。北端にはⅡ区南端の沢へと連なる沢4、21グリッド列には西へと下る沢1が下刻される。西端は次節で述べるように新期の洪水層によって、遺物包含層が切られている。

調査区内からは堅穴住居跡2軒(6・11号住居跡)、土坑8基(18・21～24・29～31号土坑)、溝跡1条(5号溝跡)、堅穴遺構1基(1号堅穴遺構)、小穴25個が検出されている。土坑には、焼成土坑やロクロピットといった土師器の生産に関連すると思われる遺構も含まれている。これらの遺構はいずれも2段目の中段丘上に位置し、特に平坦であるJ 17～19グリッドに集中する。北東端で検出された住居跡2軒は平安時代のものであり、同時期の包含層に被覆されていた溝跡および土坑もこれに近い時期の遺構と考え得る。小穴に関してはこれらの遺構との重複が認められ、いずれも住居跡や土坑よりも新しいと判断される。また、堅穴遺構は近世以降の遺構である。これ以外の部分については、20～23グリッド列の沢地形堆積土が平安時代の遺物包含層となっている。最下位の平坦面は、遺物が少量出土するに過ぎない。

出土遺物は9世紀代の土師器が大半を占め、同時期の須恵器が次ぐ。その他は、これ以降の遺物、特に陶器や鉄製品の出土が目に付く程度である。

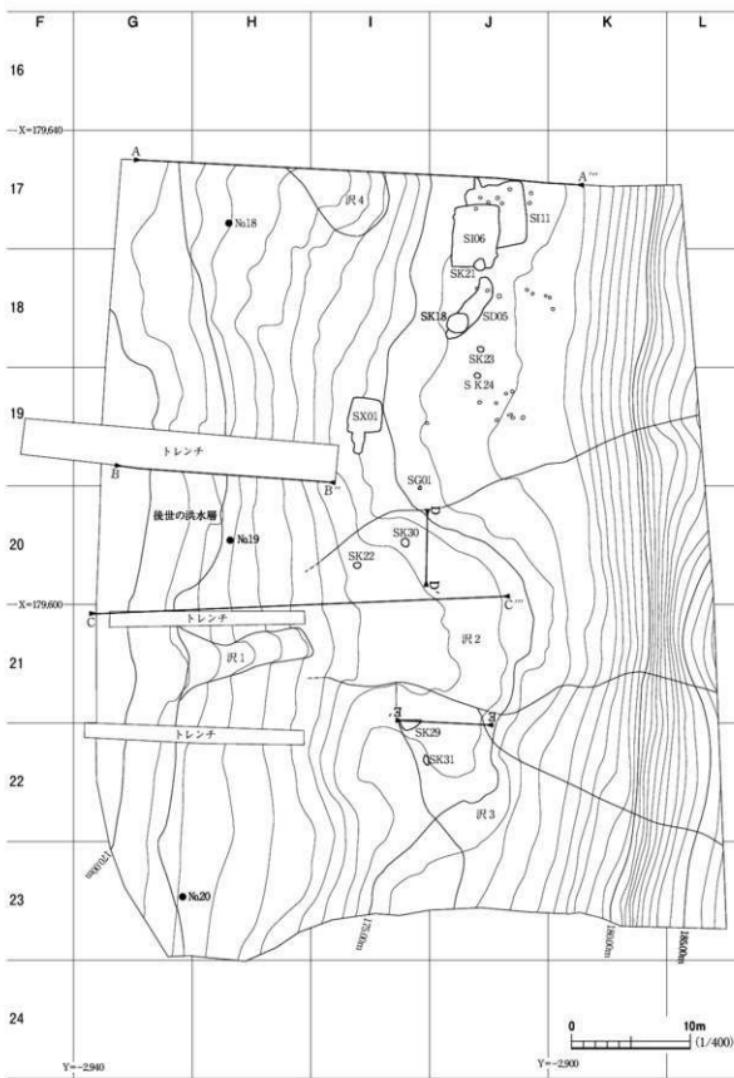


図102 Ⅲ区遺構配置図

第2節 基本土層(図103~106、写真67~72)

遺構内堆積土を除く調査区内基本土層の観察は、II区との調査区境(A断面)、喜多方市教委の設定した9T(B断面)、21グリッド列に設定した畦(C断面)において行った。結果、洪水等の河川による堆積物、東方の斜面上位からの崩落土が複雑に堆積する状況が認められた。これらの堆積物に対してII層を遺物包含層、III層上面を遺構検出面とする、I~IV層(L I~IV)に大きく分けて考えることとした。各層はその分布や土質の違いによってさらに細分される。その他に、沢1~4と呼称した旧流路状の地形部分についてはC断面およびJ 20グリッド(D断面)、I・J 22グリッド(E断面)に設定した畦で観察を行った。これらは遺構としては取り扱わないものの、堆積土層については基本土層とは分けて遺構内堆積土と同様の扱いとした。以下に各層の細分、堆積状況および特徴について詳述する。

L Iは東部の小段丘面を被覆する表土層であるL I a、その下位に認められる包含層上に乗る斜面地山粘土の崩落土層であるL I b、最下位平坦面を被覆する砂質の表土層であるL I cの3層に分けられる。

L IIは平安時代の遺物包含層を一括した。図103のA断面に見られるL II a~cは、北東部の小段丘上にはほぼ水平に堆積する土層である。L II aは黒味がかったシルトで斜面崩落前の旧表土層と考えられる。L II b・cは砂質土で、この周辺の遺構を埋めている。大部分の遺物はこれらから出土する。L II d・eは最下位平坦面に認められる。L II d 1はH 17・18グリッドにのみ認められるシルト層である。L II d 2は西方に下って堆積する粘性の強いシルト層で多量の炭化物を含んでいる。20グリッド列以北に堆積し、西側はL II Rによって切られている。このL II d 2はII区のL III Eに近い土質であるが、調査区境に沢が入り込むため両層の連続は確認できていない。L II eについてはL II d 1の下位でのみ確認された砂質土層である。L II d・e層からの遺物出土点数は少ない。

L II Rとしたものについては、調査区西端に堆積する新しい時期の洪水層である。陶磁器片や角釘が出土しており、近世前後の堆積と想定できる。なお、B断面に認められるL II R 9は、地震を要因とすると考え得る円弧すべりによる地すべり層である。L II R 9 gとした層は土師器を包含しており、元はL II d 2に比定される。この上にはL II R 9 fとした比較的の目粗い砂が確認でき、これはII区L III Dと類似している。これらよりも上位のL II R 9 bやL II R 9 dはII区L IIに近い暗色系の砂質土である。ここから、III区の最下位平坦面については、元来II区と類似した堆積物が存在していたが、現況では失われている可能性を想定できる。

L IIIは遺構検出面以下の土層のうち、遺跡よりも古期の斜面崩落土層上の堆積物および河川の側方付加堆積物と考え得る土層をここにまとめた。斜面崩落土については観察地点ごとに堆積状況が異なっており、断面AとCにおいては統一を図らず別記号によって細別した。L III a~hは北東部



図103 III区基本土層（1）

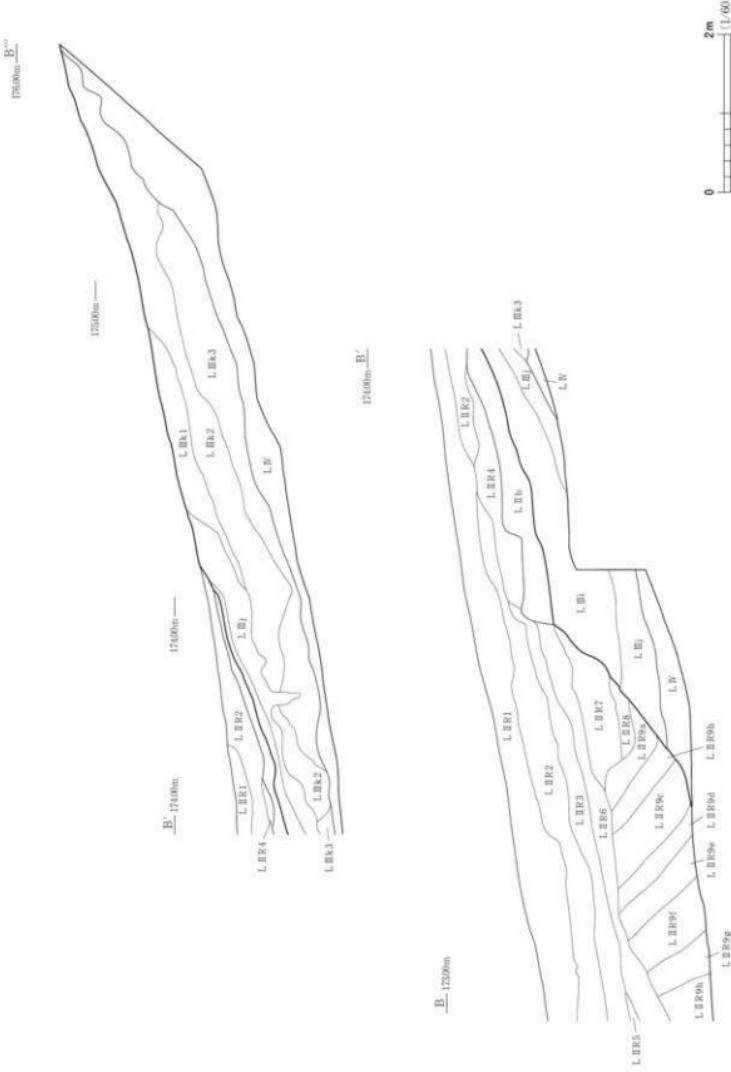


図104 III区基本土層（2）

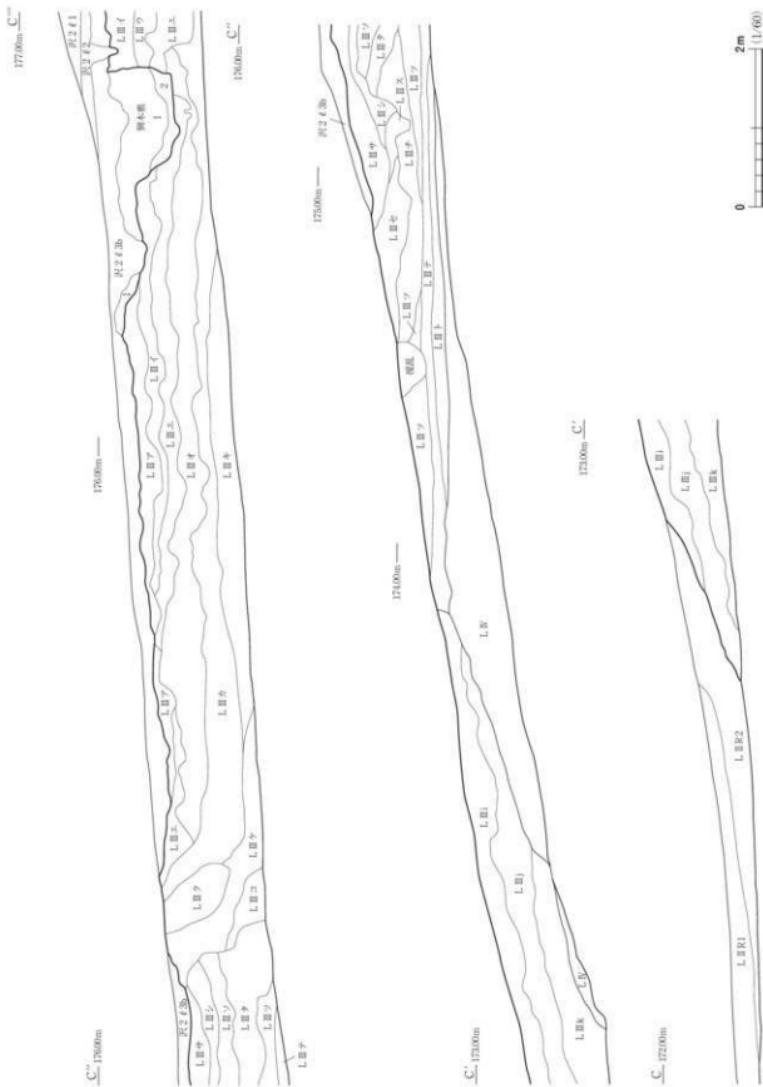


図105 Ⅲ区基本土層（3）

Ⅲ区基本土層 A-A'

L Ia	褐褐色土。10YR3/3 (小颗粒少)。光上擦。	L II R1	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/3	L II R1	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/3
L I b	明黄褐色土。10YR6/6 (砾石层底土)	L II R2	褐褐色砂质土。IOYRA/1	L II R2	褐褐色砂质土。75YRA/1
L I c	褐褐色土。10YR3/3 (凹凸物堆积)	L II R3	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/3	L II R3	1.45-45° 黄褐色砂质土。75YRA/1
L I d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR3/3 (凹凸物堆积)	L II R4	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4	L II R4	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4 (凹凸物堆积)
L I R2	褐褐色砂质土。10YR3/3 (凹凸物堆积)	L II R5	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR3/3	L II R5	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR3/3 (凹凸物堆积)
L I R3	褐褐色砂质土。10YR4/4 (凹凸物堆积)	L II R6	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L II R6	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3 (凹凸物堆积)
L I R7	褐褐色砂质土。10YR2/2 (炭化物、块状风化带)	L II R7	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L II R7	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L II b	褐褐色土。10YR1/1 (炭化物少)	L II R8	褐灰褐色砂质土。IOYRA/1	L II R8	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/1
L II c	褐褐色砂质土。10YR3/3 (炭化物少)	L II R9	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/3	L II R9	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/3 (凹凸物堆积)
L II d	褐褐色土。10YR3/4 (炭化物多)	L II R9a	褐灰褐色砂质土。IOYRA/1	L II R9a	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/3 (凹凸物堆积)
L II e	褐褐色砂质土。10YR4/4	L II R9b	褐灰褐色砂质土。IOYR5/3	L II R9b	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/3 (凹凸物堆积)
L III a	褐褐色土。10YR2/2 (明黄色风化土, 小颗粒少)	L II R9c	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/1	L II R9c	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/6 (凹凸物堆积)
L III b	褐褐色土。10YR4/4 (炭化物堆积)	L II R9d	褐灰褐色砂质土。IOYRA/1	L II R9d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/6 (凹凸物堆积)
L III c	褐褐色土。10YR3/1 (炭化物多)	L II R9e	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR4/3	L II R9e	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/6 (凹凸物堆积)
L III d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/3	L II R9f	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/2 (II的颗粒带)	L II R9f	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/2 (II的颗粒带)
L III e	1.45-45° 黄褐色砂质土。10YR1/1 (小颗粒少)	L II R9g	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L II R9g	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L III f	褐褐色土。10YR1/1 (小颗粒少)	L II R9h	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L II R9h	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L III g	1.45-45° 黄褐色砂质土。10YR4/4 (块状风化带)	L II d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4	L II d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4
L III h	1.45-45° 黄褐色砂质土。10YR3/3 (块状风化带)	L II d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4	L II d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4
L III i	褐褐色土。10YR4/4 (块状风化带, 破片入土)	L III j	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L III j	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L III j	褐褐色土。10YR3/4 (块状风化带, 破片入土)	L III k	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR4/4	L III k	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR4/4
L IV	1.45-45° 黄褐色砂质土。10YR5/4 (炭化物含碳量高, 颗粒少)	L III k	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L III k	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
		L IV	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/2 (1.45-45° 明黄色风化土, 小颗粒少) (炭化物含碳量高, 颗粒少)	L IV	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/2 (1.45-45° 明黄色风化土, 小颗粒少)

透镜带地层 A-A'

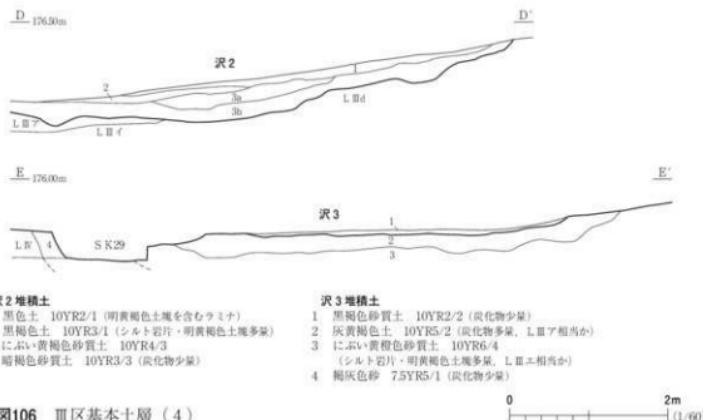
1	褐褐色砂质土。10YR2/2 (小颗粒多)	1	褐褐色砂质土。10YR3/3 (黑色, 小颗粒多)
2	褐褐色土。10YR2/1 (块状风化带)	2	黑色土。10YR2/1 (块状风化带)
3	褐褐色土。10YR3/3 (明黄色风化带, 小颗粒少)	3	褐色砂质土。10YR3/3 (明黄色风化带, 小颗粒少)
4	褐褐色土。10YR3/3 (明黄色风化带)	4	褐色砂质土。10YR4/6 (块状风化带, 小颗粒少)
LW		LW	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4 (块状风化带, 小颗粒少)

Ⅲ区基本土層 B-B'

L I a	褐褐色土。10YR3/3 (小颗粒少)。光上擦。	L II R1	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/3	L II R1	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/3
L I b	明黄褐色土。10YR6/6 (砾石层底土)	L II R2	褐褐色砂质土。IOYRA/1	L II R2	褐褐色砂质土。75YRA/1
L I c	褐褐色土。10YR3/3 (凹凸物堆积)	L II R3	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/3	L II R3	1.45-45° 黄褐色砂质土。75YRA/1
L I d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR3/3 (凹凸物堆积)	L II R4	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR2/1 (块状风化带)	L II R4	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR2/1 (块状风化带)
L I R2	褐褐色砂质土。10YR3/3 (凹凸物堆积)	L II R5	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR2/1 (块状风化带)	L II R5	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR2/1 (块状风化带)
L I R3	褐褐色砂质土。10YR4/4 (凹凸物堆积)	L II R6	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR3/3 (凹凸物堆积)	L II R6	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR3/3 (凹凸物堆积)
L I R7	褐褐色砂质土。10YR2/2 (炭化物, 块状风化带)	L II R7	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L II R7	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L II b	褐褐色土。10YR1/1 (炭化物少)	L II R8	褐灰褐色砂质土。IOYRA/1	L II R8	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/1
L II c	褐褐色砂质土。10YR3/3 (炭化物少)	L II R9	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/3	L II R9	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/3 (凹凸物堆积)
L II d	褐褐色土。10YR3/4 (炭化物多)	L II R9a	褐灰褐色砂质土。IOYRA/1	L II R9a	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/3 (凹凸物堆积)
L III a	褐褐色土。10YR2/2 (明黄色风化土, 小颗粒少)	L II R9b	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L II R9b	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/3 (凹凸物堆积)
L III b	褐褐色土。10YR4/4 (炭化物堆积)	L II R9c	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/1	L II R9c	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/6 (凹凸物堆积)
L III c	褐褐色土。10YR3/1 (炭化物多)	L II R9d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR4/3	L II R9d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/6 (凹凸物堆积)
L III d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYRA/3	L II R9e	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/2 (II的颗粒带)	L II R9e	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/2 (II的颗粒带)
L III e	1.45-45° 黄褐色砂质土。10YR1/1 (小颗粒少)	L II R9f	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L II R9f	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L III f	褐褐色土。10YR1/1 (小颗粒少)	L II R9g	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L II R9g	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L III g	1.45-45° 黄褐色砂质土。10YR4/4 (块状风化带)	L II d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4	L II d	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4
L III h	1.45-45° 黄褐色砂质土。10YR3/3 (块状风化带)	L III j	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L III j	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L III i	褐褐色土。10YR4/4 (块状风化带, 破片入土)	L III k	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR4/4	L III k	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR4/4
L III j	褐褐色土。10YR3/4 (块状风化带, 破片入土)	L III k	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3	L III k	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/3
L IV	1.45-45° 黄褐色砂质土。10YR5/4 (炭化物含碳量高, 颗粒少)	L IV	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/2 (1.45-45° 明黄色风化土, 小颗粒少) (炭化物含碳量高, 颗粒少)	L IV	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR6/2 (1.45-45° 明黄色风化土, 小颗粒少)

伴木床地层 C-C'

1	褐褐色砂质土。10YR3/3 (黑色, 小颗粒多)	1	褐褐色砂质土。10YR3/3 (黑色, 小颗粒多)
2	黑色土。10YR2/1 (块状风化带)	2	黑色土。10YR2/1 (块状风化带)
3	褐褐色土。10YR3/3 (明黄色风化带, 小颗粒少)	3	褐色砂质土。10YR4/6 (块状风化带, 小颗粒少)
4	褐褐色土。10YR3/3 (明黄色风化带)	4	褐色砂质土。10YR4/6 (块状风化带, 小颗粒少)
LW		LW	1.45-45° 黄褐色砂质土。IOYR5/4 (块状风化带, 小颗粒少)



の平坦面で観察される土層である。L III h とした流路状の落ち込み上に L III a・f・g とした斜面から崩落した黒色土・岩屑を挟みながら、その他のシルト・砂が水平に近い状態で堆積することにより、遺構集中部の平坦な基盤地形を形成している。L III i～k は西部の新期洪水層範囲沿いに認められる、褐色砂と炭化物を含む暗褐色シルトの互層である。層理が川へ向かって急傾斜で下り、L IV 堆積後に側方付加された河川堆積物と考え得る。21 グリッド以南では L I c 直下でこれらの層が露出する。L III ア～チは C 断面で確認された層順である。崩落土層が A 断面よりも大きな塊として認められ、これらが A 断面での L III c 以下の褐色系の砂質土の堆積中に崩落したものと想定される。L III ア～コ、L III サ～チが崩落時期の単位となると思われる。L III ツ～トは水平堆積し、L III トは A 断面 L III g に類似した細粒の岩屑が混じる層である。

L IV は L III に比して目の細かい砂で、炭化物を含む暗褐色のシルト・砂質土のラミナを複数含んでいる。図103のA断面にはこれらのラミナも示したが、川に近い西方でやや乱れがあるものの、層理がほぼ水平を呈しているのが見て取れる。

沢1堆積土は土層断面図を示していないが、暗褐色土の単層で L II R 2 とした新期の洪水層へと繋がっており、近世前後の流路と考えられる。若干の遺物が出土する。沢2は ℓ 1 が L II a に類似し、ℓ 2 は崩落土を多量に含む。ℓ 3 は上部の a と下部の b に分けられる。L II b に類似する ℓ 3 b は、やや多くの遺物を含んでいる。沢3堆積土は 4 層を確認した。うち遺物を包含するのは ℓ 1 で、ℓ 2 との層理面に包含する割合が高い。炭化物を多量に含む ℓ 2 は、周辺に所在する遺構の検出面となっている。ℓ 3 以下から遺物は出土しない。沢4堆積土について、Ⅲ区内で確認できるのはⅡ区沢 ℓ 4 とされた層のみである。Ⅱ区の土層観察では、ℓ 4 は新期洪水層へと繋がっていくことが確認されており、これはⅢ区内での土層観察では L II R 2 に比定される。これよりこの沢は近世前後に形成されたものと推定できる。

(山元)

第3節 壁穴住居跡

Ⅲ区の1次調査では、2軒の壁穴住居跡を確認した。これらの住居跡は、調査区の北東端で重複して確認されたもので、いずれも平安時代のものである。この他、今回確認された住居跡の北側では、未調査ではあるが、ほぼ同様な時期と考えられるⅡ区の14号住居跡の存在が確認されている。

6号住居跡 S I 06

遺構 (図107・108、写真73~76)

本遺構は、調査区北東部のJ 17・18グリッドに位置する。2段目の中段丘北部の平坦面に構築され、L III b上面で検出した。S I 11、SK 21と重複し、新旧関係はS I 11が古く、SK 21が新しい。周辺にはSD 05、SK 18が隣接する。

平面形は長方形で、東・西壁が若干東へ傾くため平行四辺形となる。規模は長軸5.18m、短軸4.05mを測り、検出面からの深さは最大23cmである。東壁は急角度で立ち上がり、それ以外の部分では西に向かって壁高が低くなる。床面は平坦である。貼床は、カマドのある住居跡南部に認められ、硬く縮まっている。また、東壁から炉の間とカマドの周辺はさらに硬く踏み縮まっている。

堆積土は4層に細分された。 ℓ 1~3はレンズ状堆積を示す自然堆積土、 ℓ 4は黄褐色粘土粒を多く含む貼床である。 ℓ 1は基本土層のL II b、 ℓ 2がL II cを主体とするものと考えられる。

屋内施設としては、カマド1基、炉1基、ピット4個が確認された。カマドは住居跡南東隅付近の東壁に構築され、袖部は貼床の上で確認された。袖先端部の図110-4・5の土師器長胴甕は、それぞれ倒立させた状態で袖の構築材として設置されている。焚口の幅は30cmで、底面での奥行は37cmである。長軸67cm、短軸58cmと焚口外まで赤褐色に焼土化し、その厚さは最大8cmを測る。さらに焼土面の中央部は焼き縮まっている。カマド内堆積土は5層に分けられ、 ℓ 1が流入土、 ℓ 2がカマドの構築材と思われる焼土塊や粘土塊を含む土。 ℓ 3は焚口付近にある木炭層である。 ℓ 4・5はカマド袖の構築土である。 ℓ 2はカマド上部を壊した土を埋め戻したものと考えられる。

カマドの周囲には土器が多数出土しているが、特に図108の下部に示したように、カマドの奥壁底面には、図109-19・20に示した甕2つが伏せ置かれ、北側の19の上には、同図1・4・8・11に示した土師器杯が4つ重ねられて出土した。堆積状況と併せて見るに、これらの土器は、カマド上部を壊し、片付けを行った後に底面に土器を配置し、 ℓ 2としたカマドの廃土で埋め戻されたものと考えられる。この行為は、カマドの廃絶に伴い行われたものであろう。また、カマドの北側に見られる白色粘土範囲は1cm程の厚さのもので、カマド袖に被さるように貼られたものと考えられる。

カマド前方の床面中央付近では、楕円形を基調とする明赤褐色焼土範囲が確認でき、これを炉と判断した。炉は、床面が長軸80cm、短軸58cmの範囲で焼土化し、その厚さは4cmまで達する。

ピットは、住居の隅付近と床面中央から4個確認した。そのなかで、明確な柱穴は確認されてい

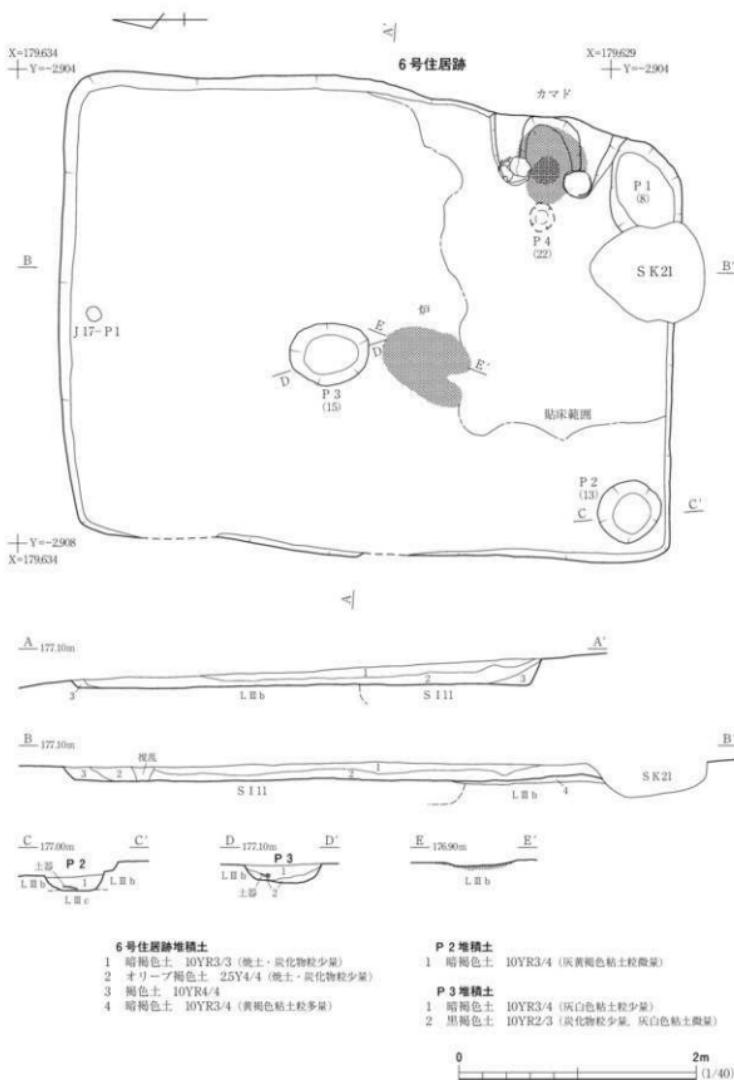


図107 6号住居跡 (1)

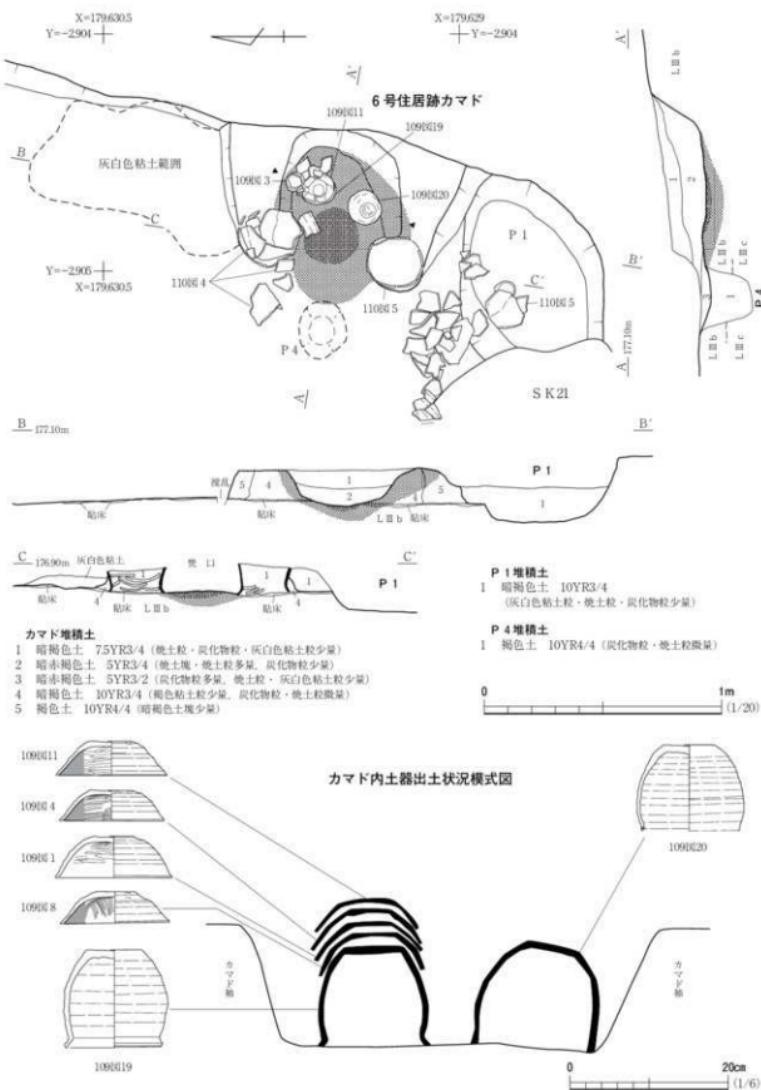


図108 6号住居跡（2）

ない。P 1 はカマド右脇で確認され、貯蔵穴と考えている。P 2・3 は長軸55cm前後のもので、検出面からの深さは14cm前後である。住居内堆積土に近い土で埋没する。性格は不明であるが、P 3 は ℓ 2 に炭化物粒を含むことから、隣接する炉に関連する可能性がある。P 4 はカマド焚口で確認され、貼床を掘り込んで構築される。堆積土の上部が焼けていることから、カマド機能時には埋め戻されていたものと考えられる。性格は不明である。

遺 物 (図109～111、写真85・86)

出土遺物は、土師器片2,040点、須恵器片9点、石器1点、粘土塊2点である。主に住居跡南部から出土している。土師器は杯類と甕類に分けると、杯類は全体の6割以上を占める。須恵器は全て杯で、数が極端に少ない。このうち、土師器27点、須恵器1点を図示した。

図109-1～12はロクロ整形の土師器杯である。いずれも、口縁端部が外反する特徴を持つ。1・3は大振りかつ深めで、体部が内湾する器形である。2は同様に大振りで内湾する器形であるが、これらよりも浅い。4～10は体部下端が内湾気味ではあるが口縁部に向かって外傾する度合が強く、全体としては浅めの器形となる。11は直線的に外傾する器形である。底部の切り離しは、回転糸切り痕が1・4・6・12で確認されるが、それ以外は再調整のため確認できない。体部下端から底部の調整は、ロクロおよび手持ちヘラケズリのものが多く、1・6のように再調整のないものも認められる。3は乾燥が進んでから体部上位まで回転ヘラケズリを加えられ、表面が平滑なミガキ状の効果を得ている。内面調整はいずれもヘラミガキが認められる。黒色処理は2・3・5・6・9に明瞭に認められるが、4・8は痕跡が窺える程度で、これら以外は確認できない。

図109-13は須恵器杯である。小さめの底部から内湾気味に立ち上がる器形を呈する。底部には手持ちヘラケズリが施されている。

図109-14～17は土師器高台付杯である。内面ヘラミガキがなされる。器形のわかる14・17は、14に短脚、17に長脚が取り付き、杯部は体部から内湾気味に立ち上がり、口縁部端が外反する器形である。器面調整では、杯部下端に回転ヘラケズリ、内面黒色処理が施される。特に14は、陶器碗の器形を模倣したものと考えられる。15・16は脚部から杯底部の破片で、長脚が取り付く。

図109-18～20、図110-1・2は土師器甕類である。いずれも、口縁部が「く」字状に屈曲し、端部は摘み上げられる。底部は平底である。図109-18～20、図110-1・2は、胴部に丸味をもつ小型の甕である。口縁部から底部までがロクロ整形される。図109-18～20、図110-1は球形状となるのに対し、図110-2はこれらよりもやや大きく、胴長である。底部の切り離しは、図109-18・20、図110-1に回転糸切りが認められる。図109-18・19の底部は手持ちヘラケズリが施される。また、図109-18は、焼成前に胴部下半に孔が穿たれており、その他の甕とは異なる使用法がされた可能性がある。

図110-3～5は長胴甕である。口縁部から胴部上半までがロクロ整形され、内面中位以下にはヘラナデが認められる。3・4は胴部下半の平行タタキメの上から中位に、5は胴部下半にヘラケズリを施す。3・4では胴部中央、5では胴部下部に、接合痕および段差が見られ、作りの違う口

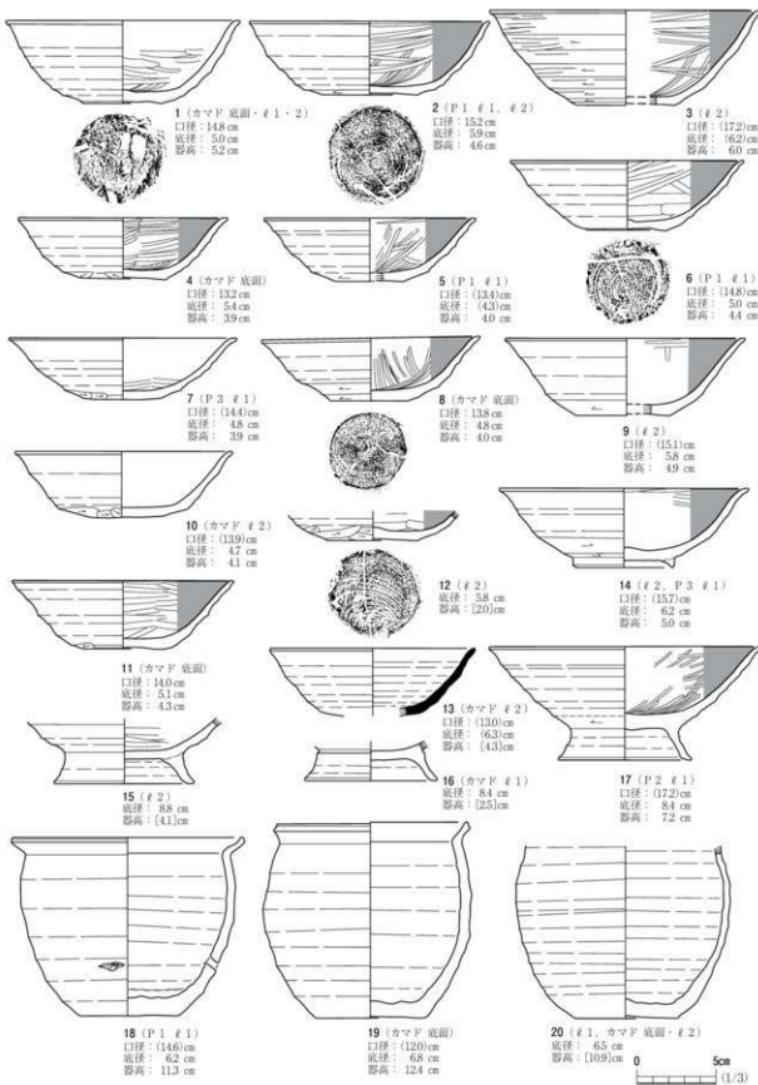


図109 6号住居跡出土遺物（1）

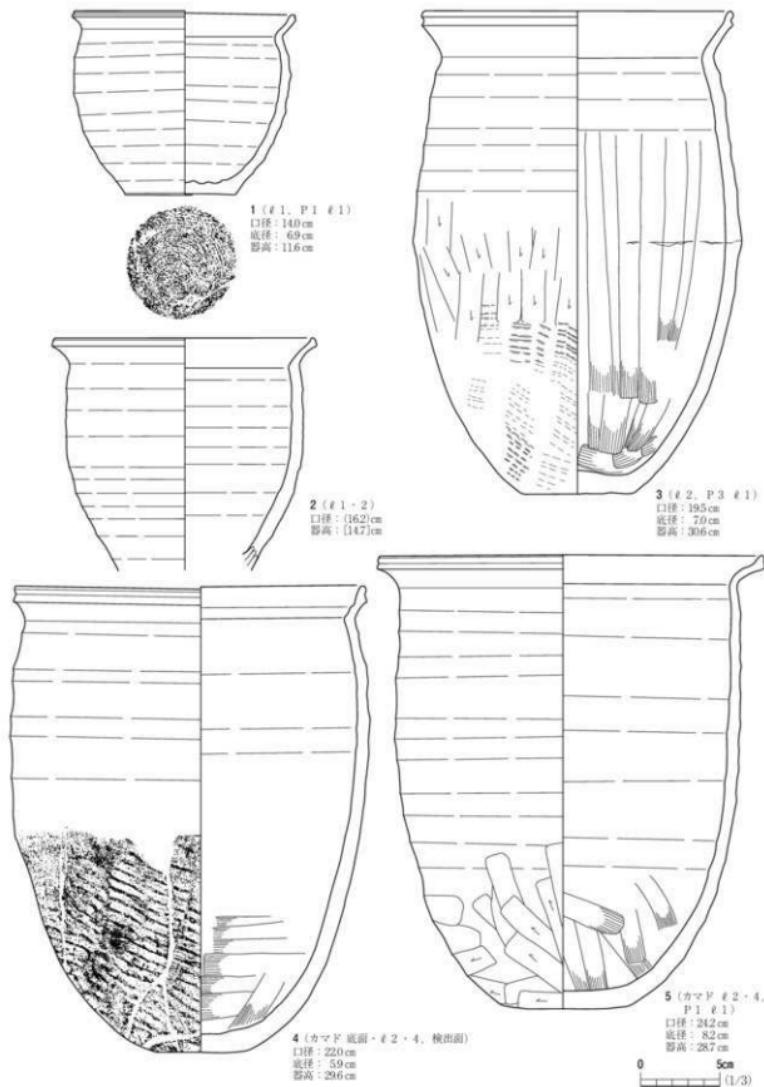


図110 6号住居跡出土遺物（2）

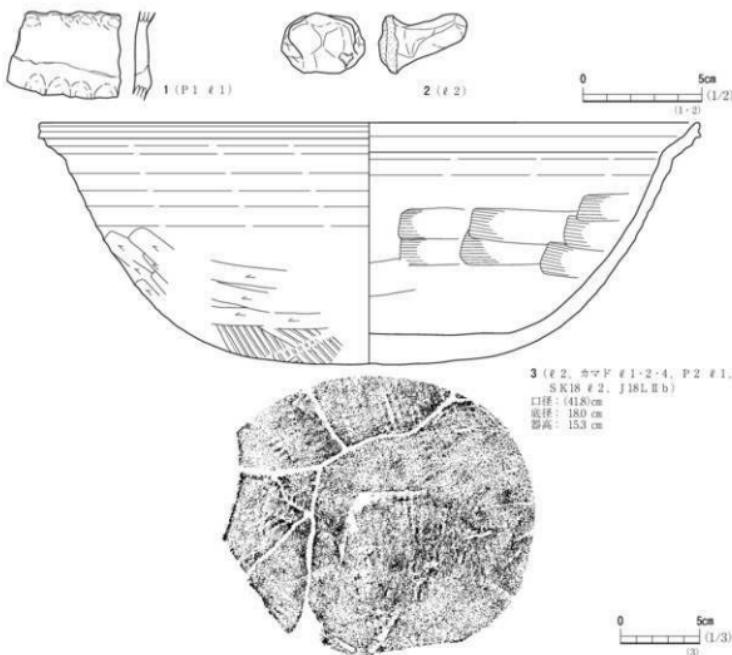


図111 6号住居跡出土遺物（3）

縁部と底部とを接合した後に外面にケズリ、内面にナデを加えたと考えられる。

図111-1は土師器筒型土器である。外面には、輪積痕と指頭痕が2段に認められる。胎土には、太平洋側の粘土に含まれる白色針状物質が認められることから、搬入品の可能性が高い。

図111-2は土師器双耳壺の把手である。胴部の接合面から剥がれたものである。

図111-3は土師器鍋である。約3割が遺存する。口縁から体部上半はロクロ整形され、底部から体部下半にかけては、タキ整形後にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。この他、本資料はSK18出土土器と接合した。

まとめ

本遺構は、長軸方向が北を向く長方形を呈する東カマドの住居跡である。明確な柱穴は有さず、床面中央には炉が配される。カマド袖の構築材には長胴甕が使用され、廃絶時には、土器を配置するなどのカマドに関わる祭祀行為が認められる。遺構の時期は、S I 11との重複関係および出土遺物から9世紀末葉と考えられる。

（國 井）

11号住居跡 S I 11

遺構 (図112・113、写真77~80)

本遺構は、調査区北東部のJ 17グリッドに位置する。遺構検出面はL III b上面である。S I 06と重複しており、新旧関係は本遺構の方が古い。北側にはⅢ区のS I 14が隣接する。

平面形は南北方向が若干長い方形を呈し、主軸方位は北からやや西に傾く。規模は長軸5.30m、短軸4.98mを測り、検出面からの深さは最大61cmである。周壁は全体的に急角度で立ち上がり、床面はほぼ水平である。貼床は壁際を除くほぼ全面に施される。踏み締まり範囲は、カマド周辺から床面の大半に確認された。さらに、床面の東壁際では貼床上に灰白色粘土の堆積が認められた。

堆積土は6層に分けた。 ℓ 1・2はレンズ状の堆積を示しているが、土器や炭化物粒、粘土塊や黄褐色土粒等が含まれることから人為堆積と考えられる。 ℓ 3・4は、壁際で三角状に堆積することから自然堆積と考えられる。 ℓ 5は貼床上の灰白色粘土を含む土で、P 3がこの上面で検出されており、さらに貼床上に擦り付けられたような堆積状況から、住居機能時に追加された床面を考えた。 ℓ 6は褐色土粒や黄褐色粘土塊を含む貼床である。

屋内施設としては、カマド1基、炉1基、焼土化範囲、ピット4個が確認された。カマドは住居北西隅付近の北壁に構築され、袖と煙道が確認された。袖は貼床上に造られ、袖構築材としてS I 06のカマドと同様に、図115-4・5の土師器甕を伏せて使用している。奥壁上端は住居外へと飛び出すような形態である。煙道は北壁から1m程張り出す。先端から緩やかに下り、奥壁付近は平坦となる。カマドの寸法は焚口幅が46cm、底面における奥行は63cmを測る。底面は、焚口外からカマド袖上までの長軸80cm、短軸68cmの範囲が赤褐色に焼土化し、その厚さは最大8cmである。その中央部では焼き締まりを確認した。カマド内堆積土は7層に分けられ、 ℓ 1が流入土、 ℓ 2~5がカマドの天井や袖等の崩落土を含む流入土、 ℓ 6・7がカマド袖の構築土である。さらに、カマドの焚口前方付近からは、図113で示したように土器が多く出土した。

炉は床面のほぼ中央に位置し、東西に長い楕円形の焼土化範囲として確認された。炉の中央では僅かに還元した範囲が認められ、焼き締まりも確認できた。規模は長軸31cm、短軸24cmを測り、焼土の厚さは最大4cmである。その形状や還元範囲が認められることから、鍛冶炉の可能性が考えられる。しかし、鉄滓や鍛造剝片等を確認することはできなかった。炉の西側では、赤褐色の焼土化範囲が3カ所認められた。これらは、位置関係から炉に関連するものと考えられる。

ピットは、カマド東脇と床面の東部から4個確認した。P 1はカマド東脇の楕円形のもので、規模は長軸75cm、短軸64cmを測る。位置関係からカマドに伴う貯蔵穴と考えられる。P 2は、P 1と同様にカマド東脇で確認された径25cm程度のもので、形状や位置から支柱穴の可能性も考えられる。P 3は、炉の東側で確認された円形のもので、規模は径33cmを測る。床として追加された粘土である ℓ 3上面から確認できることから柱穴の可能性がある。P 4は、炉の南東側で確認された楕円形のもので、規模は長軸64cm、短軸50cmを測る。性格は不明である。

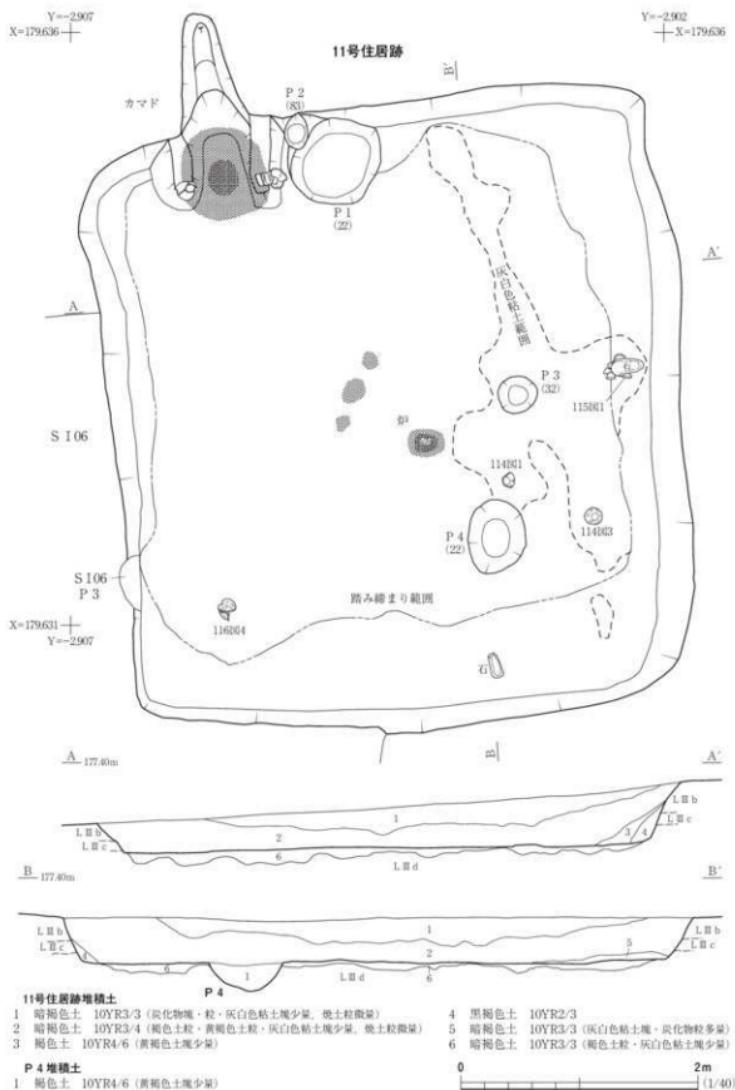


図112 11号住居跡（1）

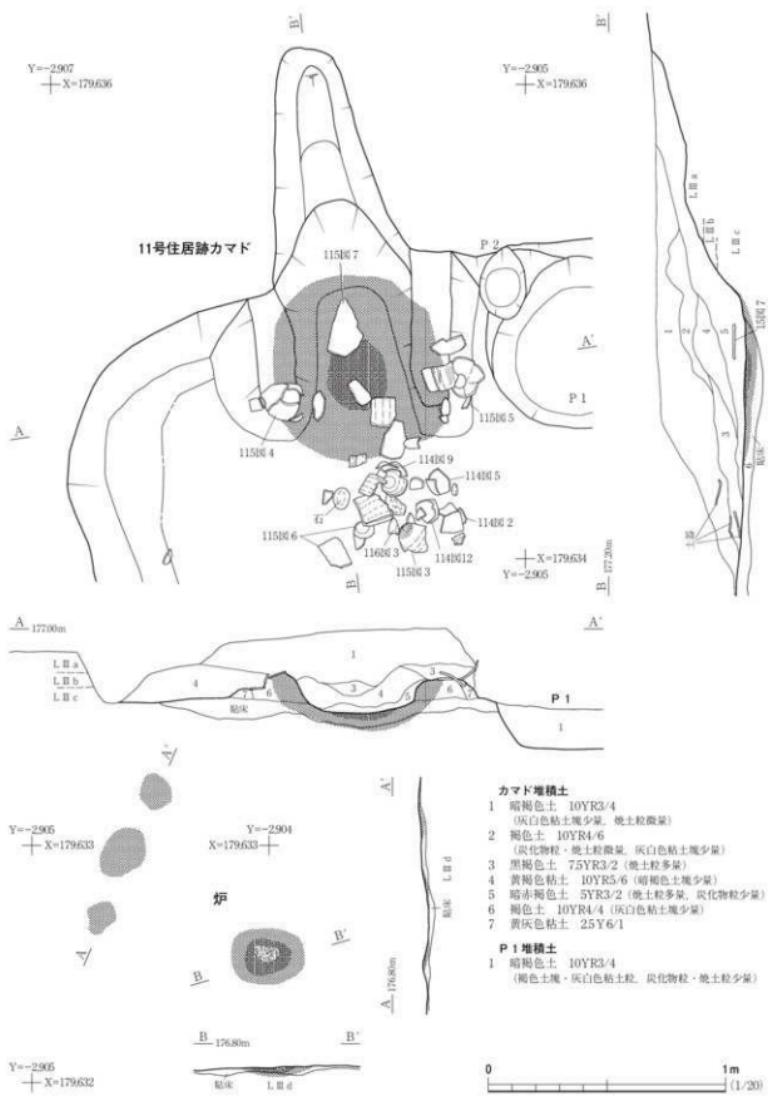


図113 11号住居跡（2）

遺物（図114～116、写真87・88・90）

出土遺物は、土師器片1,019点、須恵器片116点、土製品1点、粘土塊4点である。土師器は杯と甕が主体となるが、この他に鉢も認められる。高台付杯は含まれていない。須恵器の出土数はS I 06に比して多く、そのなかでは杯が圧倒的に多い。これらの杯のなかには、生焼けのものや傷物等の焼成時の不良品が目立つ。このうち、土師器24点、須恵器14点、土製品1点を図示した。

図114－1～11はロクロ整形の土師器杯である。摩滅が著しい4以外には、内面調整としてヘラミガキ、黒色処理が認められる。1・2は小型の杯で、器高／口径比は0.40を超える。回転糸切りにより底部が切り離され、外面調整は体部下端に手持ちヘラケズリや回転ヘラケズリが施される。3～7は器高／口径比が0.30前後と相対的に器高の低いものである。3～5は体部が内湾する器形で、底部から体部下端に回転ヘラケズリが施される。6・7は直線的に外傾する器形で、6に手持ちヘラケズリ、7には回転ヘラケズリが認められる。8～10は大振りのもので、8・9のように器高／口径比が0.43程度の椀形を呈するものもある。8が体部下端にのみ、9・10が底部から体部下端に回転ヘラケズリが施される。8・10には、回転糸切りによる底部の切り離しが確認される。

図114－12～17、図115－1～6は土師器甕類である。甕と長胴甕に大きく分けられる。甕は図114－12・13、図115－1～5である。底部までロクロ整形され、口縁部は「く」字状に開いて端部が摘み上げられる。図114－12・13はなかでも小型の甕である。図115－1～3は胴部最大径が口縁部直下に来る器形である。胴部の下端にヘラケズリが施される。カマド袖に設置された図115－4・5は甕のなかでも大振りで、胴部の最大径は中位にある。内面調整にはカキメが施される。

長胴甕は図114－14～17・図115－6である。図115－6は、底部欠損のため甕か櫃の判断ができるないが、外面のケズリ調整から甕と判断した。口縁部が大きく開いて端部が上に摘み上げられる。タタキ整形後に胴部の中位以下にはヘラケズリ、胴部内面にはカキメが加えられる。図114－14～17はタタキおよびヘラケズリの認められる胴部下半から底部の資料で、内面にはハケメおよびカキメが認められ、17はハケメをナデによって消している。

図115－7は単孔式の土師器櫃を図上復元した資料である。底部から胴部下半が遺存する。外面に縱方向のヘラケズリを密に加え、内面はハケメ調整後にヘラナデを施す。さらに、下端には内外に横方向のケズリを加える。

図116－1～11は須恵器杯である。焼成状態は2・5～9など不良のものが約半数認められる。また、9のように体部下端の凹みや、底部の割れが観察される不良品もある。器形は、1～5のような体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がるものの、6～11のように直線的に開くものに分ける。器形の特徴は、土師器杯と共通するものがある。直線的に開くものの中には、9・11のように口縁部端が外反するものもある。底部の切り離しは回転ヘラ切りで、1・6・7・9・11では、底部にヘラケズリ調整が僅かに施される。

図116－12・14は須恵器甕である。12は底径や器壁の厚さから小型のもので、底部には手持ちヘラケズリが施される。14は外面に平行タタキメ、内面には同心円状の当て具痕が認められる。

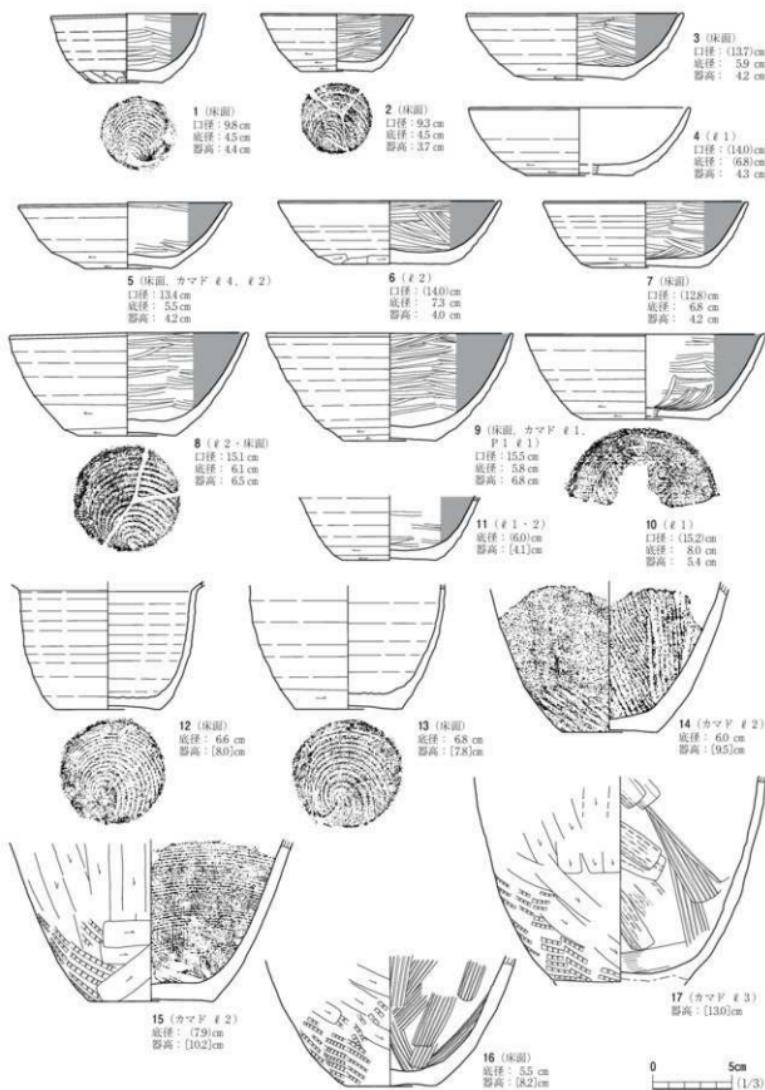


図114 11号住居跡出土遺物（1）

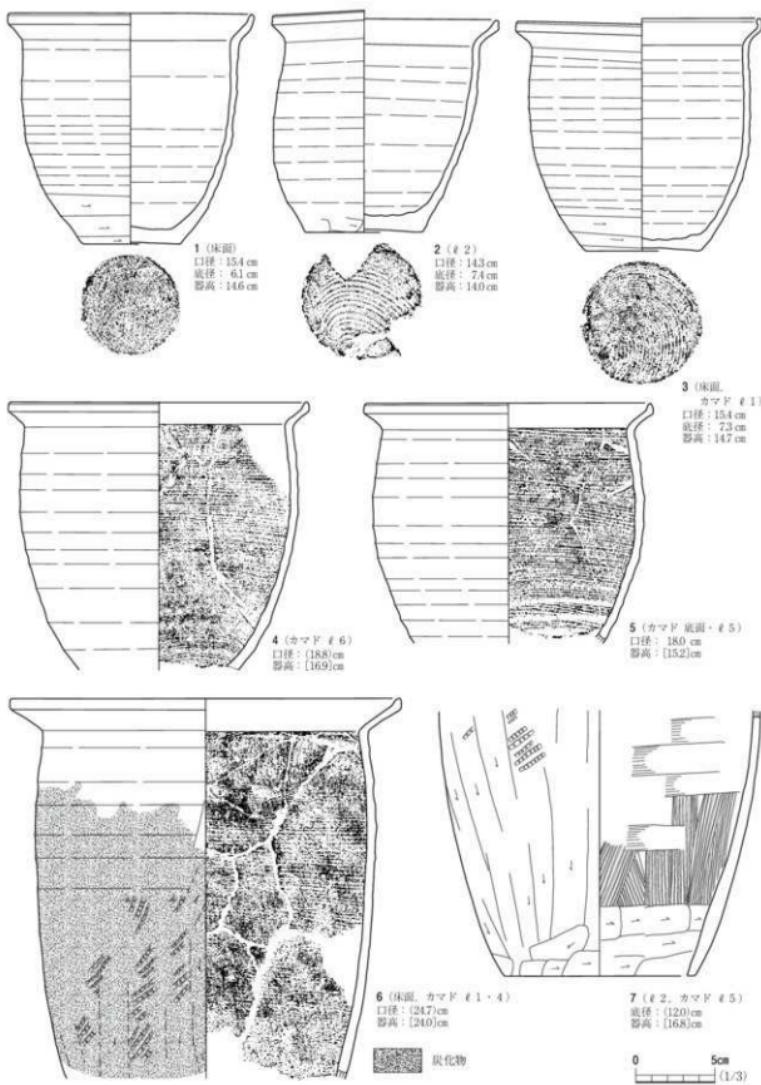


図115 11号住居跡出土遺物（2）

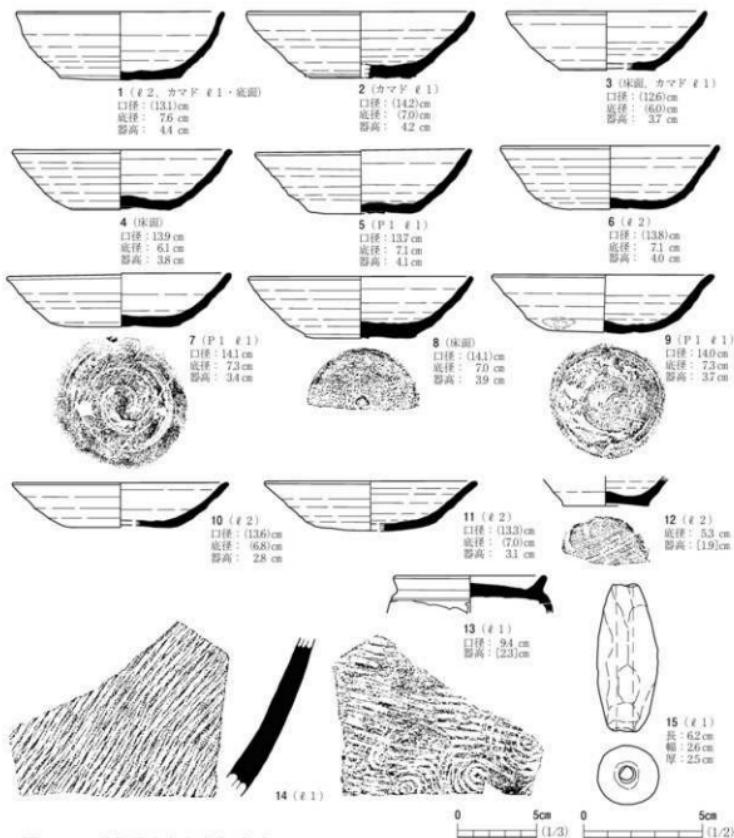


図116 11号住居跡出土遺物（3）

図116-13は須恵器円面鏡の未使用品である。硯部と脚の一部が遺存し、透かしが認められる。

図116-15は管状土錐である。径7mmの貫通孔が認められる。芯棒に粘土を貼り付けて指によるオサエ・ナデによって製作されている。

まとめ

本遺構は、方形を呈する北カマドの住居跡である。少数の柱穴と、床面中央では鍛冶炉と考えられる炉が確認された。出土した須恵器に不良品が多く含まれることから、Ⅲ区の須恵器窯跡との関連も考えられる。遺構の時期は、出土遺物から9世紀中葉～後葉と考えられる。（國井）

第4節 溝 跡

平成22年度の調査では、溝跡を1条確認した。住居跡が確認された2段目の小段丘上に構築され、性格については、11号住居跡等に伴う道跡と考えられる。

5号溝跡 S D 05 (図117、写真84)

本遺構はJ 18グリッドに位置し、L III b上面で検出される。北東部の段丘平坦面でも若干谷状に窪む部分に構築される。S K18と重複し、新旧関係は本遺構の方が古い。北側にはS I 06・11が、南東側にはS K23が隣接する。

遺構は、ほぼ直線状に北東方向へと延びるが、北東端は僅かに北側に方向を変える。規模は長さ6.00m、幅1.74mを測る。検出面からの深さは最大22cmである。周壁は緩やかに立ち上がる。底面の標高は北東から南西に向かって低くなる。踏み締まり等の硬化面は認められない。遺構内堆積土



図117 5号溝跡

は2層に分けられ、いずれもレンズ状の自然堆積と考えられる。 ℓ 2は基本土層のL II cを主体とする。

遺物は土師器杯と甕が32点出土したが、小片のために図示していない。

本遺構は、平坦部に構築された浅い溝跡である。時期は、遺構内堆積土や出土遺物の特徴から平安時代と考えられる。性格は、西側の斜面から平坦面の低い部分に取り付いており、北端部ではS I 11の方向に向きを変えることから、住居跡に伴う道跡の可能性を考えられる。

(国井)

第5節 土 坑

1次調査において7基の土坑を確認した。そのなかには、住居跡と同様の平安時代と考えられる土器生産に関連する焼成坑(18・29号土坑)とロクロビット(23号土坑)が確認される。

18号土坑 S K18 (図118・121、写真89~91)

本遺構は、J 18グリッドに位置する焼成土坑である。遺構の周辺では、検出時から多量の土師器が出土しており、暗褐色土の堆積範囲をL III b上面で確認した。北側4mにはS I 06が位置してお

り、S D05を切って構築される。

平面形は楕円形を呈し、長軸は北東を向く。規模は長軸200cm、短軸173cmを測る。検出面からの深さは最大21cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。また、遺構の東半では、底面から壁の一部にかけて赤褐色に焼土化し、特に中央部は強く焼けていた。遺構内堆積土は3層に分けられた。レンズ状の堆積状況を示し、全体的には自然堆積と考えられる。 ℓ 1・2は土器が多量に出土するが、底面に接するものはないため、埋没途上に土器が投棄されたものと考えられる。

出土遺物は、土師器片901点、須恵器片4点、粘土塊140点(500g)である。土師器には、杯・高台付杯・鉢・壺・鍋があるが、多くは杯と壺である。また、鍋はS I 06の図111-3と接合した。これらの土器は、S I 06出土遺物の特徴に近似する。粘土塊は、表面にスサの痕跡を残すものが多く、楕円形状の薄手のものと丸玉状のものがある。そのなかで最も多い薄手のものを写真91に示した。図121には土師器6点、須恵器1点、土製品1点を示した。

図121-1・2はロクロ整形の土師器杯である。いずれも、体部から口縁部にかけて内湾気味に立ち上がり、口縁部で外反する器形を呈する。調整は内面がヘラミガキ後に黒色処理、外面には底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。1は、外面の回転ヘラケズリ後、器面全体に横方向のミガキが加えられる。同図3・4は土師器高台付杯である。3は杯部のみ遺存し、口縁部が強く外反する特徴がある。4は杯底部から脚部かけて遺存する。内面は黒色処理される。同図5は土師器鉢である。内面は、土師器杯と同様ヘラミガキ後に黒色処理が施され、外面の体部下端にはヘラケズリが観察される。同図8は土師器長胴壺の胴部片で、外面に平行タタキメ、内面にヘラナデが認められる。同図9は須恵器大壺の胴部片である。内面には同心円状の當て具痕、外面には平行タタキメが認められる。同図10は粘土塊である。表面には布目、繩目と竹の圧痕が認められ、棒が繩で縛られて固定された上に貼り付けられたものと考えられる。裏面は写真91に示したように、スサの痕跡や粘土を貼り付けた状態が確認できる。壁材の可能性が考えられる。

本遺構は、周辺にロクロピットが確認される点や底面が強く焼ける状況から、土師器焼成坑の可能性が考えられる。また、遺構内にS I 06と同時期の遺物が投棄されることから、機能停止後に捨て場として利用されたものと考えられる。時期は、出土遺物の接合関係を含めたS I 06との関係から9世紀末葉と考えられる。

(國 井)

21号土坑 S K21 (図118・121、写真81・89)

本遺構は、J 18グリッドに位置する土坑である。S I 06の埋没後に構築され、新旧関係は本遺構の方が新しい。

遺構の形状は不整な楕円形を呈し、規模は南北95cm、東西85cmを測る。検出面からの深さは最大30cmである。周壁は、底面付近では丸味を帯びながらも急傾斜で立ち上がる。底面は南に向かって低くなる。遺構内堆積土は3層に分けられる。 ℓ 1・2は流入による自然堆積である。 ℓ 3は、炭化物を多量に含む土質と堆積状況から人為堆積と考えられる。

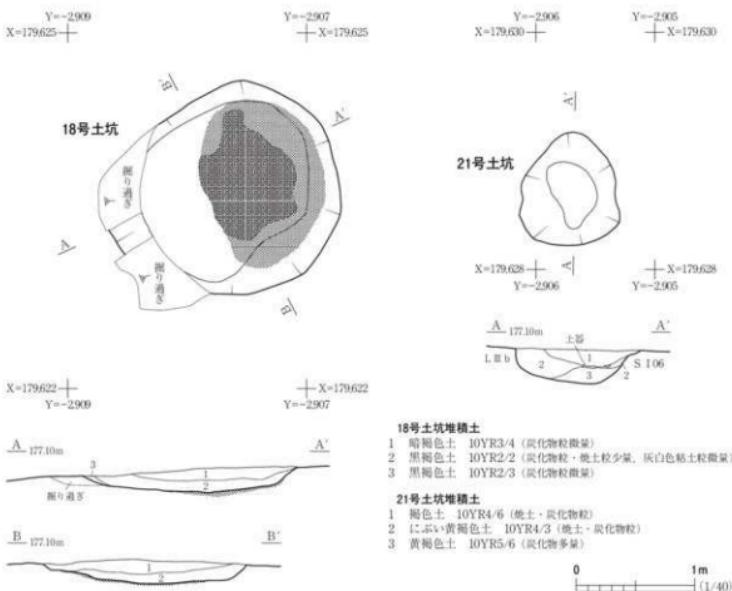


図118 18・21号土坑

遺物は土師器片80点が出土した。主に①1から出土する。図121-6はロクロ整形の土師器杯で、S I 06の②1出土の破片と接合した。底径が小さく、口縁部が強く外反する器形をもつ。調整は内面がヘラミガキ、外面が底部から体部下端にかけて回転ヘラケズリが施される。

時期は、住居跡との重複関係および出土土器から9世紀末葉以降と考えられる。(國井)

22号土坑 S K22 (図119・121、写真81・89)

I 20グリッドに位置する。沢2内の南に下る斜面に立地する。検出面はL III dと思われる砂層で土師器杯を伴う灰黄褐色砂質土の堆積範囲として検出した。

平面形は楕円形を基調とし、東西に長軸をもつ。断面形は皿状で、底面は周囲の傾斜に沿って南への下り勾配となる。規模は東西56cm、南北48cmを測る。検出面からの深さは14cmである。堆積土は、灰黄褐色砂質土の単層である。

遺物は、図121-7に示した土師器杯の他に、ロクロ整形の土師器壺の同一固体片4点が出土している。図121-7の杯は3/4程が西壁に張り付くように出土した。その他の破片も堆積土中に含まれており、ほぼ完形に復元できた。器体は比較的大振りの楕形を呈する。ロクロ整形後に体部下半に回転ヘラケズリ、底面および内面にはヘラミガキを加えている。被熱のためか内面黒色処理は

確認できない。住居跡出土土器と比較して9世紀中葉～後葉に比定されよう。

遺構の時期は遺物の年代観から9世紀と考えられるが、用途については不明である。（山元）

23号土坑 S K23 (図119、写真81)

本遺構はJ 18グリッドに位置する漏斗状の土坑で、L III b上面で検出した。周辺にはS I 06・11、S D05やS K18・24が隣接する。

遺構の形状は円形を呈し、規模は直径54cmを測る。検出面からの深さは最大30cmである。断面形は、漏斗状を呈する。遺構内堆積土は4層に分けられる。ℓ 4は粘土粒を多く含む土で掘形内を

$Y=-2916.5$
+ X=179.604

$Y=-2915.5$
+ X=179.604

$Y=-2906$
+ X=179.622

$Y=-2905$
+ X=179.622

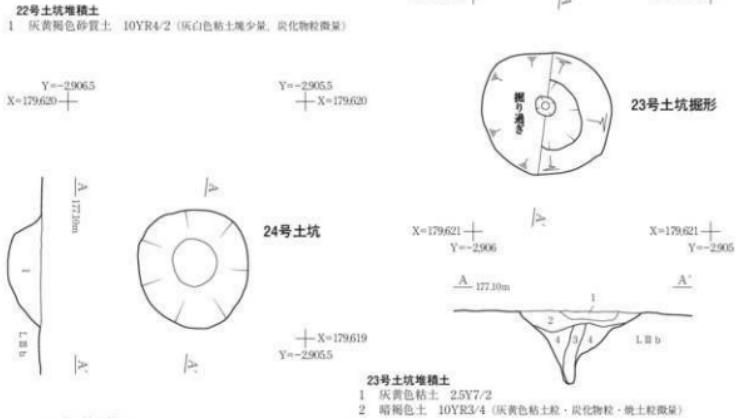
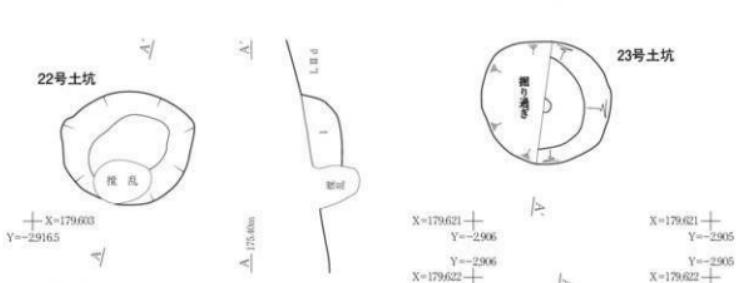


図119 22～24号土坑

覆い、その中央には ℓ 3が棒状痕跡として認められる。このような遺構の特徴や周辺に土器生産遺構が確認されることから、本遺構はロクロビットと考えられる。よって、 ℓ 1・2は廃絶後に埋め戻されたもの、 ℓ 3がロクロの軸部分で、 ℓ 4が軸受け部分と理解される。遺物は、土師器片62点が出土しているが、小片のため図示していない。

本遺構は、漏斗状のロクロビットである。時期は9世紀中葉～末葉と考えられる。 (國井)

24号土坑 S K24 (図119、写真82)

本遺構はJ19グリッドに位置し、LⅢb上面で検出した。北側には、SK23が隣接する。遺構の形状は円形を呈し、規模は直径58cmを測る。検出面からの深さは最大14cmである。周壁は緩やかに立ち上がり、底面は中央部が最も低くなる。遺構内堆積土は単層で、LⅡb主体土が流入することから自然堆積と考えられる。

遺物は土師器片4点が出土するが、小片のため図示していない。

時期は堆積土から9世紀中葉～末葉と考えられる。性格については不明である。 (國井)

29号土坑 S K29 (図120、写真82)

I21・22グリッドに位置する。沢3の西縁に立地する。検出面は沢3の ℓ 2とした灰黄褐色土層である。沢堆積土の掘り込み中、土層観察用畦の断面に焼土面が認められたことから確認した。

遺構は、底面中央に硬く焼き締まった焼土面を有する焼成土坑である。平面形は長方形を基調とする。長軸は北東方向である。北半は沢3の掘り込みによって失われた。周壁の立ち上がりは急であるが、底面が西に向かって下り勾配となっているため、東に向かうほど壁高は低くなる。

規模は長軸が遺存長で176cm、短軸は120cmを測る。深さは西壁際が最大で26cmである。底面の焼土化範囲は長軸100cm×短軸68cmを測る。そのうち長軸62cm×短軸48cmの範囲が硬化する。焼土化は底面下10cmまで及び、うち6cmが硬化している。

堆積土は3層に分けられた。 ℓ 1は上半を埋める黒褐色土、 ℓ 2は炭化物を多量に含む黒色土である。 ℓ 3は壁面の沢3 ℓ 4とした砂質土に近しい。堆積状況がレンズ状を示すことから自然埋没と考えられる。遺物は ℓ 1から土師器細片が2点出土しているが、図示し得なかった。

時期は、周囲の遺構と同様に9世紀代と推定される。用途は、底面が焼き締まっていることがSK18と特徴を一にすることから、土師器の焼成にあるものと推察される。 (山元)

30号土坑 S K30 (図120、写真82)

I20グリッドに位置する。沢2内の南へ下る斜面に立地し、検出面はLⅢdと思われる砂層である。暗褐色土の堆積範囲として確認した。

平面形は円形である。周壁の立ち上がりは緩めで、皿状の形態である。規模は南北が68cm、東西が62cmを測り、深さは20cmである。堆積土は沢2 ℓ 3bを主体とする。遺物は出土していない。

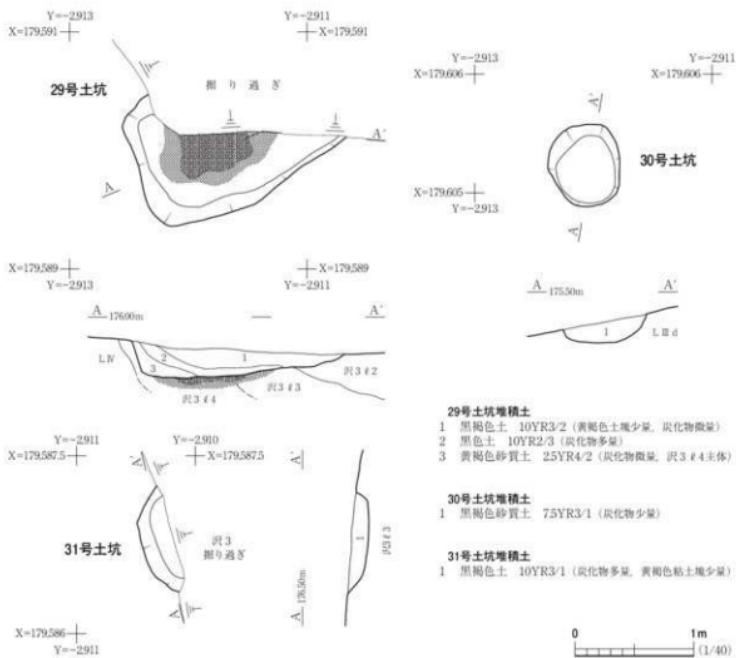


図120 29~31号土坑

9世紀の遺物を主体的に含む沢2堆積土に被覆されていたことから、時期は平安時代の初め頃と考えられる。性格については不明である。

(山元)

31号土坑 S K31 (図120, 写真82)

I 22グリッドに位置する。沢3の西縁に立地する。沢3の ℓ 2までの掘り込みを終えた後に断面に炭化物を含む黒褐色土の堆積範囲を確認し、これをS K31とした。よって遺構の掘り込み面は沢3の ℓ 2および ℓ 3である。

遺構の東半は沢3堆積土の掘り込みによって失ったが、平面形は円形を基調とするものと推定される。断面形は浅い皿形である。遺存長は南北で90cm、深さは16cmである。堆積土は炭化物を多量に含む黒褐色土の単層である。遺物は出土していない。

堆積土が9世紀の遺物を主体的に包含する沢3 ℓ 1に類似しており、時期については平安時代の初め頃と推定される。炭化物を多量に含む土質から焼成に用いられたと考え得るが、その焼成対象については明らかにし得ない。

(山元)

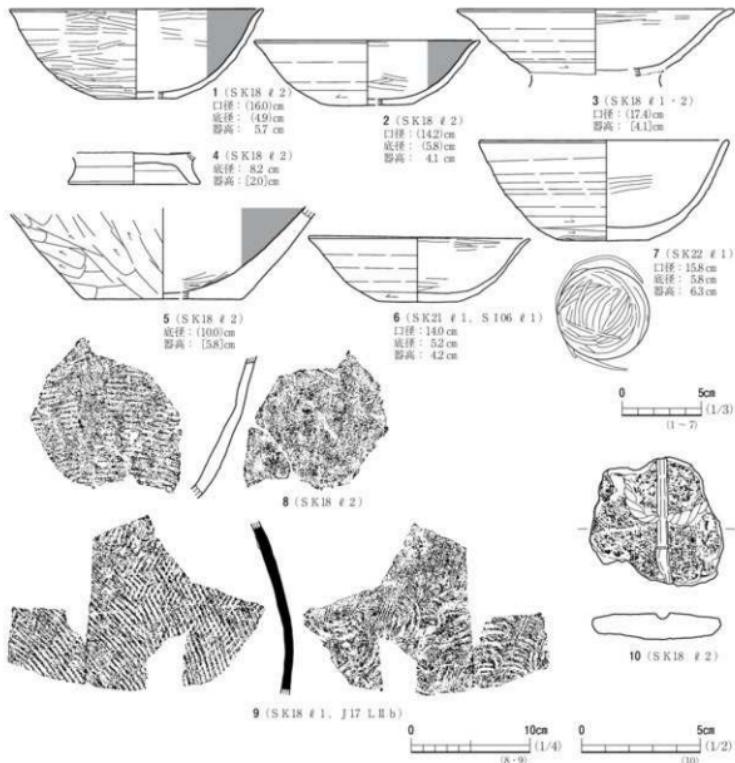


図121 土坑出土遺物

第6節 壺穴遺構

1次調査において壺穴遺構としたものは1基である。壺穴住居跡が確認された北東部の小段丘平坦面に構築されるが、これらの遺構とは時期と性格の異なる近世以降の「むろ」と考えられるため、これらと区別して壺穴遺構として報告する。

1号壺穴遺構 SX01(図122、写真83・91)

本遺構はI 19グリッドに所在する。小段丘でも最下位平坦面への落ち際に位置している。暗褐色土の堆積範囲としてL III b上面で確認した。検出当初は古代の壺穴住居跡と判断して調査していた

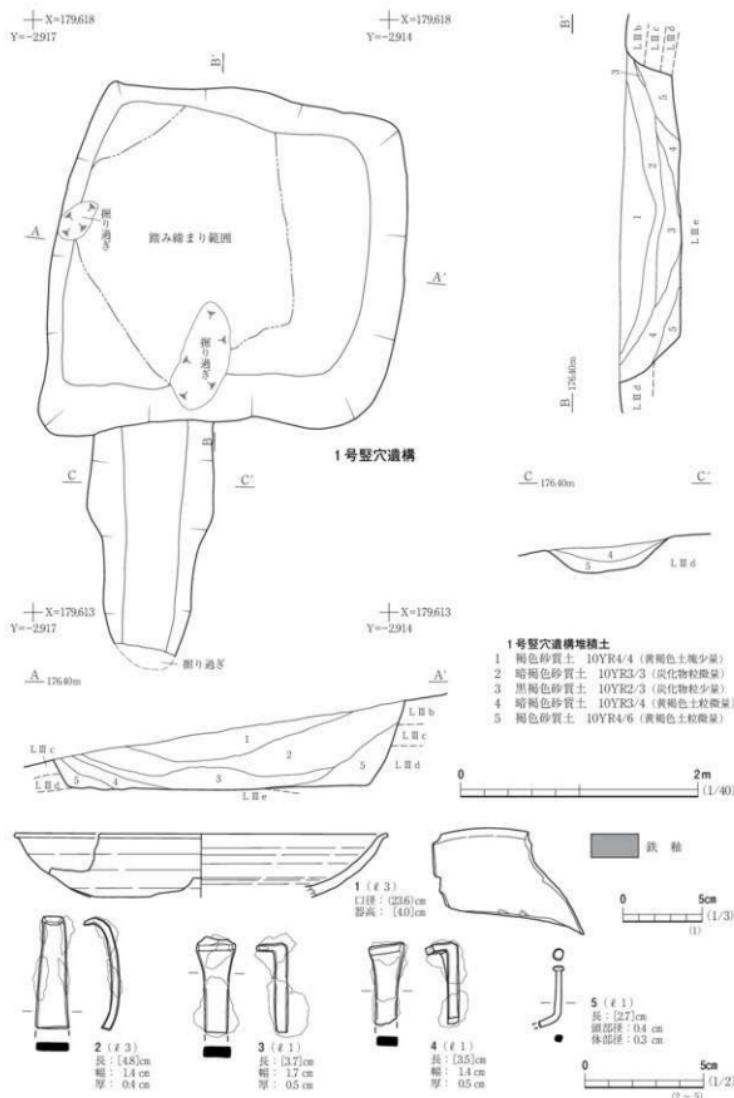


図122 1号竖穴遺構、出土遺物

が、カマドが伴わないことや磁器の出土から、竪穴遺構とした。また、竪穴遺構の南側に接する溝は、堆積土等の状況から本遺構に付設されたものと判断した。

遺構の平面形は、西側が若干長い方形を呈し、主軸は北からやや東へと傾いている。規模は、東西が2.98m、南北が3.02mを測る。検出面からの深さは最大70cmである。周壁は全体的に急角度で立ち上がる。底面に傾斜は認められず、細かな起伏をもちらがらも概ね平坦に構築される。東壁際でL III dとする砂層、中央以西がL III eとするシルト層が露出し、シルト層部分に踏み締まり範囲が認められる。床面からは、焼土面や柱穴と思われるビットは確認できない。

竪穴の南側には南北に直線的に延びる溝が付設される。溝は南壁の西寄りに取り付き、長さは2.00m、幅は最大1.07mで、深さは最大22cmを測る。壁の立ち上がりは緩やかである。溝の底面は竪穴に向かって北方向へ下り、18cm程度の落差をもって竪穴内へと落ちる。逆に南端は壁の立ち上がりが認められず、検出面まで下がったため消失したような状態となっている。この溝は、竪穴内と同様の堆積土で埋まっていることやその形状から、本遺構に伴う道状の入口施設ではないかと考えられる。

遺構内堆積土は5層に分けられる。全体的にレンズ状の堆積状況を示しており、自然堆積と考えられるが、ℓ 3は磁器の出土があることや炭化物を含む土質であることから、これらが人為的に投入された可能性がある。

遺物は、磁器片2点、鉄製品5点が出土した。このうち、磁器片1点と鉄製品4点を図示した。

図122-1は本郷焼碎石手の皿で、口縁部の約1割が遺存する。内面には、僅かであるが鉄釉による草花文が認められる。時期は19世紀前後と考えられる。

図122-2～5はℓ 1から出土した鉄釘である。2～4が断面が扁平な和釘であるのに対し、5は洋釘である。そのなかで3・4は頭部のつくりから皆折釘と判断される。これらの釘は、その形状から舟釘の可能性が考えられる。5の洋釘は、頭部、断面ともに円形を呈する。

本遺構は方形の竪穴で、底面には踏み締まりが認められた。南側には溝が付設されている。遺構の時期は、出土遺物から18世紀後半以降と考えられる。性格については物置等に利用された半地下式の「むろ」である可能性を考えている。

(國井)

第7節 焼土遺構

1次調査において焼土遺構を1基確認した。住居跡や土坑等が確認された小段丘上の平坦面に構築されるが、その性格や時期は不明である。

1号焼土遺構 SG 01 (図123、写真84)

I 20グリッドの沢2への落ち際に位置する。遺構はL III b上面が焼土化する。焼土化範囲は、南北75cm、東西54cmの範囲内に3カ所の赤褐色に焼けた部分が確認される。焼土化した厚さは南方

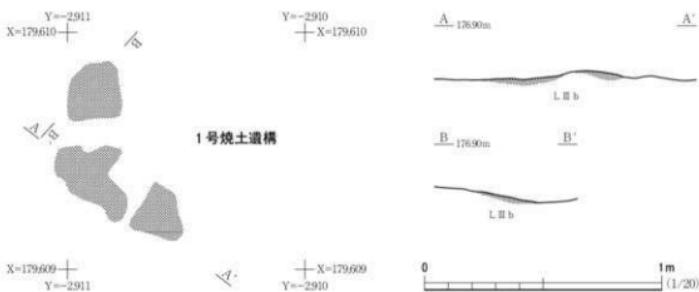


図123 1号焼土遺構

の2カ所で最大3cm、北部の焼土化部分は、最大2cmまで達する。焼土化の程度は弱く、焼き縮まりは認められなかった。

本遺構は小規模な焼土遺構である。遺構の時期は、L II a～cとする包含層に被覆されていた状況から平安時代と推測される。性格については不明である。
(國井)

第8節 小穴群(図124)

1次調査においては、小穴を25個確認した。これらは堅穴住居跡の付帯施設とは認められず、かた掘立柱建物跡や柱列等の規則的な配列が認められないものである。このような小穴についてはグリッドごとにP 1・2・3…と番号を付して調査している。

小穴群は、調査区北東部のI 19、J 17～19、K 19グリッドに位置し、住居跡や土坑等が確認された2段目の小段丘の平坦面に分布する。これらは、東側に急斜面が迫る位置で、東西11m、南北20mの範囲で確認された。遺構検出面は、いずれもL III b上面である。一部の小穴で他の遺構との重複が認められ、その関係はJ 17-P 1～5がS 11より新しく、J 17-P 1がS 106よりも新しい。さらに、J 18-P 2はS D05よりも新しい。

小穴は、北側からJ 17-P 1～8の8個、J 18-P 1～6、K 18-P 1・2の8個、I 19-P 1、J 19-P 1～8の9個の3つの小群として捉えられる。各小群は、南北に6～7mの間隔をもつて並んでいる。各小群内では、小穴が東西方向に細長く不規則に配列された状況を呈する。小穴の平面形状は円形のものが主体となり、楕円形を呈するものも若干認められる。直径14～36cmと大きさには幅があり、なかでも18～24cmのものが多い。検出面からの深さは12～36cmで、25cm前後のものが多い。大きさや深さによる分布上のまとまりといったものは見出せず、小群内に大小の小穴が不規則に混じっているという状況である。

小穴内堆積土は、黒褐色土あるいは暗褐色土の単層である。このうち黒褐色土が堆積するものは18個、暗褐色土が堆積するものが7個ある。いずれもシルト質であることからL II aを堆積土の主

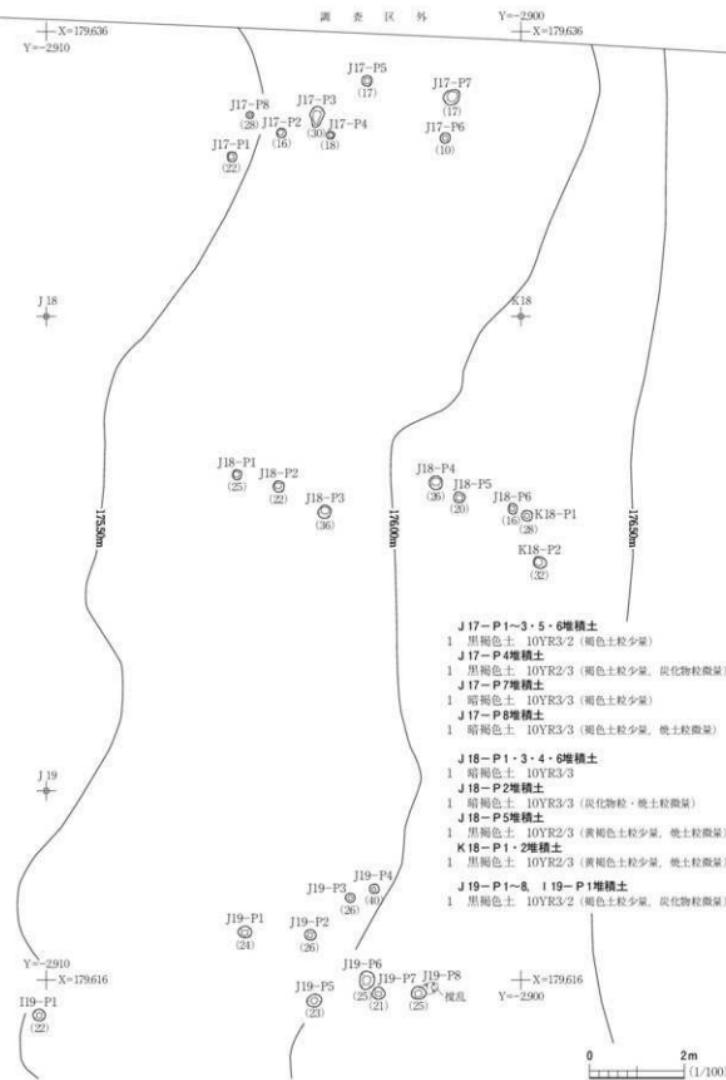


図124 ピット群

体とすると考えられる。断面の観察から柱痕や抜き取り痕等は確認されなかった。ただ、J 17-P 3は、南部が不整に広がるその形状から、柱が抜き取られたものである可能性が考えられる。

遺物は、J 17-P 1・3、J 18-P 1から土師器片が計9点出土したが、小片のため図示していない。いずれも堅穴住居跡出土土師器と変わらぬ特徴を持つもので、遺物包含層中から流入したものと考えられる。

各小穴の時期は、堆積土の土質や、重複関係を持つものはいずれも9世紀の遺構よりも新しいことから、10世紀以降の時期の所産と考えられる。 (國 井)

第9節 遺構外出土遺物 (図125・126、写真89~91)

遺構外からは、土師器片2942点、須恵器片60点、陶磁器片12点、石製品(砥石)1点、鉄製品(角釘)1点、土製品(土鍤)2点、焼成粘土塊12点が出土した。遺構が分布する北東部平坦面のL II a~cからの出土数の割合が61%と多く、沢2・3が23%でこれに次ぐ。最下位平坦面からの出土数は全体の5%程度に過ぎない。出土する土師器・須恵器の特徴は、L II a~cと沢堆積土の間に差はない。加えて堅穴住居跡出土土器とも概ね共通しており、大部分が住居の構築された9世紀中葉~末葉の所産と判断される。また、少數ではあるが10世紀に掛かるかと思われる遺物の出土も認められている。これよりも新しい時期に帰属する陶磁器・鉄製品の類は、L I およびL II Rとした新期の洪水層からの出土が主である。図125に土器、図126にその他の遺物を示した。

図125-1~6は土師器杯である。いずれもロクロ整形で、内面にヘラミガキと黒色処理がなされる。ヘラミガキは単位の見えないものが多い。1~3・6は被熱によるものか黒色処理が飛び、内面褐灰色を呈しており、図示していないもののうちでもこのような破片も少なくない。底部調整については、1~5が体部下端に回転ヘラケズリを加えられる。うち2・3・5は底部まで回転ヘラケズリによる再調整が及ぶ。加えて5の底面には条線状の凹線が認められる。他の1・4には回転糸切り痕が残されている。6は体部下端から底部まで手持ちヘラケズリが加えられている。器形の分かれる1・2は、S I 06出土土師器杯の形態に近く、体部下半が内湾気味に立ち上がり、口縁部がやや外反する器形を呈している。

図125-7~9は土師器高台付杯の高台部片である。いずれもロクロ整形で、内面にミガキと黒色処理がなされる。杯同様、これらの中にもヘラミガキの単位が明瞭に観察できるものはない。いずれも台の底部は角張る。形状は7が直線的、8が外反気味に開く。9についてはこれらの2つと異なり台が低い。杯部器壁の立ち上がりが急であることから、楕円形の器形をなすと思われる。

図125-10~12は土師器壺の破片である。いずれも長胴壺の胴部下半の資料と思われ、外面にタタキメが残される。内面はナデによって當て具痕跡は消されている。10は細い線状の平行タタキメ、11は平行タタキメ、12は斜格子状のタタキメが認められる。

図125-14は須恵系土器の皿である。外面灰色、内面淡黄色を呈し、焼成は軟質である。内外面

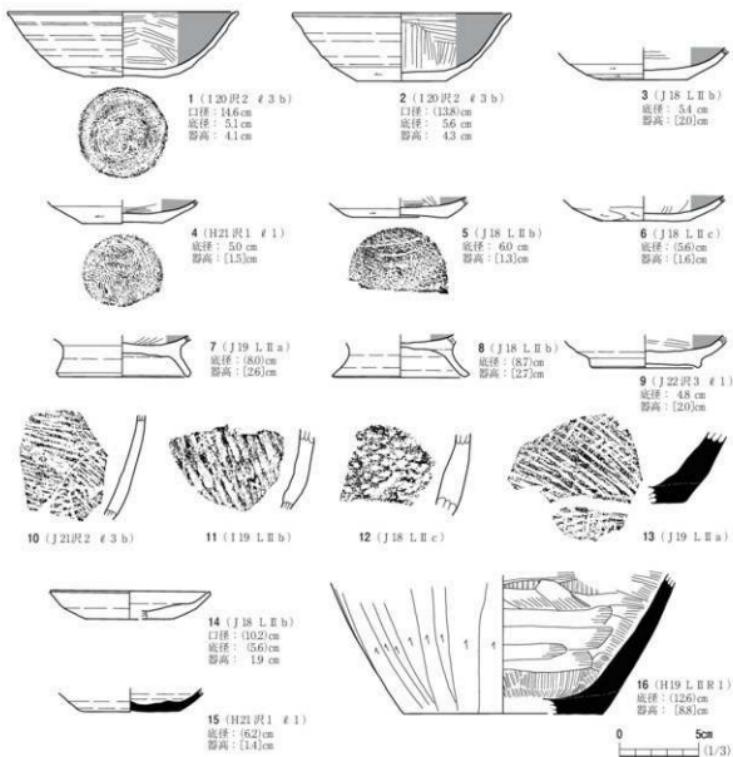


図125 遺構外出土遺物（1）

ともロクロによる整形痕のみが残される。切り離し方法は不明である。S I 06・11の年代よりも新しい10世紀代の遺物の可能性がある。

図125-15は須恵器杯の底部片である。底面はヘラ切り後、回転ヘラケズリされる。S I 11出土のものと底径は近似し、近い時期の所産かもしれない。

図125-13・16は須恵器甕の底部片である。13は外面に平行タタキメが認められ、内面の当て具痕はナデによって消される。16は外面が縱方向のヘラケズリによって調整される。内面は縦方向のハケメ調整の後に、横方向のヘラナデによってハケメを消している。

図126-1・2は管状土錐である。心棒に粘土を巻き付け、両端部に指オサエ、中央部に指オサエ・ナデ調整を加えることによって整形される。1は円柱形、2は錐形である。

図126-3は直方体の砥石である。両端は未使用面で4面が使用される。このうち図の正面と裏

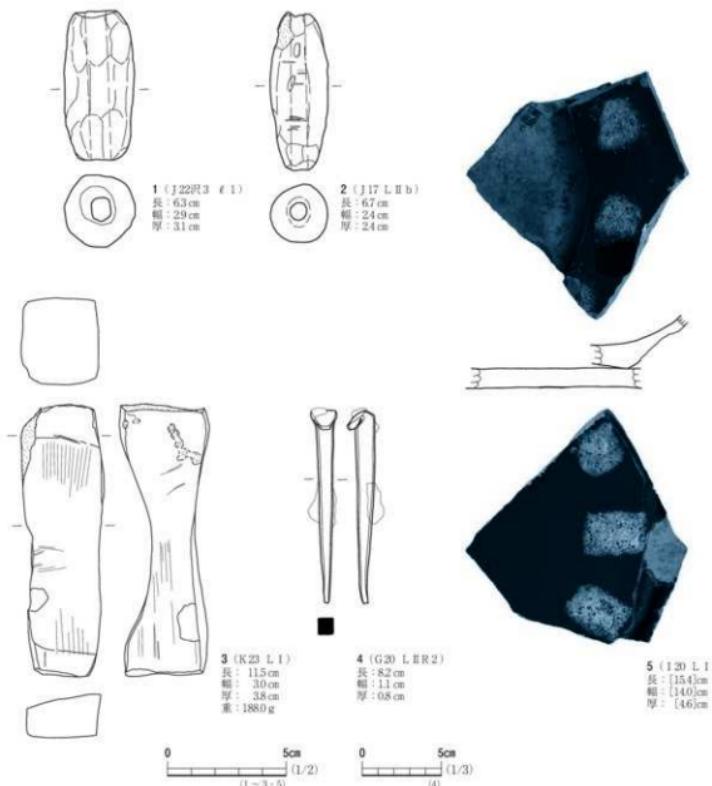


図126 遺構外出土遺物（2）

面の使用頻度が高く、凹面を呈する。凹面の端部および図の側面に当たる面に、長軸に平行した筋状の擦痕が残されている。凹面の深い部分には長軸に直行する擦痕が数条認められる。

図126-4はL II R 2から出土した鉄釘である。断面方形の角釘で、頭部は平頭となっている。ほぼ完形であり、長さは2寸5分である。

図126-5は陶器片である。壺底部と焼台が釉薬によって溶着されている。釉薬は鉄釉である。焼台上面には釉は施されず、壺底面との接着部分のみに認められる。焼台底面および壺底部内面に3カ所ずつ砂が付着する。これ自体が焼台として機能したものと考えられる。

図126-3・5については、L Iからの出土であり、調査区内の遺構とは直接関係しないものと思われる。

(山元)

第10節 まとめ

平成22年度に実施したⅢ区の調査では、竪穴住居跡2軒、土坑8基、溝跡1条、竪穴遺構1基、小穴25個が検出され、9世紀を中心とする遺物が出土した。本節では、本調査区における出土土器および検出遺構についてまとめた上で、現在考えられる調査区付近での活動の変遷について、若干の考察を加えておく。

1. 出土土器について

S I 06, S I 11, S K 21の重複した3基の遺構の出土土器は、それぞれ異なった特徴を持っており、これについてまとめておく。各遺構の重複関係を再確認すると、古い順にS I 11, S I 06, S K 21となる。次に各遺構出土土器の特徴を挙げる。

S I 11で確認できた器種は、土師器では杯、甕、長胴甕、瓶、須恵器では杯、甕、円面碗である。土師器杯は体部が内済する器形で、小型で器高のあるもの、器高の浅いもの、大型の椀形を呈するものの3つに大きく分けられる。土師器甕は胴部の張り出しが弱く、胴部最大径が上位にある。大きめのものの内面にはカキメ調整がなされる。土師器長胴甕は上半をロクロ、下半をタタキによって整形される。内面にはハケメ、カキメの調整がなされる。

S I 06で確認できる器種は、土師器では杯、高台付杯、甕、長胴甕、鉢形の鍋、瓶(把手)、筒型土器である。須恵器は杯のみで、数量も少ない。土師器杯・高台付杯は口縁端部が外反する器形である。大型の椀状のものと器高の浅いものに大きく分けられる。杯の底部はS I 11に比べて小さく、手持ちヘラケズリによって再調整されるものが多い傾向にある。内面黒色処理が確認できないものもあるが、ヘラミガキは施されており、いわゆる赤焼土器や須恵系土器と称されるものは認められない。土師器甕は胴部最大径が中位にあり、球胴状である。ロクロナデのみで整形される。土師器長胴甕および鍋は、S I 11と同様に上半をロクロ、下半をタタキによって整形されるが、内面調整はロクロナデもしくはヘラナデのみである。

S K 21では底部が小さく、口縁部が強く外反する器形の杯が出土する。

このように、器形の違いはもちろんのこと、古いものでは須恵器の量が多く、甕にハケメ、カキメ調整が残るのに対し、新しいものでは土師器高台付杯の出現や須恵器への依存性の低下など調整技法や器種組成の変化も見て取れる。これらの相違は、遺構の重複関係から、明らかに年代差と捉えることができる。山中雄志をはじめとする従来の会津地域における編年観に当てはめれば、S I 11には9世紀中葉～後葉、S I 06には9世紀末葉、S K 21に9世紀末葉～10世紀初頭の年代を考えることができる(山中：1999・2000)。

さらに遺構外からは、須恵系土器の皿が出土していることから考えて、平安時代における調査区付近での活動は、9世紀半ば以降～10世紀代と考えることができる。

2. 遺構について

調査区内で確認できた遺構は、平安時代では住居跡のほか土器焼成坑、ロクロピット、道跡と考えられる溝跡が近接して存在している。他に、これらの遺構を切って構築される小穴群、近世以降では堅穴遺構とした半地下式の「むろ」がある。いずれも、小段丘上で確認されたものである。

平安時代の遺構では、重複関係および出土土器から2時期に分けて考えることができる。古期は9世紀中葉～後葉でS I 11とS D 05とした道状の遺構、S K 22が該期の遺構である。新期は9世紀末葉でS I 06とS K 18とした土器焼成坑、S K 21が該期の遺構である。ロクロピットとしたS K 23、もう1基の土器焼成坑であるS K 29については、大きくは9世紀代に収まるであろうが、その詳細な帰属時期は明らかにし得ていない。

9世紀末葉に見られる住居跡とそれに近接した焼成坑という在り方は、Ⅲ区のS I 08とS K 25にも見ることができる。S I 06とS I 08は平面形、主軸方位、カマドの位置、住居中央部に炉をもつなど特徴が共通している。非常に近接した時に構築されたものと推測される。

3. 変遷過程

Ⅲ区の遺構は、小高い小段丘上に構築される。この小段丘は、本章はじめに述べたように河川堆積物と斜面崩落土によって形成されたものである。山際に段丘状に取り残され、洪水の影響を受けなくなってしまったこの場所を狙って、9世紀中葉～末葉に集落が形成されている。この地形の最終的な形成年代としては、S K 29の検出面となった沢3ℓ2出土炭化物の¹⁴C年代が7～8世紀という数値年代を示しており(付章第1節参照)、想定される集落の相対年代と非常に調和的である。

一方、最下位の平坦面については、現地形では南北方向に非常に平坦な面となっている。ただし、L II d・eとした平安時代の包含層が、南部では欠層となり、北部では細分できるという状況から、元来は上流側から下流側へと下るような地形であり、少なくとも、Ⅲ区の最下位面では平安時代半ば以降も阿賀川による侵食・付加が繰り返されたと想定できる。基本土層B断面における、近世前後と推定できる洪水層への円弧すべり痕跡では、元L II d 1(L II R 9 g)上に、現在は確認できない数枚の暗色系の砂質土層が堆積しており、平安時代にはⅢ区と同様の包含層の形成があった可能性も想定できる。この地すべり自体は、ト部厚志氏からの教示によれば、地震等の大災害が要因と想定でき、会津盆地北端に地すべりによって山崎新湖を形成した慶長地震(1611年)をはじめとする中・近世にあったと想定される大地震の可能性が高い。よって現在のような地形への変化は近世以降に完成されたと考えられる。

近世以降には、堅穴遺構が構築される。堆積土上位からではあるが、舟釘が出土していること、近隣住民からの聞き取りで、道路網が整備される以前には遺跡内に対岸の長井地区との渡し舟の船着場があったとされていることから、川での舟運に関連した、物置や待機小屋などとして機能したのではないかと推測される。

(山 元)

第5章 総括

小田高原遺跡は、喜多方市南西端の阿賀川北岸に位置し、小田高原窯跡の露頭(『喜多方市史4』:1995)・遺物散布により比較的古くから周知されていた遺跡である。小田高原遺跡の範囲は、平成21年度に行われた喜多方市教育委員会の試掘調査によって増補され、新たに加えられた段丘斜面～河川敷の箇所が阿賀川狭窄部改修事業(長井地区)における発掘調査の対象区である。なお、小田高原遺跡西方の対岸域が河沼都会津坂下町長井地区で、阿賀川が市・町の境界となっている。

今回の1次調査では、縄文時代、平安時代、中・近世の遺構・遺物を確認した。遺構・遺物数から概ね平安時代が1次調査の主体である。奈良時代以降、承和七年(840)までの間に会津郡から耶麻郡が分離された(坂内:1995)、両郡の境界はおよそ阿賀川であったとされることから、平安時代における小田高原遺跡の立地は耶麻郡の南端部に位置づけられる。一方、対岸の長井地区は、所属が会津郡、河沼郡と変遷し、中世では越河荘に含まれる。

小田高原遺跡の工区に掛かる調査対象面積は19,000m²以上と広域にわたるため、便宜上、I～III区に分けた。I～III区の詳細については第2～4章に記したとおりであるが、要約すると、I区は旧遺跡範囲の小田高原台地西端部を含み、同平坦部で8世紀末葉～9世紀前葉に位置づけられる集落跡を確認した。

II・III区は概ね河川敷の一帯であり、遺構は主に段丘斜面の裾部からテラス状に張り出す平坦面で確認した。II区では、遺存状態が悪いが9世紀中葉頃に操業していたと推測される須恵器窯跡S R01～03を発見し、杯を中心とする製品を生産していたものと考えられる。S R01～03は比較的小型の簡易な半地下式窯窓であったと考えられ、杯類の焼成は重ね焼きによるものと推測される。またII区では、10世紀初頭頃の堅穴住居跡・土師器焼成土坑を確認している。対岸の長井地区には9世紀前葉頃の操業とされる荻ノ窪窯跡があるが、同窓の須恵器杯は底部の切り離しが回転糸切り技法であり、回転ヘラ切り技法の小田高原遺跡資料とは系統的な差異が認められる。

III区では重複する2軒の堅穴住居跡S I 06・11を発見し、出土遺物からS I 11が9世紀中葉頃、S I 06が10世紀初頭頃に位置づけられる。S I 06の側では同時期の土師器焼成土坑が検出され、II区と同様の状況が覗える。S I 11の出土遺物について、胎土分析(付章参照)から、須恵器杯がII区の窯跡で生産された可能性があること。土師器・須恵器杯の胎土組成は一致しないこと。また、床面採取の粘土塊と土師器杯の化学組成が類似していることなどが指摘されている。S I 11の土師器杯の底部切り離しは回転糸切りであり、須恵器杯とは技法が異なる。S I 11は、採取粘土塊の成分から土師器生産との関連性が推測されるが、II区で生産された異系の須恵器杯も受容している点が注目されるであろう。

喜多方市史掲載の8世紀中葉頃と考えられている小田高原窯跡は、I区内の農道付近にあったも

のと推測される。しかし、同窯跡については今回の調査で確認することができず、削平等により消滅してしまった可能性がある。小田高原遺跡の北東側約600mの地点には平成10年度に発見された西新田窯跡群があり、試掘調査(喜多方市教育委員会:1999-2003)によって、8世紀末から9世紀前半の須恵器窯跡が10基前後分布しているものと推測されている。同試掘調査によって杯・長頸瓶・横瓶・甕・ミニチュアなどの須恵器が採取された他、9世紀後半の土師器焼成土坑が確認されている。なお、西新田窯跡群はI区の小田高原窯跡と併せて小田高原窯跡群と一括されていたこともあるようである。

I区に存在した須恵器窯跡については、採取遺物から、会津若松市の大戸窯跡にわずかに先行する8世紀中頃とされる。また、小田高原窯跡群ではなく西新田窯跡群を指していると推察されるが、同窯跡群の評価については、大戸窯跡の影響を強く受けた長頸瓶等の生産が8世紀末頃から開始されたとする(石田:1998・2000)。西新田窯跡群では、平安時代初期、高台部を除けば大戸窯産と見分けが付かないほどの長頸瓶を製作するに至る。しかし、大戸窯跡の規模が拡大していくなか、小田高原遺跡および周辺域における窯業の展開は比較的小規模なものに止まり、9世紀中葉を境に衰退した模様である。

小田高原遺跡の周辺域は、阿賀川北岸に天神免古墳群・虚空蔵森古墳群・灰塚山古墳が、また南岸に亀ヶ森古墳・鎮守森古墳などの前期古墳が集中しており、比較的古い段階で開けた要衝の地である。しかし、奈良時代の遺跡は比較的少なく、平安時代から増加傾向となるようである。小田高原遺跡においても8世紀中葉期の状況は、喜多方市史掲載の須恵器窯跡以外に遺構が確認されておらず、不明な点が多い。また、8世紀後葉期の遺構・遺物はほとんど確認されていない。小田高原遺跡における奈良時代後半期の様相は判然としない。

大戸窯跡は、8世紀末から爆発的な生産体制に移行し、9世紀中葉段階で最盛期を迎えたことが指摘されている(石田:1998)。西新田窯跡群は、創業が概ね8世紀末葉であり、長頸瓶模倣品の生産など大戸窯跡の拡大期に即応している。西新田窯跡群の経営主体は不明であるが、平安時代初期は、郡市広網遺跡のように工房を中心とした新興集落が出現する時期でもある。I区で確認した8世紀末葉～9世紀前葉の集落跡は、西新田窯跡群の創業期と概ね一致し、平安時代初頭の新たな伸展期に成立した可能性もある。

II区で確認した須恵器窯跡の操業時期は9世紀中葉頃で、西新田窯跡群の終了期に近い。会津地方における杯類の出土傾向は、9世紀前半まで須恵器杯が量的に優越するものの、9世紀中葉以降は土師器杯が著しく増加することが指摘されている(山中:1999)。II区のS R01～03では須恵器杯類を中心に生産していたと考えられるが、土師器杯への需要変化が小田高原遺跡周辺域における須恵器生産の衰退の一因になった可能性がある。III区のS I 11から出土した杯類は土師器杯が主体であり、9世紀中葉頃が杯類の転換期であったことを推測させる。以上のことから、II区のS R01～03は、小田高原地区の須恵器生産における過渡期の所産と推測される。

10世紀初頭頃のII区S I 08・III区S I 06では須恵器杯の出土が認められず、取って代わるように

赤焼き土器が含まれる。両住居跡に近接して土師器焼成土坑が検出され、須恵器生産終了後の西新田窯跡群の状況と概ね一致している。

他に1次調査では、II区の北西部においてL IIコとした層から小刀が出土している。L IIコ内から11～12世紀頃の瓦器が出土しており、小刀は中世の所産と推測される。当該期の遺構は確認できなかった。同様の小刀は喜多方市の内屋敷遺跡の墓壙から出土している。近世では竪穴造構としたS X01から船釘の可能性もある鉄釘が出土しており、河川敷状に張り出す狭窄部を利用した船着場があった可能性がある。

なお、III区では、地震によって生じたと考えられる円弧滑りが観察された(写真70・71)。平安時代を含む遺物包含層が地滑りを起こしており、原因としては1611年に発生した「会津慶長地震」の可能性が考えられるとのことである。

今回、小田高原の1次調査によって、I区についてはすべての調査を終了した。II区では、第1遺物包含層・文化面とした概ね10世紀初頭期の調査は終了したが、SR01～03の創業期と推測される9世紀中葉頃の第2遺物包含層・文化面および下層については平成24年度に調査が予定されている。III区は、8,500m²のうち、北部3,000m²については調査が終了し、残りの5,500m²は平成23年度の第2次調査として、現在、調査中である。

(香川)

引用・参考文献(五十音順)

論文等

- 荒木 隆 2000 「陸奥南部の都立地条件と水運」『福島県立博物館紀要』15 福島県立博物館
石田明夫 1998 「会津大戸塗 大戸古窯跡群保存管理計画書」 会津若松市
石田明夫 1998 「会津、古代そして中世」(会津若松市史2 歴史編2 古代-2・中世-1) 会津若松市
石田明夫 2000 「付編2 北部地域出土の土器」「若松北部宮塲は場整備発掘調査報告書II」 会津若松市教育委員会
石田明夫他 2000 「会津のやきもの-須恵器から陶磁器まで」(会津若松市史14 文化編1 陶磁器) 会津若松市
石本 弘 1996 「丸底から平底へ-福島県におけるロクロ導入期の土師器-」「論集しのぶ考古」論集しのぶ考古刊行会
井 薫治 2003 「荒屋敷遺跡」「会津坂東北道路調査報告」2 福島県教育委員会
小野木ルリコ 2006 「飛鳥寺西門出土土管の検討」「史泉」103 関西大学
北野博司 1998 「古代の土器」「辰口町西部遺跡群」1 石川県立埋蔵文化財センター
考古学から古代を考える会 2000 「古代仏教系遺物集成・関東」
菅原祥夫 1996 「大久保F遺跡」「常磐自動車道遺跡調査報告」8 福島県教育委員会
菅原祥夫 1997 「第9節 東北東部-古代陸奥の土師器生産体制と土師器焼成坑」「古代土師器の生産と焼成遺構」窯跡研究会編 真陽社
田中広明 2003 「地方の豪族と古代の官人」柏書房
丹治萬喜 2001 「福島県内の筒型土製品・異形土製品について」『福島考古』第4号2 福島県考古学会
丹治萬喜 2010 「カマド燃焼部における遺物出土状況の検討」「福島県文化財センター白河館研究紀要2009」 福島県文化振興事業団
東北古代土器研究会 2008 「東北古代土器集成-須恵器・窯跡編-」(出羽)』
仲田茂司 1994 「東北地方におけるロクロ土師器の受容とその背景」「考古学雑誌」第79卷第3号
生江芳雄 1971 「新編会津風土記にみるいしあい出土の遺物について」「福島考古」第20号 福島県考古学会

第5章 総括

- 中村嘉男他 1976 「土地分類基本調査 喜多方」福島県
- 坂内三彦 1996 「第2編 古代・中世」『喜多方市史』第4巻(資料編1) 喜多方市教育委員会
- 平野 修 1996 「古代仏教と土地開発」『帝京大学山梨文化財研究所 研究報告』第7集 帝京大学山梨文化財研究所
- 福生田尚也 2009 「第1編 萩平遺跡」「阿武隈東道路道路発掘調査報告書」2 福島県教育委員会
- 村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」『福島考古』第3号6 福島県考古学会
- 村松恵司 1989 「村のくらし」「古代史復元」9 講談社
- 山中雄志 1999 「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(前編)」「福島考古」第40号 福島県考古学会
- 山中雄志 2000 「ロクロ土師器を中心とする会津地方の土器様相(後編)」「福島考古」第41号 福島県考古学会
- 山中雄志 2002 「会津地方におけるロクロ土師器の出現と展開を巡って」「福島考古」第43号 福島県考古学会
- 山中雄志 2008 「会津地方」「東北古代土器集成~須恵器・窯跡編~(陳奥)」東北古代土器研究会編報告書

報告書

- 明日香村教育委員会 2010 「飛鳥寺西方道路現地説明会資料」
- 会津坂下町教育委員会 1990 「福島県営は塙整備事業阿賀川Ⅱ期地区道路発掘調査報告書 青木道路」
- 会津坂下町教育委員会 1992 「福島県営は塙整備事業阿賀川地区道路発掘調査報告書 宮ノ北道路・三本木道路」
- 会津坂下町教育委員会 1995 「福島県営は塙整備事業阿賀川Ⅱ期地区道路発掘調査報告書 楠荷北道路」
- 会津坂下町教育委員会 2000 「萩ノ塙跡」「会津坂下町内道路発掘調査報告書」
- 会津若松市教育委員会 1993 「会津大戸塙 大戸古窯跡群発掘調査報告書」
- 会津若松市教育委員会 1994 「会津大戸塙 大戸古窯跡群発掘調査報告書 遺物編」
- 会津若松市教育委員会 2005 「東久路跡」
- 喜多方市教育委員会 1995 「第1編 考古」『喜多方市史』第4巻(資料編1)
- 喜多方市教育委員会 1997 「鏡金・長尾地区道路発掘調査報告I 塚田A・B遺跡 村前道路」
- 喜多方市教育委員会 1999 「西新田窯跡群」「平成10年度市内道路発掘調査報告書」
- 喜多方市教育委員会 2000 「西新田窯跡群範囲確認試掘調査」「平成11年度市内道路発掘調査報告書」
- 喜多方市教育委員会 2001 「西新田窯跡群」「小田高原道路」「平成12年度市内道路発掘調査報告書」
- 喜多方市教育委員会 2002 「西新田窯跡群試掘調査(第三次)」「平成13年度市内道路発掘調査報告書」
- 喜多方市教育委員会 2010 「小田高原道路試掘調査」「平成21年度市内道路発掘調査報告書」
- 喜多方市教育委員会 2010 「谷中地道路」「県営経営体育成基盤整備事業胸形第一地区発掘調査報告書」
- 郡山市教育委員会 1985 「広瀬道路 発掘調査概報」
- 塙川町教育委員会 1997 「県営低コスト化水田農業大区画②場整備事業塙川西部地区道路発掘調査報告書 銀ノ町道路A」
- 塙川町教育委員会 1999 「県営低コスト化水田農業大区画③場整備事業塙川西部地区道路発掘調査報告書4 古屋敷道路」
- 塙川町教育委員会 2001 「県営低コスト化水田農業大区画④場整備事業塙川西部地区道路発掘調査報告書5 銀ノ町道路B」
- 塙川町教育委員会 2004 「県営経営体育成基盤整備事業塙川西部地区道路発掘調査報告書7 内屋敷道路」
- 奈良国立文化財研究所 1997 「飛鳥寺の調査」1996~1次」「奈良国立文化財研究所年報1997~II」
- 新潟県教育委員会 1989 「新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡」
- 福島県教育委員会 1980 「佐平林遺跡(Ⅲ区)」「母畠地区道路発掘調査報告」V
- 福島県教育委員会 1982 「鳴神・柿内戸道路」「東北新幹線関連道路発掘調査報告」V
- 福島市教育委員会 1993 「御塚遺跡」「福島市埋蔵文化財調査報告書第53集」
- 福島市教育委員会 1996 「福島県道路地図(会津地方)」

付章 自然科学分析

第1節 放射性炭素年代測定

株式会社 加速器分析研究所

1. 測定対象試料

小田高原遺跡は、福島県喜多方市慶徳町山科字古屋敷に所在し、阿賀川右岸の中位段丘から氾濫原にかけて立地する。測定対象試料は、堅穴住居跡、窯跡、土坑、流路等から出土した炭化物等の試料合計15点(FB.AG10.C01 : IAAA - 102763 ~ FB.AG10.C03 : IAAA - 102765, FB.AG10.C07 : IAAA - 102766 ~ FB.AG10.C18 : IAAA - 102777)である(表12)。土器付着炭化物 FB.AG10.C01 は土器の外面より採取された。

2. 測定の意義

試料が採取された土器、住居跡などの遺構の年代を明らかにする。25号土坑出土試料2点の測定では、底面出土の FB.AG10.C15 と検出面出土の FB.AG10.C16 の値を比較することで、遺構埋没と上位の包含層堆積に時間差があるか否か検討する。J 22 G 沢 3 の ℓ 2 は炭化物を多量に含んでいるためここから採取された FB.AG10.C17 と、この層と同一地形面で検出された 6 号住居跡出土試料2点の年代値を比較することで、この層の堆積年代および地形の形成年代を推定する。J 21 G 包含層下堆積物出土の FB.AG10.C18 の測定では、この斜面地山崩落土の形成時期を推定するとともに、土砂の供給源である斜面上方に遺構が存在する可能性を確認する。

3. 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA : Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA 処理における酸処理では、通常 1 mol/l (1 M) の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、 0.001 M から 1 M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が 1 M に達した時は「AAA」、 1 M 未満の場合は「AaA」と表12に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO_2)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径 1 mm のカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測

定装置に装着する。

4. 測定方法

3MV タンデム加速器(NEC Pelletron 9SDH-2)をベースとした¹⁴C-AMS 専用装置を使用し、¹⁴C の計数、¹³C 濃度(¹³C/¹²C)、¹⁴C 濃度(¹⁴C/¹²C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5. 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C 濃度(¹³C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表12)。AMS 装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) ¹⁴C 年代(Libby Age : yrBP)は、過去の大気中¹⁴C 濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libby の半滅期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach : 1977)。¹⁴C 年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表12に、補正していない値を参考値として表13に示した。¹⁴C 年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C 年代の誤差($\pm 1\sigma$)は、試料の¹⁴C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C 濃度の割合である。pMC が小さい(¹⁴C が少ない)ほど古い年代を示し、pMC が100以上(¹⁴C の量が標準現代炭素と同等以上)の場合 Modern とする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表12に、補正していない値を参考値として表13に示した。
- (4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C 濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C 年代に対応する較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C 年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C 年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、历年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. : 2009)を用い、OxCalv4.1較正プログラム(Bronk Ramsey : 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表13に示した。历年較正年代は、¹⁴C 年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」(または「cal BP」)という単位で表される。

6. 測定結果

1号住居跡 ℓ 1出土土器着炭化物FB.AG10.C01の ^{14}C 年代は $1340 \pm 30\text{yrBP}$ 、曆年較正年代(1σ)は $653 \sim 679\text{cal AD}$ の範囲である。

他の堅穴住居跡出土炭化物の ^{14}C 年代は、2号住居跡 ℓ 2のFB.AG10.C02が $1250 \pm 30\text{yrBP}$ 、FB.AG10.C03が $1330 \pm 30\text{yrBP}$ 、6号住居跡カマド ℓ 4のFB.AG10.C07が $1180 \pm 30\text{yrBP}$ 、同住居跡炉跡底面のFB.AG10.C08が $1200 \pm 30\text{yrBP}$ 、8号住居跡床面のFB.AG10.C09が $1110 \pm 30\text{yrBP}$ 、同住居跡カマド底面のFB.AG10.C10が $1180 \pm 30\text{yrBP}$ 、4号住居跡 ℓ 5のFB.AG10.C11が $1140 \pm 30\text{yrBP}$ 、FB.AG10.C12が $1130 \pm 30\text{yrBP}$ である。同じ堅穴住居跡の同じ層から出土した2点の試料を測定した事例を検討すると、4号住居跡 ℓ 5の2点の値は誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で重なり、近い年代を示すが、2号住居跡 ℓ 2の2点の値の間には若干年代差が認められる。同じ堅穴住居跡の別の層から出土した試料を測定した事例を見ると、6号住居跡の2点の値は誤差($\pm 1\sigma$)の範囲で重なる近い年代値となり、8号住居跡の2点の値は、わずかに誤差範囲で重ならないものの、近接した年代値である。

曆年較正年代(1σ)は、FB.AG10.C02が $690 \sim 777\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、FB.AG10.C03が $655 \sim 688\text{cal AD}$ の範囲、FB.AG10.C07が $782 \sim 886\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、FB.AG10.C08が $779 \sim 869\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、FB.AG10.C09が $895 \sim 972\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、FB.AG10.C10が $782 \sim 886\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、FB.AG10.C11が $885 \sim 968\text{cal AD}$ の間に2つの範囲、FB.AG10.C12が $890 \sim 970\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。

須恵器窯跡出土木炭の ^{14}C 年代は、1号須恵器窯跡底面のFB.AG10.C13が $1220 \pm 30\text{yrBP}$ 、3号須恵器窯跡作業場底面のFB.AG10.C14が $1190 \pm 30\text{yrBP}$ である。曆年較正年代(1σ)は、FB.AG10.C13が $773 \sim 870\text{cal AD}$ の範囲、FB.AG10.C14が $782 \sim 880\text{cal AD}$ の間に2つの範囲で示される。

25号土坑出土炭化物の ^{14}C 年代は、底面のFB.AG10.C15が $1180 \pm 30\text{yrBP}$ 、検出面のFB.AG10.C16が $970 \pm 30\text{yrBP}$ で、底面の試料が古く、検出面の試料が新しいという年代差が示された。曆年較正年代(1σ)は、FB.AG10.C15が $782 \sim 888\text{cal AD}$ 、FB.AG10.C16が $1023 \sim 1148\text{cal AD}$ の間に各々複数の範囲で示される。

J 22 G沢3の ℓ 2出土炭化物FB.AG10.C17の ^{14}C 年代は $1270 \pm 30\text{yrBP}$ 、曆年較正年代(1σ)は $688 \sim 771\text{cal AD}$ の間の2範囲である。6号住居跡の試料2点に比べて若干古い年代値を示し、重複関係に調和的と言える。

J 21 G包含層下堆積物(L IIIオ)出土炭化物FB.AG10.C18の ^{14}C 年代は $3190 \pm 30\text{yrBP}$ 、曆年較正年代(1σ)は $1494 \sim 1438\text{cal BC}$ の範囲で、縄文時代後期末葉頃に相当する。今回測定された他のすべての試料よりも古い年代値となっている。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表12 放射性碳素年代测定结果

试样名	测定番号	测样地名	探取地所	试样形态	处理方法	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	$\delta^{14}\text{C}$ (校正δ)	
						(AMS)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)
FBAG10C01	IAAA-10Z763	1号住居跡	¶ 1	土器伴着灰化物	AaA	-2285 ± 0.52	1,340 ± 30	84.50 ± 0.27
FBAG10C02	IAAA-10Z764	2号住居跡	¶ 2	灰化物	AAA	-2509 ± 0.47	1,250 ± 30	85.56 ± 0.27
FBAG10C03	IAAA-10Z765	2号住居跡	¶ 2	灰化物	AAA	-2404 ± 0.6	1,320 ± 30	84.71 ± 0.27
FBAG10C07	IAAA-10Z766	6号住居跡 がマP	¶ 4	灰化物	AAA	-2386 ± 0.59	1,180 ± 30	86.30 ± 0.29
FBAG10C08	IAAA-10Z767	6号住居跡 小路	底面	灰化物	AAA	-2486 ± 0.52	1,200 ± 30	86.08 ± 0.28
FBAG10C09	IAAA-10Z768	8号住居跡	床面	灰化物	AAA	-2704 ± 0.55	1,110 ± 30	87.05 ± 0.28
FBAG10C10	IAAA-10Z769	8号住居跡 がマP	底面	灰化物	AaA	-2651 ± 0.47	1,180 ± 30	86.29 ± 0.29
FBAG10C11	IAAA-10Z770	4号住居跡	¶ 5	灰化物	AAA	-2532 ± 0.45	1,140 ± 30	86.79 ± 0.28
FBAG10C12	IAAA-10Z771	4号住居跡	¶ 5	灰化物	AAA	-2712 ± 0.53	1,120 ± 30	86.92 ± 0.3
FBAG10C13	IAAA-10Z772	1号住居跡	底面	未炭	AAA	-2750 ± 0.43	1,220 ± 30	85.92 ± 0.27
FBAG10C14	IAAA-10Z773	3号住居跡作業場	底面	未炭	AAA	-2482 ± 0.57	1,190 ± 30	86.21 ± 0.29
FBAG10C15	IAAA-10Z774	25号土壤	底面	灰化物	AAA	-2537 ± 0.5	1,180 ± 30	86.35 ± 0.29
FBAG10C16	IAAA-10Z775	25号土壤	检出物	灰化物	AAA	-2546 ± 0.61	970 ± 30	86.66 ± 0.29
FBAG10C17	IAAA-10Z776	J22G R3	¶ 2	灰化物	AAA	-2703 ± 0.54	1,270 ± 30	85.36 ± 0.29
FBAG10C18	IAAA-10Z777	J21G 釜余廻下堆积物	1. III+	灰化物	AAA	-2438 ± 0.66	3,190 ± 30	67.19 ± 0.25

表13 曆年較正年代

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		曆年較正用 (yrBP)	1 σ 年代範囲	2 σ 年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-102763	1,310 ± 20	84.96 ± 0.25	1344 ± 25	653calAD - 679calAD (68.2%)	644calAD - 695calAD (87.8%) 700calAD - 707calAD (1.2%) 747calAD - 765calAD (6.4%)
IAAA-102764	1,250 ± 20	85.55 ± 0.26	1252 ± 25	690calAD - 751calAD (55.2%) 762calAD - 777calAD (13.0%)	676calAD - 826calAD (91.3%) 840calAD - 863calAD (4.1%)
IAAA-102765	1,320 ± 20	84.87 ± 0.25	1333 ± 26	655calAD - 688calAD (68.2%)	648calAD - 714calAD (82.2%) 745calAD - 768calAD (13.2%)
IAAA-102766	1,160 ± 30	86.5 ± 0.27	1183 ± 26	782calAD - 790calAD (6.0%) 810calAD - 886calAD (62.2%)	773calAD - 898calAD (91.3%) 922calAD - 943calAD (4.1%)
IAAA-102767	1,200 ± 30	86.11 ± 0.27	1203 ± 26	779calAD - 831calAD (42.1%) 857calAD - 899calAD (26.1%)	720calAD - 742calAD (4.5%) 770calAD - 892calAD (90.9%)
IAAA-102768	1,150 ± 20	86.68 ± 0.26	1114 ± 25	895calAD - 925calAD (29.1%) 937calAD - 972calAD (39.1%)	885calAD - 990calAD (96.4%)
IAAA-102769	1,210 ± 30	86.02 ± 0.27	1184 ± 26	782calAD - 790calAD (6.1%) 810calAD - 886calAD (62.1%)	773calAD - 898calAD (91.7%) 922calAD - 942calAD (3.7%)
IAAA-102770	1,140 ± 30	86.74 ± 0.27	1137 ± 25	885calAD - 903calAD (16.5%) 916calAD - 968calAD (51.7%)	783calAD - 788calAD (0.9%) 815calAD - 844calAD (5.2%) 859calAD - 983calAD (89.3%)
IAAA-102771	1,160 ± 30	86.54 ± 0.28	1126 ± 27	890calAD - 904calAD (12.5%) 914calAD - 970calAD (55.7%)	827calAD - 841calAD (1.6%) 864calAD - 990calAD (93.8%)
IAAA-102772	1,260 ± 20	85.48 ± 0.26	1218 ± 25	773calAD - 870calAD (68.2%)	709calAD - 747calAD (13.9%) 766calAD - 887calAD (81.5%)
IAAA-102773	1,190 ± 30	86.24 ± 0.27	1192 ± 26	782calAD - 791calAD (7.6%) 808calAD - 880calAD (60.6%)	726calAD - 738calAD (1.5%) 771calAD - 895calAD (92.4%) 925calAD - 937calAD (1.5%)
IAAA-102774	1,190 ± 30	86.28 ± 0.27	1179 ± 26	782calAD - 790calAD (5.8%) 810calAD - 888calAD (62.4%)	774calAD - 899calAD (89.5%) 920calAD - 945calAD (5.9%)
IAAA-102775	970 ± 30	88.57 ± 0.27	967 ± 26	1023calAD - 1046calAD (29.3%) 1092calAD - 1121calAD (30.6%) 1140calAD - 1148calAD (8.3%)	1017calAD - 1155calAD (96.4%)
IAAA-102776	1,310 ± 30	85 ± 0.27	1271 ± 27	688calAD - 725calAD (36.9%) 739calAD - 771calAD (31.3%)	666calAD - 780calAD (93.4%) 792calAD - 806calAD (2.0%)
IAAA-102777	3,180 ± 30	67.27 ± 0.23	3194 ± 29	1494calBC - 1438calBC (68.2%)	1516calBC - 1416calBC (95.4%)

参考文献

- Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion : Reporting of ^{13}C data. *Radiocarbon* 19 (3). pp.355–363.
- Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates. *Radiocarbon* 51 (1). pp.337–360.
- Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0–50000 years cal BP. *Radiocarbon* 51 (4). pp.1111–1150.

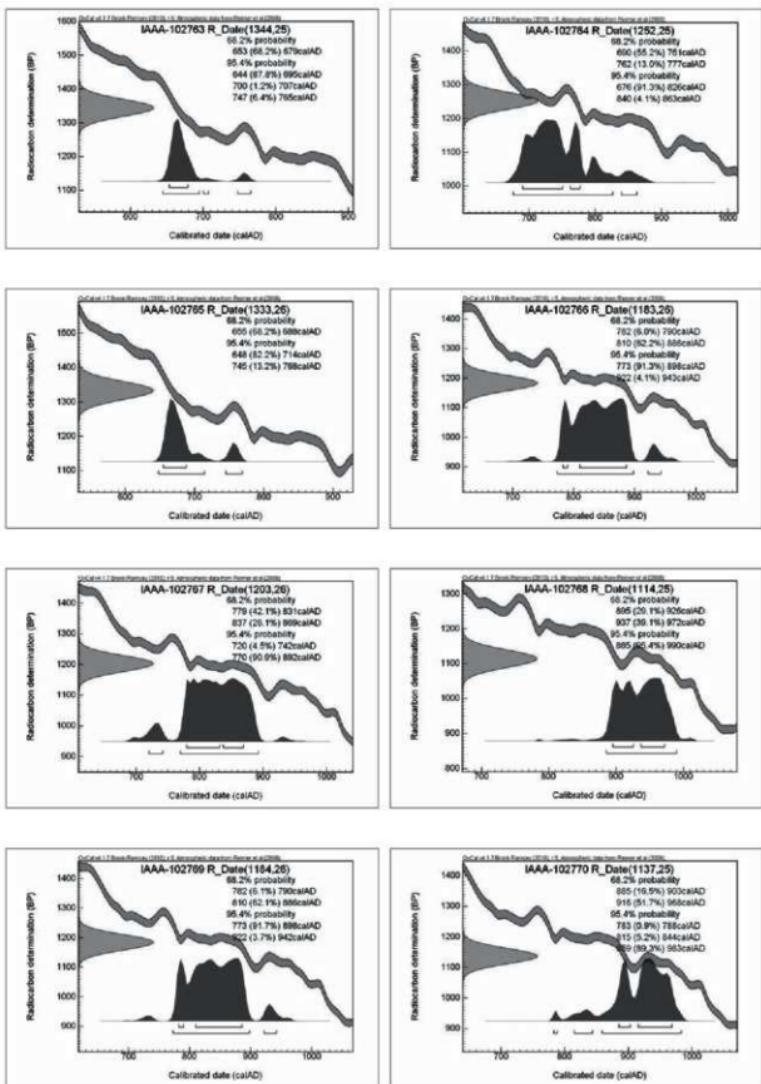
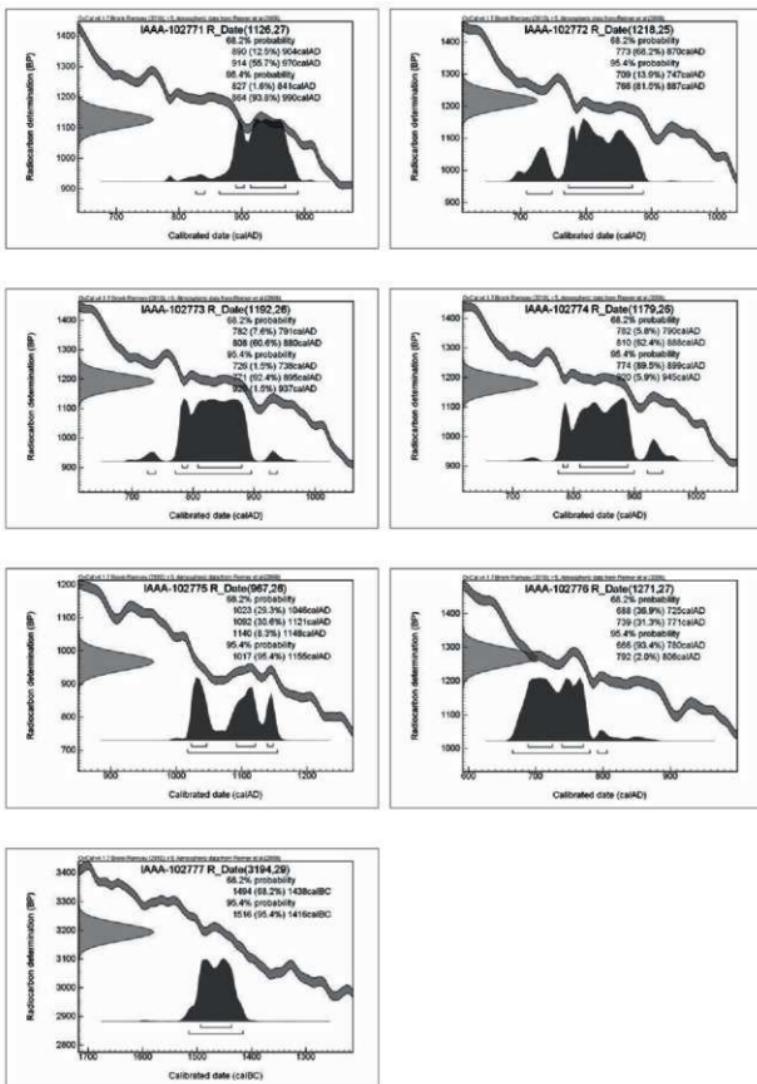


図127 歴年較正年代グラフ（1）



第2節 出土炭化材の樹種同定

株式会社 加速器分析研究所

はじめに

小田高原遺跡は、阿賀川右岸の段丘上に位置し、縄文時代の落し穴や奈良・平安時代の堅穴住居跡等が検出されている。本報告では、堅穴住居跡から出土した炭化材を対象として、木材利用を確認するための樹種同定を実施する。

1. 試 料

試料は、2号住居跡(S I 02)から出土した炭化材5点(FB.AG10.C02～C06)である。

2. 分析方法

試料を自然乾燥させた後、木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称や特徴は、島地・伊東(1982)や Wheeler 他(1998)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995～1999)を参考にする。

3. 結 果

樹種同定結果を表14に示す。炭化材は、広葉樹2分類群(コナラ属コナラ亜属コナラ節・バラ科ナシ亞科)に同定された。同定された各分類群の解剖学的特徴等を記す。

コナラ属コナラ亜属コナラ節 (*Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Prinus*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のものと複合放射組織とがある。

バラ科ナシ亞科 (Rosaceae sibfam. Maloideae)

散孔材で、管壁は中庸～薄く、横断面では多角形、単独および2～5個が複合して散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～2細胞幅、1～20細胞高。

表14 樹種同定結果

試料名	遺構名	層位	樹種同定結果	備考
FB.AG10.C02	2号住居跡	# 2	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
FB.AG10.C03	2号住居跡	# 2	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
FB.AG10.C04	2号住居跡	# 1	コナラ属コナラ亜属コナラ節	
FB.AG10.C05	2号住居跡	# 2	コナラ属コナラ亜属コナラ節	芯持丸木(直径30cm)
FB.AG10.C06	2号住居跡	# 2	バラ科ナシ亜科	芯持丸木(直径37cm)

4. 考 察

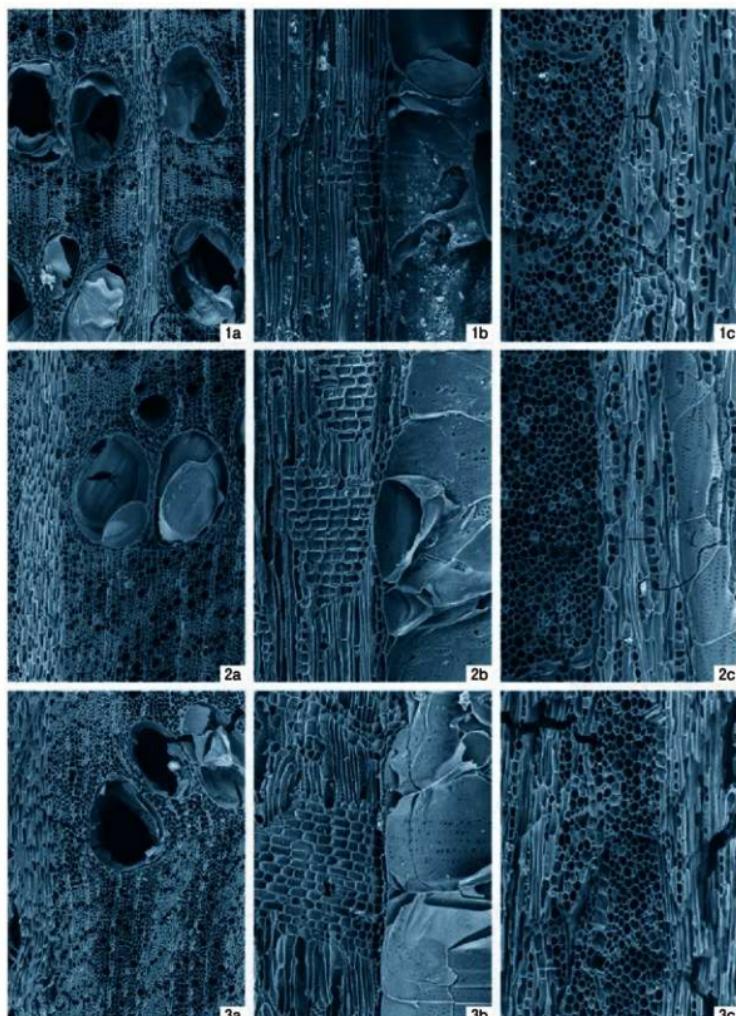
2号住居跡は焼失家屋であり、出土した炭化材は構築部材等に由来すると考えられる。大型の炭化材の他、小径の芯持丸木も2点認められる。これらの炭化材は、5点中4点がコナラ節で、1点がナシ亜科であった。いずれも二次林や山地の落葉広葉樹林中に生育し、本材は重硬で強度が高い材質を有することから、構築部材として強度の高い木材を選択したことが推定される。

本地域では、同時期の構築部材の木材利用に関する資料がほとんどない。福島県内では、浜通り地方の大船廻A遺跡や長瀬遺跡でコナラ節、クヌギ節、ハンノキ属等が比較的多く利用されている(パリノ・サーヴェイ株式会社:1995)。今回の結果から、本地域でもコナラ節が多く利用されていたことが推定される。

※)本分析は、パリノ・サーヴェイ株式会社の協力を得て行った。

参考文献

- 林 昭三 1991『日本産木材顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所
- 伊東隆夫 1995『日本産広葉樹材の解剖学的記載I』『木材研究・資料31』京都大学木質科学研究所 pp.81-181.
- 伊東隆夫 1996『日本産広葉樹材の解剖学的記載II』『木材研究・資料32』京都大学木質科学研究所 pp.66-176.
- 伊東隆夫 1997『日本産広葉樹材の解剖学的記載III』『木材研究・資料33』京都大学木質科学研究所 pp.83-201.
- 伊東隆夫 1998『日本産広葉樹材の解剖学的記載IV』『木材研究・資料34』京都大学木質科学研究所 pp.30-166.
- 伊東隆夫 1999『日本産広葉樹材の解剖学的記載V』『木材研究・資料35』京都大学木質科学研究所 pp.47-216.
- パリノ・サーヴェイ株式会社 1995『長瀬遺跡、大船廻A遺跡、前田C遺跡における炭化材同定』『原町火力発電所開港遺跡調査報告V』福島県文化財調査報告書第310集 福島県教育委員会・(財)福島県文化センター pp.1271-1304.
- 鳥地 謙・伊東隆夫 1982『図説木材組織』地球社 p.176
- Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(編) 1998『広葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡の特徴リスト』伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修)海青社 p.122 [Wheeler E.A., Bass P. and Gasson P.E.(1989) IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification].



1. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (FB.AG10.C02)
2. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (FB.AG10.C03)
3. コナラ属コナラ亜属コナラ節 (FB.AG10.C04)
a : 木口, b : 横目, c : 板目

図129 炭化木材組織（1）

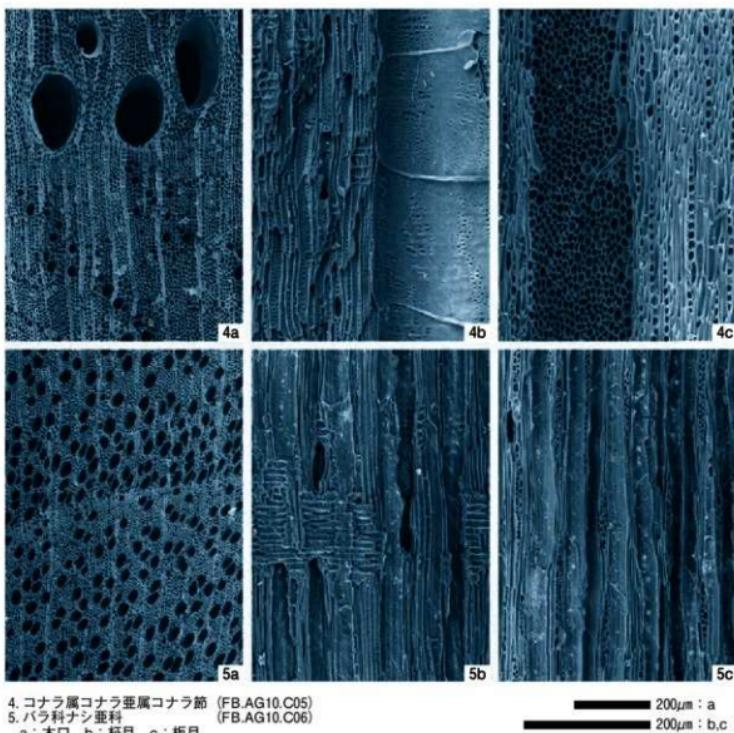


図130 炭化材木材組織（2）

第3節 土器の胎土分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

喜多方市に所在する小田高原遺跡は、阿賀川右岸に分布する段丘上およびその斜面から沖積低地にかけて位置する。発掘調査では、段丘上に8世紀後半を中心とする集落が確認され、沖積低地には住居跡および須恵器窯や土師器焼成坑などが確認されている。

本報告では、窯跡および住居跡などの遺構から出土した須恵器の材質(胎土)の特性を把握することにより、器種間、時期間さらには土師器や粘土塊等との比較を行い、小田高原遺跡における須恵器の生産事情に関わる資料を作成する。

1. 試 料

試料は、小田高原遺跡から出土した須恵器片10点と土師器片2点および調査区内より採取した粘土3点の合計15点である。試料の一覧を表15に示す。試料には小高1～15までの試料Noが付されている。小高1～5は須恵器の杯であり、これらのうち、小高1～3は須恵器窯跡出土、小高4および小高5は住居跡出土である。小高1～4までは9世紀中葉とされ、小高5は8世紀後半～9世紀前葉とされている。小高6～10までは、それぞれ、長胴甕、甕、杯、横瓶、杯蓋であり、小高6と小高7は窯跡出土、小高8は土坑出土、小高9・10は住居跡出土である。窯跡出土品は9世紀中葉

表15 胎土分析試料一覧

試料No.	種別	形態	出土地点		出土層位	備考
			遺構	調査区		
小高1	杯	須恵器	1号須恵器窯跡	II区	底面	9世紀中葉
小高2	杯	須恵器	1号須恵器窯跡	II区	底面	9世紀中葉
小高3	杯	須恵器	3号須恵器窯跡	II区	底面	9世紀中葉
小高4	杯	須恵器	11号住居跡	III区	床面	9世紀中葉～9世紀後葉
小高5	杯	須恵器	2号住居跡	I区	床面	8世紀後半～9世紀前葉
小高6	長胴甕	須恵器	3号須恵器窯跡	II区	堆積土	形状が土師器甕に類似
小高7	甕	須恵器	1号須恵器窯跡	II区	堆積土	9世紀中葉
小高8	杯	須恵器	7号土坑	I区	堆積土	8世紀末葉～9世紀前葉(焼成不良)
小高9	横瓶	須恵器	3号住居跡	I区	堆積土	8世紀末葉～9世紀前葉
小高10	杯蓋	須恵器	1号住居跡	I区	床面	8世紀末葉～9世紀前葉
小高11	杯	土師器	11号住居跡	III区	床面	9世紀中葉～9世紀後葉
小高12	長胴甕	土師器	8号住居跡	II区	床面	10世紀初頭
小高13	粘土		8号住居跡	II区	床面	床面に散布していた小塊
小高14	粘土		11号住居跡	III区	床面	床面からまとまって出土した粘土塊
小高15	粘土			I区	斜面露頭	約5万年前の沼沢テフラの風化層

葉とされているが、土坑・住居跡出土品は8世紀末葉～9世紀前葉とされている。

小高11と小高12はそれぞれ土師器の杯および土師器の長胴甕である。いずれも住居跡出土であるが、小高11は9世紀後半、12は10世紀初頭とされている。

小高13～15は、粘土試料である。これらのうち、小高13と小高14は住居跡床面から採取された粘土塊であり、小高15は調査区内の露頭から採取された沼沢テフラの風化層とされている。

2. 分析方法

胎土分析には、現在様々な分析方法が用いられているが、大きく分けて鉱物組成や岩片組成を求める方法と化学組成を求める方法がある。前者は粉碎による重鉱物分析や薄片作製などが主に用いられており、後者では蛍光X線分析が最もよく用いられている方法である。今回の分析で対象としている須恵器は、一般的には1000℃を超える高温焼成を経るために、長石類などの一部の鉱物は変質し、溶失してしまう場合もある。このような場合は、焼成前の土(素地土)における鉱物組成とは若干の変化が生じている可能性があるが、これに対しては、焼成後もほとんど変化することのない化学組成を捉えることのできる蛍光X線分析が有効となる。

ここでは、 SiO_2 , TiO_2 , Al_2O_3 , Fe_2O_3 , MnO , MgO , CaO , Na_2O , K_2O , P_2O_5 の主要10元素およびRb, Sr, Y, Zr, Baの微量5元素について蛍光X線分析法によって分析する。以下に各分析条件を記す。

測定装置

理学電機工業社製 RIX1000(FP法のグループ定量プログラム)

試料調製

機械乾燥(110℃)した試料を振動ミル(平工製作所製 TI100:10ml容タンクステンカーバイト容器)で微粉碎した後、ガラスピートを以下の条件で作成する。なお、胎土表面に塗装または釉薬が確認される試料については、これらを除去し、試料として供する。

溶融装置：自動剥離機構付理学電機工業社製高周波ビートサンプラー(3491A1)

溶剤および希釈率：融剤(ホウ酸リチウム)5.000g：試料0.500g

剥離剤：LiF(溶融中1回投入)

溶融温度：1200℃ 約7分

測定条件

X線管：Cr(50kV-50mA)

スペクトル：全元素 K α

分光結晶：LiF, PET, TAP, Ge

検出器：F-PC, SC

計数時間：PeaK40sec, Back20sec

3. 結 果

結果を表16に示す。ここでは試料間の組成を比較する方法として、以下に示す元素を選択し、それらの値を縦軸・横軸とした散布図を作成した(図131)。

(a) 化学組成中で最も主要な元素(SiO_2 , Al_2O_3)

(b) 粘土の母材を考える上で、長石類(主にカリ長石、斜長石)の種類構成は重要である。このことから、指標として長石類の主要元素である CaO , Na_2O , K_2O の3者を選択し、長石全体におけるアルカリ長石およびカリ長石の割合を定性的に見る。実際には、長石類全体におけるアルカリ長石の割合($\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) / ($\text{CaO} + \text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O}$) を横軸とし、アルカリ長石におけるカリ長石の割合 $\text{K}_2\text{O}/(\text{Na}_2\text{O} + \text{K}_2\text{O})$ を縦軸とする。

(c) 輝石類や黒雲母、角閃石など有色鉱物における主要な元素。この場合これらの有色鉱物の主要な元素のうち、 TiO_2 , Fe_2O_3 , MgO を指標として選択し、 Fe_2O_3 を分母とした TiO_2 , MgO の割合を見る。

(d) 各微量元素を選択する。組み合わせは、Rb-Sr と Zr-Ba とする。

また、これらの散布図では、須恵器の時期および土師器と粘土塊をそれぞれ異なる記号で示した。5つの散布図を見ると、窯跡出土須恵器の小高1~3・6・7は、有色鉱物主要元素の散布図では若干のばらつきを示すが、他の散布図では、互いに近接した分布を示している。さらにどの散布図においても窯跡出土須恵器とはば近接した位置に住居跡出土の小高4と小高10が認められる。一方、小高5・8・9の3点あるいはこれらのうちのいずれか2点は、どの散布図においても、上述した窯跡出土須恵器と小高4・10の分布域の縁辺にプロットされている。

表16-1 蛍光X線分析結果

(%)

試料No	器種	主要元素										合計	
		SiO_2	TiO_2	Al_2O_3	Fe_2O_3	MnO	MgO	CaO	Na_2O	K_2O	P_2O_5		
小高1	須恵器	69.30	0.67	19.62	4.11	0.02	0.83	0.58	0.95	1.79	0.02	2.11	100.00
小高2	須恵器	67.71	0.60	18.44	6.88	0.02	0.77	0.54	0.75	1.61	0.02	2.66	100.00
小高3	須恵器	68.96	0.69	19.55	3.90	0.02	0.83	0.56	0.90	1.75	0.01	2.83	100.00
小高4	須恵器	68.92	0.63	17.87	6.59	0.02	0.72	0.51	0.78	1.49	0.03	2.44	100.00
小高5	須恵器	66.00	0.62	16.00	5.02	0.03	0.58	0.50	0.77	1.46	0.02	9.00	100.00
小高6	須恵器	72.28	0.59	18.07	5.02	0.02	0.72	0.52	0.90	1.80	0.02	0.06	100.00
小高7	須恵器	68.46	0.65	19.38	5.58	0.01	0.83	0.50	0.70	1.75	0.02	2.12	100.00
小高8	須恵器	70.58	0.69	17.57	6.52	0.02	0.53	0.55	1.00	1.73	0.02	0.79	100.00
小高9	須恵器	72.38	0.64	17.93	5.33	0.02	0.71	0.41	0.69	1.81	0.01	0.07	100.00
小高10	須恵器	67.12	0.63	19.49	6.79	0.02	0.86	0.51	0.72	1.56	0.02	2.28	100.00
小高11	土師器	64.93	0.61	16.74	4.24	0.02	0.80	0.75	1.45	1.64	0.14	8.68	100.00
小高12	土師器	65.04	0.67	20.39	6.15	0.06	1.00	1.39	1.49	1.53	0.06	2.22	100.00
小高13	粘土	63.21	0.63	18.05	4.15	0.07	0.92	1.44	1.73	1.44	0.03	8.33	100.00
小高14	粘土	70.72	0.50	14.28	3.93	0.02	0.53	0.71	1.35	1.75	0.01	6.20	100.00
小高15	粘土	64.86	0.66	18.06	3.73	0.02	0.73	0.51	1.00	1.72	0.02	8.69	100.00

表16-2 蛍光X線分析結果

試料No	器種	(ppm)				
		微量元素				
		Rb	Sr	Y	Zr	Ba
小高1	須恵器	86	77	31	157	405
小高2	須恵器	81	64	27	144	338
小高3	須恵器	76	78	31	167	412
小高4	須恵器	72	65	25	156	347
小高5	須恵器	79	51	20	160	583
小高6	須恵器	78	70	28	141	366
小高7	須恵器	82	64	28	150	371
小高8	須恵器	89	72	25	174	393
小高9	須恵器	90	61	24	163	365
小高10	須恵器	81	65	26	166	374
小高11	土師器	70	86	27	163	503
小高12	土師器	64	125	30	164	379
小高13	粘土	62	136	24	166	357
小高14	粘土	70	86	24	151	364
小高15	粘土	86	66	31	174	407

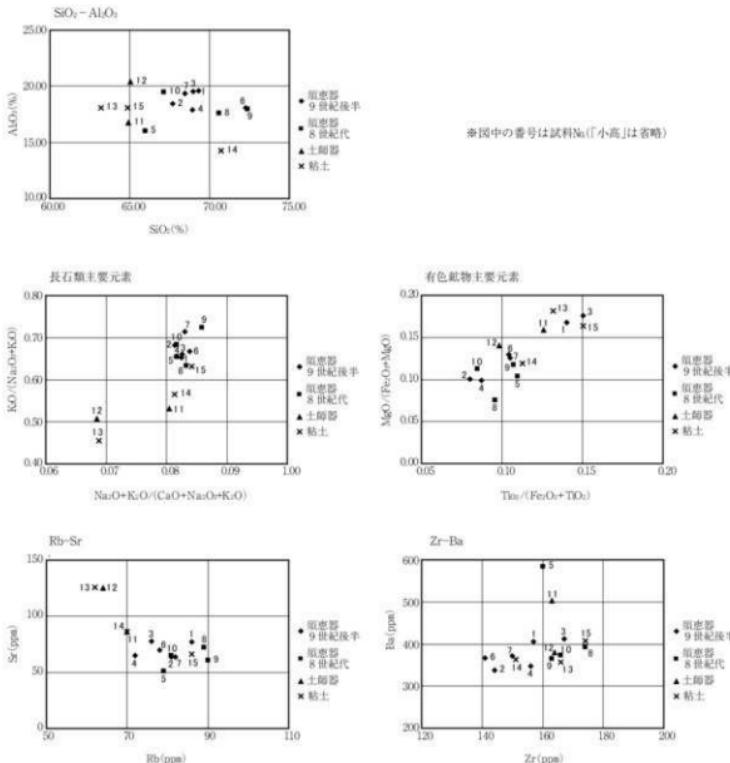


図131 胎土化学組成散布図

土師器試料の小高11と小高12は、 $\text{SiO}_2-\text{Al}_2\text{O}_3$ 、長石類主要元素、 $\text{Rb}-\text{Sr}$ の各散布図において、上述した須恵器各試料の分布域から、顯著に離れた位置にプロットされている。

粘土試料では、小高13が有色鉱物主要元素散布図以外の散布図で土師器試料の小高12と常に近い位置にプロットされている。小高14は、長石類主要元素散布図と $\text{Rb}-\text{Sr}$ 散布図では、土師器試料の小高11と接続した位置にあり、有色鉱物主要元素散布図と $\text{Zr}-\text{Ba}$ 散布図では須恵器試料の分布域内に位置している。小高15は、いずれの散布図においても須恵器試料の分布域の外縁に位置している。

4. 考 察

前述した各試料の散布図における分布に、各試料の属性(器種や出土地点および時期)を対応させると、まず、窯跡出土須恵器については、窯が異なっても胎土に大きな違いはないことがわかる。また、窯跡出土須恵器と同時期とされる住居跡出土の杯の小高4は、その胎土が窯跡出土須恵器と近似していることから、1号窯跡あるいは3号窯跡で焼かれた製品であると考えられる。小高10も窯跡出土須恵器とはほぼ同様の胎土と考えられるが、窯跡出土試料よりもおよそ100年古い時期とされている。この所見に従うならば、比較的長期にわたって同質の土が須恵器の原材料として使用されていた状況が窺える。しかし、その一方で、8世紀代の年代が推定されている小高5・8・9の各須恵器の胎土は、窯跡出土須恵器の胎土とは若干異なる材質であることが推定される。すなわち、段丘上で検出された8世紀後半とされる集落で使用されていた須恵器のなかには、材質の異なる(おそらく窯の異なる)少なくとも2種類以上の須恵器が混在していた可能性があると考えられる。

土師器試料については、須恵器とは材質が異なることは明らかであるが、今回注目される結果として、住居跡出土の粘土試料と化学組成が近いことが挙げられる。すなわち、住居跡床面から出土した粘土塊は、その出土状況も考慮すると、土師器の素地土の残片であった可能性があると考えられる。なお、テフラの風化層である小高15については、須恵器試料の化学組成からは若干ずれた位置にあり、土師器試料とはさらに離れた位置にあることから、それが土器の原材料の主体となるようなことはなかったと考えられる。ただし、須恵器の素地土の一部として使用された可能性はあると考えられる。

今回の分析では、試料数15点というなかでの解析であり、散布図における分布領域について、同質の胎土におけるばらつきの範囲か、異質の胎土であるかを特定することは難しい。今後、周辺における同時期の須恵器や土師器の分析例を蓄積することができれば、小田高原遺跡の窯跡出土試料の特性がより明瞭に捉えられることになり、周辺における小田高原遺跡窯跡産の須恵器の分布状況を胎土から検証することが可能になると期待される。

写 真 図 版



1 I区調査前全景（南から）



2 I区全景（南上空から）



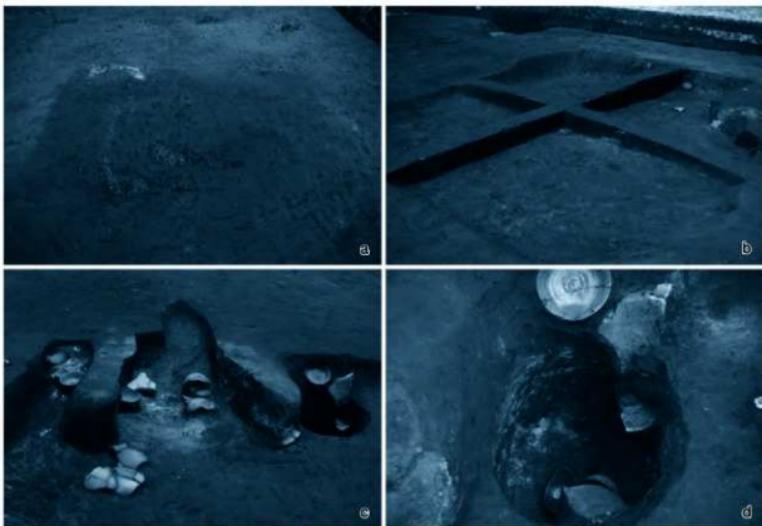
3 P・Q28G 基本土層（北東から）



4 N27G 基本土層（南西から）



5 1号住居跡（北から）



6 1号住居跡細部

a 検出（北から）
b 土層（南西から）
c カマド（北から）
d 茄物出土状況（北東から）



7 2号住居跡（西から）

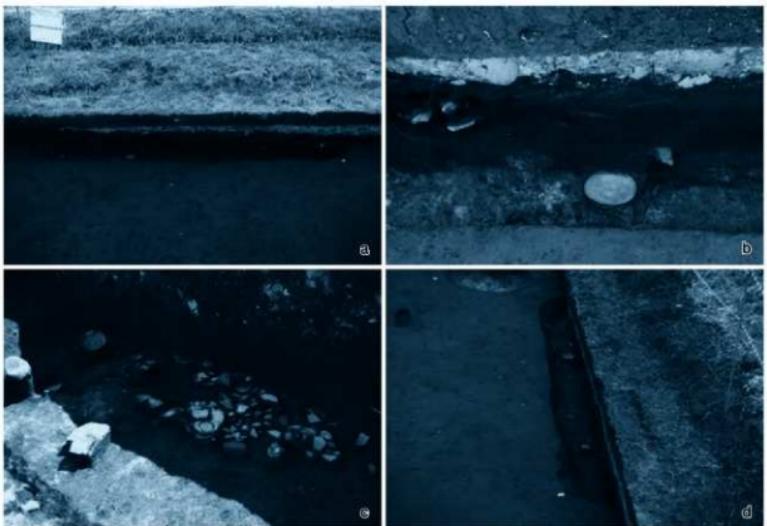


8 2号住居跡細部

a 土層（西から）
b カマド（西から）
c 遺物出土状況（南西から）
d 作業風景（北東から）



9 3号住居跡（北西から）



10 3号住居跡細部

a 土層（西北から）
b 道物出土状況（北西から）
c 遺物出土状況（西から）
d 完掘状況（南西から）



11 7号住居跡（南から）



a



b



c



d

12 7号住居跡細部

a 検出（南から）

c 遺物出土状況（北東から）

b 土器（南西から）

d 淋状施設（南東から）

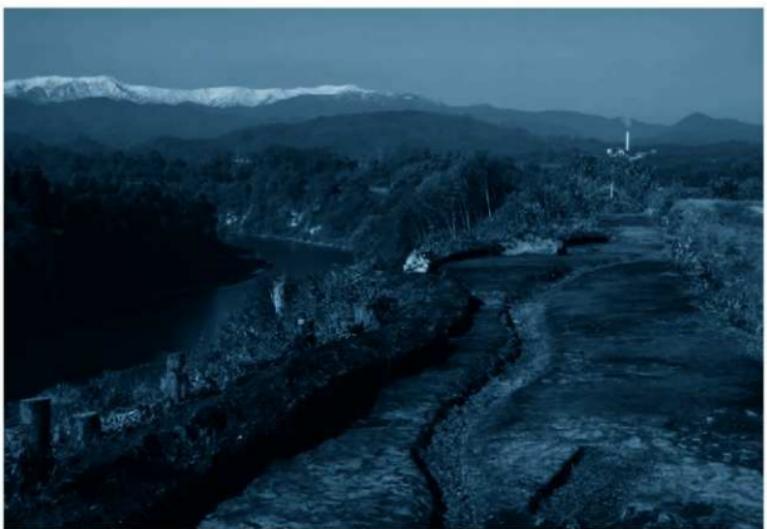


13 10号住居跡（南西から）

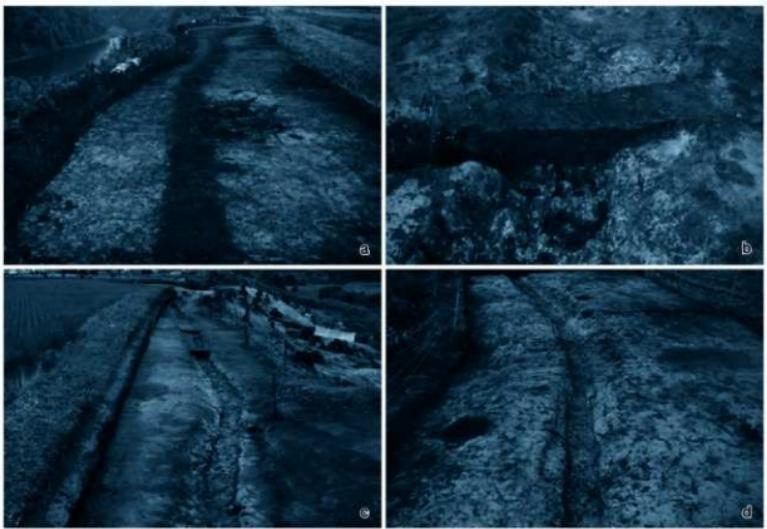


14 2・3・6～8号溝跡

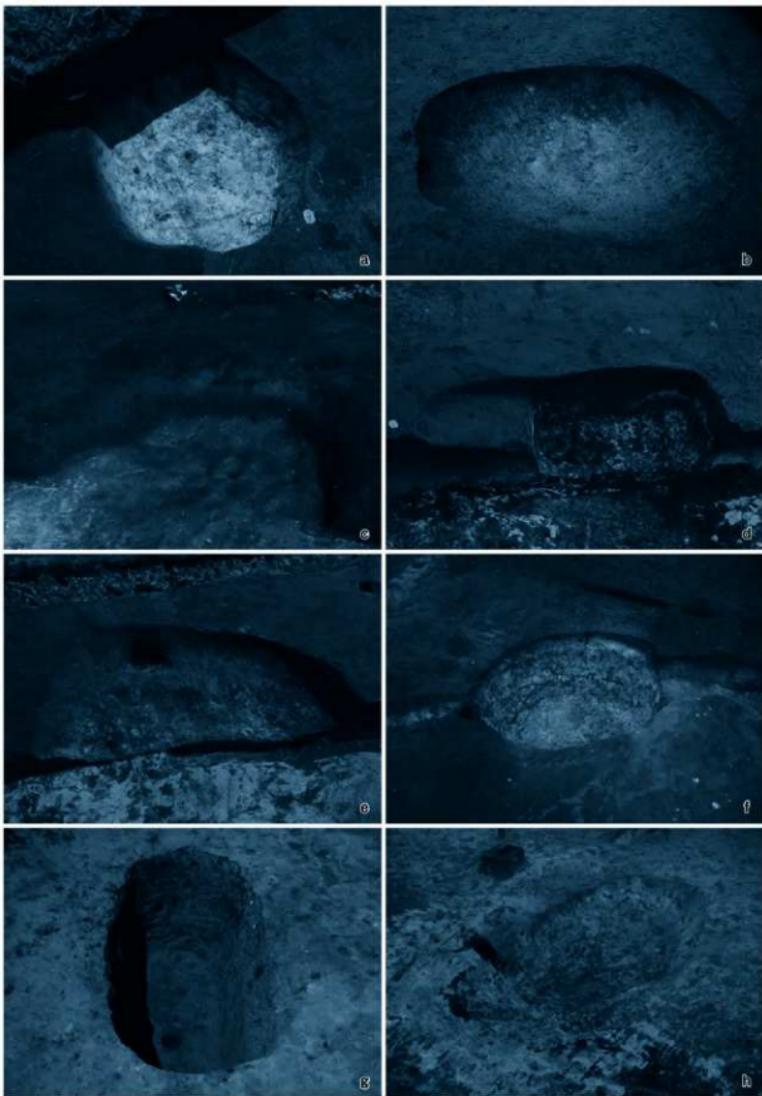
a 2号溝跡（北東から）
b 3号溝跡（北東から）
c 6号溝跡（西から）
d 7・8号溝跡（西から）



15 1号溝跡（南から）



16 1号溝跡細部



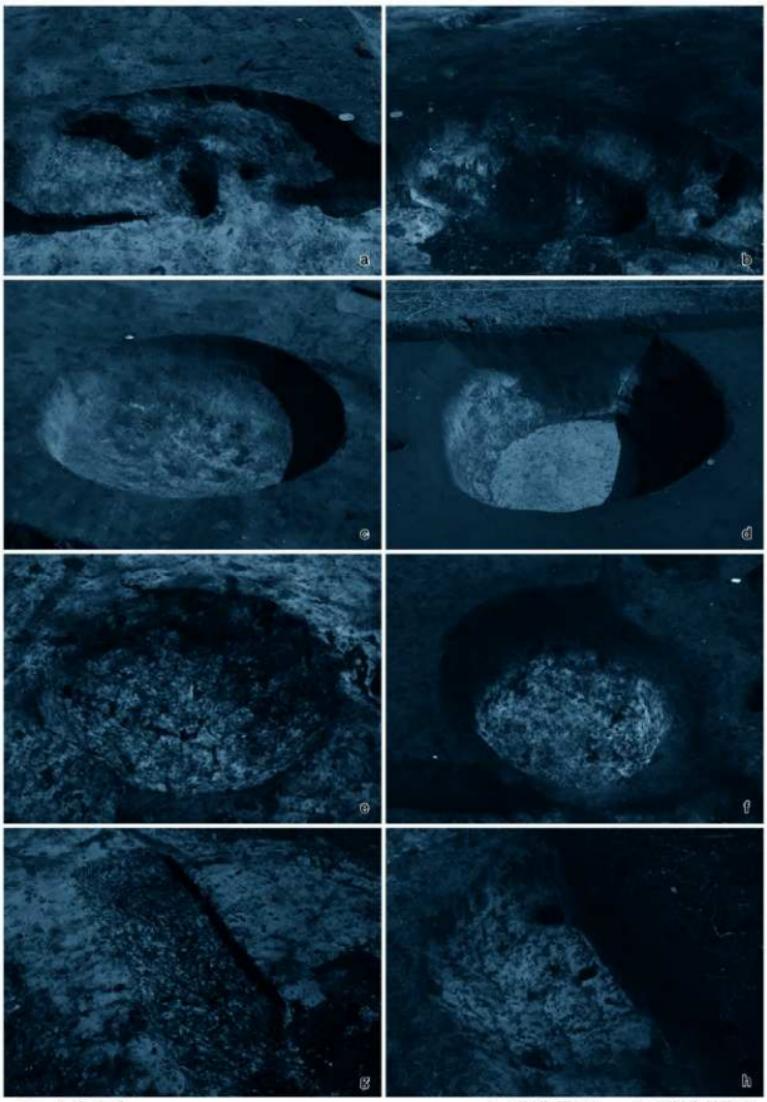
17 土坑（1）

- a 1号土坑（西から）
c 3号土坑（西から）
e 5号土坑（北西から）
g 8号土坑（南東から）
b 2号土坑（西から）
d 4号土坑（西から）
f 6号土坑（南から）
h 9号土坑（南西から）



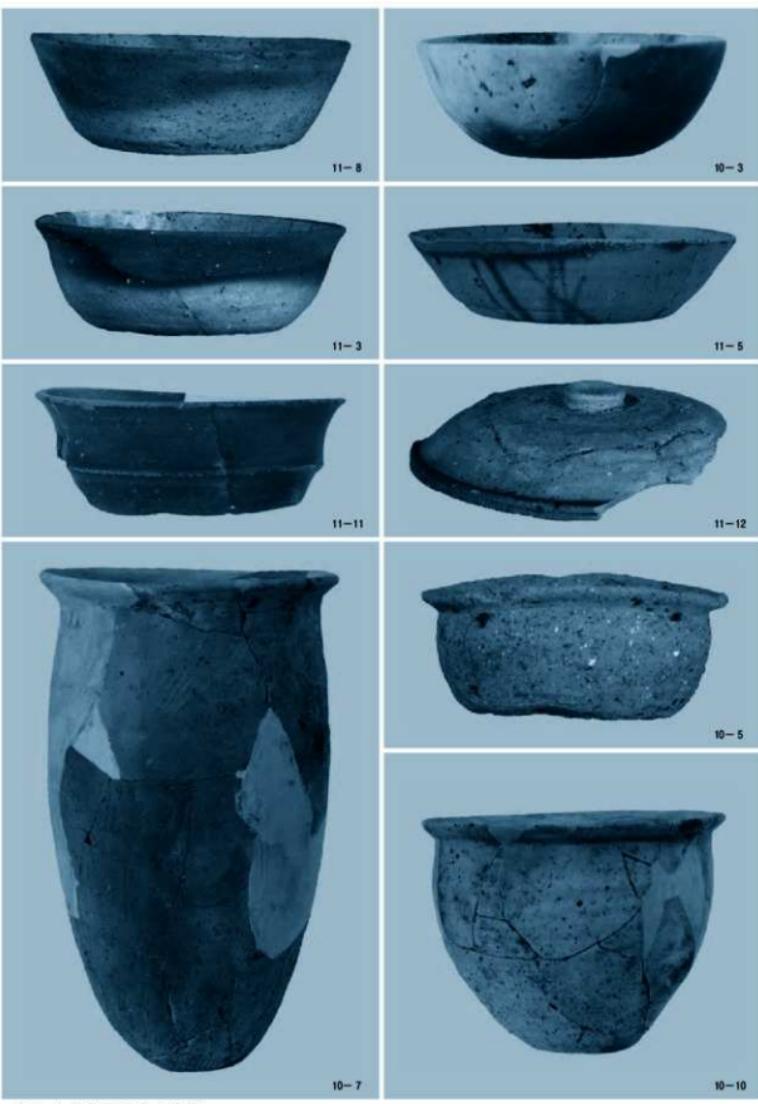
18 土坑 (2)

a 11号土坑（南東から）
b 12号土坑（南東から）
c 7号土坑遺物出土状況（北から）
d 7号土坑（南から）
e 13号土坑（南西から）



19 土坑（3）

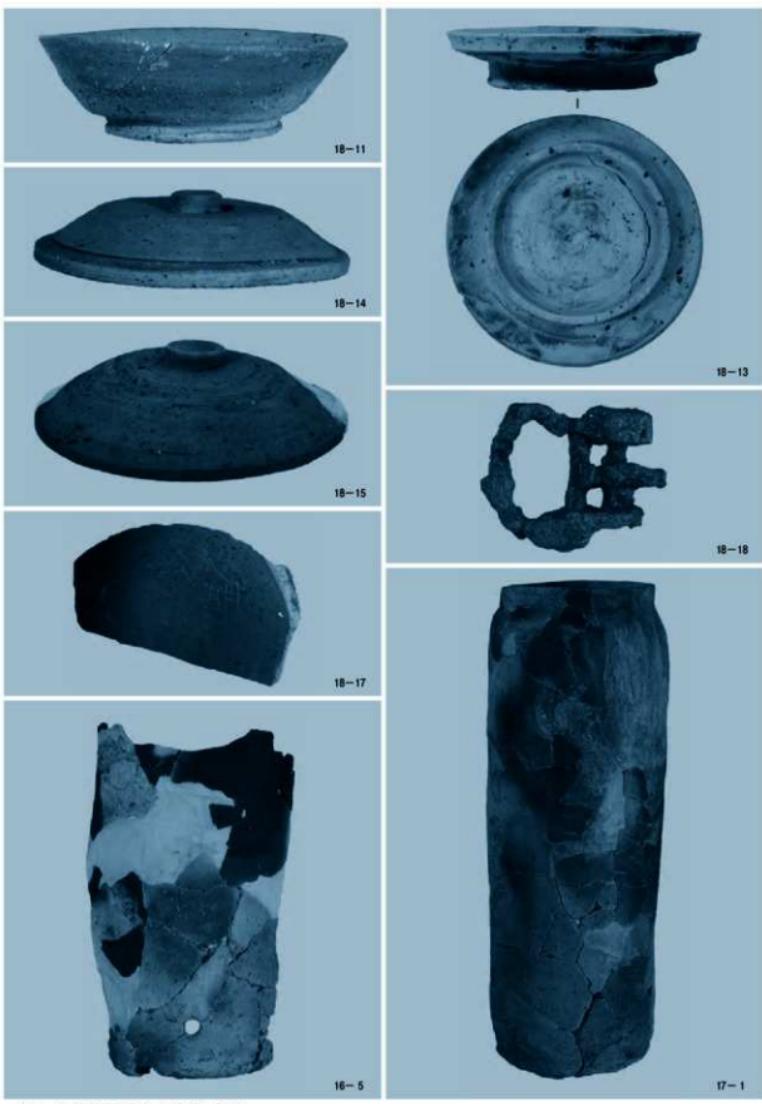
- | | |
|---------------|---------------|
| a 14号土坑（西から） | b 15号土坑（南西から） |
| c 16号土坑（西から） | d 17号土坑（西から） |
| e 19号土坑（西から） | f 20号土坑（西から） |
| g 27号土坑（南西から） | h 33号土坑（北から） |



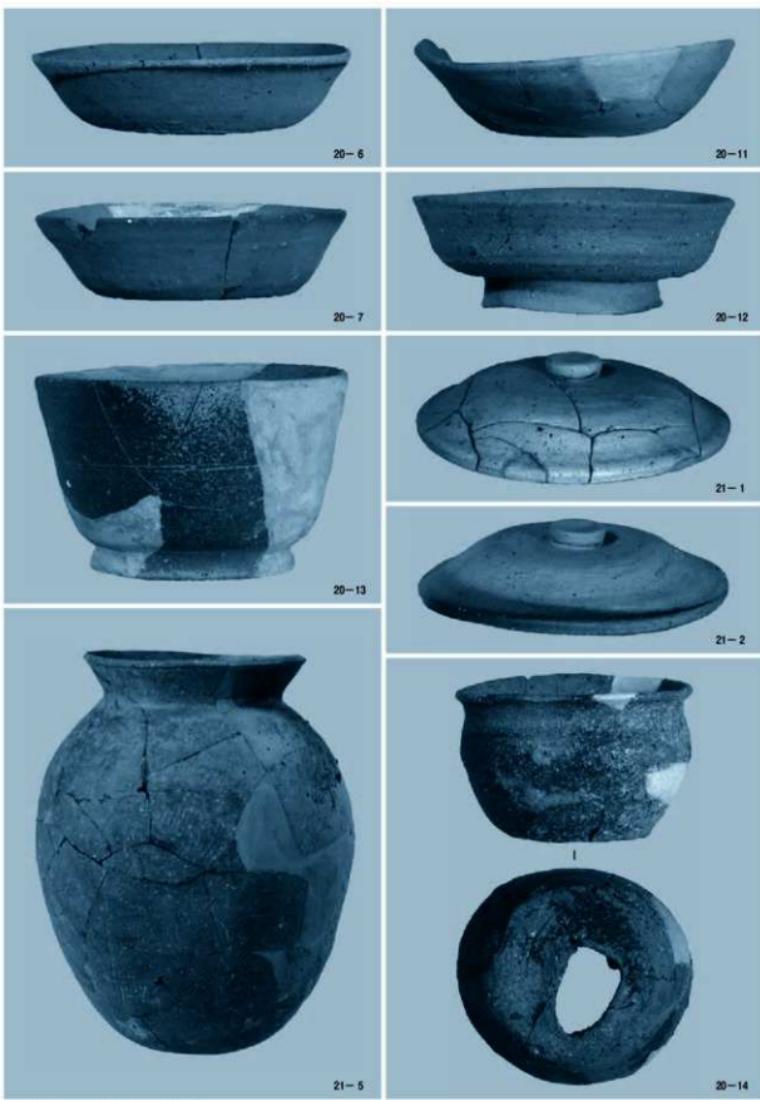
20 1号住居跡出土遺物



21 2号住居跡出土遺物（1）



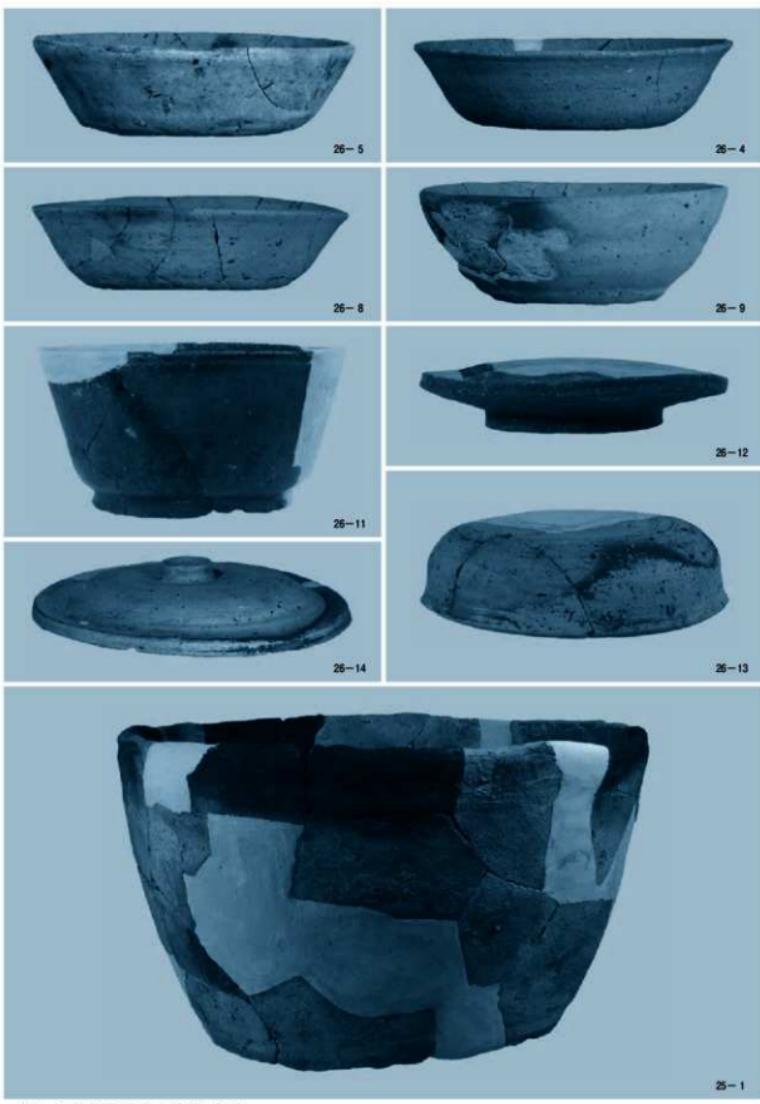
22 2号住居跡出土遺物（2）



23 3号住居跡出土遺物



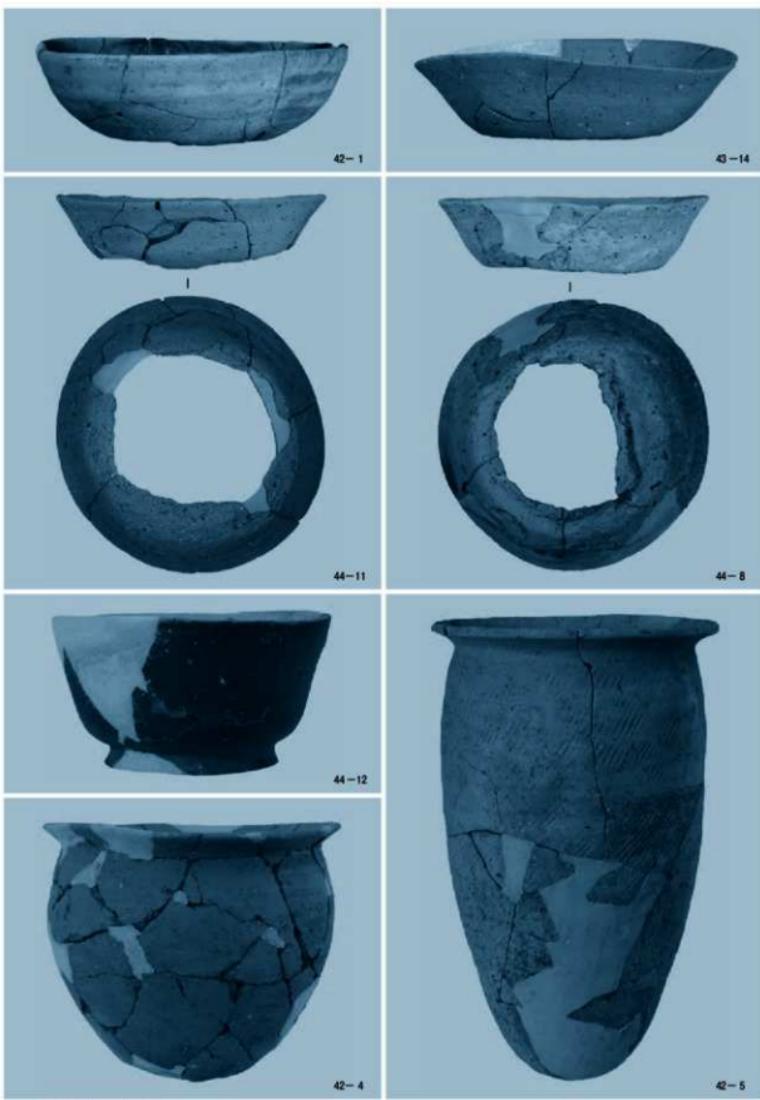
24 7号住居跡出土遺物（1）



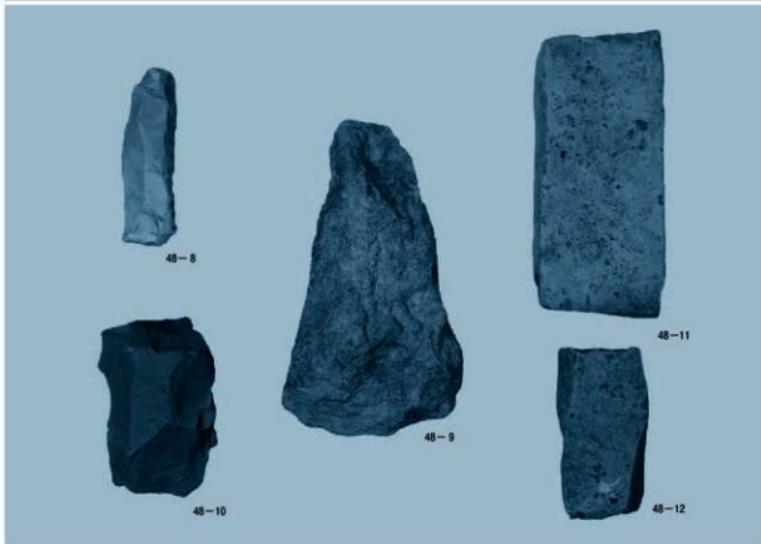
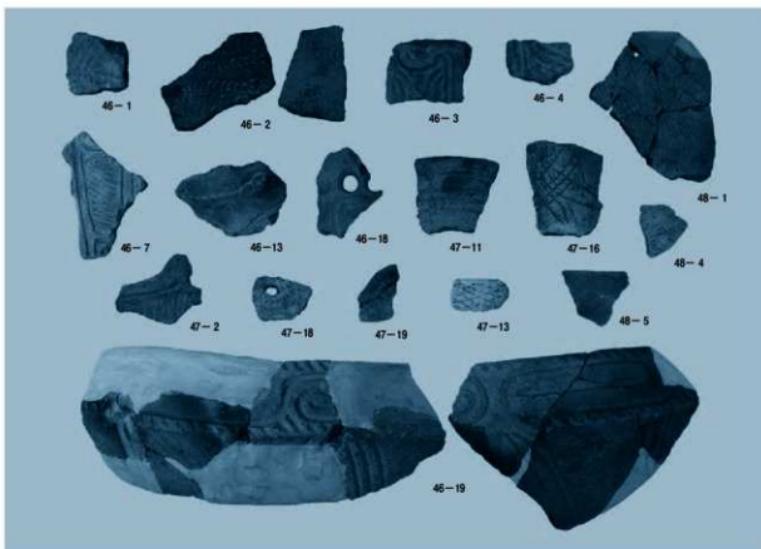
25 7号住居跡出土遺物（2）



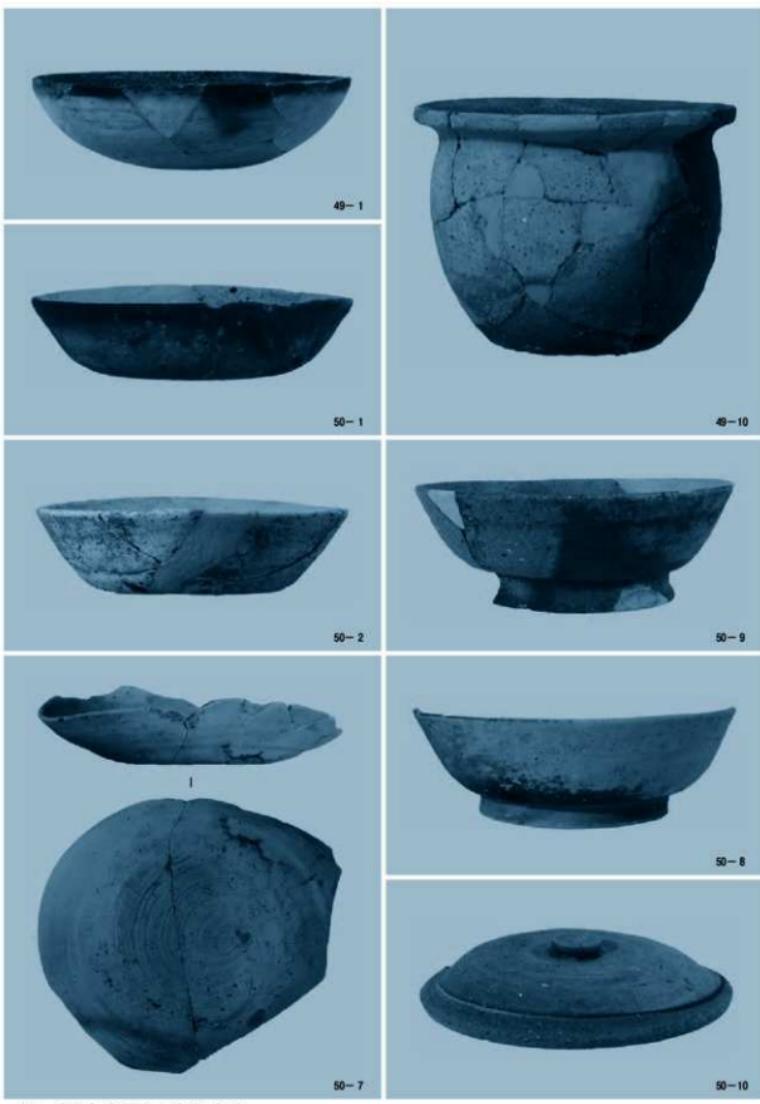
26 溝跡・土坑出土遺物



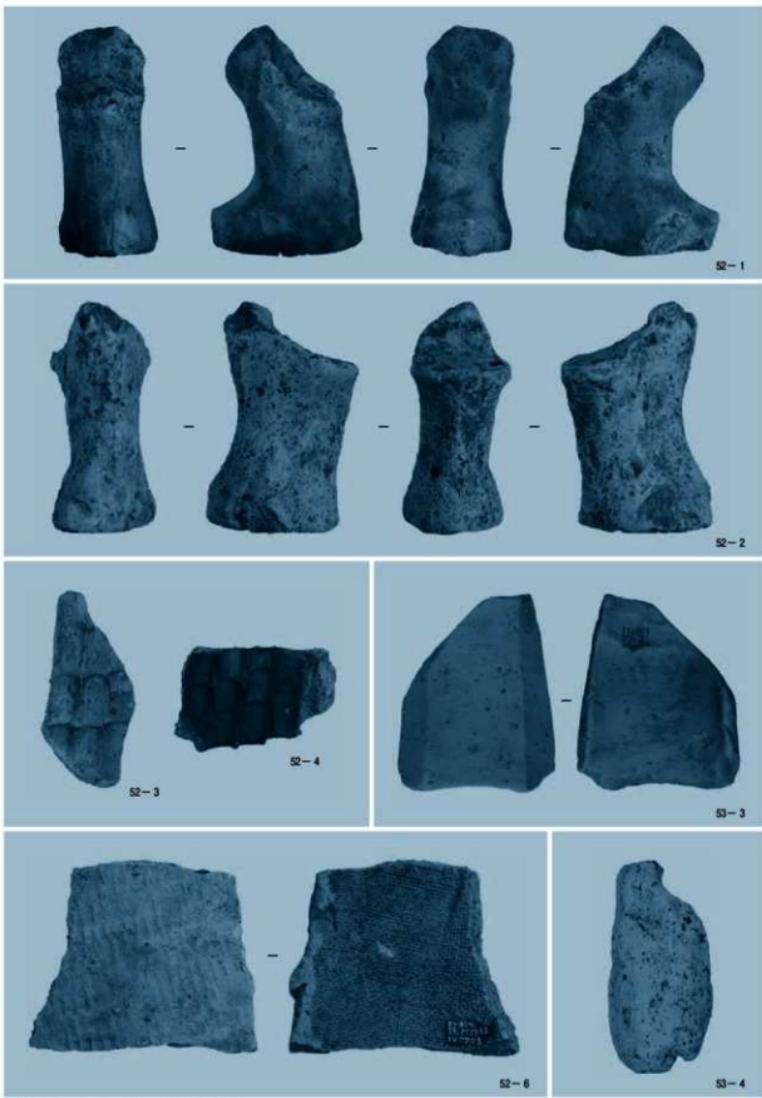
27 土坑出土遗物



28 遺物包含層出土遺物（1）



29 遺物包含層出土遺物（2）



30 遺物包含層出土遺物（3）



31 II区全景（北上空から）



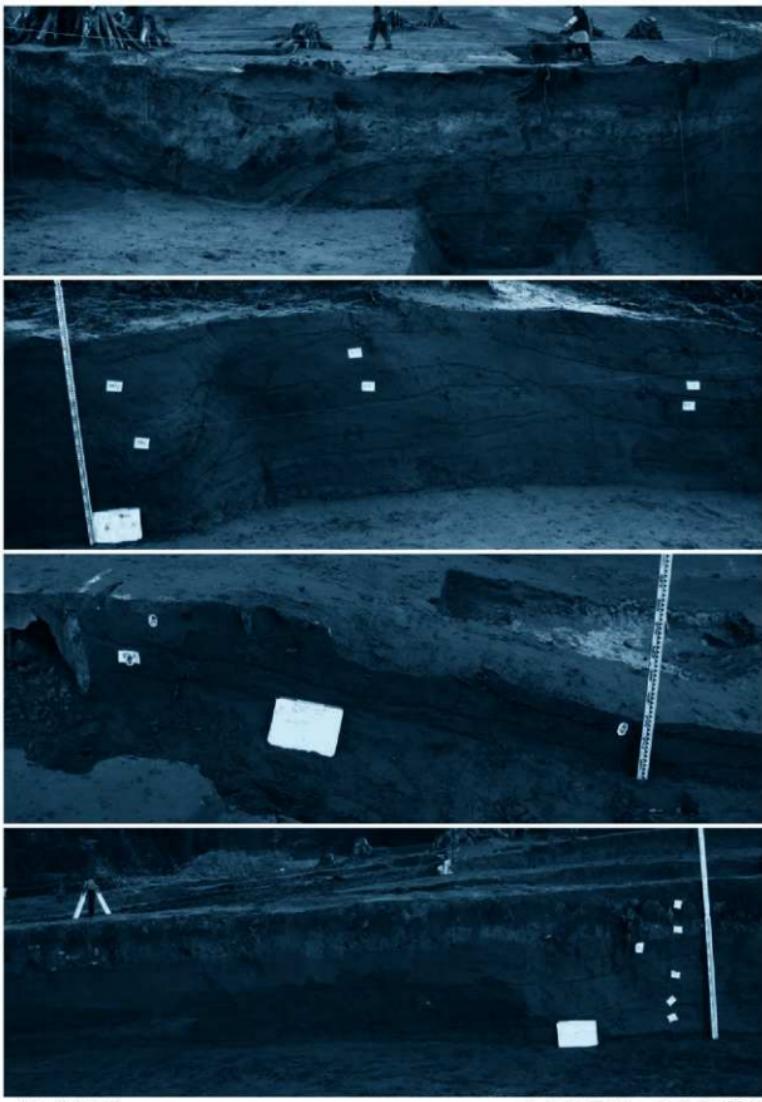
32 II区全景（上空から）



33 10G列L II土層（南西から）



34 H 6 G L II土層（南から）



35 基本土層

a D - D' (西から)
b E - E' (北から)
c J - J' (南から)
d O - O' (南から)



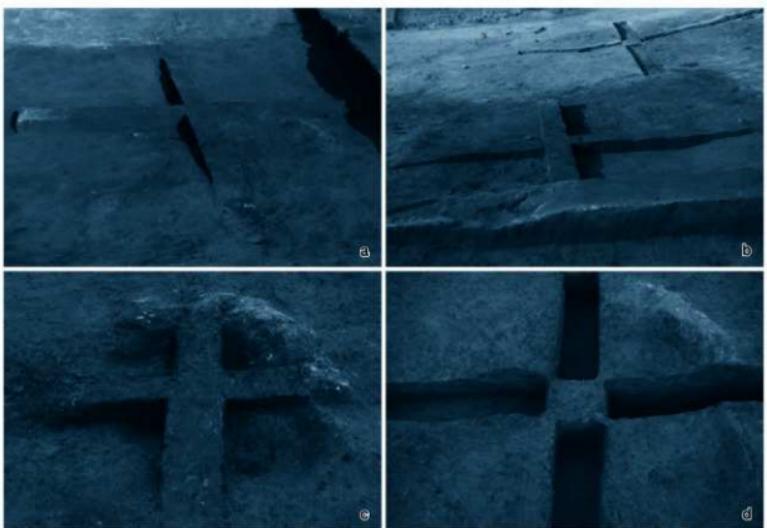
36 4号住居跡（西から）



37 4号住居跡細部



38 5号住居跡（西から）



39 5号住居跡細部

a 上部土層（西から）
b 上部土層（南から）
c カマド断面（西から）
d カマド断面（西から）



40 8号住居跡（西から）



41 8号住居跡細部

a 土器（西から）
b カマド（西から）
c 便器（西から）



42 9号住居跡（東から）



43 13号住居跡（南から）



44 12号住居跡（東から）



45 12号住居跡細部

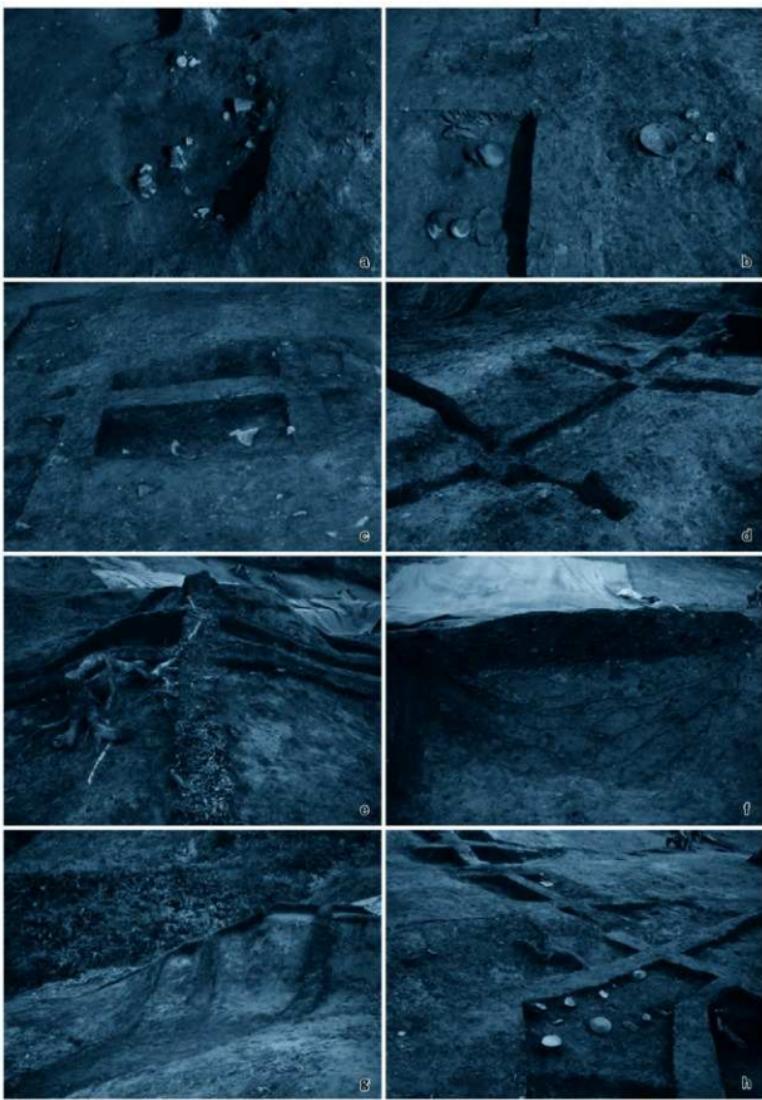
a 土層（東から）
b 小路（南から）
c が路断ち掘り（南から）



46 1・3号須恵器窯跡（北西から）

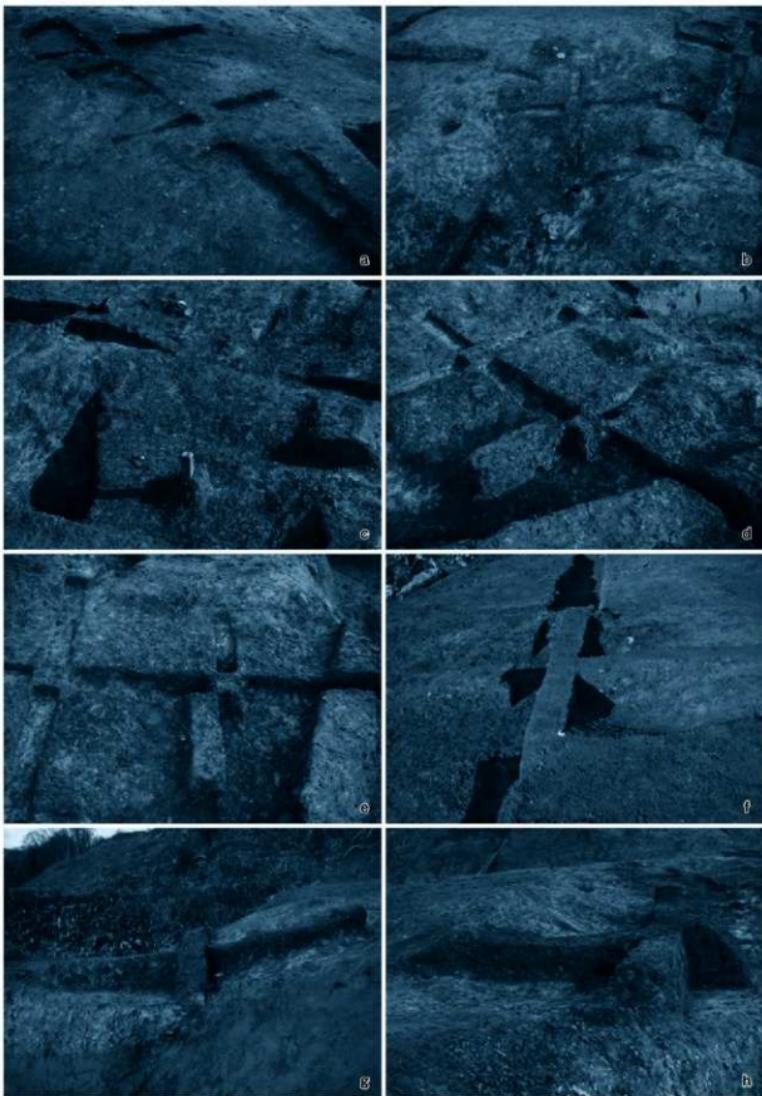


47 2号須恵器窯跡（南西から）



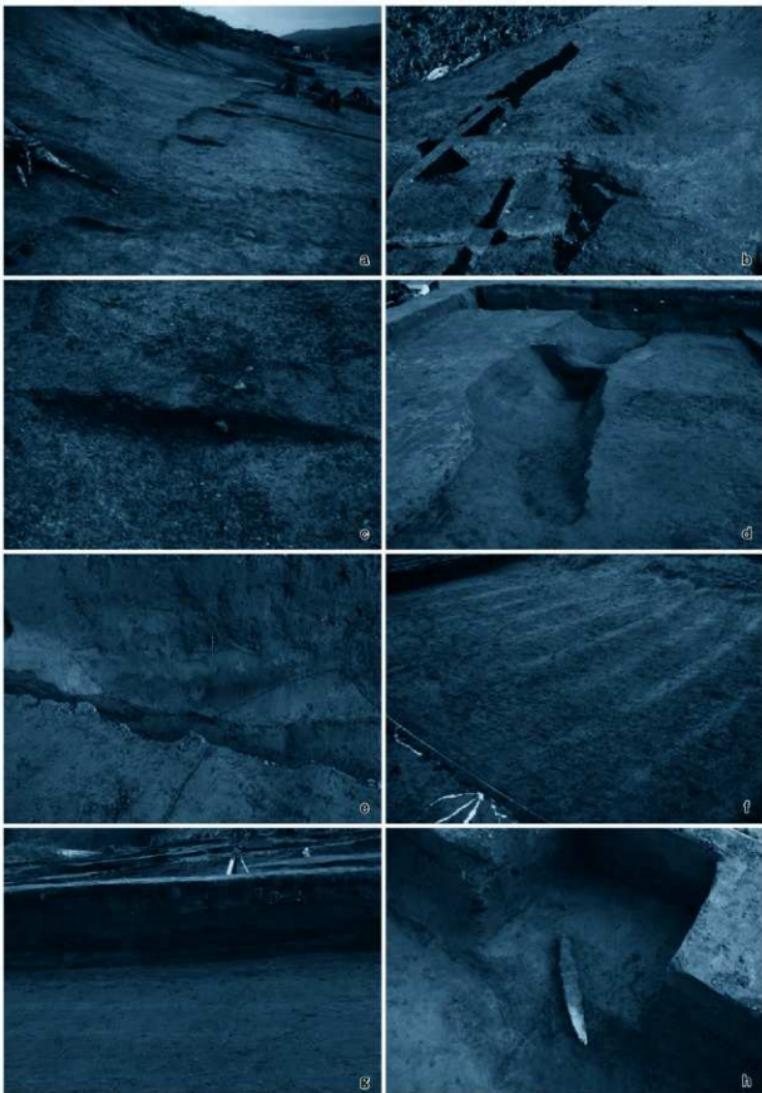
48 1号須恵器窯跡細部

a 全景（西から）	b ②遺物出土状況（西から）
c 土解断面（南から）	d 亂ち割り断面（西南から）
e 作業場南北断面（西から）	f 作業場南北断面（西から）
g 作業場東西断面（南から）	h 作業場遺物出土状況（北西から）



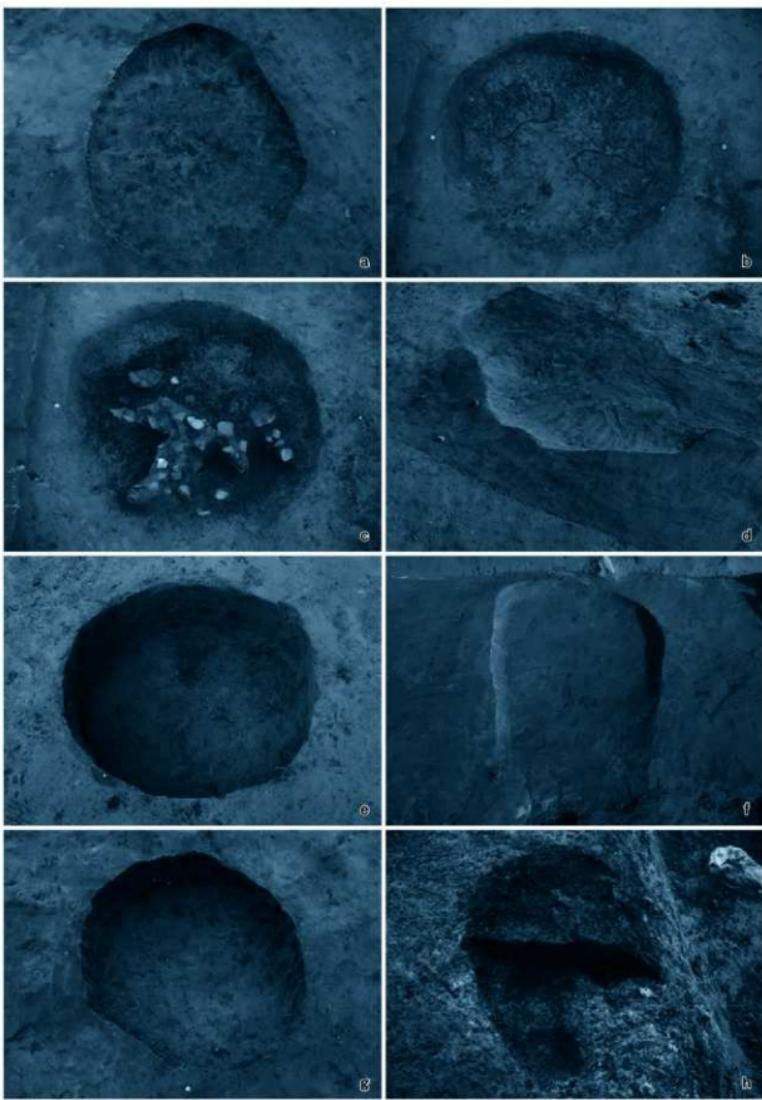
49 2・3号須恵器窯跡細部

a 2号断面（西から）	b 3号断面（南西から）
c 3号横出（南西から）	d 3号断面（北西から）
e 3号断面（北から）	f 3号断面（南西から）
g 3号作業場断面（南から）	h 3号作業場断面（西から）



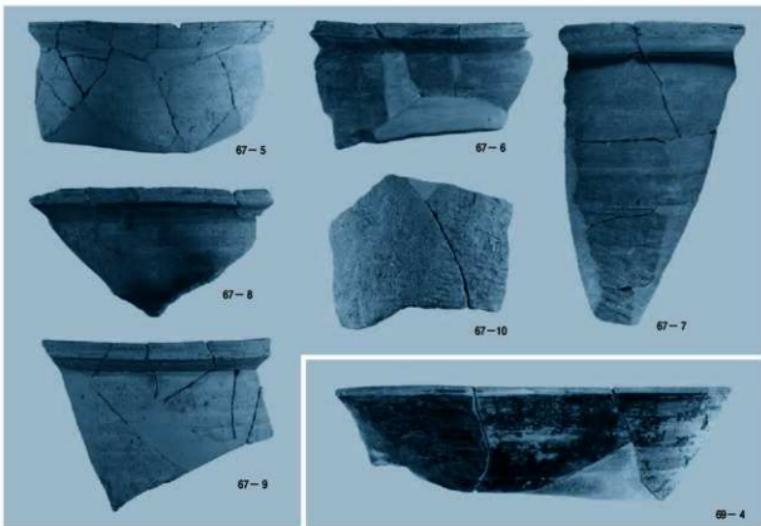
50 4・9号溝跡、畝状遺構、遺物出土状況

- | | |
|-----------------|------------------|
| a 4号溝跡全景（北から） | b 4号溝跡断面（南から） |
| c 4号溝跡断面（北から） | d 9号溝跡全景（西から） |
| e 9号溝跡断面（西から） | f 1号畝状遺構（北東から） |
| g 1号畝状遺構断面（南から） | h H6鉄刀出土状況（北西から） |

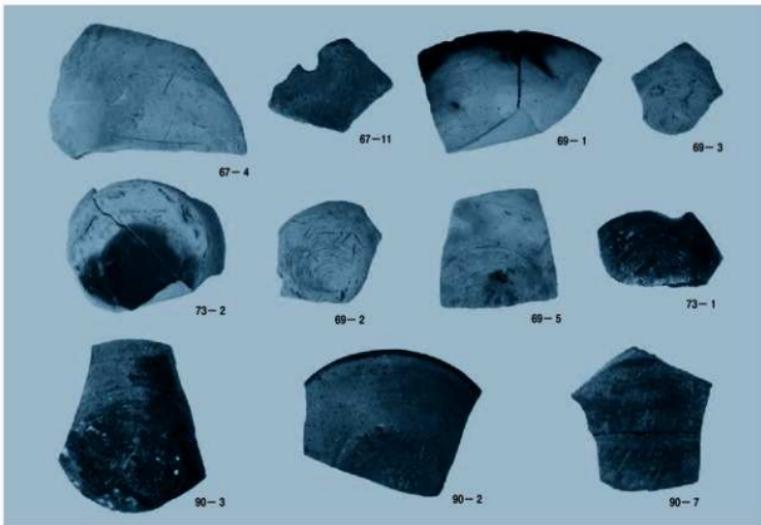


51 II区土坑

a 10号土坑（西から）
c 25号土坑遺物出土状況（西から）
e 28号土坑（南から）
g 34号土坑（東から）
b 25号土坑（西から）
d 26号土坑（北西から）
f 32号土坑（西から）
h 35号土坑概面（北西から）



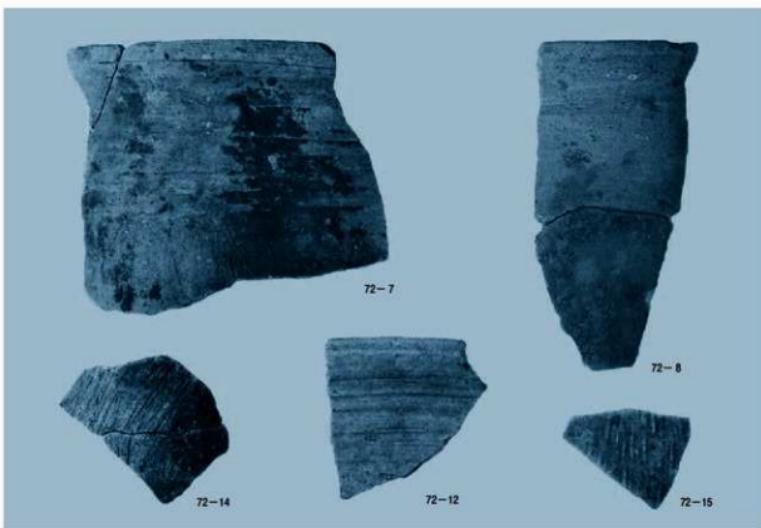
52 4·5号住居跡出土遺物



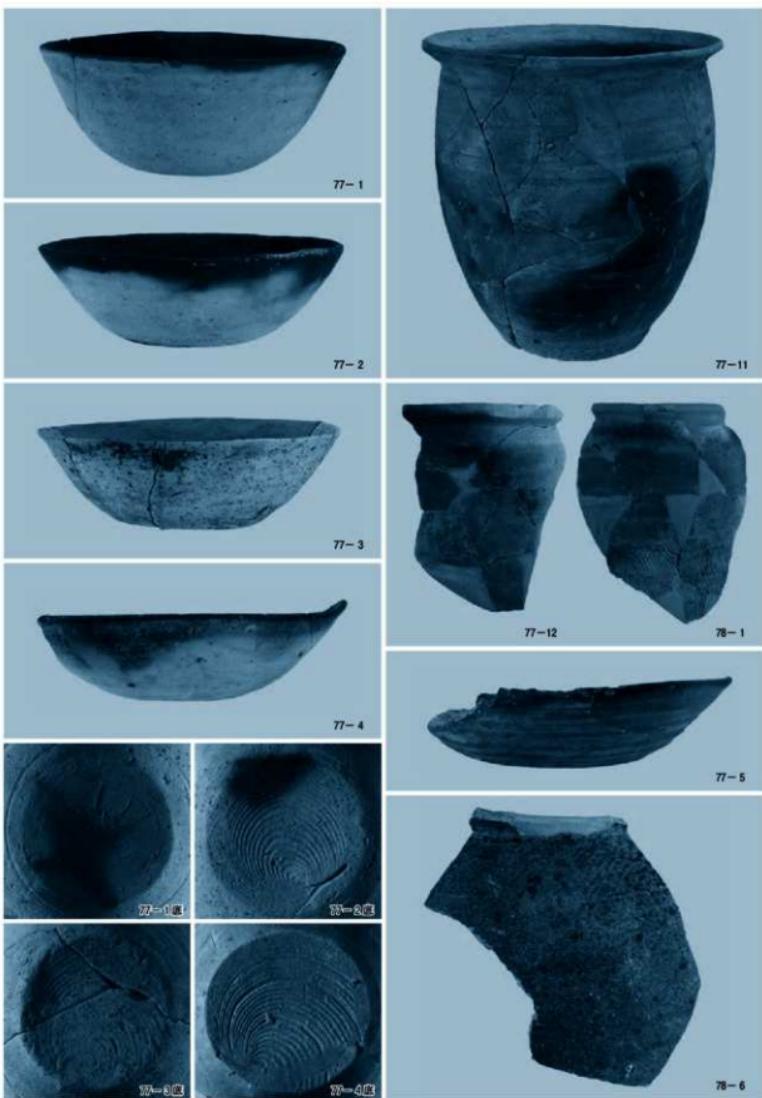
53 4·5·9号住居跡·4号溝跡出土遺物



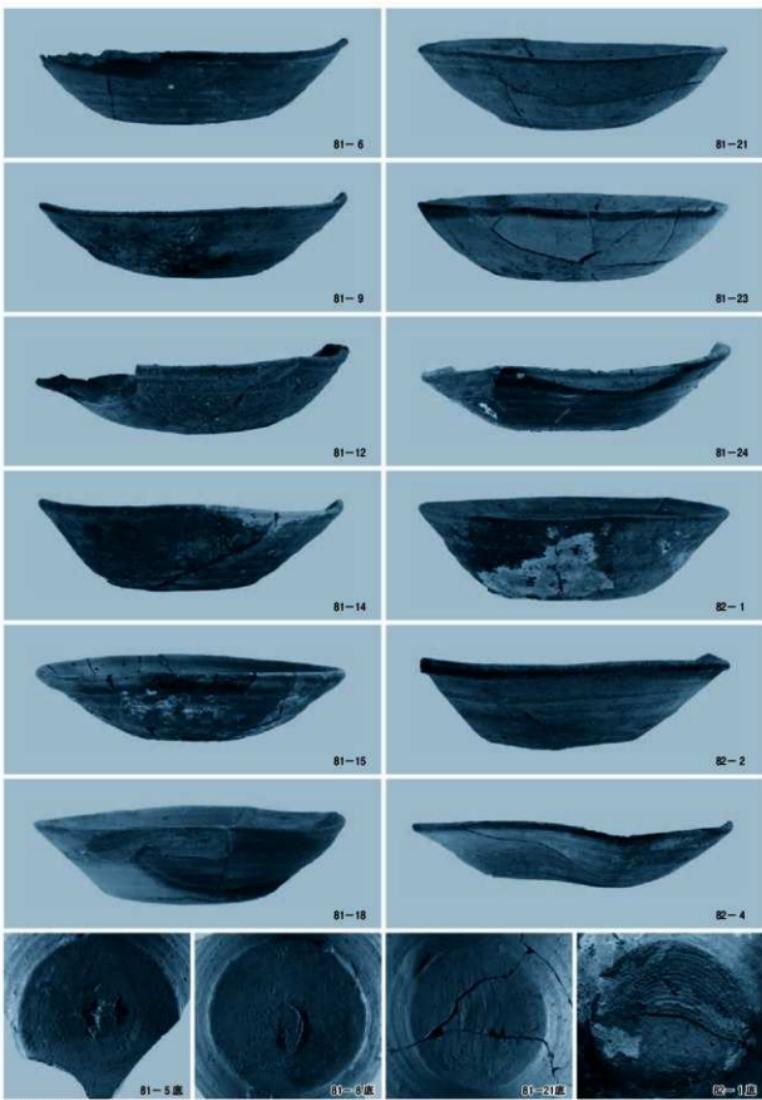
54 8号住居跡出土遺物（1）



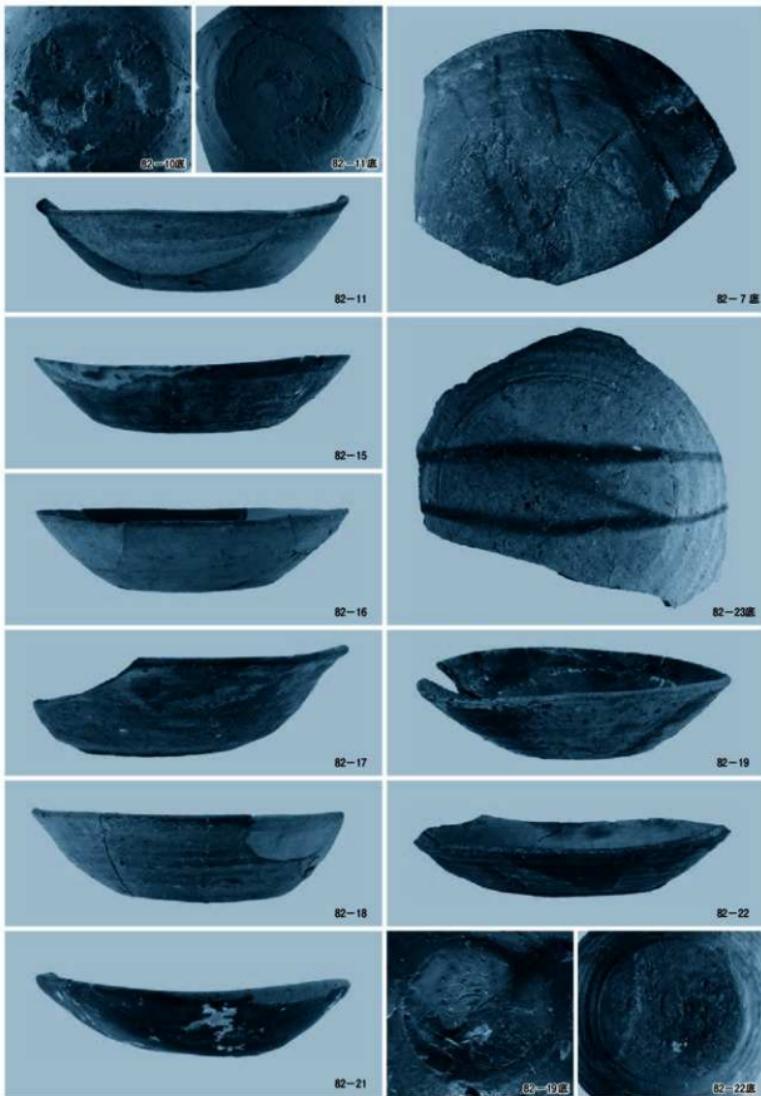
55 8号住居跡出土遺物（2）



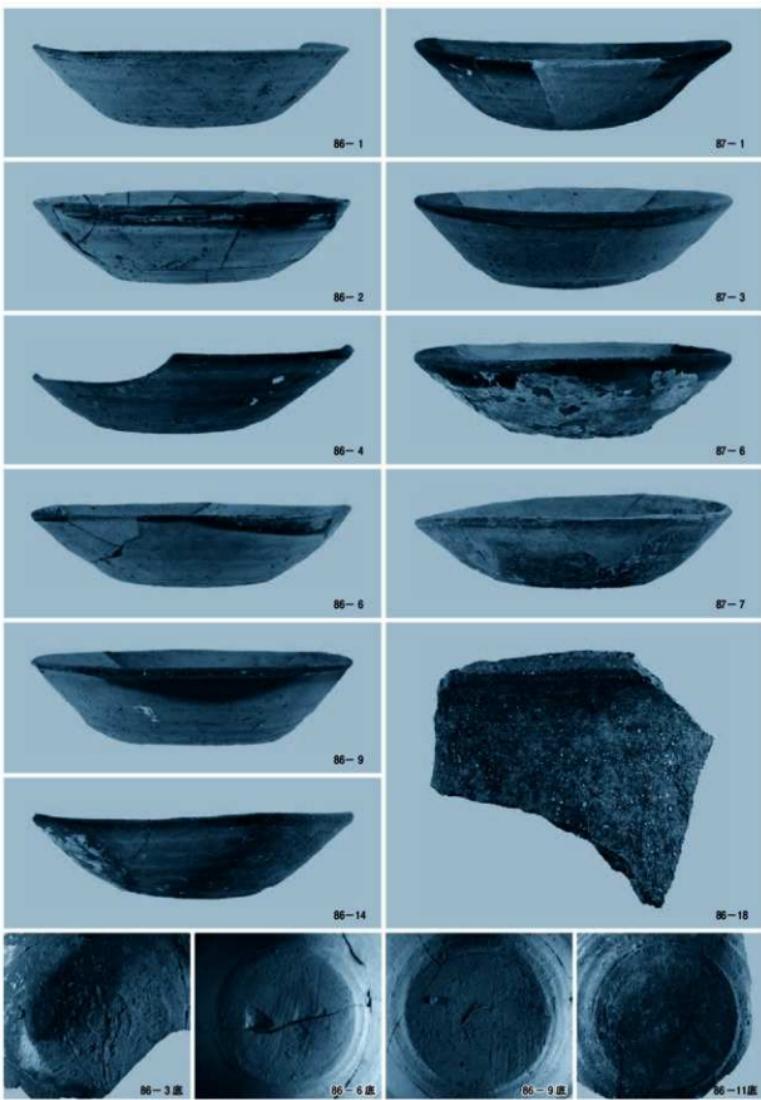
56 13号住居跡出土遺物



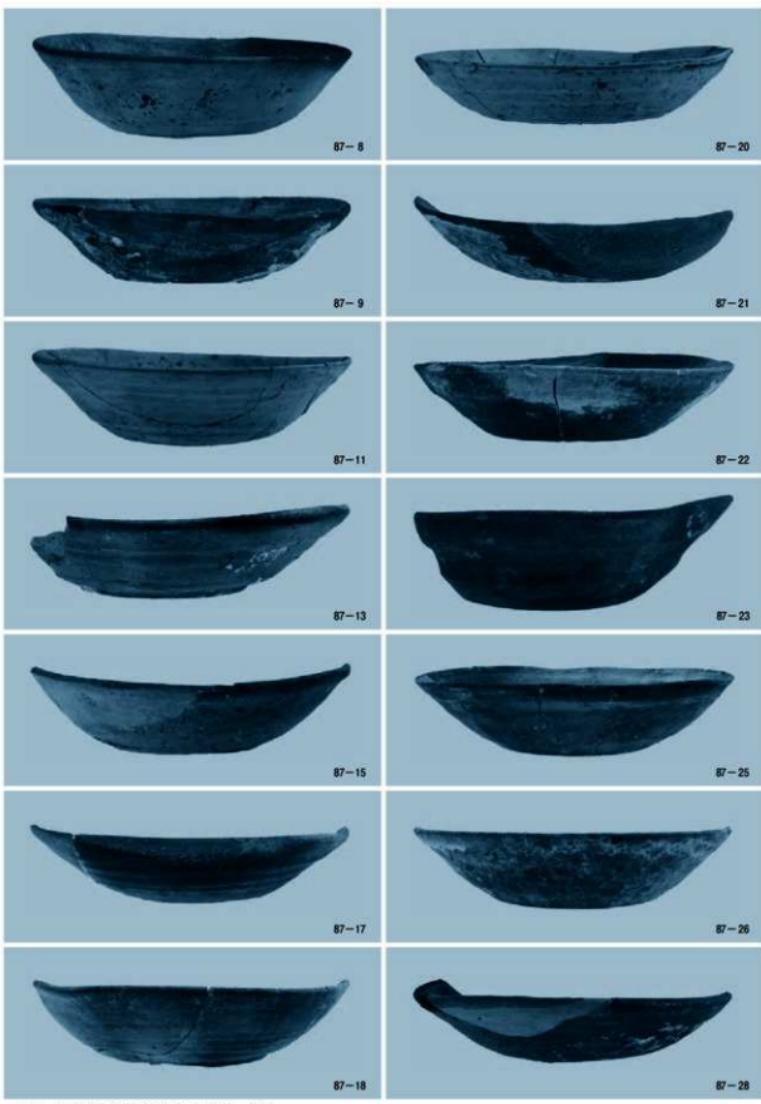
57 1号須恵器窯跡出土遺物（1）



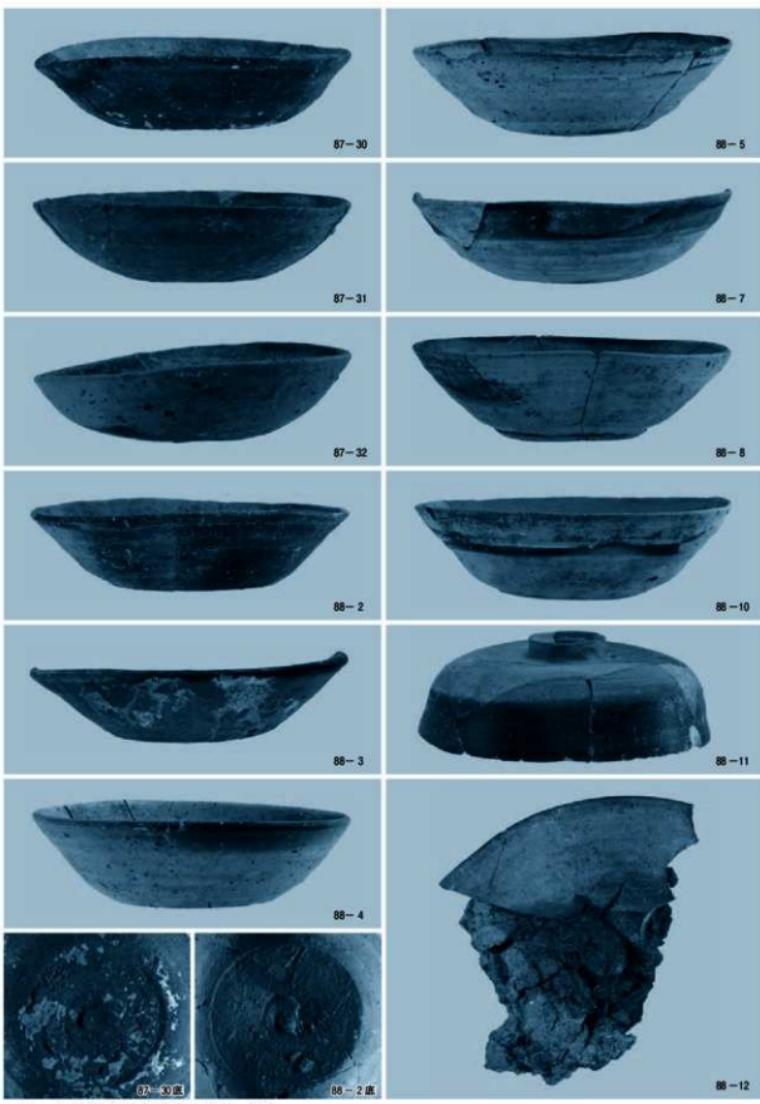
58 1号須惠器窯跡出土遺物（2）



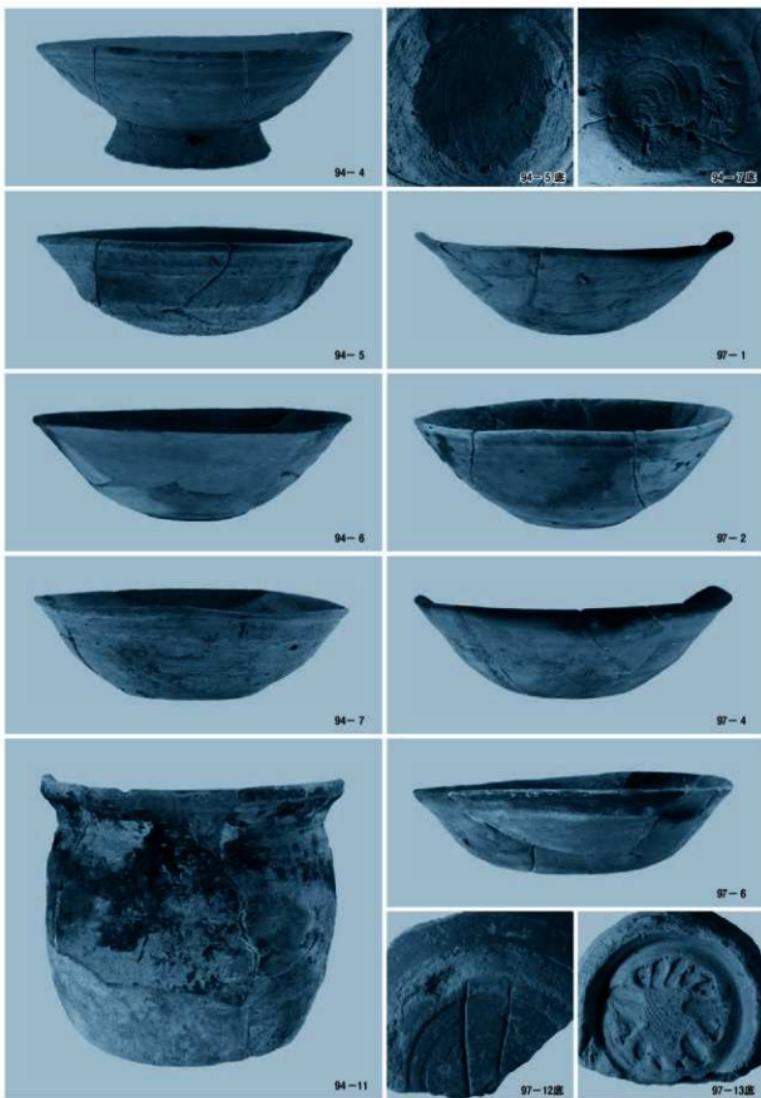
59 3号須恵器窯跡出土遺物（1）



60 3号須恵器窯跡出土遺物（2）



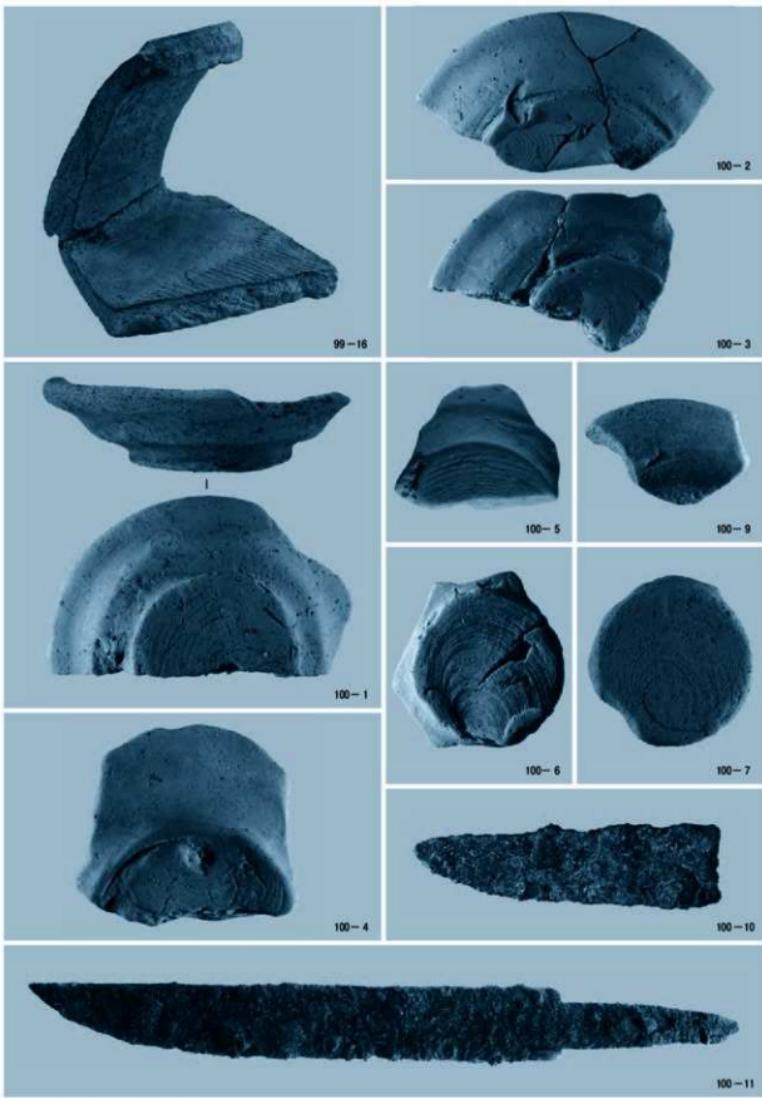
61 3号須恵器窯跡出土遺物（3）



62 25号土坑·遗構外出土遺物（1）



63 遺構外出土遺物（2）



64 遺構外出土遺物（3）



65 Ⅲ区全景（西上空から）



66 遺構集中部（上空から）



67 基本土層 (L II)

a J 17 G (南から)
b J 20 G 沢 2 (西から)
c J 21 G 沢 3 (北から)



68 基本土層A上部（南西から）



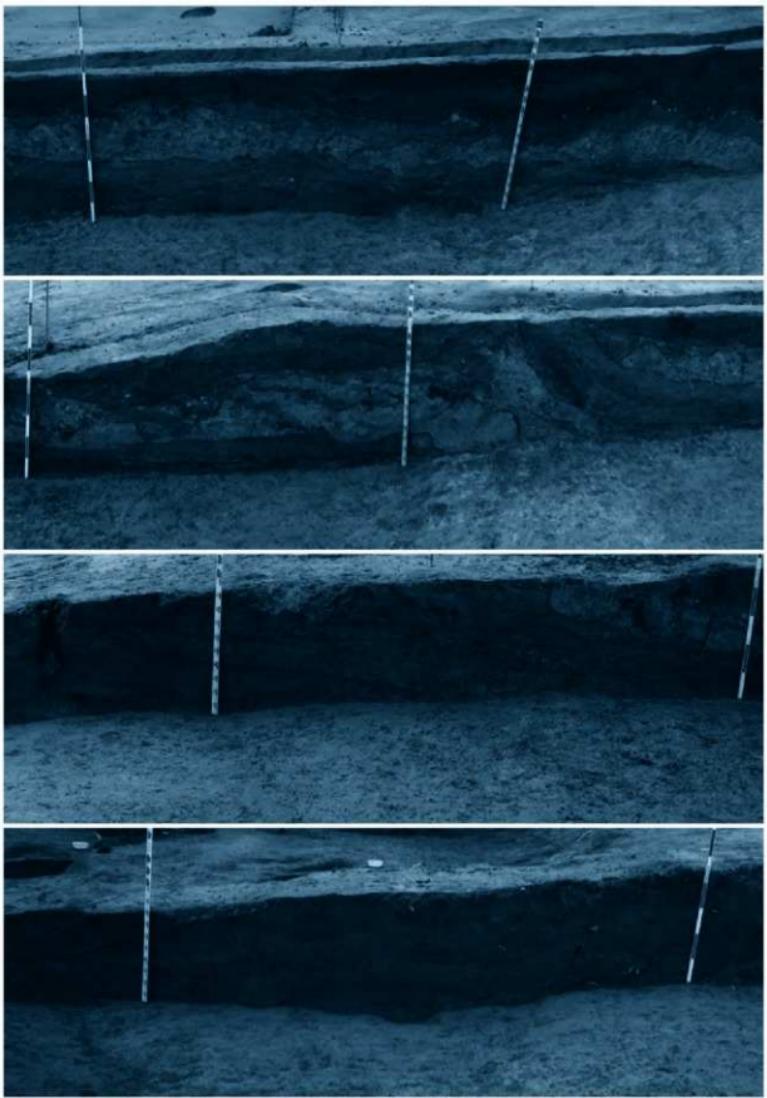
69 基本土層A下部（南西から）



70 基本土層B（北西から）



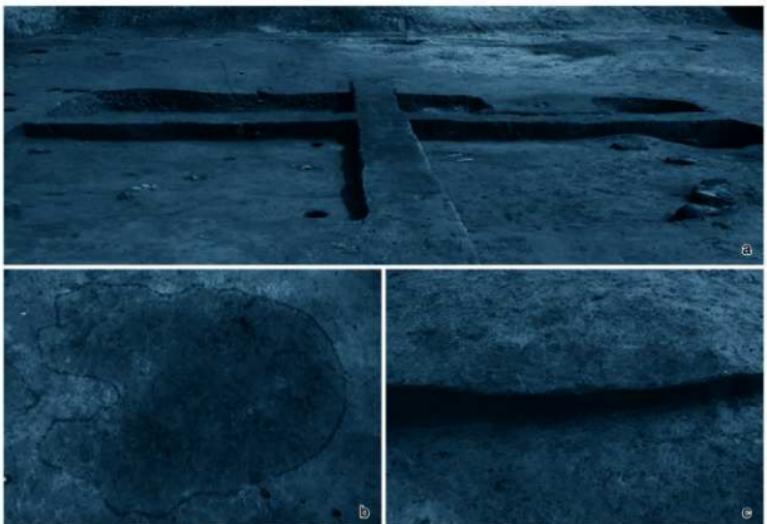
71 基本土層B地すべり層（北東から）



72 基本土層C（南から）



73 6号住居跡（南から）



74 6号住居跡細部

a 土層（西から）
b 伊路（東から）
c 伊路断面（西から）



75 6号住居跡カマド（西から）



76 6号住居跡カマド細部

a 遺物出土状況（西から）
b 遺物出土状況アップ（西から）
c 東西土層（南から）
d 袋面ち剥り（西から）



77 11号住居跡（南から）



78 11号住居跡細部

a 南北土層（東から）
b 伊藤（南から）
c 仰臥面（南から）

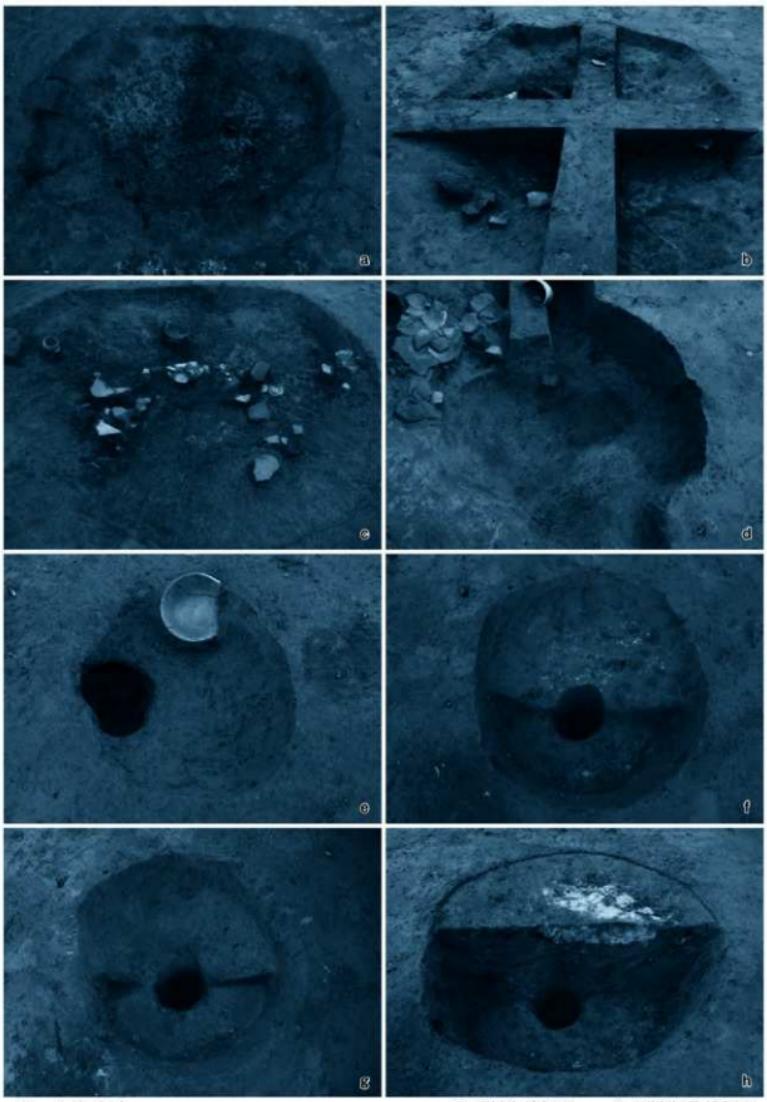


79 11号住居跡カマド (南から)



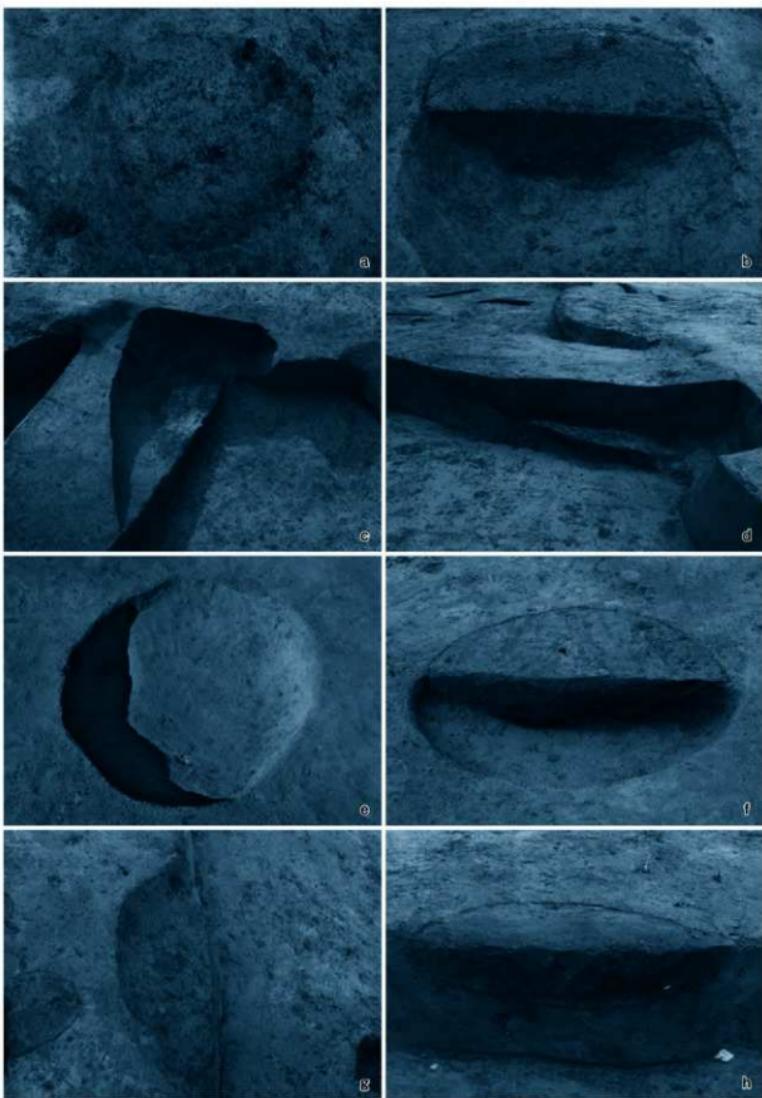
80 11号住居跡カマド細部

a 東西土層 (南から)
b P1 土層 (東から)
c 南北土層 (東から)
d 独断ち割り (南から)



81 土坑（1）

- a 18号土坑（南東から）
c 18号土坑（南東から）
e 22号土坑（東から）
g 23号土坑（西から）
b 18号土坑土層（北東から）
d 21号土坑（西から）
f 23号土坑（西から）
h 23号土坑土層（西から）



82 土坑（2）

- a 24号土坑（西から）
c 29号土坑（北東から）
e 30号土坑（南東から）
g 31号土坑（南から）

b 24号土坑土層（西から）
d 29号土坑土層（北から）
f 30号土坑土層（東から）
h 31号土坑土層（東から）



83 1号竪穴遺構（北から）



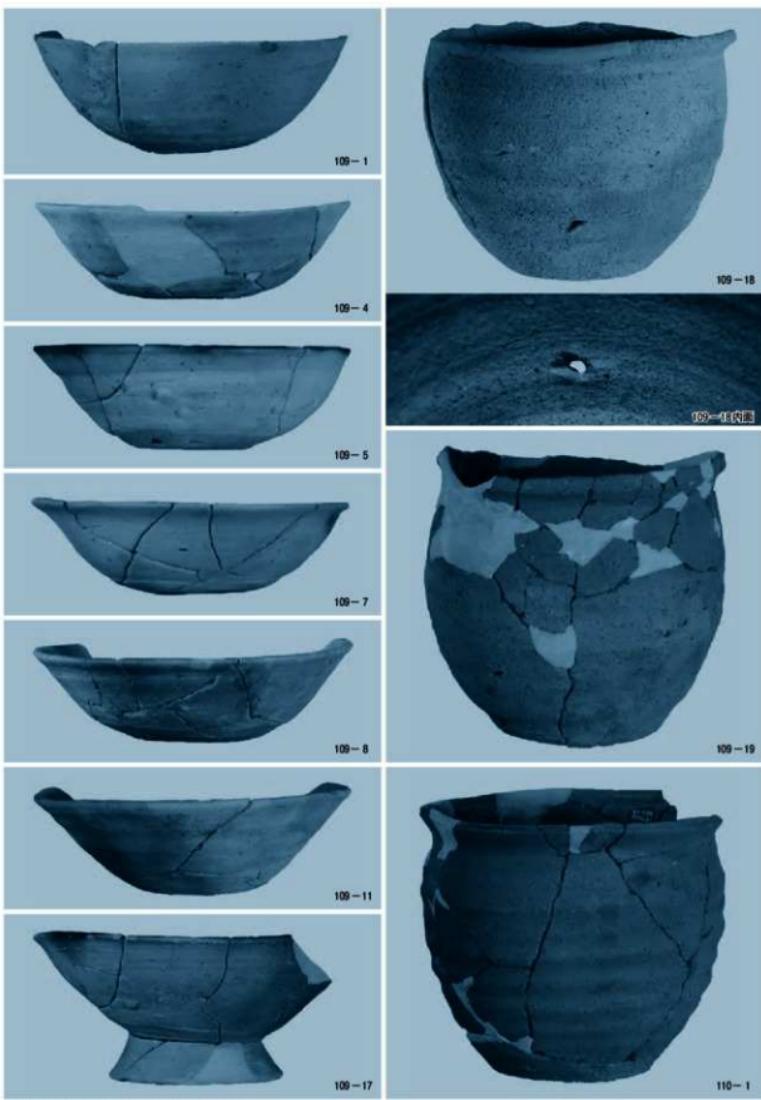
84 5号溝跡、1号焼土遺構

a 5号溝跡（南西から）

c 1号焼土遺構（南西から）

b 5号溝跡土質（南西から）

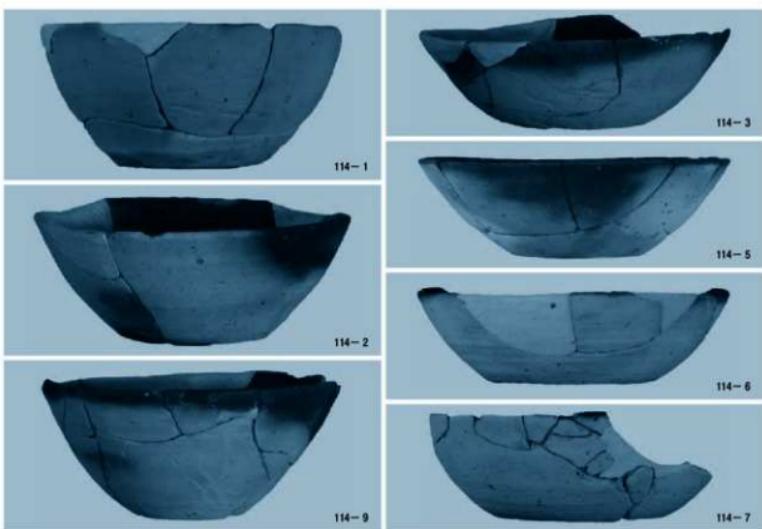
d 1号焼土遺構断面（南西から）



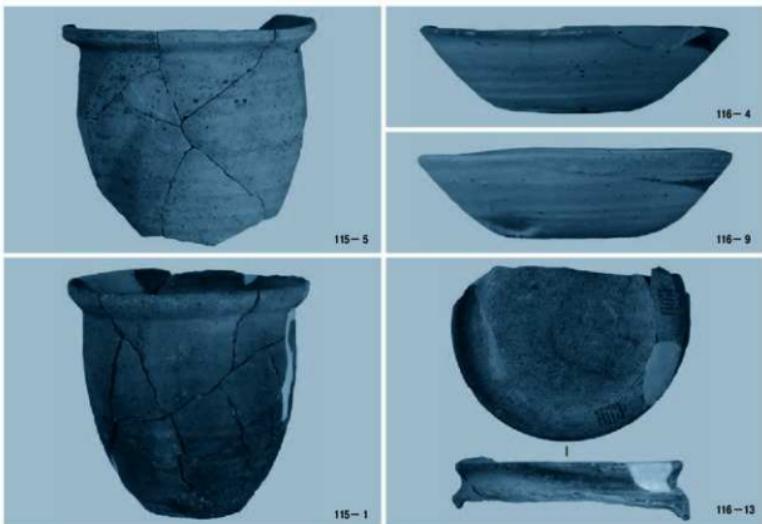
85 6号住居跡出土遺物（1）



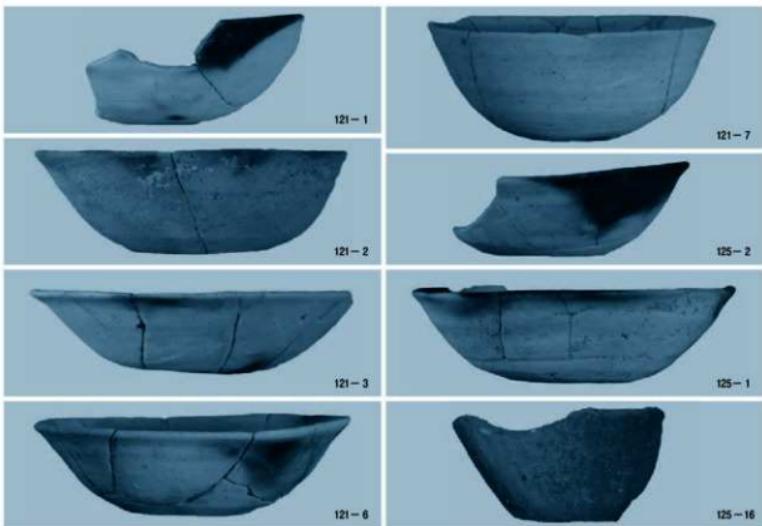
86 6号住居跡出土遺物（2）



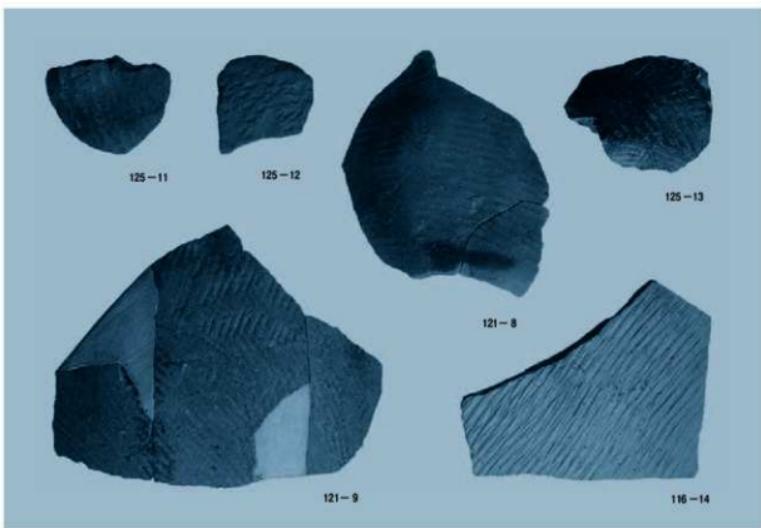
87 11号住居跡出土遺物（1）



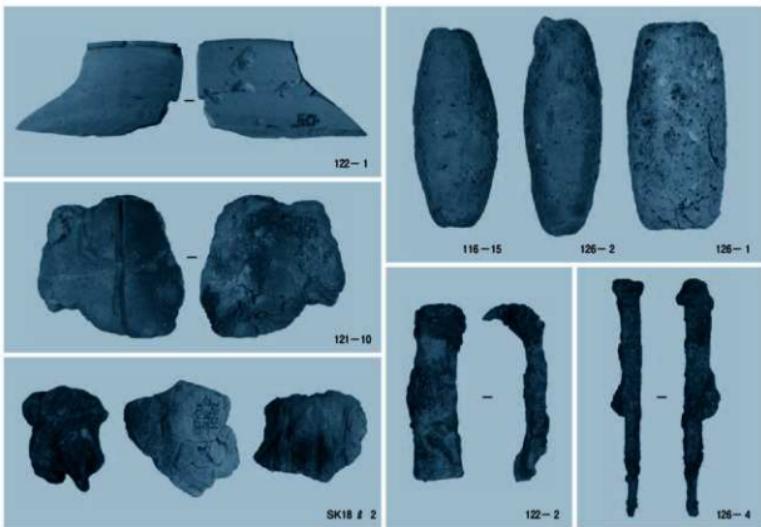
88 11号住居跡出土遺物（2）



89 土坑・遺構外出土遺物



90 住居跡・土坑・遺構外出土遺物



91 磁器・土製品・鉄製品・粘土塊

報 告 書 抄 錄

福島県文化財調査報告書第482集

阿賀川改修(長井地区)遺跡発掘調査報告 1

小田高原遺跡（1次調査）

平成23年12月16日発行

編 集 財團法人福島県文化振興事業団 遺跡調査部 遺跡調査課
発 行 福島県教育委員会 (〒960-8688) 福島市杉妻町2-16
財團法人福島県文化振興事業団 (〒960-8116) 福島市春日町5-54
国土交通省北陸地方整備局阿賀川河川事務所 (〒965-8567) 会津若松市表町2-70
印 刷 北斗印刷株式会社 (〒965-0052) 会津若松市町北町大字始字深町67-2
